THE CENTRAL REVIEW

大正二年九月廿八日印刷納本
大正二年十月一日發行（每月一回一日發行）

Vol 28
#12

中央公論

十月號

第廿八年第十二號　第貳百九拾七號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

腦病神經病最良新藥

腦病と神經病とは人一生の禍なり

主効

腦充血◉腦貧血◉頭痛◉便秘◉眩暈◉中風◉健忘
腦膜炎◉神經痛◉耳鳴◉鬱憂◉搐搦◉卒中◉癲癇
其他腦病神經病一切に驚くべき奇効あり

特長

此禍を拂ふもの唯健腦丸あるのみ



常に持藥として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき腦充血を治癒し。中風卒中を未發に防。記憶力を増進する特効あるは獨り健腦丸のみである

發賣本舗 大阪市心齋橋筋貳 東京日本橋箔屋町 丹平商會藥房

（藥價 一日半十錢、三日分廿錢、七日分四十五錢、二週間分八十五錢、五週分金二圓）

●賣捌は全國到る處の各藥店に有り

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

高橋五郎先生譯

セネカ論説集

羅馬の大哲ルシアス、セネカの全集たる世界屈指の論文集にして毎篇人間處世上の絶高教訓たらざるなく古來智慧の總持と呼ばれて、歐米讀書家の愛重措かざるものなり、今や此種飜譯界の權威たる高橋五郎先生苦心の譯文成りて明快暢達を極む 苟もベーコン、エマーソン等の論文に興味を有する人はこが原泉たる大哲の人生觀の如何に深遠博大なるかを見よ

◉日本及日本人評『千載不朽の大文字として日月と光輝を爭ふとも、いよ〳〵溢美ならず又行文の自在にして譯筆の流麗なる、洵に譯者其の人を得たりと云ふべし』

中判總クロース金文字入美本
全一冊
本文七百十二頁
正價壹圓六拾錢
郵税拾四錢

文學士 笹川臨風先生
文學士 白河鯉洋先生
共編

一代の鬼才と謳はれたる故田岡嶺雲は亦一代の文章家也曾て大學に在りし頃、故藤岡東圃博士がポープに擬せられしに對して嶺雲はバイロンに比せられしと云ふ。げにや多情多恨にして、情趣高朗、識見超邁、之を行るに天來の妙筆を以てす。本書收むる所の名什、長短實に二百五十有餘。

嶺雲文集

菊判上製
函入美本
本文八百
全一冊
正價貳圓
小包料内地十二錢
臺、樺、朝
淸四十錢

◉萬朝報評『明治の奇矯兒が天才の閃きはその一語一句ごとに見えて、そゞろに當年の俤を偲ばしむ』

◉新報事『言々句々一として肺腑のどん底から僞らぬ告白でないものはない奇跡の前に讃辭を呈する餘裕がないと同じ事で吾等は本書に對して唯驚畏の眼を見張るばかりである』

◉大阪朝日『鬼才嶺雲の書は其烈々の意氣を見るべき共生々しき血の滴を汲んで讀むべきである』

版元 東京神田區雄子町 玄黃社 電話本局二〇九番 振替東京七九九五 各國書店賣捌

海外文藝叢書

第五篇

■ズーデルマン氏作　鈴木悅氏譯

死の歌

△新刊發賣▽

全壹冊

新型洋裝美本
正價金四拾五錢
郵稅金四錢

マグダ劇によつて强大な刺戟と震動とを我等に與へた、獨逸現代の文豪ズーデルマンの小說の最初の紹介である。マグダが火の如き情熱と氷の如き理智との電のやうな閃めきに言ひ知れぬ驚嘆の眼を見開いたものは、本書によつて、質朴至純な女の目覺めの如何に痛ましきかを知らねばならぬ。哀れにも儚ない女の死の歌に心の髓に喰ひ入る涙の味を知らねばならぬ。更に結婚と道德と戀愛とに對する深き暗示を覺らねばならぬ。

東京市神田區南神保町
海外文藝社
振替東京二四四四四番

モウパッサン氏原著
吉江孤雁氏譯
久しく期待されたる新譯

■附錄『水の上』と「モウパッサンの晩年」は必讀すべき好文字也

水の上

『水の上』はモウパッサンが人生觀・社會觀・自然觀・戀愛觀のコンデンスせられた晩年の傑作である。彼の所謂現實的な傾向が、如何に神祕的傾向に向つて行くか、彼によつて說かるゝ佛蘭人の眞價は如何であるか、彼によつて描かるゝ地中海の自然が如何に艶麗であるか、彼の情緒の如何に微妙であるか、彼の機智の如何に警拔であるか、彼の皮肉の如何に深酷であるか、を知り且つ彼の人物を知らんとする上に、本書は最も價値ある而して見逃がす能はざる不朽の良著たるを失はない。

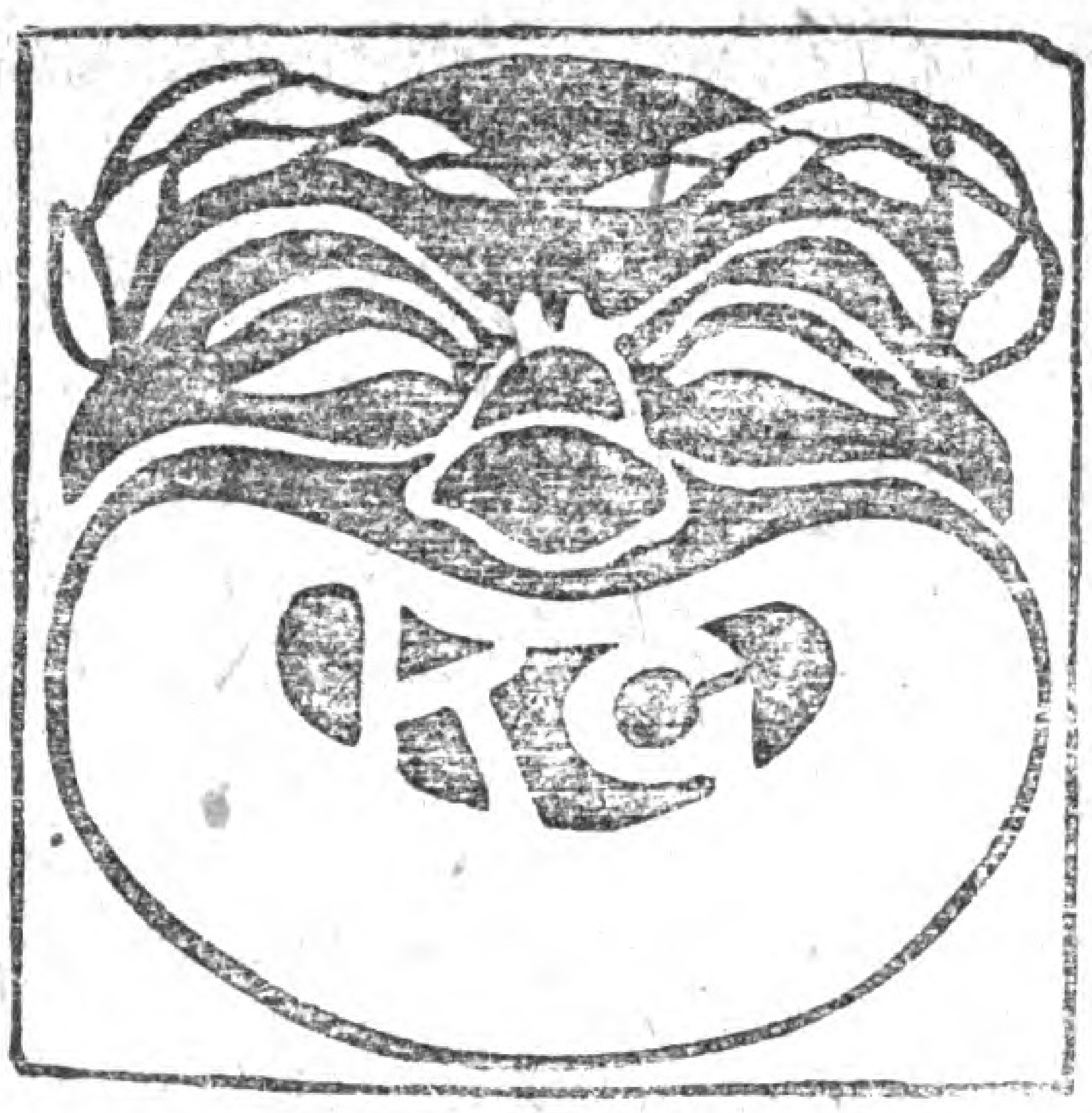
□野口柾夫氏裝□
■感じのいい箱■
□氣持のいい本□
■新式箱入美本■
□定價金壹圓□
■郵稅金八錢■

■東京神田區錦町一丁目■
中興館書店
〔振替東京四一二三番〕

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

公衆劇團

十月一日より
二十日間



第壹回興行

帝國劇場にて
毎夕五時開演

當興行狂言

(一)マクベスの稽古（喜劇）一幕　ベアリング作　駿河町人譯
役者の内幕を遠慮なくひつぱいだ諷刺劇、そこらで噓をして居るのは誰だ?!
此脚本は春陽堂發行『現代文藝叢書』第十九編に在り

(二)茶を作る家（現代劇）二幕　大久保二八子作
此狂言で河合武雄は得意の藝妓に扮します、新代劇で藝者の見られるのは此劇團ばかりです。
此脚本は十月一日發行『演藝畫報』卷頭に在り

(三)エレクトラ（悲劇）二幕　ホフマンスタール氏作　松居松葉氏譯
本職の俳優が數ヶ月間の練習舞臺監督は伊太利人ローシー氏、これが眞實の鬼に金棒。
此脚本は美本となりて鈴木書店より發行す

(四)女がた（喜劇）一幕　文學博士森鷗外氏作
背景衣裳の不思議なので膽をつぶし、作の奇妙なので頤をはづす、餘程變つた狂言。
此脚本は十月一日發行『三越』文藝欄に在り

座席料

特等	御一名	金貳圓
壹等	同上	金壹圓五拾錢
貳等	同上	金壹圓
三等	同上	金七拾錢
四等	同上	金參拾錢

座席劵は帝國劇場で發賣致して居ります御電話で御申込下されば自轉車で御宅へ御屆け致します

（公衆劇團俳優）

（いろは順）
岩田祐吉　英太郎　小河幸雄　岡本五郎　河合武雄　川村桂一　加藤桂二郎　武村新　田中榮三　谷澤時之助　中尾米次郎　上杉芳雄　上田史郎　野澤英一　久保田甲陽　松本要次郎　東辰夫　櫻井秀太郎　小織桂一郎　篠塚太郎　鈴木清隆

興業主任　大谷竹次郎
俳優總代　河合武雄
全　小織桂一郎
舞臺世話役　松居松葉

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

□□□□□中央公論讀者にして本月中直接御注文に限り送料不要□□□□□

新刊小說 □□□ 再版

長田幹彥著●中澤弘光裝畫●吉井勇氏序歌

祇園

四六判箱入
木版八度刷
紙裝頗美本
定價金壹圓
送料金八錢

著者は京都を憧憬し、熱愛するの餘り約一歲の長日月を彼地に流寓しその折々の感興筆をとつて得たる收穫の全部なり。巧緻艷麗なる筆を以て優雅なる舊都の風物を敍し紙燭ほの暗き祇園の夜をうつし、雛の如き舞妓の數々の物語を描げるこの集を京都を愛する士及京都を知らぬ讀者子に勸む。

鈴木三重吉作●津田青楓裝畫

桐の雨

內容〜〜〜祇園 宇治 [illegible]踊の夜 春の宵 蜘蛛 薄雪 島原 浮名 夕すゞみ 送り火 雛勇 鐘〜〜〜

四六判箱入
木版五度刷
紙數四百頁
定價金壹圓
送料金八錢

描寫に於て主材に於て三重吉氏はやうやく一轉化せんとする最近の長編桐の雨を卷頭に、近作「紅皿」「蛇苗」及ネオローマンチズムを以て當時文壇獨步の感ありし「赤い鳥」「をんな」の二篇を添ゆ。當時の三重吉氏を知らんとする讀者も最近の三重吉氏を覘かんとする讀者は、月見草の如き三重吉氏の女性に憧憬を持てる讀者も蓋しこの集を讀まざるべからず。

女鳩

內容〜〜〜桐の雨 紅皿 赤い鳥 蛇苗 をんな〜〜〜

鈴木三重吉作 津田青楓裝畫

□□小說十篇□□

內容 女鳩 病間 青い眼の女 留守 大伯母 金魚 人形 馬車の出來る間 氷 金盞花

定價金壹圓送料金八錢

酒ほがひ

吉井勇作〜〜〜袖珍歌集〜〜〜

□□歌七百首□□

內容 癡夢 夏の思出 酒ほがひ 後の戀 祇園册子 惡行 わからど 夢と死と パン 羇旅雜味

定價金七十錢送料金八錢

●發行所 東京市日本橋區通二丁目九番地 振替貯金口座東京二四六二三番 濱口書店

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨附記を乞ふ

簡易佛教講義錄

●大正二年四月一日第一號發行

毎月一回一日發行
一部金十八錢（郵稅共）
六冊金壹圓（郵稅共）

本書は本派本願寺法主大谷光瑞猊下の經營せらるゝ、佛教中學各教師の分擔講義を編輯せるものにして、文章は平易に、而も四號活字總假名附なれば、佛教の大意を知らむとする人は、何人にも極めて能く理解せらるべし、されば現世來世の得脫に煩悶する者は、本書に據て必ず一大慰安を得べし

●發行所　兵庫縣武庫郡岡本村　二樂莊出版部

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

文學講義録



本會員帽章

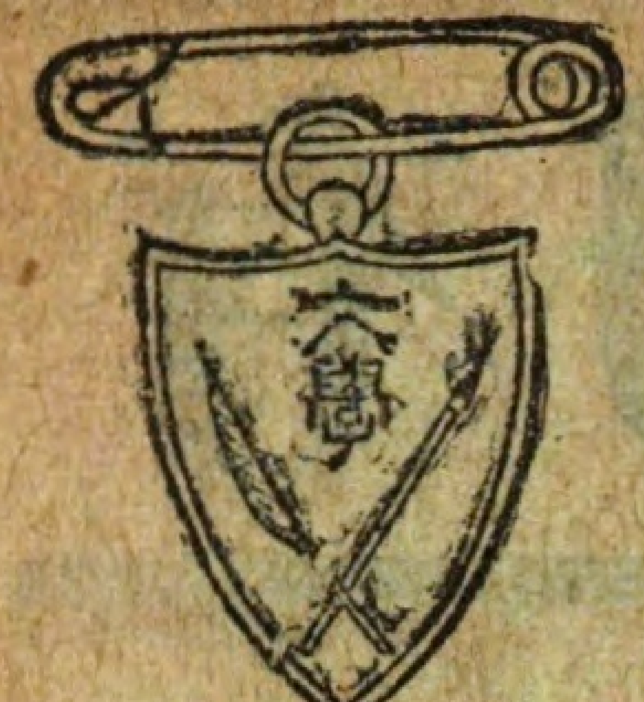
第五回新學期開講

此際入學者に限り種々の大特典を與ふ！

本會に入學すれば

本會員には大家の所論と會員の作品を滿載せる機關雜誌新文學を無代進呈す◎本會員には文章其の他無料添削の特典を與ふ◎本會員には各種の大特典を與ふ◎本會卒業生には學資貸與の特典あり◎本會卒業生には各新聞雜誌記者其の他に就職紹介の便宜を與ふ◎本會卒業生を會友とし會員同樣種々の便宜特典を與ふ◎教授法の最新講義の平易會費低廉短期の卒業之れ本會員の常に多とする所なり

講義錄見本付き
無代進呈
規則書申込次第



本會員徽章

初等科五ヶ月卒業

教授科目　論文。小說。新體詩。和歌。俳句。書簡文。國文。漢文。外國文學。日本文學。文學概論。新聞學。日本文典。創作百話。添削實例。雜科。

高等科五ヶ月卒業

教授科目　近世文藝思潮史。藝術概論。哲學汎論。詩歌論。演劇論。明治小說史。各國文學史。文章術。近世々界文豪傳。名著梗概。名文評釋。創作百話。

東京神田西小川町
（電話本局四五四七番　振替東京五二一九番）

大日本文學會

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

有朋堂文庫

第一輯 概規

【會期】自大正二年十一月、二十ヶ月、毎月三冊宛配本

【會費】●甲種（一時拂込）申込金共金參拾八圓也、地方送料金參圓六拾錢也
●乙種（廿ヶ月拂）申込金貳圓也――月拂會費金貳圓也
地方送料毎月金拾八錢也

歷代日本文學の精華を網羅し、內容の精外觀の美天下に冠絕せる「有朋堂文庫」は、今や有利簡便の條件を以て江湖に提供せられたり。第一第二兩輯共に各獨立して座右机上の珍たるべきは勿論、前後百廿冊を以てすれば上下三千載の一流文學は擧げて之を居常日夕の伴侶たらしむるを得べく、眞にこれ傳家の至寶國民的寶典也。躊躇して此絕好機を逸する勿れ。

第一輯六十冊 第二輯六十冊 特約會員募集

●申込期限 大正二年十一月十日限、供給可能限度を超過する時は期限內と雖も即時締切

●申込方法 東京市內は電話又はハガキにて御申越次第店員參上 地方は申込金貳圓又は一時拂込金送料共全額振替口座又は爲替にて御拂込の事

●內容見本 本文庫の實物寫眞、詳細規定、內容細目、本文插畫及び索引の印刷見本等を收めたる詳細內容見本、御申越次第即時贈呈

第二輯 概規

【會期】自大正二年十一月、三十ヶ月間、毎月二冊宛配本

【會費】●甲種（一時拂込）申込金共金四拾圓也、地方送料金參圓六拾錢也
●乙種（卅ヶ月拂）申込金貳圓也――月拂會費金壹圓四拾五錢也
地方送料毎月金拾貳錢也

申込所
東京神田錦町
有朋堂書店
電話 本局一一三六 本局四四二五
振替 東京七一四八

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

銃後は赤い笑と共に世界文壇に於ける有數の名著と評せらる

伯爵 大隈重信序
鷗外 森林太郎題言

陸軍步兵大尉 櫻井忠温著

天覽

銃後

菊判全一冊
定價壹圓五十錢
送料八錢

肉彈は年を逐うてますます其の聲價を揚げたり殊に海外諸國に於て愛讀研究せらるの甚だしき邦人の著述にして如斯く廣く世界に流布せるもの稀なり。見よ既に其の譯文に英米版あり瑞典、獨、佛、伊の諸版あり而も露譯は五の多きを算す而して新著銃後はまた實に肉彈を補足して日本的精神の幽微を闡明し日本魂一度び活躍せば果して如何の莊美を發揮するかを遺憾なく語り盡せり一たび之を讀みたるもの必ずや卷を措く能はず肉彈以上の悲壯なる興味を感ずと評せざるなし宜なり此書近く出てゝ而して今や肉彈と共に世界の視聽を驚かさんとするや敢て愛讀を俟つ。

●肉彈 一名旅順實戰記
定價七拾錢送料八錢

●英文肉彈
定價金壹圓
郵送料金八錢

東京麴町二丁目
丁未出版社
振替口座東京七八四七番

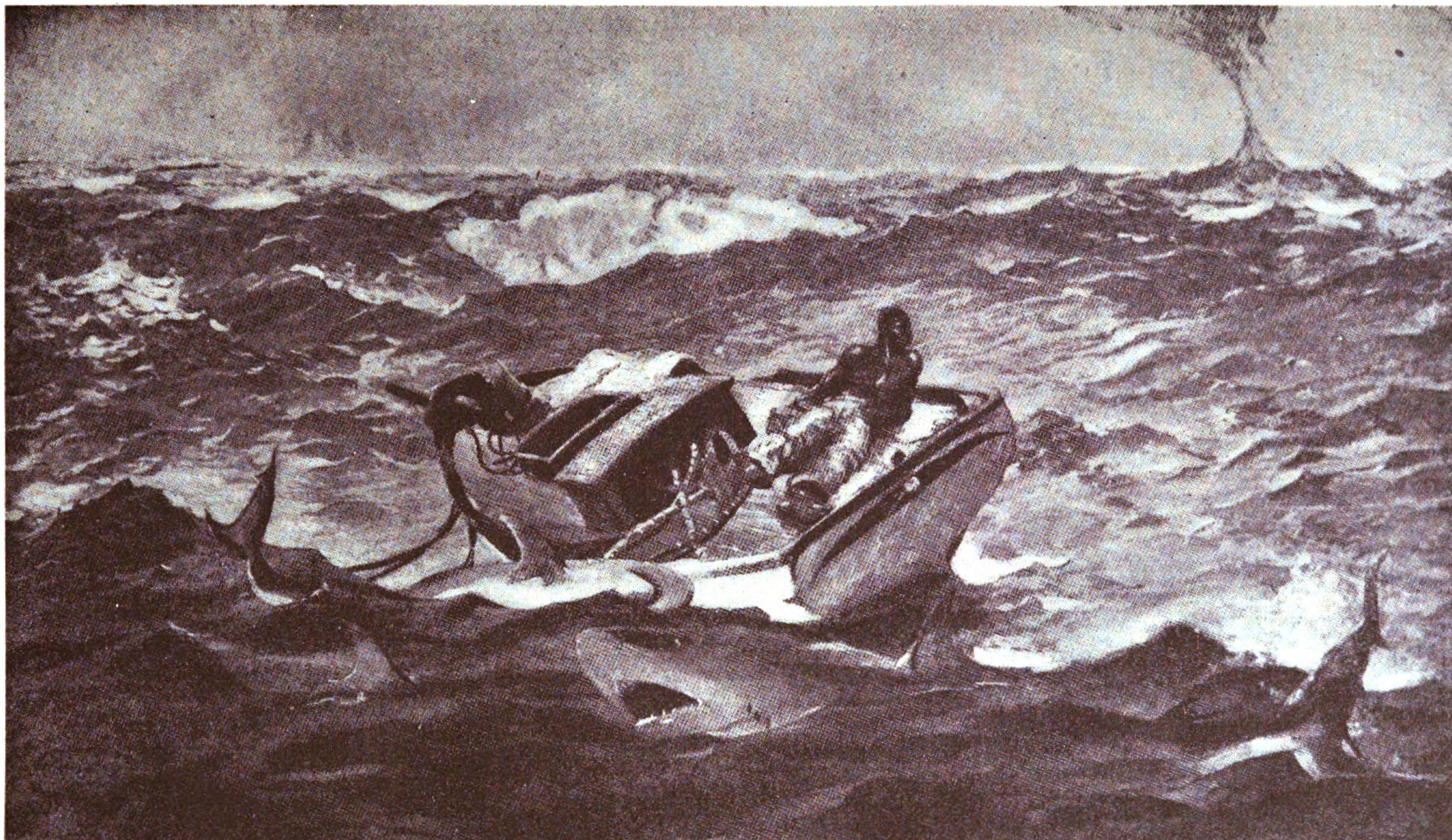
信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第廿八年十月號目次



WINSLOW HOMER



"THE CASTAWAY"

中央公論



十月號
第廿八年第十二號
第二百九十七號

支那・北米・及び日本

我日本は由來幾千載の久しき東洋の一隅に偏在し、世界の文化と列國競爭の餘渦に遠かれるも、今や宇内交通の形勢全く一變して東洋と西洋を接近せしめ、我邦をして其仲間に介在して最も好望の地歩を占めしむるに至れり、即ち大和民族は北太平洋の一方より遙に南面し右に支那を控へ左に北米と接し、世界の二大國の間にありて自ら貿易上最大利便を占むる耳ならず、東西文化の對照融和に於ても亦た自ら唯一の媒介者たるを失はず、而して東洋和戰の鍵鑰亦た我邦の手に在りと謂ふ敢て過言なりとせず、斯かる有望有爲の位置に立つからには自然に幾多の危險の之に伴はざるを得ず、即ち加州排日案件の如き又は南京虐殺及び我軍人侮辱事件の如き、我邦が隣國との關係最も親密なるが故に發生し得べき事件

に外ならず、此等の案件の如きは我邦が占むる最有望の位置に對して支拂はざるべからざる租稅なりと謂ふを妨げず、但し此一篇に於ては吾人は暫らく具體的政治論に立入るを休め、兩隣邦の、形勢、國情を對照して其異同を辨し其教訓を示摘し、以て大和民族の前途に於ける內憂外患に向ひ暗夜を照らすべき一道の光明を求めんと欲するなり、

（一）

支那と米國との國情を對照して第一に吾人の注意に上るものは兩國孰れも世界一流の大國なること是れなり、先づ國土の面積に就て觀察せんに、支那は其廣袤實に四百三十萬方哩に及び、未だ大英帝國（千百五十萬方哩）、露國（八百七十萬方哩）、及び佛國幷屬領（四百九十八萬方哩）に及ばざるも、英と佛との版圖は廣大は廣大なるも世界の各方面に碁布散在するが故に警備交通の困難頗る大なり、素より支那が亞細亞大陸の一方に集團を爲すに如かず、露細亞は大陸國にして其大部は一方に集團を爲すも、多くは北方に偏在して大洋に向ひ一の不凍港をも有せず、黑海のオデッサは南露唯一の貿易港なれども大洋を距ること甚だ遠く、地中海に出づるさへダルダネールの關門を通過するを要す、之に反して支那は氣候中和を得て其東海岸一千八百哩の一帶は頗る自然の良港に富み、殊に其中腹を東西に横斷する揚子江は、其支流を合すれば汽船の航行に堪ゆるもの一千五百哩に及び現に開港市場九箇所を有し、吳淞漢口間の本流（六〇〇哩）には自由に一萬噸の大船を上下し得べくして、大凡世界江河の大なるもの多しと雖も孰れの大河か長江の滾々滔々たるに及ぶを得んや、眼を轉して米國を觀れば廣袤約三百五十七萬方哩を有

して支那と伯仲の間に在り、其版圖亦た僅かにアラスカ、布哇等を除くの外は皆な一の偉大なる集團を爲す、即ち北米大陸の最膏腴の大部分を占むるものにして、此點に付て支那が英佛露に對し優勝なるが如く米國亦た同じく優勝の位置を占む、北方の大湖と南方に流るゝミシシッピ河は之を支那の長江に比すべく、米國と支那とは人工の作用、文明的施設の多少に到りて殆んど霄壤の相違あると云ふべきも、國土自然の形狀に就て觀は此兩國は誠に能く相似たり。更に人口の點に就て觀るに支那は流石に世界第一なり、但し單に數字を以て比較すれば大英帝國の四億二千一百萬人は支那の四億三千三百萬人に對し多く遜色なきが如きも、大英の人口中印度(二億四千四百萬人)は其多分を占むるものにして、多大の異分子を含有する未だ大英の如きはあらず、之に反し支那の人口の最大多數は中土十八省内にあるを以て彼等は同一種に屬し同一文字を解す、此點に於ては到底他國の企て及ぶ所にあらず、北米合衆國は人口の點に於て九千三百萬人を有して支那、大英及露國(一億六千七百萬人)に及ばざる遠しと雖も、其增加率の高きは到底世界中他に及ぶものあるべからず、即ち十九世紀中に於ける結果に就て觀るに一千八百年に於ては僅々五百三十萬人なりしもの一千九百年には七千六百萬人に達し每年の平均增加率は百分の三、四を示す、是れ現今世界中、米國に次ぎ最高增加率を示す獨逸人口增加率(約百分の一、三六)の二倍半に當るを見るべし、素より米國人口の增加は多くは歐洲移民の入國に原因するものにして、他國になき特殊の事情に因るとは云へ兎に角その膨脹の激甚なるは眞に驚くべし、而して米國の人口中黑人種に屬するもの約一千萬人にして、この異分子あるは自ら國民團結の一大妨害たるの嫌なきに非ざれども

黑人の増加率は低きに非るも單に出產の結果に外ならざれば到底移民に起因する白人種の増加率の高きに如かず、其數を以て國民の總數に比すれば現に僅々十分一に當るに過ぎずして、更に十五分の一となり二十分の一と爲るの日あるべきは蓋し遠きに非ざるべし、又た歐洲移民の言語風習の種々雜多なる確かに一の禍因を爲すも、米國國民敎育の力は能く此亂雜なる分子を陶冶して良民と爲すに足れりと云ふべきが如し、蓋し合衆國文化の驚くべき特徵は實に其同化力の旺盛なるにありと云はざるべからず、然れば人口の數に於ては米國は未だ支那に及ばずと雖も各々內に文化を同ふし種族を同ふする點に於ては兩國互に能く相似たり、

今この二大國を左右に控へ其中間に介在する帝國は單に貿易上より之を觀るも最も羨望すべき位地にあるや論を待たず、即ち米國に對しては約二週間以內の航海を以て達すべく、支那は一週間を要せずして其南方に達すべし、而して我邦は兩大國交通の要衝に當り船舶の往復するもの必ず橫濱神戸に寄港せざるを得ず、今日の日本は能く往古のカルセーヂの盛時に似たり、當時カルセーヂは東は希臘、小亞細亞、シリヤ、埃及と交通し西は西班牙、ゴール(今の佛國)と往復し東西隣邦の間に立ち貿易上の大利を獲たり、即ち我邦を以てカルセーヂに比せば今日の太平洋は當さに昔日の地中海に比すべきか、試みに輸出入の數字に徵するに我邦と米國との貿易は最近の調べに依れば約二億二千四百萬圓にして、支那との貿易は一億五千萬圓に達す、兩ながら是れ我邦の國別貿易表の主位を占むるものなり、而して支那の海外貿易に於て日本は英國に次ぎて二位を占め、米國の海外貿易に於ては英獨佛に及ばずと雖も優に六

位を占むるを得るなり、是れ實に我邦特殊の地の利に基き邦人の計畫亦た宜きを得たるに因るものにして、今後の發展蓋し想像するに難からず、

（二）

然りと雖も支那と米國とは根本に反對の點頗る多し、寧ろ相違の點甚だ多きが故に其類似の點の特に目立ちて見ゆるの感なきに非ず、殊に何人も見遁す能はざるべきは歷史年代の相違にあらん、即ち支那は世界一二の古國にして米國は世界第一の新國たり、世の中に復た斯の如き明白なる對照あるべからず、抑も世界の最古國として記錄の今に傳はるものは埃及なり、三角塔の記錄に依り其建國の時代を計るに紀元前四千年を下らざるは疑なきに似たり、今支那を以て埃及に比せんに、試に堯舜を以て正史の起原なりと假定すれば紀元前二千五百年に溯るを得べく、未だ埃及に及ぶ能はざるや明けし、僅かに埃及の第四王朝と同時に在り、然れども是れカルデャ建國と同時代に在るを以て、支那は優に世界最古國の一たるを失はざるなり、之に反し米國は十七世紀の初に當り初めて殖民を開始し、（清敎徒を載せたるメイフラウルの第一航海は一六二〇年に在り）十八世紀の末に於て十三州の獨立を全ふしたれば、世界の新國中の最も新たなるものなり、素より當時、建國の諸名士は歐洲古來の文明の繼承者にして、寧ろ其粹を拔けるものと云ふべきを以て、北米共和國の創業は例せば野蠻人が一躍して文明人と化せりと云ふが如き奇跡には非ず、但ゞ斧斤未だ曾て加へざる大陸の山林を開拓し、一切歐洲故國の干涉より脫し、以て共和の理想を實施したれば、其意氣の旺盛なる、計畫の大膽なる、自ら新乾坤を經營するの槪あり、

而來二百有餘年建國の氣象は依然其國風と爲り、幾多歐洲舊國の移民も一たび米國に入れば自然に其國風に感化せられ、國政の大より技術發明の小に至るまて、自ら成し能はざるの事なく、成すべからざるの時なきの慨ありて、各方面に新機軸、新趣向を發揮して以て常に世界を驚かす所以のも即ち所謂米國魂の發動に因れり、米國人の言動決して悉く善ならず、輓近其對外態度の動もすれば暴慢に失するが如き列國の遺憾とする處なれども、事に處し獨創に、大膽に能く局面を解決して毫も倦怠の色なきは實に米國の新國たる所以に非ずや、之に反して支那の近狀は最も明に其舊邦たるを示す、吾人は屢々論ぜし如く支那人民を老朽視するものに非ず、支那民族は古來間斷なく北方蠻族の侵入を受け、爲めに其血液中には新元氣の尙ほ澒躍するあれば未だ劇に前途を悲觀すべきに非ず、然れど假令其人民は老朽せず其元氣尙ほ銷磨せざるものありとするも歷史と慣習は容易に脫却すべからず、近時共和主義を唱へて革命を實行せりと云ふと雖も仔細にその施設の跡を察すれば、袁と云はず孫黃と云はず依然たる支那人にして、共和の前途亦た頗る遼遠の感なくんばあらず、是れ必ずしも現代人の罪に非ず、歷史習俗の罪なり、第二に、米國と支那の著るしき對照は天に勝つと負くるとの相異に在り、米人は天に勝つ支那人は天に負くる、是れ火を見るより瞭然たり、夫れ自然の國土に就て觀ば支那も米國も同じく天與の富源に富み江河の利便を有せり、然れども人智を用ゐて富源を開き、災害を芟除し、天然を驅使し以て人の用を成さしむる一段に至れば支那に於ては多く其成功を見ざるも、米國に於ては事々物々自然に對する人智の勝利を示さゞるはあらず、風を飛ばして雷とエレキの同一なるを發明せしものはフランクリンに非ずや、

蒸汽船、電信機、電話、蓄音器、飛行機を發明せしものは皆な米人に非ずや、始めて太洋底に電線を敷き又大陸横斷の鐵道を建設せしは孰れも米人に非ずや、地上には摩天の家屋を築き地下には地軸を貫くべき鑛坑を穿ち、百般に利用厚生の大計畫を建つるものは米人に非ずや、今轉して支那を視よ、古來人衆くして天に勝つとは支那人間の流行語なるも、事實は全く此格言を否定するに似たり、四億の民衆多からずとせず四千載の歷史久しからずとせず、然れども支那人は終に天然に勝たず寧ろ敗者の狀態に在り、太古の時大禹が水土を平げんと欲し身を勞し思を焦し、外に居る十三年家門を過ぎて敢て入らず、以て九州を開き九道を通し九澤を陂し九山を度せりと云ふが如き、其意氣の壯、規模の大、以て大に稱するに足れるも後世則るもの眞に稀なり、秦時蜀郡(四川)の太守李父子あり、岷江の上流を決し其急湍を幾百千流の溝渠に移して周ねく成都の大平原を灌漑し之を化して千里の沃野と爲し、二千有餘載の下尙今に五百萬の生靈をして其恩澤に浴せしむ、其規模の廣大なる、其技術の巧妙なる歐米の旅客をして偏へに驚歎措く能はざらしむると云へり、又た浙江省杭州より起り蘇州、鎭江、楊州を經て天津に至る大運河の如き中古以後の工事に屬するも亦た支那の誇りたらずとせず、然れども是等は宛も大沙漠中稀有の泉地（オエシス）と云ふべく、支那全般を見渡す限り、無限の富源は閉ざして開かず、自然の災害は人力の不可抗を諦して除かんと欲せず、人は唯だ恐るべき自然の勢力に飜弄されつゝ奴隸の如くに生理を僥倖する耳、之を彼米國の鴻業偉蹟、自然と奮鬪して各方面に凱歌を奏するに比すれば殆んど別天地に對するの感なからんや。

（三）

北米と支那との根本の相違は個人主義と家族主義の相違に歸す、北米の人口は支那の人口に比して其四分の一に及ばざるも、其個人の智能人格は數倍の高きを爲すが故に遂に今日の盛運を見るものに非ずや、世の論者動もすれば個人主義を解して利己主義と爲す、曰く個人主義は家を破り國を壞ると、是れ一方の弊をのみ見て未だ眞の個人主義の何たるやを知らざるの言のみ、何となれば眞の個人主義は則ち故福澤翁の所謂獨立自尊に外ならず、別に言換ゆれば個人主義とは個人の自覺を期するに在り、道義に自覺し、知識に自覺し、力量に自覺し、以て醉生夢死の境涯を脱して個人の本分を盡すを目的と爲す、是れ北米の强大なる所以なり、之に反して支那の實情を見よ、一方に國家の觀念なきと同時に殆んど個人の價値を認めず、眼中只だ家族あるのみ、一家の主長は一族を保護するの責あるも族員は只其命に從へば足れり、偶々同族中の秀才志を得て青雲に登るあれば緣故の貧者多く其家に寄宿し、當人また其食客の多きを誇るの風ありて、遂に惡財を積み富家翁を以て終らしむるに至る、焉んぞ身を國家民人に貢獻して淸名を千秋に垂るゝを望まんや、斯の如きは素より家族主義の本意には非ずと雖も、其弊の及ぶ處斯の如し、夫れ祖先を崇拜し子孫の計を爲す是れ素より人生の要事たり、然れども個人の自覺ありて始めて祖先と子孫に對するの道を解するを得べく、もしも終に自覺する能はず只だ僅かに形式的に祖先を拜し愛着的に子孫の計を爲さんとするに於ては、蓋し道を誤らざるもの多からず、豈に亦た危からずや、古來支那人間に持囃されたる二十四孝の理想の如き多くは姑息の行爲にして往々人道の大旨に背馳

ずるものなきに非ず、斯の如き偏僻狹隘の思想を子弟の間に培養せんと努むるは決して家を起す所以に非ず、蓋し此弊を生ずる所以は個人の自覺を喚起せざるの罪に座す、素より個人主義の弊亦恐るべきものあり、然れども其弊や尚ほ活氣あるを失はず、然れども家族主義の弊は元氣の消耗なり精神の死亡なり、豈に恐るべきに非ずや、

個人自覺の必要なること大凡前論するが如し、更に之を數字に譬へんに、試みに一より十に至る各數字を並べ、其前半と後半とを別々に加算せよ、恐らくは何人も其合計數の懸隔に驚かん、即ち1 2 3 4 5 15、又5 7 8 9 10 39、孰れも同じく五個の數字を合算するなり、然れども一方は十五と爲り他の一方は卌九と爲る、而して此相違を生ずる所以のものは他なし各數字個々の價値の多少に因れり、斯の如く國家の强弱盛衰多く其個人の力量人格の如何に繋がる、支那人民は世界第一勤勉の人民なり、試みに廣東の如き人口稠密の地に至り見よ、其狹隘なる市街を往復し又は戎克船を操り生活する無數の貧民中曾て一人懶怠のものありや、又は錫蘭島に於て見るが如き乞食の徘徊するを見ることありや、彼等は孜々として勞役し、唯だその可憐の生活を僥倖するに餘念なきなり、嗚呼支那人民は決して老朽して救ふべからざるの民に非ず、唯幾百千載の惡政に苦み固陋の思想に壓せられて自覺するの機會を得ざる耳、其官吏紳商の如き亦た決して無智無能の人のみにあらず、其多くは讀書子にして、殊に輓近泰西の思想に接觸するもの少しとせず、唯だ憾むらくは極端なる家族主義の弊に毒され國家民人に對する責任を自覺するに至らざる耳、

（四）

斯くて一方には家族主義の弊と天然に負くるの實例を見、他の一方には個人主義の成功と天然に勝つの實例を見て、吾々日本人民は果して其何れを學ぶべき乎、吾々は幸に家族主義の弊に毒殺せられず寧ろ其利を受けて今日に及び且つ幸に歐洲の個人主義を輸入して之を法典に採用して以て調和を計り、稍々成功するが如きの觀あるを以て滿足すべき乎、吾人を以て之を觀るに我邦人の社會及び心理の現狀に關して二個の憂ふべき缺陷あるに似たり、一は未だ個人自覺の眞義を解せざることと又一は天然に勝つの努力に於て尙ほ頗る奮勵の餘地あることと即ち是なり、奧田文相は我法典の一部が個人主義に傾き過ぎたりとて改正を促さんとすと傳ふ、吾人は玆に民法の某條項に關し得失を論ぜずと雖、現に青年男女の間に漲り來れる思想上一大危險の存するは否むべからずして、之を救濟するの道は區々たる法典の改正よりも寧ろ眞正の個人思想の普及にありと云はんと欲す、近時世間の注意を喚びつゝある新婦人運動の如き蓋し個人の價値、快樂の眞義を一知半解するの結果にして、未だ眞の自覺に至らざる未熟の產物たり、若し教育の當事者に於て大に眞の自覺を促すの法を講ぜざるに於ては益々放縱の傾向を增長して終に其弊に堪へざらんとするに至るべきは疑を容れず、更に家族主義を楯に思想上の壓迫を加へんとするが如きは益々危險を甚しからしめ、思想の改善に寸効なかるべきや察するに難からず、又た婦人間に解放的思潮の湧來らんとするに際し、一方に青年男兒の意氣漸く消沈の傾あるが如きは奇怪の現象に非ずや、即ち新婦人は社會の桎梏を脫せんと欲するもの、意氣消沈の男子は秩序ある社會の裡に晏如たる小生涯

覺せしめんとするものゝ兩ながら未だ個人の自覺に達せざるの結果に外ならず、浮薄なる新婦人や薄志なる小才子や是れ決して興國の民に非ず、吾人は我王政維新の大業なるものが一種雄大の氣魂に動かされて成就せられしことを忘るべからず、時は方さに大正に入り帝國の前途益々多事ならんとするの秋に當たり吾人は我男女青年の間一種雄渾の氣象を喚起するの必要を思ひ且つ、個人の自覺に基ける眞面目なる努力に因り、自個と國家の運命を開拓せんとする眞人物の輩出を希はずんばあらず、又た自然と戰ひ之に勝ち富强の基を立つべき人物の起らんことを祈らざるべからず、想ふに我日本が今後世界的勢力となりて國是を遂行するに當りて單に强兵を以て足れりとせず、又大に富力を增進せざるべからず、然れども富國强力のみを以て未だ足れりと爲さず、更に雄大なる哲理の力により、個人及び國家の理想の力により、國民の元氣を充實せんことを要す、是則ち我邦をして中古式の境域より脫して今代文明の先頭に立たしむる所以にして、又是れ實に大正維新の事業と謂ふべきに非ずや、支那の衰勢に鑑み北米の隆運に學び、吾人が得る處の敎訓は正に斯の如し、讀者諸君以て如何となす。

南京虐殺と善後策

九月一日北軍の將張勳部下の兵南京城朝陽門を占領するや、乍ち一大悲劇の幕は開始されぬ、南軍の降伏せるもの數百千人を虐殺せりと云ふが如きは暴は即ち暴なりと雖も殺氣の迸しる餘に出でしとす

れば必ずしも解し得られざるに非ず、然れども白晝公々然良民の財を掠奪し婦女を辱かしめ之を爭ふものは到る處に虐殺を試み、南京三十萬の人民をして殆んど一人の難を免れしものなきに至らしめ、死骸は城内各所に累々たり、財物は幾百の戎克船に滿載して各方面に運搬せられ、昨日までは殆ど裸體同樣の官兵等乍ち掠來の衣を着して得々たりと云ひ、富者は苦力同樣の服裝にて上海に遁れ來るも、殘留の貧民飢に泣くもの其幾千人なるを知らずと云ふ、殊に吾々帝國臣民の上下を問はず一齊に悲憤禁じ能はざるは同胞三人の虐殺せられしことにして、彼等は危險の身に迫るや日章旗を飜へして其日本人たるを證明せしに關はらず、無殘にも路頭に虐殺せられ、且つ邦人の居住亦た大に掠奪せられ、甚だしきは赤十字旗を飜へせる我病院亦た二十回に亘りて掠奪を蒙れりと云ふ、實に張軍今次の暴行は全く强盜追掠の所行にして、苟も軍隊の名あるものの所爲として想像し得べき限にあらず、而かも其長官たる張勳が掠奪强姦虐殺を默許もしくは公許せりと云ふに至りては實に沙汰の限りにして、吾人は斯の如き野生暴慢の人物を南京都督に任命して平然たる袁總統の責任亦實に輕からざるを思ふ、且つ傳ふる處に據れば今次の虐殺掠奪は必ずしも張軍にのみ限られず、他の軍隊も亦々之に參加せるが如し、即ち南京紅十字會本部を襲ひ藥官を殺し金七萬元を掠取せしは雷震春の軍にして、南京石油會社の石油を掠め、下關を燒燼し財物を奪へるは馮國璋の軍なりと云ふ、乃ち知る張軍や罪最も大なりと雖も他の軍隊も亦共犯たるを免るべからざるを、且今より約一年以前袁氏と緣故深き河南兵の北京に於て盛に掠奪を行ひ、公々然財物を鐵道に滿載して保定方面に引揚げたりと云ふは尚ほ吾々の記憶に新たなる所にあらずや、大凡

此等の形跡に就て察すれば、支那の軍隊なるもの、多少の相異はありとするも、概ね皆な不規律無節制の群民と云ふべく、之を率ゆる將帥多くは才將にして賢將にあらず、蘇老泉の所謂結ぶに重恩を以てし示すに赤心を以てし、田宅を美にし飲饌を豊にし、歌童舞女以て其口腹耳目の欲を極めしめ、而して之を折るに威を以てして始めて之を御することを得べきものなり、袁氏が常に賞を懸けて將を勵まし、將も亦た賞を懸けて兵を勵ますは强ゐて驚くを須ゐずとするも、虐殺强姦掠奪是れ則懸賞の資たりと謂ふに至りて眞に驚かざらんとするも得べからず、斯くて今次の南京殺掠は實に二週間の久しきに及び、巳に其何物をも掠奪すべきなきに及び始めて止めりと云ふ、嗚呼何等の慘事ぞ、南京代表者王豊鎬等袁總統に哀願して、金陵は克復するも兵士檀に姦掠し槍斃し、一物一人一匹の豚一枝の花も完膚なく劫奪せらる、我父母は斃れ我妻女は辱められ我幼兒は爛死す、昇天に號泣するとも天答へず、敢て大總統に血涙歎願す査辨救濟せよと云ふもの以て其悲慘の光景を想ふべく、人之を長髪賊の殘害に比して勝るも劣らずと云ふもの蓋し誇張の言と云ふべからざるに似たり、

然れども吾人が今次の南京事件に對し最も痛恨悲憤に堪へざるは單に一般人道の爲めにのみ然るに非ず殊に我國旗を尊重せず邦人三名を虐殺したることに因れり、夫れ今回の國旗侮辱と云ふは素より國際法上に所謂國旗侮辱と云ふと科を同ふせざるは云ふ迄もなし、即ち在外大公使館又は兵營軍艦等に揚げたる帝國の日章旗に對し侮辱を加へたる場合と個人がその私用の國旗を無視せられて虐殺せられたるとは同日に論ずべからざるや明かなり、然れども最も明白にして何人にも分り易き我日章旗を奉持せるも

の、日本人たることは張勳部下の愚昧なる兵卒と雖も理解せざる筈なく、其日本人なるを知りて之を虐殺したるは正さに我國旗を輕侮し我國威を蔑視したるものなり、同時に在留邦人の保護に任ずる我陸戰隊の勤務中に際し支那兵の我國旗を侮辱したる形跡あり、加ふるに此と前後して川崎大尉の兗州に於て、西村少尉の漢口に於て支那兵の爲め堪へ難き凌辱に遭ひしことあり、又山海關方面に於て我守備隊の支那兵に侮辱せられたることあり、斯の如き頻々たる報道に接せし我邦人の眼には支那軍隊中到る處我國を侮蔑するの空氣に充滿するの狀瞭然として映じ來れり、故に南京に於ける殺掠と國旗侮辱の報一たび傳はるや、國論大に沸騰し慷慨の士は直に最後手段を叫び、出兵を說き、內閣の辭職を求め、而して最も悲むべきは前途多望の阿部政務局長の橫死を見るに至り、更に群衆の一大運動を惹起せり、而して此際天下の大小新聞紙は概して硬論を主張し大に政府を督勵するに努力せり、

轉じて政府當局を觀るに、南京虐殺の報に接するや直に山座公使をして袁總統に向ひ談判の端緒を開かしめ、更に十日を以て虐殺並に武官凌辱事件に對する我國の要求を提げて袁政府の速答を迫らしめたり、而して北京政府に於ても頗る事態の重大なるを解せしものゝ如く、又我邦輿論の劍幕に避易したるものゝ如く、十三日を以て悉く我要求を納る旨を山座公使に返答したり、今我政府の要求にして袁政府の承諾を得たりと云ふもの大體左の數箇條の趣旨に外ならざるべし、

（一） 支那政府は南京に於て殺害せられたる三名の日本人に對し、哀悼の意を表せる謝罪狀を日本政府に送附すべし、

（二）大將張勳は此不幸事件に對し哀悼の意を表し、自ら南京駐在の日本領事館に至りて謝罪すべし、

（三）張勳の軍隊は本事件に對し哀悼の意を表し整列して南京駐在の日本領事館前に至り謝罪すべし、

（四）殺害せられたる日本人の遺族に對し相當賠償を爲すべし、

（五）日本人を殺害したる犯人及び日本人の保護を沒却したる士官を一律に處罰すべし、

（六）川崎大尉を凌辱したる犯人を罰し其所屬隊長を免職すべし、

（七）直隷總督をして天津駐在の日本領事に對し謝罪せしむべし、

（八）西村少尉を凌辱せし犯人を罰し其所屬隊長を免職すべし、

（九）支那政府より日本政府に謝罪の書面を送るべし、

（十）黎元洪をして漢口駐在の日本領事に對し謝罪せしむべし、

右十ヶ條の外帝國政府は江蘇都督張勳の免職を非公式に要求せるが如し、

今次輿論の沸騰に際し、從來支那問題には頗る關係深き犬養毅氏の如き大に出兵說を非とし穩正の態度を是なりとし、立憲同志會の如きも亦た出兵說に與みせず、政友會は素より政府を信賴するの態度を守り、概して政界の責任ある方面に於ては尋常の外交手段を以て事局を解決するを至當としたり、但し斯の如く穩正の態度に出でしとて必ずしも悉く政府を信賴せしには非ず、同志會の如き談判の結果如何に由りては猛然として政府に肉迫せんとするの情自ら蔽ふべからず、今次の談判が意外に速に決着し、從來無能の呼聲高き外務當局としては一大手柄たるが如くいふものあるも、我要求は果して無事に實行

せらるべきや否や、中央政府の謝罪狀發送、直接責任者處罰、賠償金の決定及其支拂の如きは相違なく行はるるとしても、張黎等の都督自ら我領事館に來り陳謝する事及び張部下の兵をして整列して帝國領事館前に來り謝罪せしむ等の如きは種々の方面より觀察すれば事容易の如くして決して容易ならず、殊に張勳の免職は難事中の難事なるべし、袁總統は果して此等の條件を實行せしむるの誠意ありや、假令誠意ありとするも其威力あるべきや否や、若しも一定の期間に於て之が實行を見ること無きに於て帝國は遺憾ながら斷然たる手段に出でざるべからず、

予箇の提議中前途の保證たるべき附帶の條件の見へざるは輿論の齊しく不滿足とする所たらずんばあらず、當局者は他に尚交涉中の案件ありと云ひて稍々國民を滿足せしむべき結果の今後に齎らし得らるべきを暗示すれど、其果して幾許の價値あるべきかは疑問なり、吾人は餘り多くの希望を此種の暗示に屬せざるを可なりと思ふ、

不完全ながらも已に我提議の支那政府に納られし以上は彼是れ愚痴を溢すも今更詮なしとするも、若しも當局にして猛省せず、依然として從來の優柔不斷の態度を持續するに於ては、世論の不平憤懣愈々極度に達し、遂に現內閣の瓦解を見ずんば止まざるべし、國民は今後宜しく條件の實行を監視し、當局を督勵して更に機會を求めて帝國の地步を堅固にするの策を講ぜずんばあるべからず。(九月廿日稿)

評論家としての福澤諭吉

田中王堂

時代は悉く英雄の産物である、而して異なれる時代は異なれる英雄に依つて代表されるといふ見解に一分の眞理があるならば、現代の英雄は評論家であり、評論は現代を支配する勢力の最も優れたるものであらねばならぬ。云ふまでもなく、現代は實驗と改造と、進歩とを生命として居る時代である。されば、日常の生活より自然に生じ來たる新しき理想、新しき欲求を充たすが爲めには、絶えず、新しき試驗は企てられ、新しき樣式は發見されねばならぬ。苟くも現代に棲息するからには、何人と雖ども此の覺悟と、努力とは必要であるが、就中、最も明晰なる反省と、最も莊重なる責任の觀念とを以て此の覺悟と努力とを實にして居るものは評論家である。

　如何なる國に於ても、それが或る程度の文明に達した後は、必ず或る種の詩人と學者とを有した。然しながら、嚴密なる意味に於ける評論家を有つに至つたのは、近世文明に達した國々に限られる。されば、西洋に於ても、評論家の出現したのは、個人の欲求は社會の組織と共に動搖し始めた佛蘭西革命前後とするのが至當であると信ずる。實に、佛蘭西革命を道標とする

十八世紀は、人間の進程に於て格段の光輝を放つて居る時代てあつたが、其の光輝の大半は當然かゝる機運を化醸した評論家に歸せらるべきものである。試に當時の社會の明星として閃く大立物を取つて見るに、其の職分や、階級は何んてあつても、悉くそれが氣分と、抱負どに於て評論家でないものは一人もない。チュルゴオ、モンテスキュウ、ヂデロオ、ルウソオ、コンドルセエ、ダレンベエル。是等の人々は、彼等の專門や、品性に於ては異なれる人が異る程異なつて居るに拘らず、評論家たらんとする氣分と、抱負とに於ては全く一致して居る。言葉を換えて云へば、彼等は新しき時代が要求する新しき生活の方法を試驗し、創設しようとする氣分と、抱負とに於ては全く一致して居る。詰り、從來政治家、詩人、哲學者、科學者等は類別であつたのが、當時に至つて、是等は悉く評論家たる一類に屬する種別に過ぎないものとなつたのてある。

吾が國に於て、維新の改革は其の反省と、深刻と、光彩との程度に於て遙かに歐洲に於ける十八世紀のそれに讓る所はあるが、然しながら、新しき要求に應じて新しき樣式を案出する必要は、自づから評論家の出現を促した。而して、表面は兎に角、實際に於ては、彼等をして當面の絕對の支配者たらしめたのである。彼等の最初の、而して最優のものとして、私は福澤諭吉氏を見出だすのである。

維新の機運は、新來の世界の大勢に抵抗して、生存を持續しようとした國民の本能に依つて造られたものである。されば、維新の國是を誘導したものは、固より福澤氏ではないが、氏は其れを建設した主なる一人である。氏の活動に先だつて、一つの象徵として、あの有名な五ヶ條の誓文が發せられて居るところを見ると、維新の國是なるものは既に或る程度に於て存在して居つたやうにも思はれるが、然し、之れは纔かに衝動とし、憧憬としててあつた。之れを理解とし、事實とするのには尙ほ多くの辯護と、説明と、奮闘とが必要であつたのてある。而して、明治の初年に當りて、何人にも優りて之れが辯護と、説明と、奮闘との任に

膺つた者は我が福澤諭吉氏であつた。そして、苟くも生活が衝動と憧憬との階段にある時と、既にそれが理解と事實との階段にある時とに於ける相違を知るものは、明治の新文明を建設するに與つて、如何に福澤氏の功勞が顯著であり、偉大であつたかを髣髴することが出來よう。

嘗て哲學を定義して、思想に於ける冒險であると云つた學者があるが、私は評論を定義して、事前に於ける實驗であるとしたい。して見ると、日々に生ずる新しき欲求は、絶えず新しき生活の樣式を求めて居る現代に於て、評論が如何に生活に於て貴重な位置を占めて居るかと云ふことは明らかであるが、殊に人々何事をか爲さなければならぬことを痛切に感じながら、分明に何事を爲すべきかを知らず、新しき制度を鼓吹するも適切な覺悟があるのではなく、古き習慣を墨守するも堅實な條理があるのではなかつた維新當時に於ては、事前に於ける實驗をそれの職分とする評論に依つて、一事を捨て、一物を取るにも、それの意義を説明し、それの志向を開展して、群衆の疑惑を融解すると同時に、彼等の理解を補導することは極めて重大なことであつたのである。

私が平生確く信ずる如く、凡ての改革家にとつて大切なものは知見であるが、特に評論の方便を以て改革家たらんと志すものには、何物にも先だちて知見を有つの必要がある。評論家にして知見を缺いたならば、他にどれだけの長所があつても、到底凡庸なるものにも成り得ないが、然し、之れに反して他にどれ位の缺陷があるにしても、若し、彼れにして眞に知見を有つて居るならば、彼れは猶ほ優に評論家たるの職分を全うすることが出來る。されば、評論家にして知見を有つか、有たぬかといふことは、啻に彼れの成敗を決するに止まらず、直に彼れの死活を制する問題であると云はねばならぬ。

福澤諭吉氏一代の事業を取つて、何が其れをして嘖世に卓越せしめた特徴であるかと吟味して見るに、それは、どうしても彼れの有つて居つた驚くべき知見で

なければならぬ。固より、彼れには偉大な事業に成功した他の人々に於けると等しく、誠實もあり、勇氣もあつた。然しながら、彼れにあつては、彼れの誠實は彼れの知見の啓發を賴み、彼れの勇氣は彼れの知見の後勁を得て、始めて其の用を爲して居つたものに過ぎない。實に、知見は彼れの性格全體を照らし、彼れの事業全體を動かした光明であり、動力であつたのである。

明治年代を通じて、福澤氏ほど明晰に世界の大勢の裡に吾が國が現に占めて居る位置と、將さに進まんとする方向とを認め得たものはなかつた。隨つて、又、彼れほど切實に吾が國の存續と、發展との爲めに方策を講じ得たものはなかつた。當時、古き制度が力を失つたことは誰れても知つて居つたが、それに拘らず、それに代はつて用を爲すべき方針を見出すことは誰れても出來なかつた。回顧の情と、空疎の計と、紛糾、錯綜して、萬人がその適從する所を知らなかつた間に立つて、毅然として、惑はず、惶はてず、唯祖國を救ふの道は、暗黑を去つて光明に就く外にないことを悟つて、苟くも此の目的を達する爲めには、如何に新奇なことと雖ども、之れを採るに躊躇せず、如何に由緒あるものと雖ども、之れを捨てゝ少しも愛著する所のなかつたのは、全く、彼れが何人にも優さりて、時局を達觀するの非凡な知見を有つて居つたからである。

維新の改革は、主として外來の勢力の壓迫に對抗して、自國の存在を保全しようとする努力に外ならなかつた。固より、是れより先き、ジエズイットの敎師、及び長崎居留の外人の手を經て獲た新知識に依つて、兵法と、醫術とは多大の刺激を受けたことは爭はれないが、眞に吾が國を振盪して、根柢より社會組織の改造を促した所のものは、全く對外政策を通じてであつた。して、之れを刷新し、緊張するの道は、詰る所、擧國一致して、富國、强兵を實にする外に途のないことに氣付いた。されば、富國、强兵といふことと擧國一致といふこととは、當時のあらゆる識者志士の念頭を片時も去らなかつた覺悟ではあるが、然し、如何なる方

法に依つたならば、永久に亙つて確實に是等を保障することが出來るかといふことになると、知見の相違に從つて人毎に異ならなければならぬ。そして、殆ど直覺に等しき福澤氏の驚くべき知見は、他の俗流を拔んじた所に之れが方法を見出したのである。

福澤氏も、當時祖國を根柢より振盪した動搖の裡に育てられ、敎へられて人と成つた一人である。されば、彼れの覺醒は又他の識者。志士と同樣に、如何にせば外國に對峙して、自國の權利と、權威とを保存すべきかといふ問題の解決より來たつたのに相違ない。そして、それが手近かな方法としては、矢張り、他の志士、識者と等しく擧國一致して、富國强兵を計るに苦くはないと考へたのであるが、如何にして富國、强兵を計るべきいふことになると、彼れは單に軍備や、殖産を改造することだけでは達せられずして、直ちに國民の生活全體を擧げて、西洋の文明に霑浴せしむることであると、端的に理解し、大膽に宣言したのである。

彼れは明らかに彼れの著『文明論之概略』に於て、『今の歐羅巴の文明は卽ち今の世界の人智を以て僅に達し得たる頂上の地位と云ふ可きのみ、されば今世界中の諸國に於て假令ひ其有樣は野蠻なるも、或は半開なるも苟も一國文明の進步を謀るものは歐羅巴の文明を目的として議論の本位を定め此の本位に據て事物の利害得失を談ぜざる可からず』と述べ、又、同書に、彼れは『今の時に當て前に進まん歟、後に退かん歟、進んで文明を逐はん歟、退て野蠻に返らん歟、唯進退の二字あるのみ世人若し進まんと欲するの意あらば、余輩の議論も亦見るべきものあらん』と云つて居る所を見れば、畢生の事業の眼目とした所が自づから明らかであると信ずる。かくして、一たび外國に對して國權を發揚することは、獨り徐々に國民の生活を改良する外にないことを覺つた彼れは、當初の目的は全く忘れないまでも、遂には主なる興味を手段に置くやうになつたと思はれる。そして、是れは極めて賢き覺悟であつた。なぜならば、目的はあつても手段の伴はない場合は往々にしてあるが、手段が充實して居つて、目的が遂行出

來ないといふ場合はない。畢竟するに、目的とは手段の綜合したる結果に與へらるゝ名に過ぎないからである。彼れの知見が一たび此處に到著した以來は、彼れが畢生の事業とした所のものは、各方面に於ける祖國の内生の改良と充實とに在つたのである。

唯物主義者、實利主義者といふ言葉を極めて淺薄に、形式に解釋して、彼れを唯物主義者、或は實利主義者と呼んで居るものがある。是れは、彼れが吾が國を武斷主義の支配より、漸くに產業主義の風潮に移すことを急務と考へて、頻りに近世文明に於ては武力の貴むに足らず、財力の侮るべからざることを主張した所より來て居るのであらうと思はれる。然し、彼れの意見には少なからず矛眉した所もあり、徹底しない所も多いやうであるが、兎に角、彼れは文明の外形を排斥し、それの精神の皷吹に努力して居つたことは、彼れの言に徴しても明らかである。詰り、彼れの意見に從へば、文明の外形は國の便宜や、富の程度に依つて斟酌しなければならぬ。唯、何れの國にしても、衰亡を怖れて繁を望む限りは、榮進んで採らなければならないものは、文明の精神であるといふにあるのである。例へば、彼れは尙ほ『文明論之概略』の或る箇處に於て『或人は文明を求むるに當て其形を先にし忽ち妨碍に逢て其妨碍を遁るゝの路を知らず余輩は其精神を先にして豫め妨碍を除き外形の文明をして入るに易からしめんとするの相違あるのみ』と云つて居る。

然らば、彼れの謂ふ所の文明の精神とは何であるか。各個人に自由と、幸福と、聰明とを保障する所の狀態を指すのである。されば、彼れも亦或る箇處に於て『文明の要は唯この天然に稟け得たる身心の働を用ひ人間の交際を盡して遺す所なきに在るのみ』と云つて居る。尙一層事實に就て之れを云つて見れば、智識の普及と、權力の公平なる分配とを計るのは卽ち文明の精神に外ならないのである。彼れの意見に從へば、野蠻とは智識の幼稚にして、權力の偏倚したる狀態に外ならずして、文明とは、それに反して、智識の發達し、權力の能く各階級に分配されたる狀態に外ならないからであ

る。彼れの與はつた題目も多く、彼れの公にした言論も甚だ尠くはないが畢竟するに、文明の精神を同胞に傳へんとして、智識の進捗と、權力の公平なる分布とを計らうとしたものであると云へる。

吾人が現に有つて居る智識や、經驗からして、詳しく考へ、細かに察したならば、智識の性質に關しても、權力の作用に關しても、福澤氏の意見は決して精確なものでもなく、徹底したものでもなかつた。例へば、智識と道德とを分離して居る如きも、其の一つであるし、一國は權力の分離、對峙に依つて進步すると見たのも其の一つであるが然しながら、當時因襲久しく、權力は不明の爲政者にのみ偏倚し、智識は幾千年を經るも其の面目を改めることのなかつたのが、歐、亞の文明の相違を來たした二つの原因であると診察し、此の陋習を打破するのを以て、新たに文明の域に入る唯一の條件と斷言したのは、如何にも時務を知るの明と、時艱を救ふの力とを具へた評論家たるを辱かしめぬ知見と云はねばならぬ。

明治の大業漸く其の緒に就いて、一方には閥族は私を營む爲めに與黨を造り、學者は纖細な學說に溺れて大局を忘れるやうになつて來た時に、彼等は互に呼應して頻りに復古の機運を養成しようとした。そして、各異なる理由の下に、福澤氏の意見を粗笨と罵り、生硬と嘲つた。されば、明治十五年以後に於ては、福澤氏の感化は甚だ衰微したやうに見えた。然しながら、彼れは、尙當年の意氣と覺悟とを失はず、己れに對して極めて同情薄き社會に於て、吾が國民を救濟するものは、あの纖細なる國家論や、迂遠なる國粹保存說にあらずして、彼の生氣あり、應用ある文明論、民權說にあることを主張した。而して、公平に今日より見れば、吾が國民は當時他の論者の言論に誘惑されずして、吾が福澤氏の言論に信賴して行つた方が遙かに正しくあり、賢くあつたのである。若し、福澤氏の議論にして、確かに粗笨、生硬にして、當時稍々進步した社會の要求に合はないといふならば、少くも、彼れの當初の主張を根柢として、それより自然に發展し來たる見解を

採擇して、それに依つて、飽くまで邁往、直進すべきてあつたのてある。あの狡猾なる權家と、迂愚なる腐儒との結托に依つて、無益に造られた無意味の反動よりして吾人は今日に至るまて、どの位損害を蒙つて居るか解からない程てある。世界の大勢が現にあるが如くてあり、吾が國の位置と實力とが現にある如くてある間は、吾人の任務は、何處までも精神的に福澤氏の遺鉢を繼承して、實質的に無窮にそれを發展して行くより外に道はないと信ずる。

吾人は天才に關する世間の謬見を破らねばならぬ。私は、古來總ての天才の目的とした所は宗敎にせよ、政治にせよ、藝術にせよ、乃至科學にせよ、最も善く當時の民衆の欲求を充たす所にあつたと信ずる。嘗て、グラッドストオンはホオマアの事業を評して「彼れは水蒸氣を民衆の中よりとつて、之れを雨と化して、復び之れを民衆に還したのてある」と云つたが、かくの如きは獨りホオマアの事業に限られずして、あらゆる事業に就ても云はるべきことてある。此の理由て、私は天才は、いつの時代に於ても、何人にも優れて、最も善く民衆の欲求を充たすことを目的とし、又さうすることの出來る人の謂であるとしたい。彼れの宣傳した事業が獨自のものてあるか、或は或るものの繼承又は變更てあるかは極めて偶然のことてある。或は福澤氏の宣傳した意見や、政策の多くは彼れが創設したものにあらずして、前人のものの適用てあるのを見て、彼れの天才の價値を疑ふものもあるかも知れぬ。然し、是れは全く天才は必然に創設の技倆を具へなければならぬとする固陋の見より發して居るのである。福澤氏の天才は、當時何人にも優れて、世界の大勢に圍まれたる吾が國の位置と、要求とを洞察した所にあるのてある。そして彼れは之れを充たすの方便は、假令彼れに他の種の文明を創設するの技倆があるとしても、西洋の文明を移植するを捷徑と考へたから、それを直裁に、大膽に爲したのみてある。等しく何人にも優れて民衆の欲求を充たすのが天才の特色てあるが、新しき樣式を創設して、それを充たす方が善いか、或は現に

在る所のものを適用して、それを充たす方が善いかを識別するのも亦獨り天才のみの擅にし得る能力てある。

私は初めより此の小品に於て維新の歴史を敍述する積りはなかつた。否、福澤氏の事業を論議する積りもなかつた。只、私が平生福澤氏から享受して居る印象の一端を披瀝しようとしたまでである。(完)

此論文は氏の近著「吾が非哲學」の中に收めらるべし(編者しるす)

内閣の命數盡く

鈴宇山人

山本内閣も多少の成功をした。勿論此の成功は、昨年より全國に瀰漫したる憲政擁護運動が、背後の勢力となつたからてはあるが、此の風或は逆風になるかも知れぬ時、或は横手から吹いて來るかも分らぬ時、巧に之を利用して荒海を乘切り、文官任用令の改正と言ひ、其の他整理事業の幾分を行ひ得たと云ふことは、内閣の成功として祝賀せねばならぬ。併ながら成功の後には必ず失敗の惡魔が附纒ふ。而して此の惡魔は、晴天白日には手を伸ばすことが出來ぬが、恰も蝙蝠が黄昏より暗夜に乘じて翼を振ふが如く、國情少しく暗黒となる時は、失敗の惡魔、忽ち其の翼を張るのてある。今や對外政策に依りて國民頗る不安の念に襲はるるに及んで、此の惡魔は大に翼を張つて天空を翔つて居る。余は山本内閣には、幾分の同情は有つて居る。而して其の成功せんことを望む者てあるが如何せん内閣の命數は已に盡きたと云ふことを暗示せざるを得ない。

元來山本内閣は、過渡内閣の性質を帶びて居る。純粹

なる超然内閣が亡びた。其の之を亡したものは誰れであるかと言へば國民の勢力である。國民の勢力を負ふた者は即ち政黨なるが故に、政黨が官僚内閣に代るべき理由と勢とを有つて居つたに拘はらず、山本内閣の現出したるが爲に一時の時局は收められたと雖も、其の山本内閣は政黨内閣であらざる理由に依り、官僚内閣であるの理由に依つて、功をなしたには相違ないが、同時に其の性質が中間の一時的の存在を保つに過ぎざる運命を有つて居つた。而して余は此の内閣が交迭する時は、必や外交問題と財政問題に依ると云ふことゝを豫言して置いた。元來外交問題は我國の立場より見て極めて困難なる多くの性質を含んで居るのみならず、外交の局に當る牧野氏の個人的性質に依つて、更に外交問題を紛糾せしむべき理由を增して居つた。之と同じく財政問題は多くの困難を伴ふものであつて、何人が局に當るゝ困難であるには相違ないが、高橋氏の局に當ると云ふことの爲に、其の困難を一層增加すべき理由を含んで居つた。故に余は前々月の中央公論に於て、此の内閣は必ず外交か財政の二者より火が付くべきものであると云ふことを豫言して置いたが、果して其の如くて、余は知言の名を得ねばならぬ場合に立至り、今や内閣は外交問題より瓦解の運命を現はして來た。これ頗る山本氏に對して悲むべきことであるのみならず、又國家の爲にも慨嘆すべきことであると思ふ。

今や國民は何故となく外交に就ては不安の聲を出して來た。或者は支那に對して速に出兵せよと言ひ、或者は出兵すべからずと言ふ。政友會の如きは自家の戴く内閣であるが爲に、内閣を信ぜざるが如き行動は執らないが、一黨を通じて外交に就て不安の念を懷いて居ると云ふことは蔽ふべからざる事實である。固より今日外交に就て如何なることをせよと云ふことの、國民の一致點を見出すことは甚だ困難である。但し現當局者に對して不安の念を抱き、之を信ぜざるの心あることは、各黨派を通じて皆然りてある。恐くは内閣員自身、或は首相自身も同じであるかも知れぬ。元來支那に對する外交と言ひ、亞米利加に對する外交と言ひ、

何人が局に當るも困難である。又其の結果を論ずれば、何人が局に當るも牧野氏の爲さんと欲する所よりも非常に多くを豫期することは出來ぬかも知れぬ。併ながら若し其の局に當る人が牧野氏にてあらざりしならば、兎に角問題がハキ〳〵して、曲り目が劃然として、不精々々ながらも國民が忍耐し得るだけのことをしたかも知れぬが、牧野氏の局に當れるが爲に、國民に不安の念を增さしめたのである。牧野氏の外交は恰も吝嗇なる遊蕩兒が金を使ふが如き風である。金を出せと言はれた時、彼は愚圖々々して出さない、而して度々强請まれた結果、一千圓を出さなければならないやうになつたのである。若し之を巧に使ふ人であつたならば最初より一千圓を快く投出したのである。然らば此の一千圓は少額の金であつても、國民は滿足したかも知らぬが、度々催促しても出さないやうな吝嗇なる當局に向つては、國民は最早や金錢の問題でない。金錢などは要らない。生命を奪はうと云ふまでになつて來たのである。

今賢明なる政治家があり、雄大なる經論を抱く政治家があつて其の局に當るも、恐らくは牧野氏の爲したるよりも少し位の餘計なることはするかも知れぬが、國民の望むが如きことの爲し得ざるは明白である。是れ國家が四圍の對外關係より然りとする所である。併ながら若し局に當る人が有爲にして見識ある者であるならば、問題の扱方がも少しハキ〳〵し、も少しハツキリし、も少し敏活であつて、國民をして不安心の中にも安心を得さしむる方がないでもない、元來今日支那に對する外交のハキ〳〵せざるは、日英の間に同盟の約があつて、而して日本は英國を引いて日本の有する特別なる利益に伴はしめなければならぬと云ふことが元である。世間唯々外務當局を非難すれども、日英同盟が我が政府の手足を拘束して居ることを知らぬやうである。日英同盟は今日に於ては此の如く我が政府の手足を拘束するのであるが、我が外交の局に當る者、若し畫策宜しきを得ば、英國をして我が利益に伴はしむることは敢て難事ではない。世間には我が前北京公

使は哀に與し、或者は南に同情した。其の極互に相爭ふた。是れ我が外交の破綻の本であると言ふ者があるが、英吉利の如きも其の政策には同樣の點がある。即ち余は斷言す南方の今回の動亂は英吉利の資本に依るものなることを。是は明白なる事實である。初め孫逸仙、黃興の徒は、軍資に窮するが爲に事を擧ぐるを大に躊躇したのである。然るに英吉利は重慶四川を經て雲南に通ずる鐵道の敷設權を要求した。而して此の要求の爲に百五十萬圓の金を提供した。茲に於て孫逸仙は鐵道總辦の權力に依つて、此の權利を英吉利に與へたのである。此百五十萬圓は忽ち孫等をして意を決して砲火を開かしめたのである。故に南方の戰亂若し外國に關係ありとせば、そは日本に非ずして英吉利である。英吉利既に此の如き關係を有する以上は、日本政府の畫策其の宜しきを得しならば、我が特別なる利益を支那に有する事情を明にし、彼を引いて我と行動を共にせしむることは出來たに相違ない。然るに我が外務當局は、此の如き好き位置に立ちながら、英吉利を捕ふる能はず、却つて英吉利に拘束せられて、運動の自由を失つたのである。內部にかゝる失策ありしが故に國民は自然に其やり方に不滿がある。勿論何人も今日より見れば漢口占領論の如き暴論に同意する者はあるまい。併ながら此の如き暴論に同意せざる者も、然らば牧野氏の爲す所を是なりとするかと言へば、彼のやり方のハキ／＼せざる、遣り口の明白ならざる、何を爲さんとするのであるか判明せざる、此の如き者に向つて外交を委任することは出來ぬと言ふのである。これ或は國民が此の問題の性質を能く了解せざるが爲であるかも知れない。外交には勿論秘密を要することがある。惡事ならざるも秘密にせねばならぬ場合が多い。併ながら秘密にするにしても、自ら國民をして己れに信賴せしむる方法はあるであらう。然るに彼は國民をして己れに信賴せしめ得ざるのみならず、其の與黨たる政友會をして己れに信賴せしむることが出來ない。豈啻政友會のみならんや、外務省內に於ける屬僚さへも己れに信賴せしむることは出來ないのである。一屬僚が

一問題に就て書類を出して說明すると、一度では濟まずして二たび三度問返す、而して尙斷案を下す能はずして、彼は書類を置いて行けと命じ、獨り唇を舐づりながら考ふること多時、終に斷案を下す能はずして問題は徒らに机の上に堆積して、いつ解決するか分らぬ。屬僚憤慨せざるを得ぬ。與黨不安の念に襲はれざるを得ぬ。而して國民亦不安の念を抱き、此の如き外務省は葬り去れと叫ぶも自然の成行きである。故に今日は外交に關する處置宜しきを得ずと云ふが如き問題にあらずして、外務當局の人物に對する不安の念よりして、時局を困難ならしめて居るのである。これ即ち余が前々號に於て問題は外交より來るであらうと言つた所以である。今や其の言的中したと云ふことは、山本內閣の爲め、頗る悲まざるべからざることである。

而して此の問題をして一層紛糾せしむべき原因が他に今一つある。それは何かと云ふと、陸軍と海軍との軋轢である。漢口に於て二人の我が士官が襲擊せられたることよりして、今や我が國民は、獨逸が膠州灣を占領したるが如く、我が士官に凌辱を加へたる漢口若くは南京を占領せよと叫ぶが、若し端的に、卒直に言へば、何故に迅速に、疾雷耳を覆ふに遑あらざるが如き手段を採らざりしか。之を採らざりしは誰れの責任であるかと言へば、即ち此の如き凌辱を受けて、而して手を拱して何事もせざりし所の漢口の守備長官其者の責任である。我が士官が支那の軍隊に捕はれ、而して阿容々々放免せらるゝまで我が軍隊が其の處に駐まつたと云ふことは、軍隊としては頗る處置を誤つたものである。國民若し責めるならば、外務省を責むるよりは寧ろ陸軍を責むべきである。然るに國民は責むる所を誤つて、直ちに外務省を責めて居る。而して怪むべし此の外務省を責むる聲は何處から出たかと言へば參謀本部——陸軍が發表したる兩士官捕縛の顚末に依つて鼓舞せられたと云ふに至つては實に政界の怪事と言はねばならぬ。而して此の事件の起りし以後、參謀本部が之を發表するに至るまで、凡そ一箇月の猶豫があつた。若し之を發表すべきものであるならば、何故に當初發

表せざりしか、是れ頗る怪しむべきことゝ言はねばならぬ。玆に於てか政界の事情に通じたる者は、參謀本部や陸軍は、國民の憤慨を機會とし、國民の心を出兵論に傾けしめ、出兵するには陸軍が必要である、陸軍が必要である結果は二師團を增加せねばならぬと云ふ結論に至らしめたいと云ふ爲であると言ふ者がある。是れ亦無理からぬ觀察と言はねばならぬ。

參謀本部が二師團增加論を皷吹するには頗る力を盡して居る。或は直接に參謀本部ではないかも知れぬが、參謀本部と志を同じうする者は、頗る之に力を盡して居る。昨年內田某の著はしたる「三大急務」と云ふ書物の如きは、卽ち二師團を增加せねばならぬと云ふ理由を援くる者である。其の次には「東露の實情」と云ふ書物が出た。是れ亦滿韓蒙古問題を解決せねばならぬと云ふ聲を高めた者である。又其の次には「他山の石」と云ふ書物が出た。是れ亦我が國民をして露國の侵略に備へしめんとする意見である。此の如き著作が相踵いで出づると云ふのは、其の背後には必ず或る者があると言はねばならぬ。其の或る者は何であるか、參謀本部であるか、陸軍であるか、將た又之と志を同じうする一部の團體であるか、余は之を明言することは出來ぬが、兎に角同穴の狐狸であると云ふことは斷言して憚らぬのである。而して更に驚くべきは九月八日の日比谷の民衆が、演說後外務省を襲ふた時に當つて、陸軍大臣の副官が痛快であると云ふことを言つたと云ふことは、信用ある時事新報の報道する所であるが、吾々の眼中には陸軍も無ければ海軍も無い、有るものは日本を治める所の內閣あるのみである。其の內閣及外務省が民衆に圍繞せられた時に當つて、陸軍の樞要の位置に在る人が、痛快であると云ふことを叫んだと云ふことより察すれば、如何なる暗流が陸軍や參謀本部にあるかと云ふことを推測せらるゝのである。又た同時に政治には何等の關係なき所の伊集院軍令部長の住宅が警官に依つて警衞せられたと云ふことは抑々何事を示すものであるか、伊集院軍令部長は海軍の將官である。海軍の將官が外交問題に關係あるかと言へば何等

の關係もない。然るに陸軍の一士官をして痛快であると叫ばしめた此の運動の爲に、伊集院軍令部長邸宅が警官に依つて護衛せられたと云ふことは、此の民衆の一部には、如何に非海軍の或者が含まれて居るかと云ふことを政府が探知し得た結果と言はねばならぬ。玆に於てか問題がある。陸軍と海軍の喧嘩であるか、陸軍は此の民衆の動亂を如何に思ふて居るか。果して陸軍が此の運動に關係がありはしないかと云ふことを疑はれることになつて來る。關係があるか無いか余は之を知らぬ。併ながら伊集院軍令部長の邸宅が警官に依つて護衛されたと云ふことは、政府が如何に此の問題を陸軍と海軍の軋轢と見て居るかと云ふことが分る。國民が政府を信任する能はずして動亂を爲すと云ふことは、頗る憂ふべきことであるが、余は此事よりも憂ふべきは、此の如き動亂の下に於て、海軍と陸軍と相親和する能はず、互に警戒せねばならぬと云ふに至つては紀綱地に墜ちたりと謂ふべきて、國家の大患是より甚しきはなからうと思ふ。

我が陸軍の中に於ては、公然外務省の政策を否認して居る所の將官がある。或は否認せざるも外務省のなす所と相背馳した政策を新聞紙上に於て公然論議する將官がある。而して此の如き空氣の中より、此の動亂に對して痛快であると云ふことを叫ぶ士官を出すに至つては、我が政府部内の實情頗る危險であると云ふことを示して餘あると思ふ。恐らくは此の如き空氣より、二師團増加論は其の性質を一變して來たと思ふ。余の見る所に依れば、今年の二師團増加は、參謀本部に於ても陸軍に於ても、一通り其の必要を認めて之を内閣に提出し、内閣若し四圍の情勢に於て之を容るゝこと能はずとするならば、其儘沈默するであらうと思ふて居つたが、過去三週間の變亂の結果として、恐らくは此の如き形式的の提出に止らずして、熱度を加へたる提出方に變化しはせぬかと思はれる點が見出されるのである。山本首相を初めとして各大臣は、二師團増加を單に經濟上の問題とし、國防上の問題とせず、昨年以來政治上の紛爭の道具として使ひたるが故に、當分

は之を問題とする能はずとの名目の下に葬る積りであつたらしいが、今となりては恐らく斯く容易く葬り去ることは出來まいと思ふ。小兒が燐寸を弄んて居る。此の燐寸は一たび唾を掛ければ直ぐ消えるのであるが、若し誤つて障子に付いたならば家を燒く恐れがある。今日は今回の動亂の生じた結果、稍、燐寸の火が強くなりつゝある。

是等の理由に依つて、内閣の位置は頗る險惡となつて來た。余は此の内閣は桂内閣に比して優る所多きが故に、而して此の内閣をして爲さしむべき一二の問題あるが故に、此の内閣の速に倒れることを望む者ではないが、併ながら命數は已に盡きたりと斷言せざるを得ない。今や此の内閣は支那に向つて條件を提出したと傳へらる。其の條件なる者は、新聞紙に於ては極めて輕く言はれて居る。併ながら余は新聞紙に公にせられた以外に、尙滿洲問題を其の條件には含んで居るであらうと思ふ。恐らく政府は、極めて輕き條件を新聞紙に漏らし、而して之を解決し得た曉に於て、意外なる賜として滿洲租借期限の如きものを齎して國民を悅ばせ、己れの信用を固める積りであらうが、國民はそれ位では滿足せぬであらう。尤も識者は此の如き問題に就ては不精々々に滿足するであらうが、國民の望む所は尙大なるが故に、此の如きことにては滿足しない。其の結果として必や第二の國民大會が催されるであらう。併ながら此の國民大會能く何をかなさん、恐らくは電車を破り、外務省の門に民衆が攀登る位のことであらうが、命數の盡きたる内閣に取りては、此の如きことすらも大打擊である。而して此の大打擊も今年の議會頃までは兎に角無事に行くであらうが、今や不景氣の聲は天下に滿ちて居る。此の不景氣は政府の責任ではないかも知れぬ、又此の問題の爲に政府が倒れねばならぬと云ふ責任は無いであらうが、此の問題に依つて内閣の命數は更に縮まるであらう。醫者は病を治す責任があるが、其の人の病氣が醫者の力の及ばざる時には醫者の責任でないにも拘はらず、病人は醫者を怨むのである。今や我國を襲ふて來た不景氣は、實業

家をして悉く不安の念を懷かしめて居るが、此の不景氣は今年を越え、來年の春に至れば一層甚しくなつて、終に國民をして醫者たる政府に對して不信任の投票を投付くるに至らしむるであらう。外交の打擊に依つて命數の盡きた內閣は、更に余の豫言せし如く經濟上の問題に依つて、愈々その生命を失ふであらう。而して此の內閣の後には何が來るであらうか。余は交迭を希ふ者でないが、政治上の議論は冷靜でなければならぬ。冷靜に考へて此の內閣の命數は已に盡きてしまつた。凡そ水は之を激すれば高きに登らしむるを得べしと雖も、勢ひ窮まれば又元に復する。此の內閣も一時憲政擁護運動を利用して立つたのであるが、其の組織に頗る無理がある。高橋氏に財政に如何なる手腕があるか、其の人物は如何程高尙であるか、世既に定論がある。牧野氏に如何なる手腕があるか、如何なる人物であるか、世既に定論がある。此の劣等俗惡の人物に此の內閣が勢を得て居る間は一時其地を支へることが出來ると雖も、勢窮まれば又元に復せざるを得ぬ。今や內閣は、其の組織の無理なる所よりして傷が出て來た。是は何人の罪にもあらず、唯々山本首相が不適材を不適所に置いた所から斯かる結果を招いたので、又誰をか咎めんやである。顧るに山本內閣は既に多少の功績を示した。余は其の功績に對して同情を表すと雖も、一面には又大なる過ちを有つて居る。此の過ちに對しては山本首相は自ら其の責に任ぜねばならぬ。今や己れの播きたる種子は稔つて來たから、山本首相は自ら之を刈入るべき秋になつたと云ふことを覺悟せねばならぬ思ふに今の內閣は人物頗る多し、原は、內務大臣としては大久保以來の明臣である。奧田は文部大臣として申分はない、松田は已に五回の大臣席を踏みて、二朝に歷事した老臣であつて、威望十分である。其他海軍の齋藤の老實、遞信の元田の端正なる、內閣として先づ人物を集めて居る、唯だ十インチの鐵艦も肝腎の處を木片で押さゆるの狀態を免れざるは外務と大藏である。而して敵彈は不幸にして此最弱點に命中したのである。

歐米社會の享樂的及び社會主義的傾向

法學博士　河津暹

私が此前に歐洲に留學して歸つて來たのは恰度日露戰爭の初まり頃で。今度足掛九年振りで復た一年ばかり歐米を漫遊して來たのであるが、苟も歐米に二度行つた人には誰にも氣が附くことであらうと思ふが、私が最も驚かされたのは、歐米社會が近來になつて、享樂的傾向及び社會主義的傾向の著しくなつて來た事である。

享樂主義の傾向が强くなつて來たといふ、其遠い原因を探つて見たならば、勿論從來歐米の人心を支配して來つた宗敎の權威が衰へて、一般に懷疑的になつたといふ所にあるだらうが、其近い原因としては、十九世紀のコンヴエンショナルな道德の反動と、自然主義の文學の勃興などを擧げることが出來やうと思ふ。十九世紀のいろ〳〵なコンヴエンショナルな道德に對してはニーチエとかトルストイとかいふ人々が手嚴しい痛擊を加へ、又ゾラとかモーパッサンとかいふ人々が盛んに自然主義の文學を唱導して、一般人心に非常なる動搖を惹き起した。で、從來の道德とか社會の規律とかいふやうな事に疑を挾む傾向が非常に强くなつた。それに持つて來て、男女の關係などについていへば。いろ〳〵の原因からして結婚が困難になつて來た。さういふやうな事からして享樂的傾向が出て來たものと考へる。

獨逸などいふ國は、誰も知つて居る如く、從來は寧ろ粗朴な國民であつた。其粗朴な國民が今日では享樂的方面からいへば、其本家本元の佛蘭西を凌ぐ――といつては少し言ひ過ぐるかも知れぬが――確に佛蘭西の壘を摩する位の程度にまで至つて居る。獨逸の田舍

の方にまでさういふ氣分が行き渡つたかどうかは知らないが、伯林とか漢堡（ハンブルグ）とかいふ大都會に行つて見ると、其傾向の甚しい事が歴然として分る。聞く所によると、獨逸殊に伯林をして巴里を凌ぐやうな旅客吸收所としやうといふので、獨逸政府は――或は皇帝までも――伯林に於ける享樂的設備を奬勵したともいはれて居る。勿論其奬勵の程度については我々は深く知らないが、或はそんな事があつたらしいとも想像せらるゝ。斯く享樂的傾向の盛んになつた結果は、いふまでもなく社會の風紀といふものが紊れる譯である。佛蘭西は固より、獨逸に於ても相當の收入のある人で、正當な結婚をしない男が隨分澤山ある。それがやがて女の方からいへば結婚が出來ぬ事になる。さういふ人からいへば結婚する必要がない、結婚などは只家族の羈絆を増すに過ぎない、寧ろ金のあるに任せて遣りたい事を遣つて、一生を面白く可笑しく暮すのが悧巧だといふやうな考になつたのである。其結果としては固より家族とか家庭とかいふ思想がなくなり、子供の爲めにどうするといふ念慮も薄くなり、自分丈け一生面白く過せばそれでよい。自分が稼げば其稼ぎに相當する報酬を得て、其れで自分の欲望を滿足せしめやうといふ丈けの考になつて了つた。男がさういふ考であるから、女の方でも結婚することが餘程困難になつた。社會の極く上層か、極く下層のものには結婚難が比較的に少いが、社會の中流階級の女には容易に結婚が出來ぬといふのが獨逸あたりの風である。

獨り獨逸のみならず、英國あたりでも亦此風潮があるといふ。殊に英吉利では本國に於て仕事が割合に少い。殖民地に行かぬと面白い仕事が出來にくいといふ有樣であるから、海外に飛び出す男子が多い。其爲めに女が多く殘り、男女の割合が大分崩れ、從て女が結婚することが出來ぬといふやうな有樣になつた。又結婚した女にしても子供を拵へることを非常に嫌ひ出して來た。子供を拵へれば財産も少くなるし、殊にはお腹が大きくなると交際場裡に出られぬ。又子を産めば從て容色も衰へるといふやうな、女の虛榮心から避妊

といふ事を頻りにやる。其結果は出生率が大變衰へる。元來獨逸などゝいふ國は出生率の多い事を誇つた國である。處が今日ではそれが著しく減つて、此勢で進めば佛蘭西のやうにならぬとも限らない。現に佛蘭西では人口の增加の割合が少くなつた許りでなく、寧ろ人口が漸々減少しつゝある。一年に約三萬人近くも減少する。それで佛蘭西では頻りにいろ〳〵の方法を講じて人口の增加を計つて居る。が、それにも拘らず益々減少しつゝある。英國に於ても亦近來出生率が減少して來た。而して其出生率の少くなつた社會の階級は決して生活難に追はるゝ下層の人民ではなくして、どちらかといへば上流若くは中の上位の所である。此等の人間が人工的に人口の減少をやる、其基く所は財產關係、結婚問題及び婦人の虛榮心等であらうと思ふ。斯く結婚しない人は、そんなら皆眞面目な、嚴格な生活を送つてゐるかといへば決してさうでない。寧ろ紊れたる生活をして居るものがなか〳〵多い。良家の子女でも何か高い帽子でも買ひたいといふやうな時には、カフエーなどに出かけて行つて淫賣に近いやうな事をするものもあるといふ話である。要するに社會全般が享樂主義に流れて、社會の秩序といふものが大分弛るんで來たやうに見える。

何れの國でも所謂賣笑婦といふやうな階級のあるのは、勿論褒めた話ではないが、先づ止むを得ぬ事かも知れない。そしてさういふ賣笑婦などいふものと、眞面目な社會との間には截然たる區劃のあることが必要である。若し其區劃が崩れると、社會全體にとつて危險千萬な話である。今や歐米全體に亘つて生活を樂むといふ風が盛んになり――言葉を換へていへば未來の事はどうでもよい、社會の事はどうでもよい。只自分が今日面白く可笑しく暮らせばよい。所謂刹那を樂むことが出來ればそれでよろしいといふ事になつて來て、國民がすべての問題に對しての考が餘程違つて來て居る。即ち前に話したやうに家庭を作るなどいふ事を嫌ひ、或は家庭を作つても子女の教育などには重きを置かぬといふやうな風になつて來たのは明かに今日

を樂むといふ考の強い所から起つた現象である。

又方々の國で勞働問題がなか〳〵盛んて、例へば勞働時間を八時間に制限するなどいふ事があるが、之も畢竟、八時間丈け勞働して後は遊ばうといふ要求て、換言すれば社會の上層の人が生活を樂みつゝあるのに、我等は何故に生活を樂むことが出來ぬかといふのであつて、教科書などに書いてある勞働問題とは餘程趣を異にして居る。況んや、國の爲めに戰爭をするなどいふ事は此議論からいへば勿論避けるといふ事になる。私が維納に行つた時は、巴爾幹問題について出兵しつゝある最中であつたが、毎夜往來に於て戰爭反對の演説があつた。演説者は勿論多く社會主義者らしかつたが、一般社會も寧ろ之を歡迎するの有樣であつた。だから軍人などになつても奇麗な服裝をして、其容姿を婦女子に誇るといふ風て、一死國に報ずるなどいふ考は餘程薄くなつたやうに見える。兎に角コンヴエンショナルのモーラルが崩れて一世が享樂主義に傾いた結果は、社會の箍か大分弛るんだやうである。此勢で進めば社會は瓦解せざるを得ぬだらうと思ふ。

而して此傾向は獨り大陸諸國に盛んなるのみならず、聞く所によると、英國自身に於ても今日は大分其風に感染して來たといふ。從來英國は其樣な風から離れて行儀の正しい、風儀の嚴格な所だといはれて居つた。が、今日は英國に於てすら、昔と比べては大分其風が崩れつゝありといふ。勿論其程度はどの位であるか、我々外國の人間には分らぬが多くの人に聞いて見ると、英國も亦其例に洩れないといふ事である。

然し此等の國は善かれ惡しかれ兎に角、一種の文明を完成した國である。其れが崩れるといふ事は或は已むを得ぬ事かも知れない。然るに我國などはまだ文明が完成されて居らぬ。まだ海のものとも山のものとも分らぬ國であるのに、社會が崩れて來た時の歐米の文學とか思想とかを漫りに取り入れて、只新らしいとか、珍らしいとかいふ事のみを喜んで之を眞似したならば、文明が少しも完成しない中に社會が崩れることになりはしないかと、心配に堪へない次第である。

さういふやうに風俗が紊れて、享樂主義が盛んになつたのと合せて、今一つ著しく感ぜらるゝのは、社會主義的傾向の非常に殖えて來たことである。從來社會主義を唱へて居つたものは兎に角或程度までは建設的な考を持つて居つた。少くとも之を首唱するものであれば、新らしい社會を拵へやうといふ考の上に行動をして居つた人が多い。處が今日に於ては其傾向が大分廢れて來た。といふのは從來社會主義を標榜して居つたものは立法の力によつて其目的を達しよう——即ち議會に於て多數を制し、法律の作り變へによつて、社會主義の理想を實現しやうといふので、ベーベルなどのやつた事は、十分に之を證明して居る。然るに此等の人間は或所まで其目的を達した。現に獨逸などでは從來は中央黨が最多數を占めて居つたものが、今日では社會黨が最大多數を占むることになり、政府も或議案を出す時には一番社會黨に向て氣兼をするといふ事になつた。處が斯く立法の方法によつて目的を達せんとした連中が、今や其目的を達し得るが如き地位に立つと、從來の如き熱心な主張が薄らいて、却て實地問題について國民多數の意を迎へやうとし初めて來た。故に或意味に於ては此等の社會黨の元氣が薄らいだとも、又お悧巧になつたともいへる。それでいろ／＼の口實を設けて曾て唱へた通りの事を實行しないといふ事になつた。さうなつて見ると、社會下層の人民で、社會組織に不平を抱く連中は、所謂社會主義者によつては目的を達することが出來ぬ、寧ろ自分等の力によつて現社會を破壞して了はう。夫れ以上はどうなるか分らぬが、兎に角現社會を破壞して了はうといふ事になつた。佛國のサンヂカリズムなどがそれである。其サンヂカリズムといふのは、彼の有名なベルグソンの哲學に基いて盛んに議論をして居る。即ちベルグソンの哲學からいふと、世の中の萬物は總て絕えず變化する。流轉する。普通の人が視て同じといつて居るものでも決して同じものでない。例へば昨日と今日とは全く違ふ。今日と明日とも亦違ふ。只一日といふ點から

いへば同じだが、其性質は全く違つて居る。總てのものは皆性質の變つたものゝ連續である。只普通の人から見れば皆同じやうに見えるが、實際は決して同じものでないと。果してさうであれば、勞働者が現社會を破壞するに當ても、破壞の後はどうなるかは心配する必要がない。社會を破壞しても社會は無になることがない。或新らしいものが必ず出て來るに違ひない。今日のものが已によくないとすれば、之を破壞して出て來るものは、多分今日よりもよいものであらう。といふやうな假想によつて、遠慮會釋なく破壞したがよいといふのである。其樣な議論であるからして、彼等の主張には何等の建設的な所なく、徹頭徹尾破壞的である。實に危險千萬な思想といはなければならぬ。

それで主として此等の人の主張によるのであらうが、從來の如き一局部の同盟罷工では功を奏しない、生產機關の活動を全部停止してゼネラル・ストライキをやる。そして資本家は固より社會全體を困らしてやるといふ事になつて來た。英國の如き國に於てすら近來になつて頻々としてゼネラル・ストライキが起つた。英國は從來社會主義から――殊にサンヂカリズムからは割合に離れて居つた國である。然るに今日に於てはなかなか其傾向が盛んになつて來た。事柄は違ふが、彼の婦人參政權運動なども殆んど狂人の如き破壞的行動をやるのである。謂はれもなく、博物館に火を附けたり、或は關係もない店を毀はして見たり、其他種々雜多の行動をやつて怪まない。又米國などに行つて見ても、I. W. W. (Industrial workmenship of the world) の運動の如きも常識を離れた革命的破壞的傾向をあらはして居る。その害を受けるものは、獨り其目的としたものゝみならず實に社會全般である。それ故に從來はさういふ事に割合に冷淡であつた英國に於てすら、今日に於ては社會政策的の立法が盛んになつて來た。現に勞働保護の法律の如き其明かなる證據である。それて英國に於ても政府が頻りに此等の勞働者保護の法律を作つて勞働者に阿ねる事は果して英國の產業に利益なるや否やといふ議論が矢釜しい。勿論勞働者は或

程度までは保護しなくてはならぬけれども餘りに極端に之に媚びるのは、却て危險でないかと心配する人もある位である。英國の如き從來さういふ事のなかつた國までがさうなつて來たのを、我々の如く十年許り前に見て、中絶して、今新らしく之を見ると、其色彩の變つた事が一段とよく眼に映じて、何だか不可思議に感ずるのである。

此の如き勢で進んで行つたならば今後どういふ事になるか。歐米の社會の爲めには寧ろ困ることでないかと思ふ。嘗て彼のマーコーレー卿が米國の社會狀態を論じて居る中に、「米國に於ては社會多數のもの丶勢が強い所である。而かも此等多數のものは必ずしも常識によつて行動するものでない。若し此等のものが常識を缺き、感情にのみ制せられ、輿論を作り、輿論によつて行動することになれば之を抑ふるものが何もないから社會上危險此上ない」といつた。現に今日米國でいろ／＼の事をやつて居る所を見れば、恰かもマーコーレー卿をして先見の明をなさしめたかの感がある。而して此傾向は獨り米國のみならず、歐洲諸國殊に英國までも漸次に擴がりつ丶ある所を見れば、我國に於ても今日よりして大いに警戒してゐなくてはならぬと思ふ。

縱論橫議

——山本權兵衞尉源船乘朝臣に呈す——

福本日南

晉書を讀む每に何時も一寸眼に着くのは桓溫である。それは斯樣な所である。「晉桓溫爲大司馬。都督

中外諸軍事。加楊州牧。嘗撫枕歎曰、男子不能流芳百世、亦當遺臭萬年、欲先立功、還受九錫、及枋頭之敗、威名頓挫。」といふ文があるが、此大司馬、都督中外諸軍事、楊州牧といふのが、何となく海軍大將、內閣總理大臣、伯爵何某といふやうに感ぜらるる。書中の所謂「先づ功を立てゝ還つて九錫を受けんと欲す」といふのが、又自ら海軍元帥となり公爵とならんとするが如く讀まるゝ。然るに「枋頭　敗に及んで威命頓に挫く」といふのが又自然對米對支の失敗といふが如き思をなす。其出方（でかた）の素晴らしかつたのに比べて、末路――といつては失禮であるが、先づ後期位の處か――それが極めて飽氣なきを覺える。何となれば山本伯が政友會を踏臺にして天下を取られた其お手際は自分は確かにエライと思ふ。桂公に短刀を差し付けて、貴殿の有せる政權を寄越（よこ）すか寄越さぬか、寄越さねば此權兵衞は後ろに二百の代議士を集めたる政友會を有するぞ、といつたやうな態度で、遂に桂公をしてそれを授けるの止むなきに到らしめた。それが立憲的か非立憲的か、其の邊は自分の問ふ所でない。兎にも角にも豪といはざるべけんやだ。然る後政費節減を斷行し、假令一般の希望には充たざる迄も文官任用令を改正するなど、內政に於ては其成績多少の見るべきものがある。加之伯が總理となつて以來、天下の大政黨を以て自ら任ずる政友會は、此一伯爵の身後に隱れて、鐘や太鼓で探したい位である。日頃は黨中の張三李四輩は、誰がエライの、彼は辣腕だの、種々樣々に評判さるれど、其等の諸豪も此一伯爵の下には何の異彩も放つを得ぬ。斯樣に見て來れば一山本伯は、二百の代議士を包括し、幾十萬の黨員を綜合してかゝつても、其れよりも尚エライといはねばならぬ。

さりながら之は內政に對してエライのである。公等碌々の徒輩を操縱するにエライのである。見て外政に到れば之と正反對の現象をあらはすではないか。惟ふに之は知つてゐる事と知らない事との別であらうか。國內に對しては由來非常な豪傑らしき豪傑も、一度國外に對すると、別人の如くなる例は三四世紀間に亘つ

て我國の歴史が證明する。著しいものて之を觀れば、太閤の部下に於て加藤清正一輩の徒は、國内の戰ては兒童すら記憶する位の豪傑であるが、足一度彼岸の半島に渡つた以後は、何の思慮分別もないてはないか。山本伯も恐らく加藤清正以下の所てあらう。

昨今對支の問題は朝野の間に囂々てあるが、其以前に起つた對米問題から見ても、餘り結構なお手際とはいへぬ。其米國に對する精一杯は、彼岸の新大陸を望んて何としやうかと考へられたらしい形跡が見える。之は獨り山本伯のみならず、現内閣の諸公は悉く左様てあつたらしい。對米問題を諸公の如く觀察し來れば、其結果も亦今日の如くなるは當然である。何となれば平和の間に我國の希望を貫徹せんと欲すれば、一つとして米國を警戒せしむる事はない。試に見よ、彼我の貿易は如何てある。今日我國より彼に輸出する所の貿易は約一億五千萬圓と稱する。其中の主もなるものは何てあるかといへば、繭なり、生絲なり、絹織物なり陶器なり、漆器なり、茶なり、其他の雜貨、花莫蓙等て、彼の國の富の程度の高さ、おしやれの具として之を買ふのてある。絹織物なども無論ファンテージー的に必要に相違ない。然しながら此等は必要品ではない。單直にいへば無くても濟むものてある。宗教家などをして言はしたなら、寧ろ驕奢の品てある。或場合に於て用ひまいと思へば用ひずして濟むのてある。申さば左様な贅澤品無用品を輸出してゐるのてある。それて一度彼國を怒らせ、此等のものを購買せぬといはれたら、それこそ事てある。繭や生糸や絹織物の產地たる群馬、栃木、山梨等は其日から上(あが)つたりといはねばならぬ。それから茶を廢めて珈琲に代へたと出て來られた日には　少くとも靜岡縣や京都府は閉口する。之は輸出品についてゞあるが、されば輸入品は如何といへば、今日我新工業中て稍々成功してゐるもの丶隨一は、綿糸及び綿織物てあらう。其原料の一半は米國の供給にかゝるのである。一度彼國を怒らして之を送り込まぬといふ事になれば當業者に取つて之も由々しき痛苦である。

自分は嘗て英佛の間に起つた所のフアショダ問題の際に、巴里に居た事があつた。兩國は殆んど干戈相見えんとするまでに至つた。其際自分が第一の疑問は、佛國の艦隊は英國のそれの一半にも及ばない。それで一度砲火を開くに至つたならば、佛共和國たるものは如何にして英國に對抗し得るかといふのであつた。然るに其當時、或便宜によつて共和國參謀本部の戰略を知ることを得た。之によつて佛國は對隣に比し、一半の海軍を以て安んじて生存し得る所以を知つた。其戰略の大要をいへば、佛國には英國の如き雄大なる一等艦を持たぬ。それで海上に於て雌雄を決せんとすれば、やらるゝ事は無論である。が、此國は雄大な艦隊を有せざる其代りに、海岸防禦は寧ろ英國よりも優つてゐる。其軍港なり、軍港に備ふる所の水雷艇なり、驅逐艇なり、又其頃までは英國の殆んど有せざる潜航艇の多くまでも有してゐた。それでスハ開戰といふ曉には艦隊は進んで挑戰に應ずる代りに、退いて軍港に遁げ込み、上にいふ所の固定遊動の諸防禦物と相待つて、軍港を維持するに勤める。軍港の攻撃は、艦隊の最も忌む所であるから、茲に逃げ込まるれば、如何に雄大の英國海軍と雖も容易に其技量を逞うすることを得ない。斯くの如き戰爭をして佛國は如何にして敵を苦むるかといへば、彼は多くの大戰艦を有せざる代りに、極めて速力の早き巡洋艦の多くを有する。そこで巡洋艦隊丈けは海上に浮べて之を働かせる。但し之も英國の戰鬪艦隊に出遇へば到底太刀打は出來ぬ。代りに非常の速力を有するが故に、此速力を用ひて敵艦隊に出遇ふが最後、逸足出して遁げるのである。斯く見來れば佛國の頼む所以のものは何處にありやといふ事になるが、そこに一つの妙案がある。それは人々の知れる通りに、英國の貿易は世界の海上を掩ふのである。就中歐米の中間にあるアトランチックの海面は英國の最も得意とする商業田である。そこで此兩大陸間を日々往復する商船は幾百千を以て算すべきものがある。佛國の巡洋艦はそれを脅かさんとするのである。此無數の商船を脅かして何日何時打沈めるか捕獲するか知れ

ぬといふ事になれば、武裝なき商船の事であるから其運航は自然停ることになる。すると茲て御難なのは大英本國の人民である。彼等は歐米兩大陸から供給する小麥の粉を以て大部分は生存するのであるから、三日間大陸から小麥の粉が入港せぬとなれば、麵麭の價は直ちに二割三割と騰貴する。斯る狀態が一ヶ月繼續すれば大英國は人爲の大饑饉に逢ふのである。こゝが佛國の附目であつて、二三ヶ月も此狀態を繼續させれば優者であり勝者である英國の方から、どうか講和をお願申すと出て來る。斯樣な點に佛國の安心點を托して居ることを知るを得た。

それて斯樣な位置に日本があるならば、平和戰に於ても隨分米國を困らせることも出來やうが、上來述べた通り日米間の貿易は贅澤品を賣り込んで必需材料を買込まうといふ地位にあるから、一つとして彼を困らせるものはない。それ故に彼の大陸を望んで移民問題などを有利に解決せんと欲して、一つも政策は立たんのである。此間に處しては矢張り現內閣の實行した通りに泣いて見せるより外はないのである。「それでは餘り酷いぢやないか、人道問題に戻るぢやないか、貴國由來人道を尊ぶの國と稱する、何とか我々黃色人種の仲間も一視同仁を以て見て呉れる譯には行くまいか」といふより外に思慮も分別も出るものではない。

處が彼のヤンキーてある。左樣な事は幾十年先から御承知の事であるから、一つとして泣き落しにはならぬ。其結果は之が本當の泣寢入りといふ事に歸して了ふ。斯くの如きを人に到さるるといふ。

此間にあつて自分が思ひ出るのは昔のお譚にあるイズライルの一老夫てある。之は皆樣ぉ御承知てあらうが、イズライルの小王國に於ては、人民が其國王を公選した。それが大古の事てあるから極めて簡短な法式て選擧をした。一年中て一番お目出度いのは正月元日にある。元朝の初日の出を誰よりも先に拜んだものはお芽出たい中の芽出度い人間てあるから、之を國王に公選しやうといふ決議が出來た。そこてイズライルの都府にある人民は、我こそ第一に初日の出を認めて一

番此國王にならうといふので、悉く廣野の中に出て、東の山の端を望んだのである。此際に一人の老夫があつて、其奴ばかりは西の方を望んでゐる。彼奴は到底國王などになれる資格が無いから自暴（やけ）のヤン八で西天を望んでゐるのだナと人々は嘲笑つてゐた。已にして曉天となつた。今にも太陽が東方から光を放つてあらうと、誰も彼も瞬きもせず山の端を望んでゐる。折から靜寂を破つて「ソラ太陽が出た！」と大喝一聲衆中に叫んだのが、先きの變物のお親爺であつた。人々は飽氣にとられて彼の方を振り向くと、成程太陽の光は、其府の西廓に聳ゆる高塔の頂きを照らしてゐたのである。親爺は最初から此高塔の頂きに見込をつけてゐた。それて此奇警なる着想によつて、よぼくれ親爺一朝にしてイズライルの國王になつたといふのである。

こゝが面白い所であると思ふ。一國の大政を司るものは少しは後向いて高塔の頂き邊に眼を着けて見るがよい。日の出る方の米國のみを望んでゐるから思慮も分別も出ぬやうなもの〻、後ろの方を見ると、泣く所てはない。莞々として笑を帶びて、而かも我れ反對に、對手の米國をして蒼皇狼狽せしむべきものがあるではなからうか。其島となりは三千一百餘島から成り、其面積は十三萬七千餘方里を算し、七百萬以上の住民に、天然の儘で餘り多くの人工を加へざるも五千萬弗以上の物產を產する一大地方がある。あれはどうなるものであらうか。考へ樣によつたらば地圖の塗り代へを請求し得ざるの限りでない。

斯く見來れば、出稼人に對しては多少氣の毒ではあれど、新大陸に於て虐待せらるるなども國にとつては却て幸ではあるまいか。虐待せられたならば總てを喚び歸してもよいではないか。彼地に現住するものは二萬以上三萬を出てぬ。其中には多少の資產を作つたものもあらうが、それは極めて少數で、多數は裸一貫の出稼人に過ぎぬ。夫れ故それを喚び歸すに平均一人一千圓を呉れるとして、二萬人なら二千萬圓、三萬人なら三千萬圓ぢやないか。それ丈けの金は呉れて喚び歸すとしても、その代りに彼の一大島地圖の色換をする

といふ事になれば、國の商賣としては此れ程得はなからうと思ふ。而かもそれが一時の利益にあらずして永久の獲得である。今の當局者からいはしたら、左樣な事が出來るものかといはるゝかも知れねど、其大地方の現所有者に移つた所以を顧れば、爾に出てたるものは爾に返るものなりとの格言は、彼に當て篏めるに何等の故障もなからうと思ふ。それで物は見樣である。眼の着けやうである。少しはイズライルの老夫を學んで貰ひたいものと思ふ。

昨今の支那の問題の如きも亦其一て、當局諸公は、イヤ當局諸公のみならず國人の多數は又々イズライル民に落ちて、誰も彼もが彼禹貢の九州のみを見詰めて、それより外には何の考もないらしい。それで貧しげな少尉一人が辱められたからといつてワアツワアツと大騷ぎをする。若し其支那本部のみを見る眼睛を少しく轉じて、横の美人も眺めてはどうであらう。我々甚だ不得手ではあれど、色眼を使ふといふのは此邊の事てはないか。少し脇の方を見れば、當面の問題は問題として、日本の國策を伸ぶべき大方面があるてはないか。日本の大陸政策として當さに大いに力を用ふべきは彼にあらずして此にあるてはなからうか。すれば當面の問題は大概にして形附けて、もう少しいへば大國の襟度を以て勘辨してやつて、其方に力を用ひたらばどうであるか。但し之とても獨力でやれる話では無論無い。他の一强國と十分の妥協を要する。自分の知れる所、講究せる所によれば、確かに其妥協は可能的である。東大陸の治亂は繫つて我國と此一强との和協如何にある。世間に用ふる言葉を借りて之をいへば百年の長計は此和協によらうと思ふ。之が往年の大戰爭以前ならば到底不可能であれど、今日に於ては一も其成立すべからざる所以を見ぬ。彼一强の世界に强をなし重きをなす所以のものは、其國の本部を歐洲に托するからてはないか。彼强なりと雖も、此本部を空明きにする譯に行かぬ。往年は彼大戰の爲めに曾て一度本國を空明きにした其影響は巴爾幹に出て、大損害を受けたぢやないか。今後と雖も亦然りてある。故に所謂コルチア

ル・アンタントに出てたならば恰かも今日の英佛協商の如く、名は協商といふと雖も、其實は同盟である。之と同一の現象を兩國の國際間に顯現せんとすることは餘り六つかしくなからうと思ふ。それは即ち此秋なりと我々は深く確信する。

一度此方針を採れば、現在の親友たる同盟國と雖も又多く異存あるべきを見ぬ。といふのは現同盟國にも多年の宿題として希望の地方がありませうが、全體、自家の本國すら維持し得ざる國民が、廣漠なる半屬地を有するなどゝいふ事は贅澤な沙汰である。其等はよろしく二三强國の間に形附けべきものである。といつて必ずしも侵略の目的を以て之に處せんとするのではない。其擧卽ち隣國の保障であり。又東洋平和の保障てある。無主に等しき廣漠の地方を抛却して置けば、無用の閑人の入り込み來らんとするは自然の數である。東洋平和の動ともすれば脅かされるもの畢竟之によるてはないか。それが二三ヶ國の權力下に確定すれば極東生靈の幸のみならず又世界の平和に培ふ所以てある。夫れ故に之を斷行したいといふのである。

其邊に力を用ひて貰ひたいが、禹貢九州の本部のみを見詰めて其他を見ない人には果して如何なる工夫がありや否や。若し彼の所謂半屬地の方面に力を伸べんとする方策を立てれば目下の問題の如きは前申す通り寛大な處置を以て甘んじてもよろしからうと思ふ。果して此れ丈けの圖案が當局者にあるならば今回の凌辱事件に對する要求の如き餘り多く批難すべき所以を見ぬ。

彼の多數なる群衆が小題大做に、之を以て直に袁世凱を捕つて捉へやうだの、捉へれだのといふのは、餘り無理な注文てはないか。かゝる事を卒直に申出せば群衆心理に逆うて腹立てられるか知らねど、近來我國の傾向は厭ふべく怖るべきものがある。群衆が盲動する、擾言する。それが卽ち國策であるかの如き觀がある。我々之を言へば腹も立たうが傍觀八矚眼自ら分明といふ事がある。彼のウエストミンスター・ガゼットが「日支間の紛爭に關し、日本國民の慷慨するは無理な

らざるも、東京に於て發現せしが如き過度の憤慨を來すの理由なし」といへしが如き、他國の他人から之を見たならば其邊が相當ではあるまいか。現在の所謂對支那論のよつて發出する動機は凌辱事件にあらずして外にあるのではないか。民間黨の一部分が躍鬼となつて之を唱導するのは、最屓角力の負けた口惜し紛れではないか。孫黃の爲めに吊合戰の積てはないか。日本が支那ならそれてもよい。日本が楊子江南の一帶ならそれでもよい。然しながら日本は日本なり、支那にあらず。孫黃の爲めに吊合戰の材料などには使はれて堪るものか。

此點については流石に犬養木堂であると思ふ。木堂は不評判を犯して彼の四角張つた俗論に同意しない。別に一個の意見を把持して敢えて群衆に雷同せざる所、流石に木堂の木堂たる所以を見るのである。然しながら木堂の彼の群衆に喰ひ附かれるに到つたのは木堂亦自ら罪ありといはねばならぬ。彼は此群衆を煽して一度神樣となつた。其神樣が少しても群衆に聽かぬとなれば、群衆の反噬し來るのは理の當に然るべき所である。「奈良の大佛樣鼠が噬じる、猫を呼んで來いアパバノバ」と我友小山米峯は醉つ拂ふ毎に放歌するが、今に於て此俚謠の面白味を悟り得た。「早稻田の神樣鼠が噬じる、猫を呼んで來い」といひたくなる。

詰る所は人を致して人に致されざる、之れ政治の要諦てはないか。群衆をして何事にも馮怒し、其れを以て國政を左右するの端を助長したならば、日本帝國をして千八百七十年巴里城下の誓後のコンミユンの亂と同一の境遇に陷らしめぬとも限らぬ。自分の最も恐るる所は玆にある。之は抑々何人の罪であるか。一國の大政に當る諸公の罪であると思ふ。外交の問題の如きは最初に於て相當の所分を洩らし、又相當の交渉を洩らし、微を塞ぎ、漸を閉づるの擧に出れば、群衆の騷擾何かあらんである。當局の處置は何時も玆に出でず、其外交の手段は何時も故陸奧伯の所謂對內的外交である。國人の口を塞がんが爲めに兎も角も撥を合はせるといふ擧に出られるが爲めに、最後には國を累はすや

うな馬鹿事が發生するのである。之も亦人に致されて人を致し得ない結果といはねばならぬ。我々は何よりも先に本國を愛する。本國の大政を擧げて委任せられた諸公は此點に精々顧みて貰はねばならぬ。

が、山本伯である。伯は豪傑に相違ない。一飯斗米肉十斤、鞍に凭つて顧眄する廉頗將軍の概はあれど、何をいふにも山本權兵衛尉源船乘朝臣である。海軍の事は御存知であれど、內地の雜輩を操縱することは得意であれど、外交などに至ては殆んど御存知ないことと見える。それで霞ヶ關の先生などから「此事は斯樣するもので御坐ります」などゝいはれると腑には落ち兼ねれど、それを非斥する丈けの御能力が乏しくはおはさぬか。それで虎髯嚴めしく、俗吏を睥睨しながらも「左樣の事になつてゐるか、それてはどうも仕方がない。左樣致すより外はなからう」などゝいつて、遂に今日の境遇まで引落されて、「枋邱の敗に及んで威名頓に挫く」といふ境遇に落ちられたのではないかと思へば、影ながら御氣の毒にも存ずる。先生、之が手

傷の本にはなりませんか。今期の議會も二ヶ月の後には見える。精々お氣を附けなさつたら如何であらう。

『死』の研究（下）

自然死 (Naturlicher Tod) の研究

醫學博士 永井潛

一、戀と無常

蜀山嘗て街上を行く。偶々婚禮の列が東より來り、葬式の列が西より來るのを見て、直ちに筆を執つて次の狂歌を認めた。

　世の中は戀と無常の行違ひ
　　死にゆく人とさせに行く人

詞や甚だ卑俗なりと雖も、此の輕妙なる三十一文字の中に、人間が有せる千古の最も大なる最も眞面目なる謎たるべき死生觀が、遺憾なく解かれて居るのは、頗る快心の至りである。西哲は歌ふて曰はく。

　生物界を支配する者は戀愛と飢餓とである。

而かも戀愛の後には死が待つて居り、飢餓の後にも亦死が控へて居る。所詮生を離れて死の無い樣に、死を離れて生を考へることは出來ぬ。蜉蝣は一日で死し、カフエンヂンユ島のアダンソニヤなる樹は六千年の久を經たと云ふが、夫れでも最終の運命は唯一『死』である。苟も『生』の港を出た船は悉く皆な『死』の岸に着かねばならぬのである。抑も死とは何を言ふのであるか。

二。死とは何ぞ

生理學的に『死』の定義を下すならば、『死』とは畢竟『生』の停止に外ならぬのである。併し此丈けでは死の定義として不十分なるを免れない、何んとなれば生の現象は一時休止して居ても、一定の條件を與へると再び蘇生する場合がある。埃及の金字塔内の王樣の木乃伊に供物として備へられてあつた色々の種子は、五十

歳の間生活を休んで居たのであるが、併し之を地に蒔いたら再び發芽して生活を喚び起したと傳へられて居る。よし是は如何はしい報告であるとしても、多くの種子や細菌及び原生動物の芽胞等が、生活に不適當な條件の下には、久しい時期何等生命の徵を示さないで居て、一朝之を適當な條件の下に置くと再び生活現象を現はし來るのは疑ひない事實である。如斯きは現に生活現象なきも、而かも猶ほ蘇生すべき能力が保存されて居るのであるから、之を假死と唱へるべきである。眞の死は獨り生活現象の停止せるのみならず、又蘇生すべき能力も絕滅された者でなければならぬ。（Der Tod ist nicht blus die Aufhebung des Lebens, sondern auch der Lebensfähigkeit)

三、不自然死と自然死

生活現象が起り得る爲には外的諸條件と、內的諸條件とが具備せねばならぬ、外的條件とは食物の供給とか、酸素の攝取とか乃至は溫度壓力等が宜しきを得ること等の謂であり。內的條件とは體成分及び其構造が健全であることを指すのである。今外的條件に激しい變動が起り、必要なる者が缺けて不必要なる或は有害なる條件が入り來る、例へば榮養物の攝取が杜絕されて飢餓したり、或は病毒を造るべき黴菌が入り込んだりすると、直接其爲に死を來たすか、或は內的條件の不調和を來たして間接に死の原因となる者である。之を不自然死と唱へるのである。怪我の爲とか病氣の爲とかで死ぬのは皆之に數ふべきである。然らば則外的條件を全然佳良ならしめさへすれば、何時迄も生命を保續することが出來るかと云ふに否らず。如何に外的條件が理想的であつても、猶ほ年月を閱する間に生物は老衰と唱へる現象が起つて、漸次其身體に變化が起り機能が弱はくなつて、終に死を來す者である。之を名づけて自然死と云ふのである。不自然死は非生理的の者であるから、衞生を守り治療を弛にせねば之から免れることが出來るが、自然死は生物が持つて生れた運命所謂天壽で生理的の者で如何にしても避くべからざる者である、不自然死は治療と衞生とを目的とせる

醫術に於て興味を有すべき問題であり、自然死は生命に關する理法を闡明すべき生理學生物學に於て研究の對象たるべき者である。

四、自然死研究の困難

不自然死の起るべき原因及び其經路に關しては、醫學就中病理學の研究によつて大に明になつて來たが、併し自然死は如何にして起るか、何故に生命てふ焔は一定時の後には必ず消ゆべき運命を始めから有て居るのであるか、何故に紅顏の美少年は白髮の老翁となり、其力なき體を杖に支へつゝ、歩一歩墓場に近づかねばならぬか、是れ實にスフインクスの謎である。青丹よし奈良の都の歌人は、

老らくの來んと知りせばかどさして
なしと答へて逢はざらましを

と歌つて居るが、金門堅く鎖さして御溝深く警蹕の聲夜を徹して守護し參らす帝王の玉晃にも、遠慮會釋なく老の波は自然の死を乘せて押し寄せて來る者で、なかなか、しかく簡單な譯には行かない。抑自然死は如何にして起るのであらうか、輓近生物學者は次の如く言つて居る。不自然死の原因は外的條件の變動で、即廣き意味に於ける飢餓の後に控へて居る死である。之に反して自然の死は生殖と密切の關係を有つて居る者で、戀愛の後に待つて居る死である。

五、自然死と生殖

世の中は戀と無常の行違であつて生殖作用と自然死との間には密切な交渉を保つて居る。而て此に關する多くの興味ある事實、並びにワイズマンを始め多數の生物學者の之に對する見解、即ち生殖と云ふ働によつて種族の保續が確實に行はれた場合には、老衰した者が何時迄も活きながらへて居るのは、却つて其種類の爲には厄介物であるから寧ろ死んで仕舞て若い精力旺盛なる者に十分活動の餘地を與へた方が、種類全體として遙に利益である。是即生殖に續いて自然死が起る所以であると主張する學說は、前號紙上に於て丘博士が面白く且明瞭に述べて居らるゝから玆には蛇足を添へる必要もない。ワイズマン等の此目的論（テロオロギー）は、如何にも

面白く感ぜらるゝが、併し此に對しては議論すべき點が尠なからずある。第一には此目的論が眞理である爲には、老衰と云ふことを前提せねばならぬ。即ち先づ如何にして生體には歳と共に老衰なる現象が現はれ來る樣になつたかを說明せねばならぬ。よしワイズマン等の言ふ如く、自然死の現象は、目的論と結び附けて論ずることが出來るとした所て、老衰なる現象は目的論ては到底說明は出來ぬ。何んとなれば老衰することが老衰せざることに較べて其種族の保續に利益ありとは如何にしても考ふることは出來ぬからてある。

六、老衰と不老不死

自然死は老衰死に外ならずとしたならば、老衰なる現象を說明するに非らざれば到底自然死を理解することは出來ぬ。此理由によりて目的論を以て自然死を說くのは、頗る其當を失するの嫌がある。抑老衰は如何にして起るのてあらうか。

先づ生體に於ける生活せる細胞を見ると、老衰せぬ者と老衰する者との二通がある。老衰せぬ者は生殖細胞（カイムツエレ）てある。此者は幾度び代を重ぬるも、子々孫々長へに其若々しさを失はない。隨て不老不死てあつて、よく種族保續の目的を遂げ得るのてある。此意味に於て各個體が單一の細胞てあつて何れも皆生殖細胞と同樣の役目を働らき得る。單細胞生物は不老不死てあつて一個の母細胞は分れて二個の娘細胞となり、始終止む時はないのてある。之に反して體細胞（ゾマツエルレ）は老衰し、且隨て自然死を起し屍體となつて壞崩に陷る者てある。何故に同一の受精せる生殖細胞から發生せしにも關らず生殖細胞は老衰を起さぬに反して、體細胞は之を起すのてあらふか、之に就いては內外の二原因を考へることが出來る。

七、老衰の源因

老衰の外的原因としては、生物が生存を主張して居る間に無數の刺戟に曝露されて居る爲に、直接其衝に當つて居る體細胞は何時しか侵害を蒙るのである。併し夫よりも今一層大切てあるのは內的原因てある。是は體細胞は生殖細胞と異なり、日常の生活機能を分擔

せねばならぬ爲に、特別の分化を惹起し、固有の構成と固有の地位とを取るが故に、時を經るに從つて各細胞組織器官の新陳代謝に過不及を生じ、其調和が破れて來る。是即ち老衰の内的原因であると主張するのである。此主張は人體に於ける各組織器官の生長が、年齡の進むと共に如何なる割合を保ちて行はるゝかの解剖的研究によりて尠なからざる根據を與へられた。其成績によると皮膚、腸、肺、心臟及び血管は、老年に及ぶ迄て、絶えず生長增大して行く者てある。而て是等の組織器官は、體の外表若くは内表を形成して居る者て、食物酸素等の攝取に尤も便利なる地位に置かれ、隨て最も十分に榮養を營むことを得る者である。次に皮膚のじき内層にある筋肉は、四〇—五〇歳迄て生長を續ける者で、是又可なり榮養に便利なる地位にあるからてある。次に筋よりも内層に位せる骨格は、僅かに二十歳迄しか生長を繼續せぬ、次に骨格よりも更に内層にありて頭蓋腔及び推官の中を充たせる腦脊髓の如ち神經中樞は榮養を營むこと尤も都合惡しく、隨て最も早く生長を停止する者てあつて、十四五歳に至れば既に其極度に達する者てある。故に人間て老衰の起るのは老年に至れば他の組織器官の生長の割合と、腦脊髓の生長の割合とが全く其均衡を失する爲てあると主張するに至つた。此說にも無論多くの缺點はあるてあらふが併し老衰の現象、隨て自然死の起る理由を目的論を離れて論理的に說明した點に於て注目に値する。更に近時化學反應と溫度との關係より奇拔なる一新說を立てたのは亞米利加のロェーブてある。

八、ロェーブの所說

ロェーブ曰はくワイズマンは、身體細胞の死に就て說を爲して、身體細胞は其の生殖細胞を出した後には、自分の種屬に對する本務を盡したのてあるから、其れ以上生き長らへる必要がない爲に死に至るものだと言つた。けれども生活現象を一の化學的機轉と見做して居る現今の人々には、此の說はあまりに信じ難いのてある。そこてミノーの考に依ると、簡單な細胞が、ずつと進むだ發育狀態に至ると其の生活機能を失ふもの

て、組織的に檢索して、細胞が漸次分化して行くと、必然「死」に立入るものだと言つて居る。即ち氏の言ふ所を化學の立場から見れば、有機體の死は、其の有機體の胎生期と同じく、發生上缺くべからざるものであつて、死の化學的原因は發生の基となれる化學的機轉と同一視すべきものだと言ふことが出來る。

所がロェーブは、實驗によつて、全く此考の當らざることを知つた。即ち氏は海盤車の卵に就て、其が受精せざるときは、成熟すると少時間の間に死ぬけれども、人工的に酸素の供給を絶ちて、その成熟を妨げると、前と同一の條件に置きても、數日間よく生存を續けることを觀察して、此場合の死は、卵の成熟といふことから齎らされた特種の破壞的機轉に基くのだと結論した。而して此破壞的機轉が、發生の原動力となる機轉と異なつて居ることは、其卵を受精せしむるか又は化學的に興奮せしめた發育狀態に置くと、之を除き得ることによつて明かてある。

九、發生の化學作用と死を起す化學作用とは別種なり

理化學の立場から言ふと、總ての生活現象を比較するには主として化學的機轉の一致を求むればよい。此化學的機轉の一致を知るには反應速度の常數と溫度の係數とを定むればよいので、單に二個の機轉が同一であるといふことだけならば溫度の係數さへ等しければ其斷言が出來る。故に溫度の係數が非常に異つて居たなら、決して兩化學的機轉が等しいとは言ひ得ない。

そこて發生時に於ける化學的機轉が、死を將來する機轉と等しきが爲には、ある有機體の生存時間に對する溫度係數と、發生の速度に對するそれと等しくなくてはならぬ。即ちロェーブはこれに關して實驗的に海膽の幼蟲に就て研究し全く其間に逕庭あることを發見した。

十、死を起す化學作用と溫度との關係

ロェーブは人工的に受精せしめた新鮮な海膽の卵を選むて實驗に供した。先づ五〇立方糎の海水を入れた器に其の卵を取りて、之を所要の溫度に置くのてある。

卵が常態の發育を爲し得るものとせば、幼蟲が水の表面に昇つて來るので分明(わか)るし、若し又幼蟲が病的ならば底に沈むのである。其處で其器の水の溫度を增減せしめて、幼蟲が如何なる溫度まで生存を續け得るかを知り得るのである。卽ち先づ次の樣な結果に達した。

溫度(攝氏)	生存時間
三二度	一、五分
三〇度	四分―五分
二八度	十一分―十三分
二六度	三五分―四〇分
二四度	一九二分―二〇九分
二二度	約十時間半
二一度	約二十四時間
二〇度	約三日間

ロエーブは二〇度以下の溫度に就ては實驗しなかつたが、彼は偶ま十六度―十七度の時に十五日間も生存し得たことを目擊したと云つて居る。

上表を見ると、溫度が二度宛下降する時、生存時間は約四倍になつて居る。すると一〇度の下降に對する溫度の係數は約一〇〇〇に等しいのである。通常化學作用に於ける溫度の係數は一〇度の變化に對して約二であるから上の如きは實に言語道斷の場合といつてよい。この事は單にこの場合のみに限つた譯ではなく螺旋狀菌を溶解せしむる「ヴイブリオリジン」と稱する物質や、破傷風菌を溶解せしむる「テタノリジン」の破壞に對する溫度係數も、一度の上昇に對して二といふ數を示して居る。

そこで海膽は一體どれ程の壽命を持つて居るかといふに、上記の表から慥かに計算することが出來るのである、二〇度に於ては三日間で、海水の溫度は通常一〇度であるから、三日の千倍卽ち三千日でなくてはならぬ。實際に於て海膽は八年乃至九年の壽命を保つものであるから全く此の數に符合する。

次にロエーブは受精せざる卵の生存時間に就て同樣の實驗を行つて見た。卵を所要の溫度に晒してから、通常の海水に齎らして、精蟲を與へ、發育することが

出來れば、生存して居た證據となる譯である。而して其結果は、全く受精した卵と同一で、次の表に示す通りとなつた。

温度(攝氏)	生存時間
三二度	一分十秒―二分
三〇度	三分―五分
二八度	八分―一〇分
二七度	約十八分
二六度	三五分―四〇分
二四度	一六八分―二〇〇分

更に氏は精蟲の生存時間に對して同一の實驗を試みた。通常精蟲は卵よりも遙かに高き温度に堪え得るものである。其方法は精蟲を所要の温度に昇らしめた海水中に齎らし、一定時間を經て後、其れを取り出し、實驗に於ける海水中にて卵に受精せしめ、一時間を經てから、受精せなかつた卵を勘定するのである。

精蟲を温に晒したる時間	受精せし卵の數		
	(三六度)	(三四、五度)	(三〇度)
一分	一〇〇%	一〇〇%	一〇〇%
二分	二〇%	一〇〇%	一〇〇%
三分	〇%	九五%	一〇〇%
四分	〇%	一〇%	一〇〇%
五分	〇%	二%	一〇〇%
七分	〇%	〇%	一〇〇%
一〇分	―	―	一〇〇%
二〇分	―	―	一〇〇%
三五分	―	―	九〇%
五五分	―	―	二〇%
六七分	―	―	八%

上表に依つて、温度の係數を定むると、今受精せし卵の數が九〇%以下になつた時を搜して見るに、三六度では一分以上、三四、五度では三分以上、三〇度では三五分乃至五五分である。即ち此場合に於ても前と同じく一度の變化に對して二といふ價を取つて居る。

十一、發生の化學作用と温度との關係

胎生期に於ける發育の速度に對する温度係數に關しては、ヘルトウッヒは蛙の卵、ペーターは海膽の卵に就て

實驗した。ペーターは溫度が一〇度高まる每に發育の速度は二、一五倍增すことを見たけれども、それは比較的高い溫度(二十一度と十六度との間)に於ての實驗てあつて、比較に用ひた胎生期が判然と區劃されて居なかつたから、ロェーブは更に其の實驗を自から行つて見たのである。氏は卵が受精してから第一の分裂を爲す迄の時間、及び第一の分裂から第二の分裂を爲す迄の時間を比較したところが、發生の速度に對する溫度の係數は、何れも判然たるものであつた。卵を受精せしめた時は直ちに、所要の溫度の海水中に齎らし、顯微鏡によりて二個細胞期(第一分裂期)を定むるのである。其結果、

溫度(攝氏)	受精せし時より第一分裂迄の時間
三度	五三二分
四度	四六九分
六度	二七五分
一〇度	一四三分
一五度	一〇〇分
二〇度	七五分

となつた。この數からして計算して見ると、發生の速度に對する溫度の平均係數は一〇度の變化につき二、八六となり、ペーターの所謂二、一五はあまりに小に過ぎるのである。

十二、溫度係數の比較

偖上述の實驗の結果、生存時間に對する溫度の係數は一〇度の變化に對し一〇〇〇以上であるのに、發生の速度に對する係數は僅かに二、八六に過ぎない。其故少なくとも海膽にありては、其生存時間の基をなせる化學的機轉と、發生の基をなせる其れとは等しくないことが明かとなつた。それで老衰の基となるべき機轉は一〇〇〇といふ極めて大なる溫度係數を有する特種の破壞的作用に依るもので、二、八六ぐらゐな小なる係數を有する作用に依るものとは受取り難いのである。然らば其破壞的の作用とは何てあるかといふに、酸化作用でないことは、靑化加里を加へると高溫に於ける卵の生存時間を短縮せしめることてわかる。とい

ふのは若し高溫が生存時間に傷害的作用を與へることが、酸化に依るものとしたならば、青化加里を加へて其が短縮する譯がない。であるからしてロェーブは、總て卵には其種屬に固有な物質が存在し、而も、絶えず分解しつゝあつて其により老衰及死を將來するものだと考へたのである。そして各動物によりて其壽命を異にするのは此物質の量及び性質が異なるからである。

前にも述べた如く、成熟して受精せざる海盤車の卵は少時間にて死するのにも拘らず、受精した卵は一年の間もよく生存し得る點から見ると、受精は慥かに生命の救濟法である。種々の有機體の生存時間を定むる物質の固有なることは、同一溫度に於ける、種々の有機體の生存時間に大なる變動あることからも解釋せらるゝのである。

十三、兩極の冷たき海には何故に生物の蕃殖盛なるか

有機體の生存時間に對する溫度の係數が、發生の速度に對する其れよりも約三百倍も大なることは、寒帶地方と溫帶又は熱帶地方に於ける生物種族の稠密度の比較から見ても明かである。海住動物、就中浮游微生物に就て觀察するに、兩極地方に行つた人は常に目擊するが如く、其處には驚くべき大量の游浮微生物が存在して居て、溫帶又は熱帶地方に於けるよりも其數量は遙かに優越して居るのである。

寒帶(零度)の海に於ける生物の發生の速度は、勿論溫帶又は熱帶の海に於けるよりも遙かに緩漫である。若し自然死なるものが發生の必然的隨伴現象なりとしたならば、何故に兩極地方にかくの如く生物が夥多に存在して居るかゞ解らないのである。ところで冷血動物の生存時間に對する溫度の係數の著しく多大なる事實が一般に當て篏るものとしたならば此の現象は容易に理解し得るのである。卽ち一〇度の溫度降下は、發生の速度を平均三分の一に減じ、同時に其個體の生存時間は千倍に增進せられ、二〇度の降下にありては、生存時間は百萬倍に增加するも、發生の速度は僅かに

九分の一である。そこで今同一種類の動物が二〇度と零度とに齎らされたならば、同じ水量中に存する動物の數は零度に於ける方が遙かに多いのは言ふ迄もない。

然し實際に於ては、食物の關係だとか、氷水の融解とかといふ事情が多いからして其數量が理論通りになつて居ないのは勿論であるが、大凡この型に篏るものと言ふべきである。

其故に今T度に於ける冷血動物の生存時間をDとしたならばT－n度に於ける生存時間は2^nDである。而してTは常に同一の價を有するからして、Dは各種屬の生存時間に特有なる價を示し、2^nは生存時間に對する溫度の素因（ファクトール）を表はして居る。其他偶然生存時間に對する素因をなすものには、寄生體、食量等の關係がある。

以上は冷血動物に就ての實驗であるが、溫血動物にも果して此關係が成立するものであるかに就てロェーブの考によると、かの發熱なるものが僅かに生命を短縮せしむることを見ても明かであると謂つて居る。それよりも肝腎なことは身體を害せぬ範圍に溫度を低くしたならば、壽命を延長し得るかの問題であるが、ロェーブは此に對してもやはり肯定的斷定を下して居るのである。

以上は理化學の立場からして、自然死を論じたロェーブの實驗を大略述べたのであるが、ロェーブの斷定が果して適當して居るや否やは容易に判斷し難いのである。然れども氏が多數の綿密なる實驗を行つて、右の樣な結論に達したのは甚だ興味ある事實であつて、かのミノーが所謂自然死なるものは粗織の分化によりて決定せらるゝものなるてふ說は少くとも其の誤謬の一端が擧げ得られたのであつて、氏は老衰及自然死の原因を、發生狀態とは何等の交渉なき一定物質の分解に歸せしめてはあるが、其物質の分解が如何なる狀態に行はれ、如何なる按排に死を將來するものなるかは全く未定の問題として殘されて居る。然れども兩極地方に於ける動物の繁榮は兎に角此の推定を說明する興味ある事實で、ロェーブの見解それ自身もまた興味あ

る所からして、玆に其一斑を紹介して自然死研究の一助としたのである。(完)

哲學者より觀たる死

文科大學講師 紀平正美

生者必滅。死は生あるもの丶必ず逢遇すべき事實である。然しながら死は生の目的ではない。これが哲學者より見た根本の原理であつて、九分九厘迄、死の問題は此の原理によつて解決が出來る。我生を知らず焉ぞ死を知らんやといへる聖人の言は、消極的ではあるが既に死を解決したものと言はなければならぬ。

古昔希臘末期のストア學派が元理として自殺を奬勵し、又實際開宗者たるツェノーン、二祖クレアンテス共に自殺したので有名であるが、此れは生の終局を以て目的と見誤つたものである。即ち此の派は德を以て生の目的とした、而して、其の德なるものは意思の自由に存在するのであるから、其の意思の力によつて自分の生命をも左右するだけの大なる力を自然尊重するやうの結論になつたのである。これも理論としては甚だよいのであるが。德が生によつて充足せられるものなる事の實際を忘れた點に混同を來した。即ち彼等は生の興味を失つたのである。勿論其の興味を失ふに至つたのは社會狀態からも來て居るし、開宗者の如きは、難船によつて全財産を失つたといふ樣な、個人的の運命からも來て居るであらう。何にせよ必到の事實を目的と混同したといふ事は明かな事實である。

爆裂彈が何故に爆裂するか、其は爆裂せんが爲めの故に爆裂するので、戰艦や砲臺を破壞する爲めのものではない。これと同樣に生の目的は生活することに依て充足せしめられるので、死が目的ではない。善は善を滅すことが出來ぬ、生は生を滅することが出來ぬと言つたプラトーンの言は味ふべきもので、いかに自力を重んじたストイックでも、純自力的に(何等の道具をも借らずに)自ら自分の呼吸を止めて死ぬことは出來なかつたであらう。玆に於て生は永遠不滅なもので

あつて、死は其の内の一波瀾に過ぎぬ、論理的に言はゞ一矛盾てある。此の矛盾の解決は依然として生によつてなさるゝのてある。即ち哲學者はこれによりて始めて生死を一貫せしめる。

必ず逢遇すべき死に就て、生者何故にこれを恐れるかといふ理由は、先づ後に讓つて置く。ともかく事實として恐ろしきもの、死後の生活は全く暗黑界である。必然に到らなければならぬ恐ろしき暗黑界であるから、これに關して宗敎的、詩的に千種萬樣の構想を逞くすることが出來る。神話宗敎文學の上には、其れ故に色々の面白い見方もあらう。然し哲學者は、表象の形式に於ける詩的構想は用捨なくこれを破壞して、概念的に生死を一にする。其れ故に生死病死を解決せんとした釋迦ても、其の到れる所は現實當面の此の生であつて、死ではなかつた。人一般の恐怖する死はこれを斯道に入る一機緣たらしめて居ることは事實であるが、恐らく死其のものだけを說いて居る經典はあるまい、靈魂其のものだとて見方によつては有るとも無いとも同時に滅だとも不滅だとも見られる樣になつて居る。即ち純哲學の問題は輕々たる死の問題てはなくして、現實當面の生の問題にある。

生の必然に到るべきものとして、死には十分なる理由があるに相違ない。而して其の理由に就ては色々の方面から見る事が出來るので、恐らく本雜誌に於て諸學者が其れ〳〵各自の立場で論ぜられることゝ思ふが、若し一切の生物が死なないものてあるとしたならば、其の歸結はどうてあるかを考へたならば、死の意義は殆んど了解せられるてあらうと思ふ。即ち死のない世界は生のない世界である、生は此れに沒し彼れに生ずる一大過程たるに過ぎない。此の意味に於て我等の生命は永恒てある、ショウペンハウエルの言へるが如く、生存せんとする意志の存在する間は、肉體を殺したとて決して、滅せしむることの出來ないものてある。死を嫌ふ人は大に喜ぶ可なり、生を欲せざる人には、永恒の苦てある、地獄である。悲むべきことてある。

さて然らば斯る生の必然の條件たる死に對して、一切の生物が何故に平氣で居られないか。嘗て唯圓房といふ人が、念佛申すも踊躍歡喜の心起らず、又急ぎて淨土へ參りたき心の起らざるは何故かと、親鸞に問ふた事がある。其の時の親鸞の返事が面白い。我も此の不審を抱けるが、汝も我と同じけるよ。然し考へて見ると、これが煩惱の所爲である、煩惱具足の我等を救はんといふのが彌陀の誓願であるからには、愈々極樂往生は一定なりと思ふべしと。此の返答はパラドックスであるが、面白い。ストア派に反對であつて、生を樂むを以て目的としたエピクルスは、生ある内は死んだのではない、死んてしまへば最早感じがない、故に我等は(生は)永久死に接することが出來ないと論じた。これもパラドックスであるが、我等は生を以て死を考へる、故に死がいやになるのみ、死を以て死を考へたなら、死は面白い享樂に價いするものかも知れない、然しこれは生あるものでは出來ない事なのである。それてエピクルスは亦論じて居る。畢竟世俗人が死を恐れるのは、不用意に死と死を感ずること(生)とを混同し、死んてからでも自分が死につゝある、自分の體が燒かれ居る、或は虫に喰はれて居る。或は腐敗しつゝあるといふやうなことを感ずるものと思ふからてあると。如何にも左樣てある、其處に我等人性に於ては、死に重大なる關係が生じて來るのである。我等は死を恐れる本能的現象に就ては言ふことが出來ない、何故ならば、生物が死を恐れるとして居るのは、我等人間の勝手な見方、即ち比論類推に過ぎないので、恐れるのではなくして、却て喜んで居るのかも知れぬからてある。

其れて我等の言はんと欲するのは、我等人性に於てゞある、卽ち人格的生活に於ての事てある。人格的存在に就ては今茲に詳敷論じて居る餘裕はないが、人格的存在には必ず相手たる人格があるといふ事を考へれば、それて大體の事は考へられるのてある。相手の人格がなければ、其は旣に人格的存在でない、我等が意識的に活動して居る限りは、親なり、兄弟なり、友人

なり、鄕黨なり、或は宗教家の場合には、神なり佛なり、必ず相手たるべき人格を有て居るので、其の相手を失へば、自己意識を喪失するのである。其れで一人格を有つた人が死ねば、其れに關係ある人格者は、其の敵手を失ふ、即ち自己の缺損であるから悲しいのである。悔みの詞に「御力落し」といふ事があるが、これは形容の語ではなくして本當の語である、何となれば力とは精神的にして始めて感ぜらるゝもので、而して相手がなければ力の感じはないからである。其れ故に死んで行く人から言ふも、筧博士の語を借りて言ふならば、一生懸命で死んで行くので、笑談に死ぬるものではない。此の死者の一生懸命と後に殘された人々の力落し、これが人性に於ける死に意義あらしむる所以のもので、「虞美人草」の甲野さんは玆に死の偉大なる所以を認めて日記帳へつけた。余は最近に於て悲劇に逢ふこと三回、死をよくせんとせば生をよくせざるべからざることを愈々切に覺らしめられた、然しこれは問題外であるから玆には論ずることをやめる。重ねて言ふ、必ず逢遇すべきものとしての死は生に對して重大なる意義のあるものではあるが、生の目的ではない。

（大正二年八月十二日生の大混雜中にて）

醫學上より觀たる死（下）

ドクトル　富士川游

病死

死亡統計を見ると、死亡の原因として、一定の疾病の名目が擧げてある、昔の醫家は、人の死は腦と心臟と肺臟との病のためであると言つたが、この三種の疾病を主として、人類の命を奪ふべき病の數は少なくない。此等の疾病のために生活に直接重要の關係を持つて居るところの器官がその作用を營むことが出來ぬやうになるので、死といふ現象が現はれるのは言ふまでもないが、しかし生前には勿論、死後解剖して見ても何のために死んだか、その原因の確かにわからぬ場合

がある。又著しい病變が認められても、その何れのために死亡したのであるか、どの器官の變化が死を致した原因であるかを明かにし難い場合も尠なくないのである。

多くの場合では、血液循環の異常があつて、それがために腦の機能が止まつてその人は死亡する、大抵の死の場合にはこの血液循環の異常があつて、それがために重要器臟の機能を止めるといふことが主の原因であるが、神經中樞の一部（延髓の一部）を破潰すれば、直にその人の死亡を致すことがある、フローレンス氏はこれを生活結節と名づけて居る、動物に就て試みにこの一小點を破潰すると、その動物は呼吸することが出來なくなつて、僅、數分後に死亡するのである。

心臟の作用が止まれば其人は死する、心臟の作用の止まるのは心臟自體の病と、心臟を被へる膜（心嚢）及び心臟に連續せる動脈の病、心臟神經の病等のためであるが、心臟と直接の關係のない部位の疾病の場合でも、所謂心臟痲痺のために、人の死亡することがある。心臟痲痺といふものは心臟が突然その機能を止めるので、血液を腦に送ることが出來ぬやうになり、これが爲に腦髓の作用が止むによりて、その人は卽時に死ぬるのである。

腦は意識の府で、その機能が止めば呼吸も止み、心臟の運動も止み、到底生活は出來たのである。肺臟が病に罹ればその機能が止むで窒息の症狀が起きて、その人は窒息のために死ぬる。腎臟は食物によりて身體の内に入りたる毒物又は體内で出來ね毒物を排除するための器官であるから、その機能が止むと、所謂自家中毒といふものが起きる、彼の尿毒症といふものは卽ち自家中毒で、このためにその人は死亡する、腎臟炎に罹て、永く治療しないで居る間に、毒物が血中に蓄積して、中毒を起し、忽ちに頭痛、不安、譫妄、昏睡の症を起して大抵は速かに死亡するに至るのである。

變死

疾病のために死ぬる外に、多くの人は不幸の出來事

や、怪我などのために死ぬる、これを總括して變死とする。變死には色色の種類があつて、第一は劇烈の精神感動のために死亡、卽ち喜ぶこと、怒ること、笑ふこと、哀しむことの劇しいために死するのである。第二は渴のための死亡、全體渴は飢よりも身體に危險のものである。第三は飢餓のための死亡、第四は凍死、寒冷甚しきときは全身疲勞の感甚しく、しきりに睡眠を催し、丁度酒に醉ひたる時のやうに步行不十分となり、目の力が漸次に薄くなり、耳が鳴り、後には聞えず、意識は漸次朦朧の有樣となる、顏色は蒼白となり、卒倒する、呼吸は弱く、脈搏も衰へ、意識消失して、其人は眠むるが如くに死ぬる。第五は負傷のための死亡、血液を失ふのと、意識を失ふのとが、負傷の二大徵候て、中にも血液を失ふこと一定度に及べばその人は必ず死亡するのである。第六は火傷、爆發、電擊の爲の死亡、第七は瓦斯中毒のための死亡、これは燈火用瓦斯のためのものが多く、全く窒息死てある。第七は毒死、毒は自殺のためにも用ひられ、他殺のためにも用ひられ、又誤まりてこれを飮食するが爲にその人を死亡せしむるのである。もとよりその死因は毒品の異なるによりて同一てない。第八は窒息死、これに屬するは溺死、縊死等である、第九は戰死。

臨終

此の如く、疾病によりて死ぬるものもある、負傷によりて死ぬるものもある、死亡の原因は種々てあるが、何れの場合ても、死其物は苦痛てないといふことは明かに認められる。大抵の人は死に臨むて、死其物を感覺することとは甚だ稀である。それから、たとへば病人が、その生活の終より死亡に移るときは死戰(Agonie)といふものが始まると古昔から言はれて居る、臨終に身體不安、筋肉搐搦を起し甚しきは痙攣を起し、その人が死亡するに至りてこの痙攣は止む、丁度臨終に際して何物かと戰ふやうに見え、如何にも苦悶らしく見ゆる、又苦痛の多い病氣には死戰も甚しいといふやう な事をいふものもあつて、臨終は誠に苦痛のものと唱

へられて居る、しかし實際は決してそうてない。

死亡の直前まて、話したり、笑つたりして、忽ちに死亡する場合の如きは、死亡の當時まて意識明瞭てあつたと吹聴せられるが、精細に觀察すると、決してそうては無く、右のやうな場合ても、死亡當時には常に意識の消失を致して居る。故に、人の死を恐るるのは死の觀念を恐るるのて、死其物は死ぬる人自からはこれを感覺するものでないことは疑の無い事實てある。

(をはり)

佛敎より見たる死

島地大等

佛敎の死に對する考の第一として、語らねばならない問題は、死を何う考へることが、最も完全な見方てあり、あるべき様の事實として、佛敎が敎えて居るのてあらうかと云ふことて、一言にして曰はゞ、理想的の死とは何んな意義の上に立つて居るものてあるかが、最初にして且つ根本の問題てある。

それは割合に簡單に説明し去らるゝが普通てある。但しその實頗る重大な意義を含んだ問題てある。雜多な古典的專門的學説を通しての究竟點は、畢竟この問題に歸着する。してその解釋は、消極的の解釋としては、死生を一如に見ることとて、他の消極的解釋は、生及びその連續と同じ様に、偉大なる意義に立てる活動の一波丘として死を見ることてある。この説明は速解に適し、從つて誤解に陷り易いので、次に聊多少の註釋を加ふるの止むを得ざるものがある。

死生を一如に見ると云へる消極的解釋は、特に誤解され易い。古人が「死を見ること歸へるが如し」と云つたと卒然同觀してはならない。死生の一如なる所以には、一大背景がある。この背景を正しく理解したる上ならては、死生同觀の眞面目が顯はれ難い。更にその積極的解釋にしても、同樣なる秘密を探らざるに於ては、死を生と同じ一波丘と見る、眞の意義と興味とに同情し得ることが出來ぬ。これが多少の註釋を要する

所以である。

先づこれを理解するには、吾々個々の實體を理解せねばならぬ。吾々個々が日常に經驗する自我は、自我そのもの丶眞面目ではなくて、その背面の實相は、限りなき生命と量りなき光りと力とに滿ちた靈體である。この靈體が眞の自我であつて、この眞我には、普遍平等絶對無限唯一常住と云つた樣な、道學者哲學者宗教家等の知れる諸有の善美な、好ましい屬性の全體を內容として居る。その境地には、自他善惡苦樂一多と云つた樣な一切の差別的關係を超脫し、微妙絶對の靈光が耀いて居る。但し床頭の連璧を望む樣に、靈妙な境地であると客觀的に眺めて居ると云ふのではなくて、それが湛然妙寂の本地に立ちつ丶、絶えず限りなき智光と慈愛とを人類の上に浴せ、盡きざる活動を試みつ丶ある力の巨塊である。却說かゝる靈體が、吾等の眞面目として、それが「大悲止むことを得ず驚て火宅の門に入る」と說かれてある樣に、この人生に活動の全體を投出し、かりに現人生をその無限活動中の一期と見て、生はその最初の波丘であつて、生の連續がその活動の一波は一波と送り込む道程であると想ひ做して見ると、死と云ふものも、同じ波瀾の一波にすぎないことになり、生が限りなき意義と力とを包むだ一波丘をなして居ると全然同じ意味を持つた、多數の連續した生の波丘を經て、この現實人生と人類の呼んで居る一期を送り出す最後の一波丘が、所謂死と云ふものに呼做されて居ると云ふことになる。して眞常の大我そのものから云へば、無限時劫の活動の一環鎖にすぎないので、その死が軈て次の活動の環鎖に移るべき道程を爲すことになる。コウ考へて見ると、死生は一如、死も亦これ法海の一波丘と云ふことに、當然歸着しなければならない。

この眞常大我の活動が、無意の活動でなく、絶えず新しいものを造り出しつ、絶えず向上進步をその生命としつ丶、限りなき時劫の環鎖を結び延べたものであることは云ふまでもないことであるが、その委細の解釋は、今の問題の中心であるまいから、他日に讓り、

またその哲學的論斷に照して何うあるかは別の問題として、人類個々がかゝる眞常の大我をその實體としての死に對する考察が、此ふ云ふ點に到着すると云ふ、大乘佛教共通の信仰の一端を、こゝに言顯はしたにすぎないものと見て、扨說次の問題は、それは一片の空理に過ぎはしないか、佛教の歷史上かゝる信仰に立ちて活動した人物があつた歟何うか、好矣あるにしても古人は兎に角現人とは餘りにかけ離れた信仰でないか何う歟と云ふ問題が、當然吾々の頭に浮んで來る。この二個の重要なる疑問は、嚴肅に考へて見ねばならぬ問題である。併し先づその第一の問題、それが實現されたか何う歟の疑問から考へて見ることゝする。

佛教徒の如上の信仰は、一部自然科學者等の立場からは、恐く誇大妄想には非ざるかとの批評もし致かねまじき程度に、廣大にして且つ神秘的な着色の濃厚なるかゝる信仰をも、極めて容易に信奉し來つた偉大なる動力は、既往二千五百年間、佛教の歷史あつてより以來絶えず繰返へされ、活ける歷史の上に、幾多の巨人の足跡が、マザ〳〵しく印遺せられて居るので、同じ信仰に入らざるを得ないことになつて居る。而してそれ等の最も偉大なる、また最も鮮明なる足跡は、佛教史の第一頁に見出される。教主釋尊の信仰、及びその入涅槃相即是。

釋迦牟尼佛が、その八十年の生涯を通して、如何に奮闘されたか、如何に活動されたかは、人類の歷史あつてより以來、最も卓抜の史實として誰れ知らぬものはあるまい。シテその死の前一年、印度人文の中心地にして且つその多年奮闘の深縁あり、多數の奉侍者の群居せる、摩掲陀の都城を後にして、人類救濟の第一義の爲めに、恆河を渡り、吠舍離を過ぎ、雪嶺の南、拘尸那掲羅の荒凉なる林地を指して傳道の途に上られし釋尊は、途半にして老軀更に疾を得て、尙且つ止まず、越へて翌年城北拘尸沙羅林下、將に死に入らむとする最後の一呼吸に至るまで、氣息喘々の間、一語は一語より滿腔の慈愍を包むで教誡倦まざりし、絶大の努力奮闘の狀況は、南北諸傳の記述中に於て現に而り

見るが如く、併かも寂然靜に最終の呼吸を止められし事迹は、何人と云へども絶大の感嘆を禁じ得ないものがある。この活ける史實は、實に前曰つた信仰の遺憾なき實現である。

釋尊が死の最終に至るまで、諄々弟子を敎えて倦まざりし事實上に顯はれたる敎訓を拾ひ集めて見ても、容易ならざる多大の含蓄がある。釋尊の生涯を通して、女々しい愚痴の樣な言行は塵ほどもなかつた樣に、臨死の言動上にも、毫厘のこれを認むべきがない。東の聖人が云はれた「噫天我を喪ぼせり」と云はんが如き種類の語、西の賢人の云はれたと傳へて居る「我神なにとて我を棄て給ふや」と云はんが如き荒凉悲慘なる句を、釋尊の唇から聞くことが出來なかつた。この種の語の洩れなかつたと云ふ樣な消極的な言顯はしては足らない。身死に臨むで居ると云ふことなどは殆ど釋尊の念頭に上つて居らなかつた樣に、道、救濟、活動と云つた樣な大なるものゝ意識巳外に、何者もなかつたかの樣に、實に寂然たる態度で、唯專心道を傳へると云ふことの外になかつた。これが實に死生一如の第一義の活現である。モ一ツ注意を惹く點は、その生涯の活動に對する滿足の狀態である。釋尊はその死に臨んで生涯の活動を回想し、十二分の滿足を以て居られたことが、南北諸傳の上に明瞭に認められる。その最後の敎誡中に、「吾れ既に說くべきものは說き終はり、作すべき所のものは既に作し終はり、何等心に滿たざるところなし」とある。この滿足の感じを打明けて、安庠死に入られたのである。口に語るべきこと、身に行ふべきことの凡てを、語り盡し行ひ盡して、所謂人事を盡し了つて、更に新なる活動に入るべき宣告であつたのである。この崇高なる心理狀態を想見し來るとき、何人か自ら顧みて慚愧なかるべき、何人か進でこの聖襟を欽仰し奉らざるべき。此くその死に臨んで、死生一如に超脫し、その生涯を顧みて、絕對の滿足を告白し得た釋尊の死は、この簡單なる叙述によるも、尙前に示した信仰の事實としての顯はれてあることが略理解され得ることゝ思ふ。而して更に一步を進め、かゝる

釋尊の生涯及び死が、果して前語つた樣な、更に偉大なる背景の下に立ち、一個の印度人としての釋尊以上に、釋尊自身の實體たる眞常大我の、永久倦まざる大活動の一波丘にすぎないと云ふ信仰そのものに、釋尊自らが立つて居られたと云ふことをも一言しておかねばならない。

法華經と云ふ聖典の眼目と傳へられて居る壽量品の一章は、釋尊自からがこの問題に關して告白されてをると云はれて居る。彼に、「世人は予を以て史上に顯はれた一個の現人と見て居る。併し夫は誤である。予の實體は絕對の佛陀であり。久遠の靈體である。人類の救濟は予の生命であり、予の理想である。絕えざる活動はこの人類の上に進められ、現實濁惡の人生は予が棲息の世界である。予の靈格は元より死生の境を超越して居る。唯人類救濟の運動が、非生に生を現し不死に死を現するの止むを得ざるものがある。予がこの活動の最初は過去に於て無始であると共に、將來に於てまた無限である。これが予の如來秘密の神通力である」と云ふ意味の說法が見えて居る。この說法と同樣な意味が、種々なる形式を以て、多數の大乘經典中に廣く說かれて居る。

この說法を以て、前の釋尊の生涯と對照して考へて見るならば、凡人に於て驚異すべき彼の偉大なる事跡も、サシテ驚くべきことではない。かゝる眞常大我の活動の一環鎖として、釋尊八十年の生涯は喫茶飯底の事件でなくてはならない。

釋尊已後悠々二千六百年間に、立かはり入かはり顯はれた古聖前賢のうちには、釋尊のこの信仰を明にし、且つこれを紹介するに努力したものもある。一步を進めてこの信仰と事實とが、歷史上のそれにあらずして、現實個々の自我の上にあるべき活ける事實であることを知らしむるに努めたものもある。更に進んで、それが現人個々の上に如何に體現せらるべきかを、主として說き示した先聖もある。その說明の形式上に差別こそあれ、終局の極致に立つては皆この一點に歸着するのである。而して此く古聖前賢が一樣にこの道を說示

されたと云ふ計りでなく、教祖釋尊を學んで、誰れもかも、同工異曲、思ひのまゝに同様の内容を包むだ死を迎送して居るのである。

釋尊常侍の二大弟子と傳へられて居る舍利弗の死は何うであつたか、日蓮の殉教的死相は何うであつたか、龍樹の弟子提婆がその殉教的死滅の時に臨んで、怨親平等の信仰に立ちつゝ、諄々因果應報の大道を説き、刺客の悔悟と入道とを示したる史實、三論學派の祖嘉祥大師の、死に臨んで特に死不怖論を草しつゝ筆を投じて瞑目せし史實、天台學派の祖南岳大師の嚴肅秋霜の如なる死、天台大師の溫平春光の如なる死、慈雲門下の殉教、弘法大師慧覺大師彗心僧都明恵上人法然上人道元禪師日蓮上人これ等の至聖が、相次で示された死の事實及び教訓が何うあつたか、親鸞聖人が、その臨死の遺訓に、「わが歳きはまりて、安養淨土に還歸すと云ふとも、和歌の浦曲の片雄浪の、よせかけ〳〵歸へらむに同じ、ひとり居て喜つゝふたりと思ふべし、二人ゐて喜つゝ三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」と示されたる信仰は、釋尊が、入滅に當つて諸弟子に遺訓し、「道は爾等の大師である、道を行ふところに吾もまた共に道を行ず、法身は不滅である」と、懇に説示された教誡と、符節を合するが如くである。道元禪師の永平を二祖に屬してのち、疾を平安に養ひつゝ、中秋の明月を仰いで、即是道場諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提の句を低誦しつゝ、靜に死を迎へし態度が、また善く釋尊臨死の落付きと符節を合するの觀がある。「水鳥のゆくもかへるも跡たえつされども道はわすれざりけり」と詠ぜし禪師の信仰が、この寂默の裡にも活躍して居る。更に慈覺大師が、その七十年の生涯を終はる最後の一日に至るまで、提撕倦まず、病床の裡に在て、手印灌頂の儀に依て、常齊に傳法したる、また榮西禪師の、實朝の榮遇を辭し、老軀を提げて特に滅を長安に唱へたる、何れの史傳を見ても、最後の一呼吸に至るまで、救濟の第一義に努力したる尊き事範を示して居つて、此處にも釋尊の終生倦まざる奮闘の影が認められる。此種の傳實を拾ひ集めたならば、殆

ど際限のない事になる。シテこれが凡て、前語つた根本信仰の實現であつて、その信仰の信仰として力をなしたのは、悉く釋尊の人格を通して顯はれた力の波動であると見てさし支へはない。併かも更にこれを還元すれば、これ等古聖前賢の個々の實體、所謂眞常大我の波動である。

（注意）前來屢々繰返へして云へる眞常大我と云へる靈體は、猶太系の神と全然その意義を異にせるものなることとは、數年來屢々予の説くところなるが、今又こゝに讀者の誤解を恐れて一言注意し置く、）

如上の説明は、或は人をして死の問題に對する説明として、殆ど失題の感を懷くものがあるかも知れないから、この點に於て、尙一辭を加ふべき必要を感ずるのである。元來大乘佛敎の理想論から見た死と云ふものは、理論上さして複雜な説明を要するものではないのである。死生は一如である、死もまた法海の一波丘に過ぎないと云ふ丈の説明でつきて居る。大乘佛敎の眞髓は、徹底したる現實主義に立ち、徹底したる自覺を根本信條とするのであつて、生が生であるならば死もまた一の生である。死が死であるならば生もまた一の死であつて、死生の間に確たる區別を認めない。從つて死生對立の誤解から導かれた、歡樂悲哀の感情の如きは、元より問題とならないのである。爾らが人情を沒却するのであるか、死の悲哀に同情が無いのであるかと云へば、元よりある、大に有る、有るから死生一如の敎も出て來る。活動と滿足の信仰も説かれて來るのである。これが眞の同情である、これが死に對する眞の人情である、哀情の徹底であると云ふのである。この點を多少でも明にしたいと云ふ考へから、前曰つた樣な根本信仰の大要を敍述し、更にその實證を歷史上の事跡に求めて見たのである。尙この點まで論じて見れば、これが吾等の現實と距離があると云ふ疑雲も、當然消え失せたであらうと思ふ。無論大多數の人には理解し惡いであらう。但し少くとも如上の説明の根本精神が、適度に理解さるゝならば、その直下に個々の自我と絕つべからざる、否個々の自我の説明にすぎな

いことが理解せられて、現實との距離と云へるが如き疑問の發すべき餘地なきことを自得し得らるゝことゝ思ふ。即ちこの第二の疑問は自然消滅として、特に筆を措く所以である。

前來示したる死觀は、大乘佛教の通說であつて、豫め注意しておいた通り、理想的のものである。從つて、卓越したる宗教的天才、即頓悟の機根でなくては、容易にこの大自覺に入ることは出來ない。理論上からは實に容易な筈であつて、自個本來の面目を、自個自ら徹底するにすぎないのであるが、事實は頗る困難である。理解と實證とは非常に徑庭がある。智識と信仰とは雲泥の間隔がある。自覺は實證であり信仰である。從つて容易でない。少くとも人類の少數に依て透徹せらるべき自覺であつて、大多數は遺憾ながらその選に漏れることになる。そこで、實際を中心とする佛教本來の主義が、別に大多數の人類に適當したる教義の施設を要することになつて、極めて道德的で現實的な佛教が開顯せられる。勿論前に示した大乘佛教と、今將に敘べんとする佛教との間には、尚無數なる佛教が施設せられ、多方面の人々を救濟する設備にはなつて居るが、この種の一般的說明に於て、專門的敘述を試むるの穩ならざるを想ひて、特にこれを省略して、前者を理想的の死觀と云ふに對し、玆に最も現實的な（佛教として）死觀を說明するに止めておく。所謂現實的な佛教と云ふのは、小乘的佛教である。業の思想を中心とした佛教であつて、極めて道德的な佛教それである。

業の佛教は、現實界に立脚して、人生を考察する。佛教的因果律によりて人生は無限に繰返へさるゝと見る。但し靈魂を直に不滅とは言はない。大乘に在ても小乘に在ても、自我の實體常住は、道德的にも哲學的にも否認する。元來吾等の經驗し觀察する宇宙人生の何者も、時間の約束を越へたるものとては一つも無い。空間の制限をうけて居らぬ何者もない。即刹那刹那に生々滅々し、恒に同一の實質と形式とを保存しつ

つある何者もない。ある因果關係に依て、そこに類似の實質と形式とを、或る時間と空間との內に於て保留さるゝに過ぎない。諸有客觀が爾ある許りでなく、自我そのものと考へられて居る、肉も靈も、凡てが同一の刹那消滅の窩中に在る。宇宙や人生やは、絕えざる生滅の連續である。從つて常識上に確認せらるゝ如く考へられたる個我の實在は、その立脚を失なつてくる。ツマリ無我である。但し吾々の生活が、類似にもせよ、三十年乃至八十年間一定の生命を有し、一定の形體を具へて居るてはないかと云ふ疑問に對しては、それが業の力に依ると答へる。自我と思惟せられて居る何物も絕えず新陳交謝しつゝあるので常住の自我は認められぬにしても、ある因果關係から、一定の間、類似の肉體と意識とが、絕えず新しく結び付いて、生活の繼續を形造つて居る。而して所謂死は、この一定の年壽を經て、稍廉强なる新陳交謝の行はるゝところに名けたもので、一定の生涯を通じて、これを貫く中心の力も、この生涯から次の生涯、或は前の生涯と、前後を貫く一定の力となつて居るものも、共に業と云ふものてあるとする。更に進んて、その業とは何であるかと問へば、業は倫理的行動の反射的印象が、一定の力となつて保存せらるゝものであると云ふ。この業が、原因結果の自然律に伴なつて、絕えず新しい人生を形造つて進む。更にその倫理的行動の中心となるものは何かと問うて見る、それは思の機能であると云ふ。思とは心理學上の意志である。この意志の審慮決定發動の三階程を經て、行爲として顯はるゝところに、業が成立すると云ふ。この思の如何は、善若くは惡の業を形成し、業が中心の力となりて、この人生を形造り、更に限りなく新なる人生を生出すことになる。その規律ある徑路を抽象して見ると、三世因果の大法となり、具象的に言顯はされた語が、生死輪廻と云ふ事實となると云ふのである。これが有名なる業の理論てある。勿論この思想を適當に理解するには、所謂佛敎的因果律の說明を要するのであるが、今はこれ等の知識を豫想して、こゝにこれを略して置くのてある。

この業の理論に基きて、死の問題を考へて見る。普通呼んで生命と名けらるゝものは、壽即ち年時と、煖即體溫と、識即ち意識と、この三者の結合したるものであつて、畢竟、肉體と精神と及び兩者の結合時限との三者を生命と名くるのであるとする。その一定の結合時限たる壽命の長短は、因果律に基きたる業の爲めに、制限されたものとする。死の狀態が平穩無事であるか、自殺狂死病死等の變態的であるかも、因果律に基きたる業の制限を受くるとする。死の刹那の心理狀態も、また勿論同樣である。更に死に近づいた場合の心理狀態は、次の生活に對して、極めて重要な關係を有するものと考へて居る。この思想が一種の佛敎に於て、臨終の正念を熱望すると云ふことになつたのである。また死時は現生活に對する猛烈なる愛着が高潮するものだと語つて居る。先づ自己の肉體に對し、その他自己の家族友人に對し、資產境遇に對しての愛着等である。以上は凡人の死に關する解釋であるが、聖者は所謂業の繫縛を解脫したるものゝ謂であつて、羅漢とか佛陀とか稱せらるゝものは此の境地に至つたもので、この聖者の死は、特別な死を經驗するのであつて、最後滅盡定と云へる理想界に還元するときの心理狀態を、數學的に、微妙なる說明を試みて居るが、これは今の主題でないから略しておく。

これを要するに、業の思想に依れる死は、業の支配の下に一切が規定せらるゝことになるのであつて、(運命說と同觀すべからず)その業は、思即ち意志の倫理的心理機能に由來するのであるから、一切がこの思の如何に依て解決せらるゝと見て大過がない。從つて思の心理運動が、極めて重要な注意を要するのであつて、この現人生の上にも、その最終の死の上にも、乃至連續すべき無限の新なる生活の上にも、凡てこの思が最も重要な關係を持つと見て、念々刹那の意志の運動に警誡して、出來得る限りを意志の向上に盡して、現生を平安に、死を安靜に、而して永久を淸淨にする樣に、力めねばならないと云ふことを敎ゆる。この敎義は、

極めて嚴肅な道德的立脚に立つて居る。業論の立場から見た死の考へは、不完全ながら此に止めて置く。

却說如上の二個の見方が、同一佛教の思想として、何う調和せられるものであるかと云ふ問題に付て一言すべき必要を認める。この問題に對しては、當然歷史的に解釋すべきものであるが、今且くこれを避けて、簡單に思想上から、兩者の關係を一言する。畢竟これは、理想界から見た死と、現實界から見た死との區別てある。前者の見方てあつても、現實上の說明は矢張り後者の如く語る場合がある。後者てあつても、理想界を語る場合は、前者の說の全部或は一部を語らざるを得ないのてある。また他の方面から說明するならば、前者は自在業幻の思想に立つて居り、後者は因果實業の思想に立つて居るから、表面上水火相容れざる樣てはあるが、その實、現實自我を中心としたる佛敎としては、因果實業の上より說明するが當然てあつて、現實我の實體眞常の大我を個々の面目と見て、その立場より見る場合は、自在業幻の信仰に立たざるを得ないのてある。これも立場の上からの區別てあつて、互に矛盾すべき理由を持つて居るのてはない。一言にして曰はゞ、因果とか業とかは、自我の現實としては、その約束から越ゆることの出來ぬ樣に自縄自縛して居るのてあるが、(この一面は實業因果の說明に依らねばならない)自我の理想としては、この繩縛を解脫し、因果の實業の實際に徹底し、却てこれを自在に用ゆるものにならなくてはならない。(この意味が即ち自在業幻の說明を要する所以てある)、眞の活動は此に顯はれて來る。業や因果に囚はれたる自我は、殺活自在の大用を顯はすことが出來ない。それらの囚はれから完全に脫落して、初めて不思議の業幻自在の大用なるものが出て來るのてある。生死岸頭に立てる大自在と云ひ、還相回向と云ひ、薗林遊戲地といふは、みなこの思想の換稱に外ならないのてある。更に他の語で言表はして見る。前者は覺後の佛敎てあり、後者は覺前の佛敎てある。覺とは大悟の謂である、大悟徹底の境地に至

らざる間に在て見る死は、死は死であり苦痛であり悲哀であり愛着である。覺後の果界に立ちて見たる死は、さながらに本地の風光である、月落烏啼の境地である、柳綠花紅と簡ぶところがない。覺前覺後を以て兩者の死を區別し、そこに兩者の調和を知るべきである。而して更にこれを他の方面より概觀するならば、死の理想觀は、佛敎の哲學的一面を代表し、死の現實觀は、自ら佛敎の道德的一面を代表して居るものである。

死に對する佛敎の哲學的一面と、道德的一面とを略して說き了はる。而して更に宗敎的一面より見たる死あり。而して予の本稿既に豫定の頁數を超へ、加ふるに豫定の時限を過ぐ。正に是れ死後死を說くに似て、頗る時宜を失せり。乃ち筆を投じて他日の因緣を待つ。唯一辭の冲微を漏洩すとせんか、如上二面の思想の善妙なる結合は、玆に所謂佛敎の宗敎的一面を形成するのである。有緣の道俗請ふ三思せよ。

武士道學派の死生觀

文學博士　井上哲次郎

一體死生の問題はなか〳〵廣い問題であつて、哲學上でも研究されて居るし、政治學の方でも講究されて居るし、又宗敎などの方にも死に對する訓戒が少くないのである。て總ての方面から死生の問題を今委しくお話するといふことは出來ぬが、生理の方で研究する死といふことは悟りといふ事とは餘程掛け離れて居る。生理學上から生といふものはどういふものである、死といふものはどういふものであると一々分解的に說明することは、科學の方面からは大變大事な研究であつて、近世に至ては餘程新たに闡明された點が多い。然しながらそれ等は只生理的方面のみの說明である。それて其方面から直ちに死生の關門を打破つて、一種の悟を開くといふやうな事は六つかしいのである。どうしても悟を開くといふ事は生理以上の立場に上つて初來なければならぬ。即ち生命の精神的方面に入つて初

めて死生以上の悟りを開くことが出來る。

其點については餘程日本の武士道學などいふものは立派な考を持つて居つたのである。山鹿素行の師匠は北條氏長と申すが、此北條氏長と宮本武藏とは師弟の關係がある。兵學に於ては北條氏長が師であつて、劍道の上に於ては武藏が師である。互に弟子たり師たる關係である。宮本武藏の書いた五輪書を見ると、死生の關門を打破つて、其れ以上に超越して、大決心をなして居つた所が見える。換言すれば死生以上の悟を開いて、そこに自分の立場を拵へて居つた。彼武藏は禪學をやつたものと見えて、單に武藝のみをやつといふてなくして、禪學を基礎として劍道の極意を得たものである。それで幾度も試合をやつても何時も勝利を得て居る。佐々木嚴柳との試合が最後の試合である。そして其試合の際には、もう死生などゝいふ事は念頭になく、非常な勢を得て敵の腦天を打ち破るのであつたが、其技は實に石火電光といふべき有様であつた。即ち死生を超脱して居るが爲めに、さういふ場合に少しも狼狽などすることなく、折合が十分あつたから思ふ通りに敵に打勝つことも出來た次第である。之を、死を決して却て生を得るの方法ともいふべきであらう。其等の事はよく五輪書の精神のある所を味つて初めて悟り得べきであると思ふ。

山鹿素行は語類の中に死說を說いて居る。死說は、死を決して却て生を得る方法である。例へば家を出るにしても、萬一途上て危い事があつても遺憾なき決心を持つて出るのである。再び家に復らんでも憾みない決心で出る。それ丈けの覺悟を以て居るから、非常に勇氣が養はれて居る、即ち何時でもイザ事が起るとなればそこて大決心が起る。彼此を顧ることなく、餘念に惹かるゝことなく、當面の事に對して全心全力を傾けて解決することが出來る。又死說といふ事は、單に死を決するのみてなく、死といふ事を非常に大事にする事てある。死ぬべき場合をよく考へる、死すべからざる時に決して死してならぬ。死ぬべきに當つて死せざるは恥てある。其邊の事は人間當行の道に外れぬ

やうにする所に死説が成立つのである。素行の門人に大道寺友山といふ人があるが、此人の著はした武道初心集の初めに「武士たらむものは、正月元日の朝、雑煮の餅を祝ふとて、箸を取初るより、其年の大晦日の夕べに至るまで日々夜々死を常に心にあるを以て、本意の第一と仕り候」と書いてある。今日から見れば極端かも知れぬが、當時の武士の身にとつてはさういふ考が必要であつたらうし、又正月元日の雑煮を食ふ時から死を覺悟しろといふのはなか／＼面白い。

吉田松陰などいふ人も、死生の事については餘程よく考へた形跡がある。肉體の死より以上に出て、精神的生命の永久的なるを考へて、精神的生命の方を主とせるを以て、肉體の死などは殆んど眼中にあるかなきかの如き輕いものになつて居る。

乃木大將などは死といふ事について餘程前から考へた。夙に死すべかりし身がまだ生き殘つて居る。從て如何なる時期に如何に死すべきかについて綿密なる考慮を費やしたのである。或時「かういふ風にして居れば疊の上で空しく死んで了ふ」といつた事がある。其意味は疊の上で病死しては武士の耻であるといふ考であつたらうと思ふ。屍を原野に曝らすといふ事の方が武士に應はしい死方であると思ふたであらう。乃木大將は戰爭で負傷はされたさうだが生命に係はる程の怪我はされぬ。然し最後に明治天皇の崩御となつた時、玆に自分の死ぬべき機會を發見したのであらう。乃木大將は實に死に花を咲かせたものである。あの壯烈なる、訓戒多き死方は乃木大將の目的に協つて居る。あゝいふ最後を遂げられたといふのも只偶然でなく、餘程細かく計畫された事で、自己の意志によつて決行されたものである。一體武士道ではさういふ側の事が餘程よく研究されて居る。それは武士は何分死生を賭してかゝるものであるから、必要上そこにいろ／＼考が及んだものである。

一體人間は一度死んだものと思うて社會に生存して居ると假定すると、餘程死生に對する考が違つて來る。同時に人間は一度は誰れしも死んで了ふものであれ

ば、豫て無き身と覺悟して、尙世に生存して居るものと考へると、實に其生命の價値の尋常ならざることが自覺せられて、一日と雖も一刻と雖も徒らに經過すべからざる感を起さゞるを得ない。死といふやうな事を只凡夫風情が念頭に忘れぬやうにして居ると Fixée Idée となつて、只死、死といふ事ばかりを考へて所謂死神に取り兇かれて病的にならぬとも限らぬ。さういふ病的、厭世的に陷るは、死生の間に一種の悟を開かぬからであつて、悟が開けて超脫ずれば、死生何かあらんといふ偉大な境に入ることが出來る。禪學などいふものはさういふ側に効能があるものである。そして禪學と武士道はよく結びつく。禪學丈けては一個の私の悟であるけれども、武士道は現世的のもので、國家の爲めに應用が利くので、一層實際上の意味が多大である。

希臘のストアの哲學派などいふものも死に對しては餘程强い決心があつたやうに思ふ。彼等の中に自殺したものが隨分多い。然し武士道學派の死に對する考とは大分違ふ所がある。ストア學派の自殺したのは全く長生をして居ると段々弱くなつて難儀な事になるから、それよりは死んだ方が增してある。それで程よい所で始末をつけるといふ所から來たので、全く一人の都合上自殺するのである。いはゞ利己的の動機に出るものといへる。武士道學派はさうでない。生命を大變に重んずるのである。生命は一つしかないから、之を最も有効に、最も役に立つやうにせんとする。故に死は泰山よりも重く、鴻毛よりも輕して、死すべからざる時には死は泰山よりも重く、義正に死すべしとなれば命は鴻毛よりも輕く、一死を何とも思はぬ。詰り生死を決するは義によるので、義によつて生き、義によつて死するのである。ストアの如く自分の都合によつて自殺するのとは大變違ふのである。武士道の眞精神を會得せぬものは、武士道は死を輕んじたやうにいふけれども之は誤解である。武士道學派に傳はつて來て居る死生觀は實行と伴ひ、なか〳〵壯烈なものである。之は分析的には了解せられず、寧ろ悟てある。近來日

本にもベルグソンの哲學が流行つて來たが、ベルグソンの哲學には、分析的に研究しては到底捉ひ難きものあるのを主張して居る。實在其物を動的に見て、それは直觀によつてのみ捉へらるゝものであつて分解の及ばぬ所なりといふのは、其生命に關する考の歸結する所であるが、武士道學派の傳へて來たやうなものは矢張り直覺的にのみ看破せらるゝもので、或程度までは分析でも行けるが、分析のみでは十分に解決せられぬ所がある。詰り人生觀の極意の處に至ればどうしても分解以上に到達する。故に今日の生理學などの方面からして分解的に死生を研究したものは、そこまで到らない。近頃永井潜氏の「生命論」などは分解的に生命を研究したものであつて、分解的の方面には有益な知識であるが、之を以て直に死生の關門を打破るには到らぬ。それは其以上に直覺的の範圍に遡らなければならぬ。而してさういふものがこれまで日本にはあるのである。其直覺的な、壯烈な武士道學派のやうなものと、西洋の分解的の學問とを合せて我物にすることが、今後の要求であると考へる。

前號に掲載せる「死の研究」(上)は

▼生物學上より觀たる死……丘 博士

▼基督敎の靈魂不滅觀……内ヶ崎愛天

▼醫學上より觀たる死(上)……富士川 游

▼原始民族の死に對する觀念……渡瀬博士

等なり

國旗問題

日本國旗の凌辱

法學博士 松波仁一郎

此度の南京事件については種々論ずべきこともあるが、總ての問題を論ずることは到底出來ず、又餘り雜駁になつても惡るいから、玆には主として日本國旗の凌辱について所感を述べて見やうと思ふ。

まだ自ら目撃したのではないから眞僞は保し難けれども、些か信ずべき事實として傳ふる所を見るに、我日本商人が自宅を引上げて領事館を指して國旗を捧げて來る途中に、國旗は蹂躙せられ、人は殺され或は重傷を蒙つたといふ事があり。諸方面の通信を見るに此事眞なるが如し。次いで我海軍の陸戰隊が我國民を保護する際に國旗を用ひたるを、又支那の軍隊の爲めに辱められ、幸に我水兵は直ちに之に對し適當の救濟を行ひ、侮辱者に鐵拳を加へて國旗の神聖を侵されずに止んだ。然し兎に角一度は侮辱を加へられたに相違なく、名和司令官よりの公報によつても事實と見るより外はない。尚又甚しきは、彼の軍兵が我日の丸の赤玉を刳り拔いて非常に殘酷な、憤慨すべき事をしたといふ事實も確からしい。尚多くの事實があるが、全體として日本の國旗が凌辱を受けたといふ事が爭ふべからざる事實である。

之に對して我國民の憤慨するのは無理でない。我輩も學者であつて世事に疎い者であるが、國旗の性質を研究して居るから一層の感慨が深い。恐らくは冷靜を裝うて居らるゝ内閣諸公も苟も國旗の性質、國權の何たるを辨へる以上は、心の中には憤慨して之に應ずる適當の策を講ぜられて居る所であらうと思ふ。

國旗の性質といふのは大分我國人にも分つたであら

う。即ち國權の標章である。國旗に對して加へる侮辱は日本帝國に對する侮辱である。昔から國旗の觀念が何處の國にもあつたが近來は一層其念が盛んになり、其神聖を防護することは文明國共通の事となり、平時に於ても大いに注意することゝなつた。他國の法律は暫く措き、我日本刑法の如きも「外國に對し侮辱を加ふる目的を以て其國の國旗其他の國章を損壞、除去又は汚穢したる者は二年以下の懲役又は二百圓以下の罰金に處す」(第九十二條)として一私人が外國の國旗を除去又は汚穢してさへも懲役に處置するのである。國旗が公然掲揚せられざる時に侮辱を加へてすら加害者を懲役に處するのである。然らば公に掲げられたる時に軍人が之に侮辱を加ふれば其結果の重きことといふを俟たずして明かである。單に其加害者を内國法で罰するが如きによつて濟まさるべきにあらず、場合によつては戰爭になるかも知れず、談判によらずして此一擧直ちに戰爭開始となるやも測られず、又直ちに開戰するも決して無謀ではないのである。

然らば今回の事實については如何にすべきか。予は單純に、我政府より對手國に向つて亂暴したものに刑を加へよとの請求位で滿足すべきにあらざるは明かなりと思ふ。對手國をして、國として我帝國に謝せしめざるべからず、單に口先の謝意を表するのみにあらずして、實果を示せる謝意を表せしむるを要し、我又我國權の擁護、帝國の威信を保つ上にも之を望まなければならない。事は急を要するのである。時が經ると感情が薄くなつて有耶無耶の間に葬られて、彼我國民の中に自ら國旗の尊嚴の度が減ずる。彼國民が日本國旗及び之に伴ふ日本帝國に對する尊嚴の度の減ずるのみならず、我國民亦日本帝國旗の威嚴を感ぜざるに至るであらう。

此度の國旗凌辱事件に關し、往々彼を辯護して、此度凌辱を加へたるものは叛民なりとか、亂徒なりとか或は無智の民であつて支那國としての事にあらずなどといふけれども、前に示した數個の例によつて見ると、決して出來心の輕い事とはいへない。假令無智のもの

が凌辱を加へたとしても、國は責任を負はねばならない。一國内にあつて瘋癲白痴、未成年のものが國法に觸れることをなしたとは事體を異にする。國と國との間にあつては一國内に於ける事と別に論ぜなければならぬ。如何なる支那人が如何なる動機の下に日本國旗を侮辱したるものとしても、日本國旗は支那に於て支那人の爲めに汚されたることとなりとして、我帝國から彼國の政府に交渉せざるを得ぬ。事の極めて小なる時は其加害者に刑罰を加ふるか、其他適當の措置を取ることに止るも、事體の大なる時は、所謂國際の大問題となるのである。況んや此度の事件を以て見るに、偶然の些々たる出來事にあらずして、系統ある前後一貫したる國旗の侮辱であり、且つ彼の軍人のなしたる事なるを以て非常な大事件と見ざるを得ず。苟も國を立て、殊に文明國として我日本と伍せんとするものにあつては、我日本國旗の何たるを知らざるの理なし。國旗に對する支那人の觀念は、假りに我國に於けるよりも進歩せずとするも、清朝の時には已に黃龍旗あり、日清戰爭の時に我日章旗と爭ひ、大いに國旗に關する智識を得て居る。又明治三十三年の北清事件に於て各國の旗が聯合して清國に當りたるによりて益々國旗の何たり、殊に日章旗の何たるは知れる理である。其確證即ち旗は國を表章するものなり、權力の代表なりといふ事は、現に清朝が滅んだ時に直ちに之に代る中華民國の五彩の旗を以てしたるによつても彼が旗の何たるを知れることと明かである。殊に聞く所によれば、張勳が別に三色旗を作れりといふ。然らば清國政府は勿論、所謂官軍即ち北軍の人には旗の觀念に富み、我日章旗が日本帝國の表彰たることを熟知して居る譯である。然るに二度三度ならず、十數度も其軍隊の之に侮辱を加ふるに委するに於ては殆んど帝國に對して戰を挑むと解釋されても辯解の餘地なきを懼るゝのてある。

假に斯る侮辱を加へたるは民國の司令官の命令にあらずとするも、彼等は其責任を負はざるべからず。其部下の軍人が之を爲したからである。部下の軍人にあ

らず、叛亂の徒なり暴徒なりとせば、何故に之を制し止めざりしか。已に止むる丈けの威力なしとすれば、我日本帝國は斯る威力なきもの丶措置に依頼する能はず、自ら進んで保護しなくてはならぬ。日章旗は日本帝國と存在を共にし、如何なる國に於ても如何なる場合に於ても凌辱せらるべきものにあらず、假りに一時凌辱を加へらるゝとしても、之に委ぬべきにあらず、必らず直ちに其耻辱を雪がざるべからざる性質のものである。

斯くの如く國旗の神聖なる事は我國にのみ於ける觀念にあらず、世界共通の觀念である。獨逸の砲艦が、支那の砲臺より獨逸國旗に侮辱を加へられたるに對し、直ちに應戰し、彼を屈服せしめたるが如きは、よく國旗保護の實を盡したるものである。嘗て三十三年の北清事變に際し、聯合軍が清國の彈丸を恐れて逡巡したりしを、我軍驀進し彈丸雨下の下を潜り、太沽砲臺を一氣に乘取つて、正に旗を立てんとする際、英人後ろから來つて旗を立てんとしたりしを以て、當時の陸戰隊を率ゐし故白石海軍大尉は其英人を抑へつけて、我國旗を立て丶先登第一を示し、日本帝國が第一に占領したることを示せる如きは最も國旗の性質を發揮し、効用を示したるものである。彼の有名なネルソンがツラファルガルの戰に重傷を蒙り、將に死せんとする時、傍に居る艦長に向ひ、如何なる事あるも國旗を下ろすべからずといひ、艦長は之に對して、如何なる場合にあつても之を下ろさざるべし、閣下乞ふ意を安んぜよといへるを聞き、莞爾として瞑せりといふ事は名高い話である。今我國人が割合に輕蔑する亞米利加人でさへも國旗の爲めに死を侵すことは屢〻ある。予の記憶する一例がある。獨立戰爭の際、英軍頻りにカロリナ附近を砲擊せるに、未だ砲臺なかりしを以て、米國軍が俄かに砲臺を作り、旗を立てた處が、彈丸が竿に中つて、旗が中天に飛んだ。恰かも源平屋島の戰に那須與一の弓によつて扇が中天に舞ひ上つたと相似て居る。其時源平兩軍箙を叩いて賞讃したといふ事は歷史にあつて、其扇の成行如何は如何なる書にも出

て居らないが、亞米利加の彼の旗が飛んで海岸に落ちんとする際に、海に落ちても耻であり、敵軍に取られては一層の耻であるからといつて、盛んな攻撃中に拘らず、一民兵が飛び出して其旗の地に落ちる前に受けて、砲臺に驅け附け歸り、直ちに他の竿に掲げたる爲めに、米軍大いに振ひ、士氣一變して、さしもの英吉利の猛烈なる攻撃も其功を奏せず、擊退せられたといふ事がある。戰時と平時とは事情に於て異れども國旗の擁護なる根本の點に於て毫末の差がない。

國旗の國法上の性質に關しては各國大いに異なつて居る。英吉利の如く、エングランドにアイルランド、スコットランド等の併合さるゝ毎に旗を變じ、千八百〇一年一月一日に生じたもの、獨逸の如く一千八百七十一年に帝國の建設したる時に生じたもの、佛蘭西の如く愛國者ラファイットなどの主張によつて一千七百九十年に出來たもの、米國の如く初めて獨立した一千八百十八年に出來たものがあつて由來が極めて異る。憲法の明文に委しく示すもの、時代〲の法令布告等によつて出來るものあり、此等は專門の學術雜誌によつて述ぶべき事として他日に讓らんも、何れの國に於ても拵へる時の精神、出來た後の擁護に至つては同一にして、君主國に於ては往々其旗を君主の旗とすることあり、或は君主には別に君主のものを設け、之と國の旗とを明別するものあれども、尊嚴に於て國と君主と旗とは殆んど同じく見らるゝ。殊に米國の如き共和國は目に見ゆる主權者なく、大統領は四年毎に交代し、辯護士より大統領となるものもあれば、大統領たりしものにして新聞記者となるものもあるから、其身體に尊嚴を有することなく、殆んど國を代表する有形物なしといふも可なる程なるを以て、何物をか之を當てんとし、遂に國旗を以て之に當て、偶像として崇拜せんとする傾がある。恰かも神は無形なれども之を崇拜するに物體なくんば甚だ賴りない感じが起るから、劒又は鏡を神體となし、一度之を神靈としたる以上は鏡又は劒を汚すものを以て神威を汚したりとして天罰若くは天誅を加ふると等しく、此念慮よりして最近に於て米

國人國旗に對する觀念益々明確となつたと聞く。

君主なき米國に於てすら然り。君主國たる獨逸、露西亞等に於て、常に君主の尊嚴に馴れたる國は、之に準ずる尊敬を國旗に捧ぐること言ふを俟たない。果して然らば天壤無窮の皇室を戴く我帝國に於て國旗の重要視すべきこと固より論が無い。我國旗の存在は恰かも憲法の存在と等しく說明することが出來る。我憲法は我國開闢以來存し、神武天皇の御即位の時より算するも二千五百有餘年である。只明白に形にあらはれ、近世式の姿を得たのは明治天皇の二十二年二月十一日たるのみてある。國旗も之と等しく我皇室及び全國民の大祖先たる天照皇大神の御姿は國旗てある。折に觸れ機に應じて形にあらはれ、明治五年の太政官布告を以て近世的にあらはれたのてある。歷史上にあらはれた例證を一々擧ぐるも煩はしいから、今其最も顯著なるもの二三を話せば、神功皇后が三韓征伐の時用ひられた旗の形式は今明かに分らぬが、正氣などの文字が御訓令にある所から推して大凡そ日の丸てあつたらしと想像がつく。文字と形式に初めてあらはれたのは大寶六年五月一日文武天皇の時に大極殿て、朝を受ける時に日月の旗をお立てになつた。左には日章、青龍、朱雀の幡、右には月章、玄武、白虎の幡といふ事があつて、日章といふ事が明かに文字にも出て居る。德川時代に船などによく朱の丸といふ字があるが之は日章旗に違ひなく、最近に正確に記錄に載つて居るのは島津齊彬公が安政年間に幕府に建議したものてある。而して我國旗は不文の時代よりも勿論、形式にあらはれた後も一度も侮辱を蒙つた事はない。國民の國旗に對する智識の不十分よりして時として不知不識の中に誤りを出した事はあるかも知れないが、知りながら汚した事は一度もない。况んや外國の爲めに侮辱を蒙つた事は一度もない。日本國民は悉く國旗を保護し、國旗の下に倒るゝ決心があるのてある。此決心は日淸戰爭に於て牡丹臺を乘り取り、鴨綠江を渡り、將に北京城下の誓をなさしめんとする迄に至つた。又各國聯合軍に先つて團匪事件に天津に於ける太沽砲臺を占領し

た。又日露戰爭に際し、露國艦隊を全滅せしめ、沙河に於て、奉天に於て露國の强軍を擊退したのである。又昔の一二の事例を見ても我國人の旗に對する考の嚴肅であつたことが分る。即ち彼の村上義輝が錦の御旗を敵軍より奪ひ返したるが如き、又稗史小說であるから其眞僞は知らないが、「奥州安達原」三段目にある安倍宗任の如き「源平布引瀧」の小まんの如き何れも、我國民が如何に旗を大事にしたかを表示して餘りある。此觀念は昔より今に至るも衰へざるは我國民の特點である。國民は益々之に勤めなければならぬ。而して上に立つ政府は此氣風を良用しなければならない。一度屈すれば他の外國若くは外國人に輕蔑さるゝは勿論、國民の國旗に對する觀念の變更を來す。而して之は實に由々しき大事である。我輩は國旗を重んぜざる國民は萎縮の國民なりと斷言する。予は國旗の世界各國に於ける沿革及び比較、殊に我國に於けるものと比較し、系統的に研究したる後に、此斷言を爲すものであつて、今回南京に於て我日章國旗に侮辱を加へられたりとの報に接し、一層此感を深うし、志あるものゝ官民を問はずして奮起せんことを希望するのである。

（九月十五日談）

海軍々人として觀た國旗

海軍少將　佐藤鐵太郎

一般の人は國旗といふ事を餘程狹義に解釋して居るが、私は之を廣義に解釋して、苟も其國を表示する所の旗は、すべて之を國旗といつて差支ないと思ふ。例へば軍艦旗を始め公使館や領事館に立てゝる旗は勿論のこと、商船旗でも、或は一私人の揭ぐる旗でも、すべて國旗といつて差支ないと思ふ。

此度國旗問題が喧しいについて、貴誌がいろ／＼の方面から國旗に對する研究を蒐め、一般國民をして國旗の意義及び性質を充分に諒解せしめやうとの企ては至極宜きを得たものと思ふ。私にも海軍々人として觀た國旗について何か話して呉れとの事であるが、今

度の問題は、或意味に於て甚だデリケートな問題であり、又或意味に於ては頗るコンプレックスな問題であるから、私は現役軍人として、當面の事實問題に觸れることを避け、只國旗其物に就いての私の考をお話しして見やうと思ふ。

國旗の主旨は勿論其國を代表するにあるので、國家を代表する意味を十分にあらはした場合の國旗は、國家自身と同じものであるから、非常に嚴密な考を以て、之を解釋し且つ之を擁護しなくてはならぬことはいふ迄もない。

然しながら如何なる貴いものでも然るが如く、國旗と雖も、時と場合と場所と、又其れを代表する條件の備不備によつて其意義もも然違つて來るのである。一私人によつて代表せられる場合と、一國の代表者によつて代表さるゝ場合とては勿論、其意義が違つて來るのである。此事の最も明白なる例は商船旗と軍艦旗である。日本の國旗を立てた商船が、外國の港などで抑留された時に、日本の國旗を立てゝ居ることを知りながら抑留したから、日本の國家に對する侮辱かといふと、さうはいはれぬ。若し其抑留が不當のものであつた時には其損害賠償を請求することは出來るけれども、直に國家を侮辱したものとはいはれぬのである。之に反して若し日本國旗を立てゝ居る軍艦を抑留したならば、之は日本の國家夫自身に對する侮辱となつて、問題は商船の場合とは違つて來るのである。

又國旗は代表すべき資格あるものに代表された時に初めて其意義を生ずるもので、資格なきものが代表しても其意義は生ぜぬ。例へば支那人が日本の國旗を立てた場合には、日本の國旗たる意義を有たぬ。昔から戰爭の時分に、交戰國の一方の軍艦が、敵艦を欺いて油斷をさせる爲めに第三國の旗を立てることがあるが、之なども嚴密な意味に於ける國旗の意義がない。何故ならば代表すべきものでないものが代表して居るからである。

又同じ日本人でも、一私人として之を用ふる場合と、國家の代表者として之を用ふる場合では其間に大いな

る差別がある。又同じ一私人にしても、之を輕々しく玩弄品のやうに取扱つて、深い意味のない時に用ひたのては、國旗の國旗たる意義が十分あらはれて居らぬ。嚴密な意味に於ての國旗てない。

それからまた、其の國の敬意を表する爲、例へば禮砲を發するとき、或は艦飾をなして祝意を表するときに、自國若くは他國の旗を掲けるのてあるが、この場合は、外人が日本の國旗を掲けても、立派に日本國旗の意義があるのてある。が、これとても掲くべき時に掲ぐべき資格ある船舶が掲げたのて、決して無闇に掲げた國旗てはない。

凡そ此等の事から考へて見れば、國旗は、之を使用する場合と、其方法と、又之を使用する人の如何によつて、其觀念も自ら別るゝのてある。要するに國旗なるものは、國家夫自身を代表するものが之を用ひた場合には、其榮辱は直ちに國家にかゝるのてあるが、普通の日本人が一個の日本人として之を使用した場合には、國家の代表にはあらずして、其一個人が日本人たるを證明するに止るのてある。然し個人と雖も、自己の生命財產の安全を欲して、之を國旗の下に置く場合には、自己の屬する國家の權力に縋つて之を保護して貰ひたい、即ち國旗によつて國家の權力を代表して貰ひたいといふ意味を以て立てるのてあるから、國家たるものは其場合には十分其人民を保護するの義務があり、隨つて國旗をして國家として働かさねばならぬ意味合を有つて來るのてある。斯る場合には日本人は日本國旗によつて保護せらるゝ特權を有つて居るのてあるから、其れを保護しない國に對しては、日本國は相當の責を之に負はさなくてはならぬ。然し前にもいふ通り場合といふ事も餘程考へなければならぬ。秩序も何も立たぬ、或場合には外の國の人間でも何でも日本の國旗を濫用し兼ねぬ場合には、國夫自身の働もいくらか混亂を免れず、從つて其間に或誤謬の生ずるを免れぬ。然し誤謬が生じたからとて國旗の効力が減少する譯てはない。惡意のものに對しては惡意に對する責を負はせ、誤謬あるものに對しては誤謬に對する責を

負はさなければならぬ。いくら混淆して分らぬからといつても、日本國旗を用ふべきものが用ひた際には之を尊敬させなければならぬ。況んや之を侮辱したものが、兇行の國夫自身のものである場合には、益々混雑の故を以て言譯することが出來ぬ。

國旗の問題については昔からいろ／＼六つかしい議論もあらうが、それは公法學者の研究に俟つべきことて、我々門外漢の言説は何等の權威にはなるまい。然し我々のいふ國旗は、何處までも國家を代表する意味を失へぬのであるが、只時と場合と、之を用ふる人によつて、其意味に輕重の差あることを忘れてはならぬと思ふ。決して千遍一律に是を觀るべきものではない。

（九月十六日談）

陸軍々人として觀た國旗

陸軍砲兵大佐　奈良武次

我が國旗は其の定制近く明治の初年に在りと雖も旭日の旗釆我に採用せられたるは遠く中古に溯り近く幕末外國と交際を開始し主として船舶の標識となしたるに起因す明治三年正月廿七日西洋形船舶は必ず日章旗を掲ぐべしと命じ同五年三月廿八日東京府の伺出により祝祭日に人民一般之を擧揚することを令したるより我が邦國旗の定制茲に成れり。

軍旗の制は夙に明治三年に定められたるも之を聯隊に授けて其の徽章となしたるは明治七年一月十三日近衛歩兵第一第二聯隊に授與せられたるを嚆矢とし爾來編伍の増大と共に其の數を加へ二十七八年戰役の後は騎兵聯隊を置き亦之に授與したるを以て歩騎兵を併せて聯隊旗の數百旒以上に及へり海軍亦軍艦旗を制定し樣式粗、聯隊旗と同じく旭日に添ふるに幾箇の光彩を以てしたるものにして所謂國旗なるものには非ずと雖も共に帝國軍氣を表彰するものたり聯隊旗を敬重するの風未だ深く我が民心に貫乎せず我國の制亦外邦の如く之に勳章を附することとなしと雖も我が聯隊旗は烈戰の間に立ち毎に勇敢なる旗手の保衛を受け外戰に於て

一の敵手に落ちたるものなし三十七八年戰役に於て敵軍の聯隊旗は我れ之を奪取したることあるも我が聯隊旗は常に彈烟硝雨の中に儼立し其の敵彈に中りて殆ど完膚なきに至れるは則ち之あり其の斷片零布苟も形骸の見るべき限り傳へられて其の聯隊を飾り逢過するものをして一見起敬せしむるもの亦以て我が士風の鑑とすべし是れ一般國旗の談に非ずと雖も亦正しく國旗に關連するの話題たり。

　我が國旗の戰時に於けるは別に種々の逸話を傳ふ支那人が黑丸を白布の中央に抽き以て我軍の防衛を受けんとしたるが如き敵軍が屢々我が國旗を模造し之を壘頭に振翳して我が銳鋒を避けんとしたるが如き卅七八年の役に於て屢次實見したるの例あり我が國旗の色彩單純容易に作り得ると其の遠きより辨別するに易きとは往々此の狡計を誘啓したるを疑はず一時此の譎詐を辨じ易からしめんがため我が軍は陸海相約して三角形に近似するの日章を作り以て相示明するに便したることもありと云へり又南山の一役には兵士の心箇々に決する所ありしと見え其の占取の確實となるや各兵皆懷を探りて小國旗を出し欣躍抃舞措く所を知らず中には敵丸に射られて倒れつゝ猶國旗を懷にせるを忘れず手を高くして之を擧げ以て瞑したるものありと傳ふ國旗の深く忠愛の念を人心に印する此の如きものあり。

　日章旗は色彩單純なり然れども其の東方君子國の標識として允當切實なること近く今代に定められたるものと思はれず其の淵源遠く王朝の盛時に發し幕末より明治初年に涉り列國の通交は國旗の確定を促し政府亦沿襲の由る所人心の嚮ふ所に視て之を定む其の年ならずして遍く天下の民心を繫ぎ之をして翕然之を仰がしむるに至りたるもの誠に偶然に非ざるなり。

國際法より見たる國旗凌辱の一二先例

法學博士　高橋作衛

國旗は一國名譽の標章なり、之に對する侮辱は場合によりては戰因とせられたる事實少からず、敬友波松

博士は國旗に關して深奥なる研究を爲され貴社は同博士の意見を聞かるゝとのことなれば余は蛇足を加へす顯著なる一二先例を茲に引證することゝなせり。

千七百八十四年墺太利帝王シェルト河(Scheldt)の航路を開かんと欲し墺國旗を掲揚してオスタンド(Ostend)よりアントウェルプ(Antwerp)に向へり此時和蘭軍艦は該船に停止を命じたれども聞かざりしを以て之に發砲せり、是に於て墺帝は其國旗の凌辱を開戰の宣言と考へたるが故に("l'insulte fait à son pavillon comme une declaration de guerre")和蘭より公使を喚戻さんとし和蘭は之を謝罪せり、フォリモーア之を評して曰く此事件に於ては和蘭の正當なりしにも拘はらず謝罪せしを見れば以て古代に於ける國旗の如何に重んぜられたるかを説明するを得べしと。

又千八百四十九年墺太利は羅馬より公使引揚げを命じたるが其原因は墺國々旗及墺皇帝の徽章の羅馬に於て侮辱せられたりと云ふに在り、墺國は此の侮辱を以て國際法上の權利の侵害なりと云へり、又千七百九十九年墺人がアンコナ(Ancona)に於て露國々旗に對して侮辱を加へたる爲め兩國間に破裂を來し又千八百六十年支那人はペーホー(Pei-Ho)にて英國々旗を砲撃したる爲めに英國は支那政府に對して强硬なる交渉を爲せり(フォリモーア二卷三十八頁、マルテンス一卷七十八節)。

凡そ一國が其の名譽等を侵害せられたる場合に之に對して補償を要求するに方りては此の如き名譽毀傷の再び繰り回へされざる保障を得るを原則とす。此の如き將來の保障を得るには先づ自ら國旗の尊重すべきことを要す。自ら輕んずる者は他の侮辱を得るは當然の結果なり、日本國旗が他の侮辱を受くるを見ながら其用途の公私を區別して他の行動を當然と云ふが如き者は既往の侮辱に對して適當の賠償を得る能はざるのみならず將來に於ても十分の保障を得る能はざるべし、此の如くにして進まば結局一方は愈侮辱し一方は愈屈辱せられ、遂に兩者反目又戰爭を爲すの止むを得ざることに至るべし、遠識卓見なき平和論者は結局平和破壞論者なり、吾人は遠大なる極東保全を希望するが爲めに無識暴戾なる外國の侮辱を十分に膺懲するを適當と信ず。

(中付一の一)

法學博士 浮田和民先生新著

新道德論

四六判總クロース綴
定價金壹圓
送料内地小包八錢

時代は去れり。所謂五常の道を以て社會道德の唯一の系統とする時代は過ぎたり。新時代の要求は批評的なり、科學的なり。本書は時代の先覺たる浮田博士が新時代に於ける新道德を絶叫して理想的、個人的、平民的、自由主義的道德を唱道したるもの。人間的に將た社會的に眞の生活を生きんとする者の三讀翫味を强要す

忽三版

發兌元
東京市牛込區神樂坂上
振替口座東京壹九四番
株式會社 南北社
電話番町三八〇四番



現時の支那通

鷺城學人

一

○荀子の不苟篇に通士の語あり。後世我邦に用ゆる通人の語の出處となり、總て事物に精はしきを言ひ顯はすに使用せられ來れるが、同じく通にも深淺廣狹あり、或は大體に通ずといひ、一局部に通ずといひ、種類の一ならず。

○廣くして深きは通の上乘なれども、斯かるは望んで、得べからざる處、餅屋は餅屋、石屋は石屋、せめて部分的に暢曉せば、尚ほ通の名を冠して妨げなきも、大體にも一局部にも通ぜずして受賣するを口耳四寸の學といひ、纔に皮相を窺ひて知つた振りするを生半可といひ、共に片腹痛し。

○今の時支那通といふの多く、支那に問題の起れば必ず出シャバリて支那の形勢を揣摩し、對支政策を是非するを常とす。是等は果して自ら任ずる程に支那の事情に通ずるやの疑はしく、所謂る群盲象を評すると一般なるにあらざるか。

○世間の認めて此方面の識者と稱する中にも、往々見當違ひの言を爲すあり。政府といはず民間といはず、生半可なるは掃く程あるも、眞に支那を研究して相當

の智識、經綸を具ふるもの、絕えて無くして稀れに見るに過ぎず。

○今こゝに傳へんとする所謂る支那通の中には支那通と稱して差支なきあり、似而非通に過ぎざるあり、支那通といふよりも寧ろ支那方面の關係者といふの當れるあり。されど一括して此題目に收め、更に之を朝野の兩方面に區分し、而して朝は外務省派と陸軍派とに別ち、野は純實業派と浪人派とに大別するの順序も立ち且つ明瞭なるを覺ゆ。

○かく分類して論ずるに先んじ、舊時と今日と支那の事物を究むるに難易の別甚だしきを知らざるべからず。日清戰爭前まで支那內地は殆んど鎖國の有樣にて、日本の官吏といへども支那の官憲紳董と一堂に交驩するは稀有のことなれば、官吏以外の日本人にして彼等と膝を交へ肱を把て相談ずるが如きは絕無に屬し、官民共に猜疑の目を以て日本人を視、殊に交通の開けざりしより、甚だしく調査探究の便を缺きにき。

○是を以て當時支那に行きたるものは、辮髮胡服して身を支那人に扮し、乘るに舟車なく、宿るに家なく交從するものとては哥老會・九龍會・三合會・英雄會・紅燈會・在裡會・白蓮會・太刀會の豪傑の外に出でず。

○然るに日清戰爭後、兩國の關係一變したる結果、何程か便利となり、北清事變後に至て總督巡撫とも自由に交際し得るのみならず、新聞紙も各處に發行され、調査機關も具はり、交通機關も整ひて日に益々便利を加へ、特に支那に行かずとも、居ながらにして智識を攝取するの難からざるに至れり。

○舊き支那通は見聞上人知れぬ苦楚困難を經驗したるだけに水滸傳的奇談に富み、今日より當時を回想すれば夢の如く感じ、聽くものも亦噓の如く思はん。

○日清戰爭後、中將福島安正の南清に至るや、時の兩廣總督張之洞より晚餐の案內狀に接して意外に感ぜしが、在留邦人某より今日支那官憲と日本人と饗應を交換するは普通の例となれるを聽きて初めて然るを知り、變化の著しきに驚きたりといふ。舊き支那通の蹈蹬には新しき支那通の想像にも及ばざることあると同

時に新時代の支那に關して舊き支那通の意外に感ずる點少からざるべし。

○次に二者の相違の著しき點をいへば、舊支那通は概して支那語に長じ詩文を好くし、支那學者の多かりしが、今日の支那通は必ずしも學者を必要とせず、支那通にして無學者なるも多し。

○支那學者即ち支那通といふ一種の階級を打破して其範圍を廣くし、特に志士浪士をして力を支那に伸すの基を開きたるは故荒尾精とす。

二

○外務省派には初期時代に副島種臣ありて專ら支那外交の局に當り、啻に學者として頭目なりしのみなら支那の形勢に通じ。官憲の間にも重んぜられたり。パークスのいへりし如く、日本に於て外交らしき外交を行ひしは彼の外務卿たりし時よりし、兎に角當時に於ける唯一の支那通たりしを失はず。

○故伊藤公の支那に關する智識の深淺こそ知るを得ざれ、夫子自らは一隻眼を有すとし、三十一年清國の遊を試み、屢次意見を發表したり。さる四十二年なりしと記憶す、某處に於て支那に憲政を實施するの不可能なるを演說したるが、其不可能とする理由は交通の不便、税法改正の至難、而して地方自治の基礎なきとの三點にあり。

○當時民間の支那通の中には公の議論を以て淺薄極まるものとし、支那の事情に迂なるを笑ひしもあるが、其觀察の當否は別とし、東方問題に趣味を有し、常に研究を懈らざりしが如し。

○過去に於て敵も味方も外交の鬼才を以て許したるは獨り故陸奥宗光のみ。彼は必ずしも支那通といふにあらず、されど透明にして博大なる頭腦は支那を觀ることに於て支那通以上に出て、一定の方針を以て臨めり。日清戰爭は彼の積極的外交の結果に外ならず。當時伊藤の決論に躊躇するを看て專ら參謀次長川上操六と相計り、大鳥公使に訓電を發して著々開戰の機會を促進せしめ、終に避くべからざる勢ひを造れり。

○陸奥の沒後、交々出でゝ外政を擔當したる者の中、

嘗て支那に公使たりしは西德次郎・小村壽太郎・林薫・內田康哉の四人にして、前三子者は既に館を捐てしが、いづれも一廉の通を以て任じたるらし。

○西は薩人の故を以て松隈內閣の末期に入閣し、次の伊藤內閣に留まれり。當時露佛獨の三國は支那を脅かして利權を要求し、英國も亦威海衛を租借して之に據り、東洋永遠の平和を破らんとしたるも、政府は無爲傍觀して列國の自由行動に委し、曩に日本が三國の勸告に聽きて遼東を還附したるの意義を失ふに至れり。當時と今と支那の形勢一ならざるも、對清外交の不振は西の時代より始まれり。

○小村も林も對清外交に於て全然無能無策なるを暴露し、隨て支那の智識を疑はしめたり。蓋し西・小村・林を支那通といふは論語讀みの論語知らずと一般にして所謂る明盲目なるのみ。

○四人中內田のみは眞の支那通なるかに見えたり。支那問題に關しては陸奥の下に秘書官たりし頃より研究し、其後政務局長・總務長官たりし間に益々造詣する處ありとて官民共に望みを囑し、現に陸奥の如きは將來支那の問題に接觸して手腕を振ひ得るの外交家を後進中に求むれば、一の康哉あるのみとまで裏書したり。

○彼が最も多事なる日露戰爭前後に支那に使ひしたる幾多の先輩同僚を凌駕して外相に一躍したる、必ず相當の働を爲すべしとの期待に出て、本人も多分自信する處ありたるが如し。されど公使として何程の利器を試みたるや。外相として何樣の抱負を行ひたるや。

○公使として北京駐紮中、外交の上に活動したりといふよりも、寧ろ他の方面に振ひたりき。曰く酒を被て軍人と公使館に格鬪し、新聞記者と宴會の席上に鐵拳を交換して醉公使の名を日清兩國人の間に博したり。曰く通譯官鄭某の妻女を姦したりとて、前天津總領事小幡酉吉の爲めに毆打面辱せられ、內田の艶聞として一時北京中の大評判となれり。

○外務大臣に任ぜられて間もなく支那に革命の亂あり內田としては陸奥の豫言を實にすべき好箇の舞臺なるに、始めより形勢の判斷を誤りて一に北方に偏倚し其

他事毎に方策を誤りたる爲め、南方人士の反感を挑發し、袁世凱をして野心を逐ぐるに便ならしむるの結果に終はれり。

○斯かるは外交として拙の拙なるのみならず、今まで支那通と謳はれしの全く虚名にして、やはり明盲人に過ぎざるを證據立てたり。

○彼が衆議院に於て犬養木堂より窘迫窮追せられてブル／＼顫へ上り、護謨外相の估券を墜したるは其際なりき。爾來支那に事あるも全然沒交渉なるが如く、特に支那問題の喧しき今日、當然意見を徴せらるべき筈なるに、今日に至るまで新聞にも雜誌にも散見せざるは敗軍の將兵を語らざるにや。語らざるにあらざるも、世間より閑却されたるにや。

三

○霞ヶ關の支那通として夙に内田と並び稱せられ、或は内田の上に出づと稱せらるゝものに伊集院彦吉あり天津總領事時代より支那に勤務するの久しく、其人物の輪廓も何程か東洋向なるより、支那公使として適任なるかに認められしも、今日までの外交振りに徴するも、其智識の堂に入れるにあらずして、纔に玄關を窺へるに過ぎず。

○世間には彼の袁毒に罹れるをいひ、或は借款前渡しの周旋をなして手數料（コンミッション）を獲たりと傳へ、種々風說あり。風說を直に事實として信ずる能はざるも、彼の頭が初めより北方に傾き、少くも袁世凱に同情したるの明白なるあり。隨て袁に籠絡せられたりとて痛くもなき腹を搾らるゝも無理ならず。

○從來對支外交家の爲す處を看るに、南北を打して一丸としたる支那民衆を目的とせず、一に時の或る權力に重きを置き、而も時の權力に對する觀察の如きも概ね誤れるが故に、勢ひ失敗を免れず。

○第二西園寺内閣の時、内田は愛親覺羅氏の尙ほ長きに堪ふべきを信じ、君主政體論を以て臨みしも、兩三月を出でずして滿廷の傾覆を見たるにあらずや。

○日本の政府は袁にあらざれば支那を統一する能はずと思ひ、獨り日本のみならず、諸外國も袁を信ずるて

と深きが、是れ最も謬れる思想なり。支那に共和政治の適するか否かは別問題とし、既に共和政となり之に伴ふ機關の具はる以上、特に或る一人の力に俟つの必要を認めず斯かるは事實に於て袁を皇帝視するものといはざるべからず。

○伊集院の北方色彩の餘りに濃厚なる、一は夙に袁と深交あるよりし、一は袁其物を支那の固定權力とするの謬想に先づ。乃ち内田の愛親覺羅氏に於ける、伊集院の袁に於ける、對手こそ異なれ、國民中心の外交にあらざるは則ち一。

○公使館の一室に蟄蟠せんといひたる山座圓次郎も、北京に着任後間もなく南北爭亂に伴ひて種々面倒なる問題の起り、愈々出でゝ外交多事を加へたれば忙殺の狀察するに足る。斯かるは彼として働き甲斐のある譯なれども、一面よりいへば前任者に對する世の批難に察して同一轍に出づるを欲せざるべく、袁も亦山座を視ること伊集院の如くならず、一種の色眼鏡を以てするに相違なければ、外交上困難の位置にあり。況んや本國政府の方針彼が如く定まらざるに於てをや。

○殊に惣ひ世の彼に期待するの大なるだけそれだけ心苦しく感ぜざる能はず。力士も最負客の環視するに逢へば、自由放膽なるを得ずして固くなり、案外妙手を出す能はずといふが、山座も世間の人氣に投ぜんとするの名聞心と、萬一失敗すれば攻擊さるゝといふ恐怖心より、土俵の上に於ける最屓力士の傾なきにあらず。

○或者は彼の智識の最新にして對支政策上成竹あるを稱し、或者は僞豪傑なると同樣智識も亦附燒刃に過ぎざるをいひ、毀譽區々にして相場の定まらざるが、對支外交の結果如何に依て善かれ惡しかれ未知數の既知數となるべき順序ならん。

四

○加藤高明は居常傲然として外交界の第一人を以て任じ、曩に外相たりし時、對支政策の上に手際を示さんことを期したり。桂内閣瓦解後、支那に遊び、歸來頻に南北相爭はざるべきを豫言せしが、春月を出でずして南北兵を交ふるに至れり。

○斯くて先見の明あるかに見えし高明は甚だしく不明なるの知られ、隨て支那に關する智識の貧弱なるを暴露したり。加藤に比すれば林權助の方却て知る處多きが如く、公使としても態度の强硬なりしも、本國政府の制肘する處となりて意の如くする能はざりき。

○古き時代の外務省に中田敬義・井上陳政・鄭永寧あり當時外務省に於ける三支那通と稱せられ、對支外交の上に献替する處多し。

○中田は古き支那留學生にして明治三十一年頃まで政務局長たり。政務局長としては必ずしも出色にあらず、原敬の如きは口を極めて彼の爲すなきを罵りしが、故陸奥に愛せられ、二十四年秘書官となりてより官を罷むるまで、彼の傍を離れざりき。後年古河に入りしは陸奥との關係よりす。

○井上は元と楢原といひ故西鄕從道の贅婿たり。久しく通譯官として北京に在勤し、拳匪の亂、公使館に籠城中敵彈の爲めに倒る。今日存命せば支那問題について缺くべからざる一人ならん。

○明治二十三四年の交、外交官の賣國問題とて容易ならざる事件あり。そは書記官鄭永寧が日本の政弊を論じて支那に媚び、大に用ゐられんことを李鴻章に上書したりといふにあり。一說には福本日南の製造に出づとも傳へしが、兎に角其全文の日本新聞に掲載さるゝや、忽ちにして一世の視聽を惹きにき。

○當時鄭の家には斬奸狀舞込み刺客來り、何時危害の身に及ぶやも測り難き有樣なりき。幸ひに官憲の保護を以て事なきを得たれど、之が爲め革職せられ、憂悶の極、遂に病を發して死するに及ぶ。

○鄭永邦・鄭永昌は共に永寧の男にして亦た支那通の稱あり。前者は曩に北京通譯官より英國大使館書記官に轉じ、後者は今尙ほ北京にあり。蓋し鄭及び吳を姓とするものは元と長崎通事の家より出で、概ね支那人の日本に歸化したるものにあらざるか。

○外務の屬僚中第一流の支那通と稱せられ、政務局長として專ら現下の對支問題に鞅掌したるは故阿部守太郞とす。さる四十二年勅任參事官となるまで北京に勤

務し、通じて五年の久しきに及びたれば何程か知る處あらんも、果して世間の傳ふるが如き大支那通なりしや疑はしく、彼について言ふ處は所謂る死者に花を持たすの類にあらざるか。

○されど眞に支那を研究するもの乃公以外になしと誇稱し、首相權兵衞も外相牧野も總て彼の意見に聽き、一局長にして外務大臣の事を行ひたるかに見えにき。

○死者に彼是れ言ひ及ぶを好まざれど、有體にいへば彼は人望ある外交官にあらず、十人が十人好感を以て看ざりき。死後口を極めて褒揚する同僚中にも、生前彼を憚ばざりしもの恐らく二三に止まらざらん。

○斯かるは天性の無愛嬌にも因れど、我れは霞ヶ關第一の外交家なるぞとの自負心あるよりし、隨て任じて事に當るといふ長處も亦此にありたるらし。明治二十九年大學を卒業し、直に高等文官試驗に及第して外交官となり、秘書官・書記官・參事官・局長と順次位置を進めたることゝて、世路の辛艱を經驗せざれば自ら對人の術を解せず、隨て誤解を受けしなり。

○彼の横死は支那問題に關してなるか、或は單に別箇の私怨に出づるか未だ知るを得ざるも、其位置といひ時節柄といひ、恐らく前者にありと看るべし。

○從來政治上若くは其他の意味より刺客の奇禍に遭ひたるもの、岩倉なり大久保なり森なり大隈なり、孰れも政府の權官なるが、一屬僚を以て此事あるもの阿部を嚆矢とす。人もあるべきに一下僚を血祭りに供するは餘りに無意味ならずや。

○されど阿部の死は一面に於て名譽とすべきと共に、彼が支那外交の關鍵を握れるかに見られ、又だ唯一の叔孫通たりしとせば、現内閣は鼎の輕重を定められし譯にて、外政の不振豈に偶然ならんや。

○さはれ阿部の一死は適々現内閣を刺激し、國論の存する所を知らしめ、斯くして外交手段の上に一歩を進むるを得ば、所謂る身を殺して仁を爲したるもの、此點に於て必ずしも無意味なりとせず。

五

○陸軍の支那通は多く參謀本部に限らるゝ如く、彼等

の中には特別任務を以て多年支那にありしあり、現に派遣中なるあり。或は嘗て顧問若くは敎官として支那政府に雇はれ、現に雇はるゝもあり。

○同じ軍人にても北方にあるものは北方に味方し、南方にあるものは南方贔屓なる、猶ほ支那浪人に二樣の色彩あるが如し。

○一昨秋、南北妥協の目的を以て南下したる唐紹怡は、汪兆銘に對して日本の軍人の北を援くるを告げたるに汪は南にも日本の軍人の味方するを語り、互に奇異の感をなしたりといふが、南北相爭ふの終に漁夫の利を日本に占められんとて、妥協の議を早むるの一因となりたるらし。

○陸軍に於ける支那通の頭目は中將福島安正なりといふものあり。北淸事變の時、日本軍司令官となりたる、昨年關東都督となりたる、共に支那通なるの故ならん。

○中尉時代より支那に行き、明治十六年より十八年まて北京公使館附武官となり、其後も一再ならず視察し、古き支那に關して何程か知るあらんも、全局に通ずといふは如何にや。嘗て參謀本部會議に於て、支那の形勢を談ずるや、少將松石安治の爲めに、足下の支那觀は陳腐なりと喝破せられ、赧然たりしと傳へらる。

○日本の軍人にして北京にある最も久しきに及ぶものを青木宣純とす。元と參謀本部に於て福島の部下たりしが、袁世凱が山東省に陸軍を新造する時、其顧問に聘せらる。新造陸軍は元來康有爲の發意に出て、戊戌の政變に用ゆる計畫なりしも、袁の反覆の爲め事遂に志と違ひしなり。

○青木は顧問を罷むるの後、北京公使館附武官に轉じ凡そ過去十餘年間に於ける支那の問題は大小之を知らざるなく、從來の關係上勢ひ袁派の色彩を帶ぶるが如し。最近を以て中將に進み旅順要塞司令官に轉ず。

○此外袁關係の軍人に少將立花小一郎・大佐阪西利八あり。立花の軍事顧問として保定府にありしは大佐時代にして、當時支那通の名ありしが、今日は殆んど世間より忘れられたり。阪西は青木の公使館に轉じたる後を承けて北洋陸軍の顧問となり、今も尙ほ北京にあ

り。

○中將柴五郎氏は支那通の一人に數へられ、一昨秋の革命にも、今次の南北爭亂にも參謀本部より派遣されしが、單に團匪騷動の時、公使館附武官として籠城したりといふに止まり、格別智識あるにあらず。唯だ人物溫和なるが爲め支那人の感情を害するが如きなし。愚兄四朗に比すれば頭も好く學問もあり、賢弟の名を冠するに堪ふ。

○南方に名を知らるゝものに、少將鑄方政藏・大佐井戶川辰三・中佐寺西秀武あり。鑄方は張之洞の顧問として久しく武昌にありしが、軍事一方にして政治上勢力なかりき。井戶川は太尉時代より四川にありて南方に知己多く、一昨秋の革命には裏面に活動したるらし。頭も腕も相當に具はり、昨年來陸相秘書官たりしが、過日の陸軍大更迭に際し、聯隊區司令官の散官に遷さる。

○寺西も第一次革命時代の活動者なり。當時或る口實を設けて黎元洪より二十萬兩を收受し、纔に二三千兩の端金を分配したる外、悉く私したりとて兩國人間の問題となれり。參謀本部にては果してさる事實ありとせば、軍人の體面上不問に附し難しとて、內密に調査する處ありしといふが、終に無耶無耶の中に葬り去れり。一說に據れば彼は餘り世評の高まりしより、竊に二十五萬兩を黎に返還したりとも傳ふ。

○其名著聞せざるも大佐守田守遠・土井市之進・與倉某も陸軍の支那通に數へらる。守田は日露戰爭の際、芝罘に在て特別任務に從ひしが、後ち北滿洲に轉ず。可なり頭腦も働き意見も相當に立つらし。土井は三浦將軍の甥にして久しく支那に駐在し、嘗て守備隊長たりしことあり。與倉は西南の役、熊本籠城中の戰死者として有名なる與倉聯隊長の養嗣子にして、嘗て營口の軍政官を勤め、後ち廣東に行き貴州に轉ず。

○由來軍人の頭腦單純なれば、支那通といふも多くは一方面の智識に止まるのみ。與倉が營口軍政官たりし時、鈔關の金三百萬圓を以て不要の土木工事を起したるは猶ほ前年小泉少將が鎭海灣の市街經營に失敗した

りと同じく、軍人の常として大局を見ずして一局部に偏するが故に動もすれば事を誤る。

○軍事的にも政治的にも支那を研究し、東亞の全局を觀て方策を立てたる故川上操六の如きは蓋し空前にして絶後といふべきか。（前號所載參謀本部論參照）

六

○實業方面にも支那通少からず。特に三井・三菱・大倉其他支那方面に關係ある會社商店に相當なるの散在するも、多くは一局部のことに通ずるのみ。

○今日こそ實業家と支那との關係密接となりたれ、以前は發展の機會多々なりしに係らず、支那の事情に通ぜざりしと、四角四面の理窟にのみ拘泥したる爲め、見す〱絶好の機會を逸したるの例少からず。

○嘗て張之洞より二百萬圓の借款を安田善次郎に申込むや、安田は張一箇人の判を以て貸すを心細く感じ、總督といふ名義を借主として、淸國政府を第二の保證に立たしむべき條件を提出したるに、張は呵々大笑して交渉を中止したるが、之を耳にしたる獨逸の一商會は直に無擔保にて借款に應じたり。

○後に至て安田は當時善き相談相手なかりしと、總て支那のことを日本流に考へし爲め、無碍に拒絶したるの失策なりしを悔ひたりといふ。獨り實業家のみならず、政府も軍事、教育の方面に專門家を送りたれど、經濟上の勢力扶殖については風馬牛相關せざりしものゝ如し。

○過去は兎に角、近年に及び我資本家も世界的風潮に棹して支那に雄飛せんとするの傾向を生じ、已に一箇のシンジゲートを起すに至れり。聊か後れ馳せの感なきにあらざるも、確に一進歩と認めざる能はず。

○日本の實業家にして最も早く支那に著目し、初めて商業を營みたる先覺者を故岸田吟香翁とす。翁は維新前已に上海に航し、其後支那に往來すること三十餘年、上海四馬路に樂善堂薬房を開きしは明治十二年頃なり。

○故荒尾精が志を大陸に伸すを得たるは翁の後援に負ふ處少からず。故川上大將の紹介により翁に上海に面

して志を告げ、樂善堂支店櫃的の名を以て居を漢口になし、豪傑を四方より集めて四百餘州の實勢を調査するに努めたり。

○適々英國の抗議に依て本國に召還さるゝの餘儀なきに及びたるも、二十三年再び渡清して日清貿易研究所を上海に起し、此時を以て岸田と關係を斷てり。

○樂善堂は表面藥材、書籍、雜貨等の販賣を看板としたるも翁の目的は錙銖の利にあらずして支那經略にありしが如し。

○今の實業家中夙に支那方面に關係し、又た支那通と認められ、財界に支那問題起れば必ず引張り出さるゝを山本條太郎・白岩龍平とし、東亞興業の成立は二者の力大に與る。此外に飯塚松太郎・小田切萬壽之助・中村錠太郎あり。

○山本の鬼才膽略は單に一商估を以て見るべきにあらず。曩に三井物產の理事を以て上海にあるや、物產をして英のジャーデン・マデソン、米のバタフキールドに拮抗するに堪ふべき位置に達せしめたるのみならず、

南北各地を股に懸けて支那人及び歐米人と巧みに交遊折衝しつゝ商業以外のことにも手を染めたり。

○日本政府は彼の隱れたる活動に依て未だ世間の知らざる幾多の利權を支那より獲取せるのみならず、彼に依て失敗を免れたる政治上の問題多々あり。一時日本の支那總督と稱せられ、實業家にして外交家を兼ねたり。

○嘗て支那陶器を一手に買占めたるが如き、何程か突飛の嫌ひなからざるも、突飛だけに人間に面白味あり。一言にして評すれば彼は商業の才と政治的の才とを兼ね、何程か豪傑的色彩を帶ぶるが如し。

○荒尾の支那貿易研究所を出でたるもの、其一半は軍事に走り。他の一半は支那浪人となりしも、獨り白岩と飯塚のみは財的方面に發展の地を求め、殊に前者を以て出世頭とす。

○最初白岩の創立したる大東汽利洋行は日清戰爭後下關條約の結果に依て湖南汽船會社となり、後ち郵船會社及び商船會社の長江航路と合同するに及びて今の日

淸濱船會社となり、現に彼は其專務取締役たり。

○或者は彼を以て山本の上に出づと稱するも、氣宇に於て遠く及ばず、又た識見あるにあらず、唯だ悧巧に立廻はる商人的才物のみ。今日は近藤廉平の乾兒となれり。

○飯塚は往に李鴻章の直隸總督たりし時、天津の道路改修工事を受負ひ、後ち滿洲に行きて飯塚工程局を起し、積む處の私財五十萬と稱せられ、滿洲に於ける成功家の一人たり。

○小田切は中田敬義・金子彌平等と同時代の支那留學生にして久しく上海總領事たりしが、數年前橫濱正金に入り現に上海支店長たり。出身が出身とて官僚臭味を帶びさまで手腕の稱すべきなし。彼が中央支那の商業に明かなる如く、中村は北支那の商業事情に精通す。

七

○支那關係の浪人に三種類あり、假に純浪人派・商業派・學者派と稱すべく、今次の南京虐殺事件以來、憂國の志士を標榜しつゝ躍起運動を試むるは多く第一種に屬す。

○浪人派に孫興派・袁派及び宗社黨派あると共に、支那保全論者と滿蒙論者とあり。今日張勳事件に激して出兵占領を呼號するものは概ね後者の系統と見て可。

○滿蒙派は多く陸軍派と聲息を通ず。蓋し陸軍派は概ね滿蒙論者にして、現に朝鮮總督寺內正毅之が頭目たる形あり。此外に滿蒙派とも保全派とも附かず、支那の前途を不可測として成行に一任せんとする一派あり。

○支那の識者の言ふ所を聞くに、今日世界の大勢最早一國と一國との小關係を云々すべきにあらずして、白人對黃人の問題となれり。乃ち此大處に著眼し、支那と日本と人種的に一體となりて白人に當らざるべからざる時代に入れり、滿州蒙古の如き日本の取るに任さんのみと。滿蒙論者に比すれば支那人の頭腦夐に進步せるを認むべきにあらずや。

○故荒尾は支那浪人の先輩といふよりも寧ろ元祖にして、隨分法螺も吹きたれど、彼が如く忠實に支那全體を究めたるもの少し。中途にして川上の不興を受け、

矢野文雄の前に支那公使たらんとして不成功に終はり日清貿易研究所も尾大振はず末路粛條たりしも、國家に貢献する處多く、就中日清戰爭の如き彼に負ふ處最も大。

○今日支那通浪人の兄分ともいふべき位置に居り、支那人の間にも勢力を有し、獨り內政問題のみならず支那問題に關しても、一言一行世の注意を惹くものを、犬養木堂とす。

○彼の支那に行きしは近年のことなるも、關係の歴史は相當に古く、南にも北にも知己あり、されど孰れかといへば最も南方に多く、隨て關係も深きが如し。

○第一次革命の時、時の外相內田に面して政府の意見を徵し、且つ忠言を試みたれど、對支政策上二者の見一致せず、卿は北せよ我れは南方の務めに當らんといひて南清に航せり。

○政府が長閥元老の意を迎へて隣邦の政體にまで干涉したるは彼の最も反對せし處、南方排日熱の案外熾烈なるを目擊するに及びて益々日本の不利なるを思ひ、歸來衆議院に獅子吼を試みしなり。

○前後二回の渡清は革命黨を援助すといふよりも、國民を代表して日本の眞意を傳ふるにありしと見るの當れるに幾く、斯くして彼等の反情を緩和したる功大なるあり。

○彼の支那を知る廣くして深く、而も當面のみを見ずして遠く將來に及ぶ。當時支那通の多くは此革命に依て支那の定まるを說きしに反し、彼は今回のこと序幕に過ぎず、幾多の波瀾曲折は今日以往に生ずべきを豫言したるが、彼の所論鑿々肯綮に中るを見る。朝野を通じて彼とオーソリテーを爭ふもの恐らく一人もなからん。

八

○木堂に亞て支那通の先輩たる根津一は、荒尾と同じく陸軍出身にしてメッケルの敎育を受け、當時參謀本部に於て俊材の一人に數へられたり。

○荒尾と略々時を同うして支那に遊び漢口梁山泊の一人たりしが、二十三年招かれて日清研究所の幹部とな

り、荒尾の不在中所長代理を勤め、形影相伴ふ殆んど骨肉の如くなりき。當時荒尾の名獨り江湖に嘖々たりしも、裏面に於て彼に負ふ處多し。

○日清の役、彼れ參謀として第二軍に從ひ大山の麾下にあり。旅順攻撃に際し竊に鳩灣よりジャンクを艤して單身渺茫たる渤海に乘出で、陸海軍の連絡を通ぜり。日露戰爭の時、勸降使としてステッセルの陣營に赴きし山岡少佐と同じ派手なる舞臺に立ちしを以て、根津少佐の名大に揚がる。

○戰爭後、軍職を辭して京都若王寺に閑居し、專ら禪を學びしが、後ち東亞同文會に入るに及び、軍人としてよりも支那關係の人として世に聞え、荒尾の後繼者の如く目せらるゝに至れり。

○今や同文會は殆んど根津のものゝ如くなれるも、明治三十年近衞公・大隈等の研究所として之を設立したる時、參加したるは故長岡護美・谷干城・岸田吟香・犬養毅・陸實・佐藤正等にして彼は與らず。最初陸を幹事長とし、次に佐藤を擧げ、佐藤の後に彼を推すに及び初めて關係の附きし譯にて、日清研究所の先輩なれども、同文會に於ては後進なり。

○荒尾・根津よりも後進なれども、均しく軍人出身にして同文會に關係あるを大原武慶とす。陸軍時代は俊秀の名ありしが、屯田兵副官として北海道にありし時、或事を以て失敗し割腹して罪を償はんとしたるも、死に至らずして軍職を退けり。

○兩湖總督張之洞の武昌に武備學堂を起すや、彼は福島安正・宇都宮太郎の推薦を以て敎官に聘せられ、後ち鑄方少將と代はるに及びて浪人の群に入れり。一昨年の革命には復び母國の地を踏まずと覺悟し、夫人を携へて渡清せしが、事の未だ終局せざるに先んじて還れり。好んで小策を弄し人格の疑はしきあり。

○創立當時より同文會に關係し、支那方面の閲歷に於ても可なり古きものを熊本の宗方小太郎とす。始め北清にありしが、明治十九年荒尾の漢口より檄を四方に飛すや、直に來り投じたる樂善堂組の一人にして、調査支部を各地に置くに及び、專ら北京支部を幹せり。

○研究所時代は幹部の一人として荒尾を輔翼し、甲午の役には通譯官として特別任務を管理す。彼が布衣の身を以て特に陛下に拜するの光榮を得たる、固より戰爭の功に因るとはいへ、斯かるは前後を通じて彼れ一人とす。

○彼れ漢文を能くし又た漢詩に長ず。嘗て親朋、浦敬一の軍事探偵として伊黎に之くを送るの長詩一篇あり。君は白馬に鞭ちて天涯に走り、我は扁舟に掉して渤海に入るといひ、想ふ君西、邊關を出づる時、天山の草木蕭く秋聲、萬里平沙天に連る處、無限の客路辛酸多しといひ、行を送て遠く漢水の湄に至れば、長天雲なく月光冷なりといひ、句々皆な朗誦すべく送らるゝもの一たび朔北に去て以來杳として消息を絶ちしに想到すれば愴然として情に勝へざるあり。

九

○官吏以外の日本人にして最も重く支那人に用ゐられしものを川島浪速とし、他の一人を黑澤禮吉とす。川島は初めより何の系統にも入らず、團匪事變の時、陸軍通譯として福島と共に北清に至り、日本の陸軍と支那の官憲の間に介して連絡を取るに努め、斯くして列國聯合軍の横暴を防ぐを得たり。

○其關係より肅親王に用ゐられて警務學堂の監督となり、一昨年まで肅邸の顧問たりしが、滿廷の滅亡と共に日本に歸る。北京の情勢に通ずること深く、宗社黨に屬する浪人の頭目たる位置にあり。

○黑澤は初め米國に客たりしが、ロバート・ハートの支那に行くに伴はれて岳州税關長となり、二萬五千圓の月給取りとなる。此點に於て第一位なるのみならず、ハイカラなることも日本人中第一とす。兄弟三人とも税關長たるは奇といふべし。

○最近中西直樹・田鍋安五郎等の年少子の間に交て野次り廻るを見るが、中西は我邦最古の支那浪人にて、或は緬甸戰爭を觀、雲南の奥を極め、或は乞丐に扮して上海より北京に行き、馬賊に襲はれて吉林の山中に傷きたる等、小説よりも而白き冒險談に饒む。無類の正直者にて世事に迂なれば、動もすればお先棒に使はる。

○田邊は元と海軍大軍醫たりしが、上官と衝突して、諭られ、明治二十二年支那に行きて樂善堂に寄寓し、後ち研究所の囑託醫となる。日清戰爭の時、海軍に呼返さんとしたるも支那の奥に隠れて應ぜず。日露戰爭には高等通譯官とし從軍し、戰後滿洲に商業を營みしが失敗して日本に歸れり。故佐々の系統に屬し民黨浪人にあらず。

○今一人樂善堂に身を寄せたる豪傑を中野二郎とす。其後浦鹽に渡りて學校屋となり、浦鹽を放逐さるゝや北海道に飛んで材木屋となり、日清戰爭には舊同志多く通譯官と爲りしも、専ら金儲けの事に從ひ、北清事變には北海道材木屋の依頼を受けて天津に開店し一時成功したるが、後ち滿洲に轉じ清人と共同して棧漕公司を起す。間島問題については蓋し第一の通ならん。

○彼は岩崎久彌に知られ、前年天寶山金鑛を三菱に周旋して以來、支那方面に於ける三菱の顧問の如くし、今日は専ら山西省を根據とす。山師だけに相當才智も膽氣もありて怪物の名あるが商人派なるより純浪人の間に憚ばれず。

○隠れたる支那通には中島眞雄・吉田清揚・野間五造等あり。中島は初め福建にありしが、後ち北京に行きて先づ順天時報を發行し、次で天津に北支那日々營口に營口新報、奉天に盛京日報を起し、大連を除くの外、支那に於ける日本の總ての新聞を支配す。

○宗方が海軍省の囑託を受くるが如く、中島は陸軍と關係あり。人物溫厚にして卓見あり小根津と稱せらる。

○吉田は其古き點に於て中西と相對し性行も相似るあり嘗て郵船會社の事務長、天津の學校長たりしが、慶親王に知られて久しく其幕僚たりき。現に旅順にあり。

○明治二十四年、哥老會・三合會の長江を騷がすや、野間は一面に參謀本部の囑託を兼ねつゝ筆を載せて南清に航したるを始めとし、四十年歸朝するまで支那に往復すること四回、滯清年限を通算すれば前後約八年の久しきに及ぶ。

○其間清人と共同して或は廣東・芝罘に、或は營口・大連に諸種の事業を經營して榮枯盛衰を經驗し、隨て支

那の產業事情に通曉す。彼も亦浪人の商氣あるもの。

○嘗て代議士たりし時、屢次支那問題に關して議會に演說し、後ち內政外交百種の題案を集めたる『縱橫公議』二篇を公けにしたるが、其大部分は東方問題に就ての意見なり。

○木堂之に序して曰く、淸國に關するものに至りて、予盡く其說に同ずる能はずと雖も、亦一種の論議として敬聽せざるを得ず。況や其辭令の巧妙、其解說の周到、人をして驚聽せしむる者あるに於てをや。

一〇

○學者にして支那に關係あるものを擧ぐれば、北方に文學博士服部宇之吉・法學博士岡田朝太郎・巖谷孫藏・有賀長雄あり。南に法學博士寺尾亨・副島義一・工學博士大塚要あり。

○服部の聘せられて北京學堂にありしは內田の公使時代なり。學者肌の好人物にして史學の造詣深く、恐らく東洋歷史に於て第一位ならん。

○夫人繁子は故文學博士島田重禮の女にして、男子も及ばざる女豪なるが、嘗て北京に婦人會を組織するや之が幹事となり、內田夫人と共に在留日本婦人の牛耳を執る。

○一日兩夫人は男子と女子と孰れが語學の才ありやといふ問題につき、一は男子なりといひ、一は女子なりといひ、殆んど終日議論を鬪はしたりとて、今も尙ほ邦人間の一談柄となれり。

○岡田の法典編纂委員として淸國政府に聘せられしは去る四十一年なり。大學にありし時、硯友社に加はりて小說を著はし、或は陶器の繪を書きて學資の幾分を得たりといふが、虛心亭主人の名は當時の文壇に知られ、新著百種中の『妾薄命』最も著はる。

○蓋し彼は圓滿にして常識の發達せる才人なり。小軀を提げて溫顏人に接する處、其如才なく調子好き談話振り、刑法論の著書講義の論證明確にして面白味ある、才と智の橫溢するを見るべし。

○有賀は現に袁大總統の法律顧問にして專ら憲法のことに與る。彼が袁の望むが如き專制的憲法を起草した

りとて哀毒に罹れるを傳ふるが、國人皆な哀を惜むの今日、さる疑ひを受くるは餘儀なし。

○彼は學問に忠實なる士なり。用務なき限りは讀書し、寢に就くこと三更を過ぐるを常とし、時として曉に及ぶことあり。國際法を得意とするも史學に造詣し、社會學に通じ、學者として第一流なるも、閨閤の修まらざると、錢を愛するの病あるより人格を疑はる。嘗て坪内逍遙の公けにしたる小說『細君』は、彼の家庭を材料にせしなりと傳ふ。

○學者浪人となりたる寺尾は國際法の先輩なれども、中村進午・立作太郎・高橋作衛等に比すれば舊式に屬し餘り珍重されず。されど支那に關しては實際的に知る處あり恐らく學者中の支那通と稱して可。

○由來學者は世態人情に迂なるの常なるも、彼は實世間學に通じ、一たび口を開けば諧謔自在、最も揶揄に長ずるも人心の暗礁に觸るゝが如きなし。何程か豪傑振る癖あるも、確に苦勞人たるを失はず。

○副島は寺尾の圓轉滑脫なきも、頭腦明晰にして骨力あり。學閥を出でゝ學閥を攻擊し、憲法の解釋も總て民黨主義の立場よりす。今春の政變、屢次憲政擁護會に出でゝバン閥打破を叫び、議論の過激(ラヂカル)なる黨人の上に出づ。

○此二人者は曩に南京政府の法律顧問たりし關係上孫黃一派に同情し、對支問題についても大體に於て木堂と意見を同うす。

○大塚は久しく張之洞の鐵道顧問にして支那に於ける交通機關の進步は彼に負ふ處多く、現下第一の鐵道通たり。之を外にして早稻田大學に靑柳篤恆あり、支那通といふよりも支那學者といふを當れりとす。

○議會には政友會に小川平吉あり、國民黨に柏原文太郎あり。小川は自稱する程に通ならず。柏原は年齡に於ても支那關係に於ても遙に後輩なれど、小川に比すれば何程か勝る。二十九年明治評論を發行せし頃より近衞公の知遇を受け、同文會設立後幹事に擧げられ、曩に木堂の支那亡命客を呼ぶや共に之が世話をなし、康有爲・梁啓超・孫文等と交あり。熊希齡が木堂を訪ふ

るの言をなしたりとて新聞紙上に傳へらるゝや、梁啓超は彼を介して他人の揑造に出づるを辯疏し來れり。

○三十三年廣東以南に行き、それより支那中部にあること兩三年、日露戰役の時は北京にあり。一昨年木翁の副官兼通辯として南方に行き、昨年の選擧には首尾好く當選したれど、議員として未だ存在を認められず。又た議會の支那通なるを知るもの少く、我々浪人はと無遠慮に咆吼するだけ寧ろ伊東知也を支那通と買冠るもの多からめ。

○通といひ不通といふの程度の問題にして、ロバートハートのいへりし如く、支那は本來不可解の國なり。君主專制と共和政治といづれの適するや、分割、保全いづれを是とすべきや容易に斷じ難し。

○外交の局に當るもの知らざるを知らずとして事を行へば却て過少く、過ありとて恕すべき點あるも、知らざるを知れりとするが故に往々大事を誤る。古人も生兵法は大傷の本なるを說けり、思はざるべけんや。

鷲城學人曰く、本誌六月號に浪人組論一篇を草して他の支那浪人に及び、收めて拙著「活人劍・殺人劍」にあり。讀者の參照を望む。

空論

澁川玄耳

實行力の伴はぬ議論は、其實行し得べきと實行し得可らざるとを問はず、一概に空論と目せられて輕蔑を受ける、併し空論は國の寶だ。實行の地位に立たぬ人は勝手な議論が吐ける、大變えら相に見える。議論は立て易いが實行は困難だ、どんな口巧な人でも實行の地位に立つと口を噤んで了つて意氣地がなくなる。口

を禁むのは大な苦痛だ、勝手な議論を吐くことが出來れば、實行の地位に立たぬのが寧ろ愉快だ。

▲空論は安全

空論の中或は實行し得べきものもあれば永久に實行不可能なのもある。氣早い實行家は考へるや直ぐやりかける、そして忽ち失敗といふことがあるけれども、空論家のには其の失敗が無い。空論が實行家の手に移つて其のプランとなるまでには研究の餘地がある。プラトーの空論などまだ〳〵容易に實行の危險に到らない。

好い議論を吐いて且つ好い實行をしたものは昔から滅多に無い。孔子も孟子も韓非子も荀子も治國平天下はお茶の粉の様に說いたもの丶サテ當人は其一端をも實行することの出來なかつた皆空論家だつた。西洋哲學史の目錄を披いて見てもやつぱり實行家は居ない。最も大なる理想家は其時代と最も懸け離れて居る空論家である。

空論家といふ名は、學者の甘じて受けて好いものである。今の日本の如きは、官權に逆らはず、愚衆に忤らぬ、所謂折合の好い說を立つるを以て學者の能事と心得て、空論家といふ名を愧づる者が幅を利かせて居る。日本の學者に大理想も大議論も出ないのは慨然の至りで又當然の事である。

實際家の多い日本では何の仕事でも其場凌ぎが多いから、五年十年ならずして改正を要する、學校でも、兵制でも、國防でも、道路、築港、鐵道の如き皆さうだ、實際家といふものは過去の事を標準とし現在に拘泥するのだから、其施設が現在以後には適しない、將來の事宜を制するのは、實際家ではなくて、むしろ空論家の受持だ。日本は各方面に於て多くの空論家の現出を要求する。

▲浪人の本領

浪人の本義は何か知らぬが、自分の考へてる所では、形式的に言へば、浪人とは職を有たぬ士人だ。其の實

質はと言ふと、相當の力量を備へ、自ら守る所、自ら信ずる所があつて、利祿權勢の爲に寸毫も動かされないので無ければならぬと思つて居る。

浪人に尊ぶ所は其系圖でも履歴でも黨援でも夥伴でも無い、自信を基礎とする特立獨行である。自信といふものは各自に特有なものである、同じ型の者はザラに有るべきで無い、滅多に人と合ふ筈のもので無い。自信を主とする者は苟合が出來ぬ、面從が出來ぬ、團結や徒黨も不向きであらねばならぬ。即ち孤立的なることは浪人の當然の運命にして且つ名譽なる立場である。

▲浪人と輿論

近頃世間に浪人といふ類の者がメッキリ殖えて來た其中には士人たるの品性學問識見力量を缺いた者もある、又た一黨派の陣笠であり、某財閥の走狗たる者もある。或は新聞記者、警視廳秘密御用掛、何々省内々の囑託などいふ手合もある、名義の何たると顯なる隱なることを問はず苟も定識定俸を有する者は其の事ふる所に忠ならねばならぬ、浪人と謂ふ資格が無い、浪人と言ふならば其は假冒詐稱である。

併し眞の浪人たる資格を具備した立派な人も澤山ある、そして近來は眞贋打混して浪人組などゝ目せられて居る。其の又或部分の人々は思ひ〱の團結を作つて、衆合的の勢力を賴んで、國事に奔走し、問題が起る毎に其代表者と稱する人々が、恰も輿論の取次者であるが如き態度を以て、當局者に迫つて指圖がましいことをやる癖が出來た。

浪人組の名を以て輿論の代表らしい献言をするのは潜越若くは假冒と謂ふよりも、浪人の名を辱かしむるものと言はねばならぬ。浪人の見識のエライところのは時俗衆愚と選を異にする所に在るのではないか。輿論を楯にするのは月並政治家の常套手段だ、目瞎千人の中に目明一人を以て自任すべき筈の浪人が、輿論の神輿を擔ぎ込んで當局者を嚇すが如きは最も潔しとせざる事ではあるまいか。輿論が斯うだ多數が斯うだと

いふのは町人根性の算盤思想だ、多數を頼んで勝たうとするのは、當世流行の薄利多賣主義だ、浪人の最も唾棄せねばならぬ俗惡趣味だ。

▲浪人と一揆

浪人は吹聽がましい名聞がましいことを避けたいものでは無いか、決議を發表したり、會談を漏泄したりするのは、世間の所謂運動屋の賣名的陋手段ではないか。古武士の眞骨頭は捨石となるに在るのでは無いか。殊に浪人は利名を超越する所に意氣が存するのではあるまいか。

人の褌で相撲を取るのは浪人の最も嫌ふ可き處である。人の褌を擔ぐのも浪人の極めて陋とす可き處である。輿論の威を藉り衆合力を頼んで他を制しようとするのは孤立的自主的なるべき浪人の取るべき方法では無くて、百姓一揆的の手段ではあるまいか。況んや或者の指嗾を受け、或人に對する義理合から奔走するが如きに至つては上役下役又は親分子分の情理に過ぎずして、士人たる浪人の爲すべき所では無い。意氣を尙ぶの外に理義に明かでなければ浪人の價値は無い。

特立獨行。孤忠狷介、時俗に超越することを浪人たる者の心掛として貰ひたい、僕は浪人諸君が今一層浪人主義を發揮して、あまり實行に齷齪せず達觀的空論家たらんことを望むものである。

▲刺客の用意

少年刺客の手際は實に見事なものであつた、用意の周到なる點は何人も感嘆を禁じられない。阿部局長は僕も亦頗る嫌ひな男であつた。併し彼を刺し殺すといふ一事に至つては贊成が出來ない。頭を壓へつけて使つて行けば役にも立つたらうと思ふ。自分の意見と違ふといふ一點で直に他を屠るのは早計だ、之が爲め双方數人を失ふのは國家の大損失だ、斯ういふ風が增長して來ると時務の最終の審判は刺客者一流に於て最高權を占めることになる、それは餘り獨斷に過ぎるではないか、武士は相身互ひといふことが有る、助け合ひ

想ひやりが無ければならぬ。地を換へて之を視る底の餘裕は如何なる場合にも存して居なければならない。少年刺客の志は憐んでも其行ひは譽むべき事で無い。阿部を刺殺する用意は周到であつたが、覺醒せしむるには尙ほ十分には手段が盡されて居ないのではあるまいか。此の點はまだ批評するに事實が不明である。僕の尊敬する浪人の一先輩は『阿部の樣な奴、糞桶でも浴びせるか、向ふ脛でも叩き折つてやれば好かつたんぢや、殺すのはチト御馳走過ぎたよ』と言はれた。

藥が少し强過ぎたとは、齡取つたものゝ誰でも考へて居る事だ、然るに昨今の人氣では刺客に對して非難をやれば直に軟派だ、袁探だ、國賊だといふ樣な惡名を付けられるものだから、誰も批評を憚る、人氣が大事の新聞などでは一齊に刺客に向つて讃辭を呈して靑年の血を沸かさせるのである。刺客の害よりも新聞の此の不謹愼が更に害が多い。

▲刺客の修養

刺客傳は漢學教育を受けた者の齊しく愛讀したものだ。元老や現內閣大臣達も皆さうに違ひない。明治十年以前の生れの人ならば大抵、荊軻聶政を崇拜した時代を經過してる筈だ。僕も其一人だ、而かも刺客學校の計畫を立て、鄕里の先輩に圖つたことがあつた、勿論秘密の學校で、生徒は常に五人を限り、其機根に應じ三年乃至五年を以て卒業させる、此の學校を支持して居れば天下は思ふまゝに動かせるとさへ信じて居た勿論靑年時代の夢であつたが、其科目の編制など今でも首肯かれる眞面目なものがある。

荊軻聶政と其後の所謂『暗殺』とは大に趣が違ふ、自己の獨斷を以て意見の違ふ者を刺し殺すといふのは荊軻聶政の意でもなく又赤穗義士などの心掛とも違ふ、此處まで書いた處に客が見えたので、今書いてゐる事柄に就いて話すと客も同意して、

『さうぢや、彼の少年は死に處する用意に就いては山鹿流などの敎へる行に適うてゐるが、彼に阪本龍馬の話を少し聞かせて置きたかつた。阪本は吉田をや

つた、其から横井もやる積てあつた。吉田をやる前には度々議論を闘はしたが怎麽しても一致しないのみならず、果は貴公達弱輩に何が解るかなど〻輕蔑したもんだから憤激して到頭やつつけたのだ。横井といふ奴は外國崇拜説を唱へる不都合な奴だ、やつけねばならぬと思つたが、其前一應本人に打つ付かつて其説を聞いて見なければならぬと、或日小楠を訪うて段々話し込んで見ると形式上多少違ふ所はあるけれども結局に於て意見は一致して居たのみならず、自分の知らない種々の智識も有つて居るし、氣合も好く合ふ、横井小楠公は天晴れ國家有用の人物だと惚れ込んで了つた。其處で實は斯く〱て貴公をやつてしまふ積て參つたのだつたと打開けて、其後は双方益友として付合つたといふことを聞いて居る。膝突合せて先方の料簡を確める便宜の無い場合には別に方法を講じて之を明にすることは極めて必要なことぢや。場合に依つては身を殺して仁を爲すの覺悟が無ければならぬが其には、愼重を要する。大石を辱しめて後に泉岳寺に詫び腹を切る樣では可けない。併し又愼重々々て牧野の樣ても困るし六ヶ數ものだらう』

▲法律の威信無し

阿部局長横死の件は當夜新聞に記事を差止めた、處が東京大阪の大きな新聞の若干は之を無視して翌朝の新聞に載せた、平日は二枚て一錢の呼賣が、其記事を載せたのは一枚二錢で飛ぶ樣に賣れて增刷が間に合はなかつた。其等の新聞は此の好記事に向つて罰金の三百圓五百圓は廉い原稿料だと覺悟して差止命令を無視してかゝつたのてある。

正直な新聞と、微力な新聞とは差止命令を遵奉して見すく馬鹿を見るのてある。

法律を遵奉した側は意氣地が無いとか間が拔けて居るとか侮蔑せられて、法律を無視した者が賞讃された上に利益を得る事になつて見ると、法律の威信はゼロでは無いか。

差止命令が本來無用なものであることは當局者です

ら或る者は認めて居る、況んや違反者を奬勵する反對の結果を來して法律の目的を失ひ法律の威信を傷けるものであれば、惡法といふよりも惡法だ、速に此んな法律は廢すべきものだ、之を存して置くのは大きな新聞、橫着な新聞の跋扈を助長する樣なものである。

日本の新聞は惡辣な樣でも案外賴もしい處がある。眞に國家の爲めに書いてはならぬといふ事柄であれば差止命令などの形式を取らずとも、責任者と談合づくで記事を見合せて貰ふことは出來る、そんな實例は少くない、なまじ權柄づくで壓し付けることを廢して事情の疏通を努めるのが上策だ。

總て權柄づくが惡い。向ふ脛のへし折られて濟む筈の阿部局長が命を取られたなども、彼が平生餘り高慢で權柄づくで人を馬鹿にしたからであつた。阿部の死後外務省は噤口主義秘密主義を取つて新聞記者を寄付けず隔離生活をする樣になつた、是も馬鹿な話だ、尙ほ反感を助長するばかりで少しも安全な策では無い、却つて誤解を生じ易い危險なものだ。今いふ通り案外賴もしい處のあるものだから無用の障壁を築かずに事情の疏通を圖るがよい、さうするのは當局者の爲のみならず抑も亦國家の幸だ。

問題の人・噂の人

鐵拳禪

▲國論が沸騰する、暗殺が行はれる、新秋九月は二百十日の騷ぎのみでは濟まなかつた。天候、人事、總て險惡、亂調、凄慘を極めた。阿部政務局長の暗殺は二十幾年前大隈外相が爆裂彈でやられた以後の出來事である。一は對支外交、一は條約改正、孰れも民論の激昂を買つた爲めである。大隈伯は隻脚となつて助かつたが、阿部君は腹部を刺されて絕命した。

▲阿部政務局長の死は、後世から見て種々な意味を附される事であらう。現代では、單に一個の悲劇として、大なる疑問點を打つて置く。場所は靈南坂の官邸門前、日時は九月五日の夜、新橋停車場に伊集院公使を迎へた感慨を胸に裹んで、彼れは徒歩で淋しい路を辿つて來る。暗中に稻妻が飛ぶと、腹部に激痛を覺えて斃れる。玄關の前に蒼ざめた顔が横はる。劇としても一幕物の價値はある。唯斃れる瞬間に、何か意味ある事を云つて貰ひたかつた。板垣伯は岐阜の遭難に、『板垣死すとも自由は死せず――』と云つた。此の一句が面白い。自由の爲めに流した血は、劇の上にも活きて流れる。阿部君の最後に、平生の修養の足らなかつた事が見えるやうだ。

▲阿部君の政務局長になつたのは、昨年五月だから、まだ一年半に滿たなかつた。が、却々勢力があつたさうだ。彼れは三十年十月に書記官となり、三十二年五月に參事官、三十三年十月に外相秘書官となつて居たから省内の勝手は能く分つてゐる。夫れに何處やら親切で、友情の濃かな所があるから、部下が能く心服して居たさうだ。

▲彼れが省外に出て働いたのは、三十四年六月に英國公使館の二等書記官となり、三十八年六月に支那公使館の一等書記官になつただけである。勤めたのは二個國であるが、在勤年數が長い。省内勤務の三個年よりは、此の方は餘程長い。殊に内田公使の下に支那で働き、次で代理公使となつたから、支那の事情には能く通じて居た。既に部下が心服して居り、支那の事情に通じて居り、加ふるに頭腦が犀利明晳であるから、對支外交には誂向の人であつた。

▲處が、何うもうまく行かない。餘りに支那の事情が見えて居るだけにうまく行かない。伊集院公使の失敗は、阿部政務局長の失敗である。彼れの失敗は、現政府の對支外交の失敗である。松井次官は盆倉だし、牧野外相は無能と來てゐるので、一時は阿部政務局長の獨舞臺で、山本首相なども大に傾倒して居たさうだ。

▲阿部君は孫逸仙と間違られるやうな顔ではない。髯も太く、眼鏡を掛けてゐる。ちよつと間違られさうなのは、山座公使であらう。あの男は、鼻下に薄い朝鮮髯を蓄へ、薄い頭髮を分けて、二重瞼の鮮明な所は、孫逸仙に似てゐる。コロ的伶悧のないのと、何處か顔に締りがあるので、やはり大和民族の山座君なる事がわかる。物騷な此頃であるから、顔の造作に手入をして置くことが肝心であらう。

▲山本首相は誠意自慢の人で、本年初頭の議會で何遍も繰返して、速記錄中に誠意を散布したのは有名な話だ。が、實際局に當つて見ると、誠意ばかりでも不可いと見えて、隨分と國論を無視した事をやる。言論を壓抑する。サーベルを外に拔かないで、内に拔いて威張つてゐる所は、別に誠意の表象とも思はれない。幾分でも輿論に聞いて、國民的外交の實を擧げようとするなら、霞ケ關と云ふ祕密の城郭から出て、誠意を披瀝したら何うであらう。餘りに國論を無視し、言論を壓抑すれば、如何なる恐るべき反動を來すかは、疾くに知つて居る筈である。

▲增師問題は、山本首相の苦惱の一つであるさうだ。彼れは、此の暗礁

の前途に横はつてゐるので、容易に出兵を肯んじない。英國の意嚮と云ふやうな事もあるが、夫れよりも恐ろしいのは此の暗礁である。大陸に兵を出せば、大陸主義の口實を作る、折角下火になりかけた增師問題に油を注ぐやうなものだ。自重！　自重！　自重の意味は玆にあるのだと薩派の人々は云つて居た。南京の善後策か、應急手段か知らぬが、六艦を增派して空嚇いてゐる所を見ると、山本伯も却々食えない親爺だ。

▲甲州の若尾從六位は、朽木の倒れるやうに斃れて了つた。病氣が原因をなしたのでもあらうが、もう九十四歲と云ふ高齡で、壽命が盡きて居たのだ。逸平自身は百歲迄も生きる積りで居たのだから、無殘念であつたらう。終焉の譫語に横濱の糸況を氣遣つて居たなどは、彼れの死ぬまでも儲けを離れる事の出來なかつた證左で、所謂黃金に囚はれて居たのだ。

▲逸平老は天秤棒の間に成長して、絹夜具の上で死んだ。四十歲以前は、天秤棒を擔いで。甲信地方を行商して歩いた。桃の季節には桃、柿の季節には柿、其他賣れる物なら何でも賣つた。が、桃の行商には餘程手古摺つたと見えて、『桃と云ふものは腐れるので損が立つ』と、懷舊談をする時は、いつも其樣な事を云つて居た。

▲彼れが今日の富をなしたは、行商が本で、次に横濱で生絲の賣買をやつて儲けたのだと云はれて居るが、其の前にぼろい儲けをやつてゐる。八王寺近在を行商して、或旅籠屋に投宿した。壁を隔てゝ聞くと、隣室の客が番頭と話をしてゐる。『甲州に水晶の屑を買ひに行く、……外國商館に賣込む……御嶽へは何う行けば可いか……買へば儲けがある……』と、皆まで聞かぬが、『儲けがある』の一語は彼れを昂奮させた。彼れは早朝其の宿を立つて、一目散に御嶽の麓に至り、水晶屑を全部買占めて了つた。是れが、抑も逸平致富の原因であるさうだ。

▲新政黨の後藤男、加藤男、河野廣中君、島田三郎君、と云ふ顏觸で、此程宮城縣地方に演說に出掛けた。水害後で、黨勢擴張には不利であつたらしい。夫れに同縣の北方では、歡迎費を戶每に徵收したとかで、重税を賦課されたやうに思つて、非常に反感を抱いて居るさうだ。併し同縣の黨勢擴張費は、新富豪の荒井泰治君が支出寄附する事になつて居るから、其樣な筈は無からうが、何れ藤澤幾之輔君などが、小策を弄したのでは無いかと云ふ事だ。

▲昔日の河野君は非常に勢力もあり、崇拜もされて居たが、今日では一部古老の間に其の名を謳はれるだけで、青年からは持てない。後藤男は毛嫌もされるが、青年とは何等かの交渉はある。南部領の原敬君の向うを張つて、黨勢擴張をやる便宜のあるのが、矢張仙臺領の後藤男であらう。黨人としての後藤男の將來は、是れから展開して行くのだ。

▲河野君の風采は、何處から見ても立派だが、其の生活、公的と私的とで全く違ふ人である。あの風采、あの態度、あの辯舌で想望した河野君を、家庭に入つて見ると、輪廓の大きい處はなく、如何にもこせついて何でも能く氣のつく、茶人じみた爺さんである。茶の煎れ方から、飯の炊き方まで、自分でしなければ氣が濟まぬと云つた風である。

▲伜の廣一君は、今は郷里の村役場か何かの書記をやつて居るさうだが、父の家庭に在る時は、小さくなつて居たものだ。河野君は嚴格に構へて居ると、廣一君は兩手を突いて平蜘蛛のやうになつて、御意を承る。さうしないと、言下に叱り飛ばされる。父子の間は、何の温味も、親し味もなく、全く主從の關係であつた。彼れは、斯う表面的に觀たと、内面的に覗いたとでは違つて居る人で、思つた程大膽でなく、寧ろ臆病な男である。だから禪の修養の何のと、修養に凝つて居るのだ。

▲英國大使館參事官の小池張造君は、突然歸朝を命ぜられた。阿部君の後任として、政務局長の椅子に倚るさうだ。彼れは明治廿九年帝大政治科出身の法學士で、阿部と同期生である。卒業後間もなく外交官補となり、公使館書記官に陞任して以來、清英二國に在勤して居た。總領事としては米清英三國の間に腕を揮うて居た。夫れに一度は外相祕書官にもなつて居るから、經歷に於ては前任者よりも、波瀾が多い。支那の事情に迂濶でも無さ相だから、滿更不適任でもあるまい。

▲彼れは歸朝して、先づ何の方面より手を付ける積りか。現下の紛糾した時局を解決するに、必ず成竹のある事とは思ふが、彼れは阿部君程に我執が强くない代り、眼から鼻に拔けるやうな才走つた所がある。而して怜悧明敏で、男振が好い。所謂霞ヶ關型の外交官だが、手腕の勝れた方に數へられて居た男である。從來の軟弱外交を一蹴する程の氣前もあるまいが、何程か新生面を拓き得るが如く期待されてゐる。

▲今年は二十九年出の當り年と見えて、法學士井上準之助君も一階飛んで、横濱正金の副頭取から頭取となつた。市來乙彦君の大藏省主計局長山崎四男六君の理財局長に比べると、國家理財の樞機に參すると否との別こそあれ、より以上の好地位である。高橋藏相も、三島日銀總裁も、つい此頃まで此の椅子を占めて居た。

▲彼れは卒業後直ちに日銀に入つた。大分縣の出身と云ふので、同郷の先輩に引立てらるゝ便宜もあつたらうが、彼れの性質が夫れに適して居たのだ。行政官とか、外交官とか云ふ方面よりも、財界に對して多くの興味を持つて居た。其後英獨に留學もし、パーク銀行で實務見習もやつたから、新文明の銀行業には通じて居るさうだ。

▲彼れは風丰の揚つてゐる方で、交際が上手で、談話がうまい。ちよつと自ら高く持するやうな風があるけれども、常識が發達してゐるだけに、短所をさらけ出さない。遊戯は多趣味で、碁もやれば球突もやる。容易に人に許さなかつた櫻井すら、彼れを評して『日本人としては稀有の紳士道を保維する者』だと云つてゐる。同窓の友人で、高山君から推稱されたのは、斯の人位のものであらう

▲始めて彼れの才幹を識つたのは鶴原定吉君だが、とん〱拍子に上つたのは、山本農相に負ふ所が多いさうだ。由來日銀には、妙に大分閥と云つた樣なものがあつた。其の閥の勢力が、彼れの立身に加味してゐるのは爭ふべからざる事實だ。紐育代理店監督から一躍して正金の副頭取となつたのも、今度の陞進も、尠からず手心が加はつてゐるだらうと云ふ事だ。

▲福來博士は、「透視と念寫」の冒頭に、『雲霞の如く簇る天下の反對學者を前に据ゑ置いて、余は次の如く斷言する』と云つてゐる。誇張も斯う度を踰えると、學者の態度でなく、彌次馬の口調となる。內容は單に一片の報告で、『新なる空前の眞理を顯示』したものでも何でもない。念寫は彼れの新發見とも許せようが、透視は歷史的研究の餘地あるものだ。

▲福來博士は研究に熱心なる餘りか、或は故意か知らぬが、透視や念寫の能力者を自分のものとして、自由を束縛するやうな傾向がある。彼れの惡い癖は、書面で他を排擠する樣な辭を弄するので、其の書面を受取つた能力者すら不快を感ずる事があるさうだ。彼れの書面が公にされる事があらば、彼れの人格を傷くる樣なものも有らうとの事だ。

▲帝劇の女優森律子が、泰西の劇壇を見物して歸朝した。親の光七光と云ふ格で、是れ迄も人氣者であつたが、今後は更に洋行の一光を添へたから、貧弱な劇界の明星として持囃されるかも知れぬ。が、眼高手低と云ふ事があるから、技倆が伴はねば、生命のある藝術家と見ることは出來ぬ。泰西女優の不見轉を語る前に、自己の藝術を省察する事が急務であらう。

▲大阪の鴻池男は、山中鹿之助の後裔で、命日には每月弔をしてゐる。因幡に在る墓地も綺麗に掃除が行屆いて、無緣にならないのは、其の爲めであるさうだ。俠傑の後の富豪――斯うわかつて見れば、彼れも一肌ぬいで救世濟民とでも出掛けたら何うか。

▲法制局長官岡野敬次郎君が行政裁判所長官に轉じて、朝鮮總督府司法部長官倉富勇次郎君が其後を襲ふた。倉富は寺內總督が手放すまいとの事であつたが、何とか折合が付いたものと見える。

▲岡野博士は、明治十九年の帝大出身で、伊東巳代治子の乾兒であつたが、羽振のよい西園寺侯に就いて了つた。其の庇蔭で三たび法制局長官ともなり、勅選議員ともなつた。上院に交友俱樂部を創立したのも、斯の男だ。常に長閥の跋扈を憤つて、『軍制と軍令との區別を明確にせねばならぬ』と云つて居るさうだ。

藝術座の第一回興行を觀て

德田秋聲

文藝協會が瓦解して、そこから新らしく生出した「藝術座」の旗擧興行として、メーテルリンクの「內部」と

「モンナ、ヷンナ」劇が、若い人達によりて演ぜられると云ふことは、長いあひだの協會內部の問題が評判になつてゐただけに、世間の人氣を呼んで、開演早々から滿員の好況を呈してゐるのは、何よりも悦ばしい。

最も劇そのものゝ內容出來榮を見たうへでなければ單に新しいとか、役者が若いとかいふことだけでは、私等は今遽かに藝術座に左袒し謳歌することは出來かねるのであるが、然しそれは寧ろ出發後の今後の問題に屬するので、藝術座の人達に取つては、今度の旗揚そのものが、どいくらゐ意義であるかわからない。少くとも頭領の抱月氏及び一座の女王と思はれる須磨子に取つて然うなのである。けれど單に芝居の翫賞者としての私の慾望からいへば、新しい劇團が、無闇に分裂することは餘り好ましいこととも思へない。たとひ如何なる動機と主張があるにしても、また其罪が孰にあるにしても、文藝協會などの歷史のある劇團が、今のところ二つに分裂した形になつてゐるのは、悦しいこととも思へない。抱月氏等が新しい劇團によつて、自分等の新に生きる道を拓かうとする努力に對しては無論大いなる尊敬と祝福とを捧げないわけに行かないが、去りとて舊文藝協會の頭領坪內博士や座員を、そのために一概に排斥する氣にもなれない。少くとも役者としての土肥氏や東儀氏の技倆を、今のところ鎌野氏や澤田氏の技藝以上と考へてゐる私に取つては然うなのである。慾をいへば舊の文藝協會に今の「藝術座」のような生氣を吹込んで、新しく劇壇に蘇らせたかつたとも思ふのである。新しい劇團を產出すといふことも大事業には相違ないが、一人の秀でた技藝員を得ると云ふことも、今の新しい劇界に取つては、相當に困難なことである。そんな事は或は第二義の問題であるかも知れないし、「藝術座」の俳優の將來は長いのであるから、藝術に對する信念と態度が純粹で眞摯でありさへすれば、立派な芝居の出來る時期の來るのは、言ふ迄もないことだが、少くとも今度の第一回興行だけでは舞臺上の實力が伴はなかつたと云ふ失望がなかつたでもない。

私は背景のことなども一向解らないが、「内部」などは大半舞臺の拵方によつて、脚本の氣分を出すべきものゝように思ふが、あの室内は何となく散漫て、しつくり出來てゐなかつたように思ふ。それは室内が近過ぎて、奥深く見えなかつたのも一つの原因だらうし、天井の明るすぎたのも、邪魔をしてゐるのだらうと思はれた。狹い舞臺は狹いなりに工夫が出來さうに考へられる。庭木のないのも、内と外の世界との區劃を分明させないように思ふ。俳優では中井氏の老人が、唯一の主要人物であるだけに、白に一番氣が入つてゐて無難の出來であつた。作者の大きな脈搏に觸れるような説明的の長い白の表現し方には、まだ觀客をそこ迄引込んで行くほどの力を持つてゐなかつたが、可也入込んではゐた。他の役々も物が物だけに、目に立つほど拙くはなかつたが、全體としての舞臺の氣分がまだ充分釀されてゐなかつたようである。

「モンナ、ヷンナ」は芝居を見たあとで、私は抱月氏の飜譯にざつと目を通したに過ぎなかつたが、あれほどの脚本の飜譯としては、言葉の洗錬や推敲が充分ではないようで、讀んでゐても舞臺で聽いてゐても、少しざらつくような處があるかと思つたが、飜譯は無論完全で立派な物に相違なからうし、二幕目のヷンナとプリンチヷルレとの會見の一場などは、美しい詩のようなその戀物語が如何にも流暢なリズムのある譯筆で寫出されてあつた。私はこの脚本を解釋し得るだけの研究もしてゐないし、他のメーテルリンクの作も「ペレアスとメリサンダ」に、短かいものを二つ三つ讀んだゞけで、知識は皆無である。が、此劇を譯本で讀んだり舞臺で見たところでは、さほど面白いものとは思はれない。私にメーテルリンクの思想に觸れ得るほどの聰明がないためかも知れないが、此劇は「ペレアスとメリサンダ」に見るような蒼い濛靄のような神秘の薄絹に包まれてもゐないし、我々に肉迫して來るような現實性も具はつてゐないように思へる。私の極めてぼんやりした印象を言へば、あの三幕があの劇の眞の發端のような氣がしてならない。しかし筋の一貫して、

面白い芝居に仕組まれてある點から言へば、「ペレアスとメリサンダ」などよりも逈かに調つてゐる。そんな事は兎に角として、今度の興行の出來榮をいへば、技藝員の熱心が舞臺に溢れてゐたに拘らず、充分な成功とは、いかに贔負目に見ても、謂へないようである。そして「内部」と同じく、全體としての舞臺の空氣が醸されるまでに、象徵的の情趣が浮んでゐなかつたのみならず、役々の部分々々の藝としても、まだ手の屆かない空隙が可也目についたようである。科白がのろくて一本調子で敏感と才氣とを缺いてゐるのみならず、體が硬張つてゐて、動きの取れないようなところも、間々あつた。その中では、笹本氏のマルコー老人と、倉橋氏のツリヴルチオが、先づ尋常な出來であつたといはなければなるまいが、鎌野氏のギドーは働き場が多いだけに隨分苦しさうであつた。一番困つたことは、壓潰したような聲で、白の立たないことであつたが、歡喜と失望と、憤怒と愛慾とが、いつも一つの兇暴な苦悶の表情で押通されることとて、それが一幕目では左程目にも立たなかつたが、大詰に至つて、甚しく際立つて來た。生贄を獲たときの復讐の歡喜に踴躍するところも、ヷンナの貞操に猜疑心を逞うして、いら〱する處も、酷評すれば、ぐしや〱であつたと謂はなければならない。兎に角いぢけた、小さいギドーであつた。或は役が勝過ぎたとも謂へよう。一つは堅くなり過ぎ、個性を出し過ぎた故もあらう。

澤田氏のプリンチヷルレは、訥子に似たような大きな顏で、押出しも立派だし、聲調も明晰で、落着と餘裕があつたが、ヷンナが出現してからは、見劣がせられた。白が間が伸びて、抑揚に乏しく、科にも重々しさはあつてもフレキシブルなところと、パツシヨネートな處が缺けてゐて、冷めたかつた。しかし修練さへしたら、好い腕になれさうな素質があるやうに思はれた。

笹本氏のマルコーは、氏が漸く十八年何ヶ月と云ふ年齡としては、巧者な方といはなければならない。役相當の重みと氣韻がないにしても、藝が自然であつた。

倉橋氏のツリヴルチオは、目が能く働いてゐた。宮島氏や波多氏の副官は、一ト通りの出來てあつたが、中井氏の秘書官は、もう少し如何かならないものかと思つた。

須磨子のヴンナの出來榮は、マグダのそれに比べると、迥かに劣ると謂はなければならないが、白は相當に手に入つてゐたようてある。二幕目などは、相手次第では今少し浪漫的な色彩が出さうに思はれたが、敎つてゐたことだけは遺つてゐたように思はれる。一體に須磨子の性格には役が非現實的に過ぎて、仕勝手が惡さうてあつた。そして要所々々の敏活な動作や白が まるて感情から遊離してゐるようて、そぐはなかつたが、それても大詰の一ト場などは相當の効果を收めてゐた。

以上の評は少し酷に失したかも知れない。しかし短いものは兎に角、メロドラマとても言ひさうな恁うした劇を、日本人の手にかけることは誰に取つても成功は困難てあらうと思はれる。主人公のヴンナにしても、あれだけの固定した形がないだけに、恐らくヘッダ以上に手頼のないものてあらうと思はれる。それに藝術座の人達は、須磨子以外は恐く孰れも今度が初舞臺てあらう。希望は寧ろ今後の努力に待たなければならない。

蝸牛と京都人

黑頭巾

其一

◉優さしくして、角を有する蝸牛は、京都人の象徵として、尤も、畫趣と詩味とに富めるものならずんばあらず。

●蝸牛は京都の特産に非ず、到處に在り。然れども蝸牛の書趣は、京都を背景とするに於て、殊に美感を發し、其の動作、情態は、京都人と照應せしむる時に於て、詩味の湧くを覺ゆるなり。

其二

◉蝸牛は、濕りたる空を背景とするを要す。雨ふらずとも、陰雲、積欝、遠き天の色も雲に濁りて、樹々、草々、重たく水分を含みて、綠色の黑かゝりて見ゆる時、庭の土の、稍、軟かに濕り爛れて膨らみたる氣味を見せ、老ゐて、舊るびて、朽ちて、蟲に蝕はれたる木株の、腐れる煉化を積める柱のように、危うげなる片々に分解したるが、幾分の粘力を殘存する樹皮に包まれ、滿天の濕氣の爲に、辛くして粘著して殘れる……其の老株の上。或は手水鉢に近くして椽先に、這へるを、思掛けず發見したる。或は、牆より高き綠樹の影暗き枝の上に、靜かに棲めるなど。すべて蝸牛の書趣なり。

◉蝸牛は畫趣を以て愛せらる。蝸牛の書趣は、陰と濕との空にあり。蝸牛の棲める樹下には、飽くまで、水分に肥えたる、靑々したる古苔ありたし。

●快晴の乾ける空には、蝸牛の書趣無し。乾ける日和に、乾ける、新らしき板の上に、蝸牛を這はしめば興味、索然として盡く。蝸牛は舊と濕とに生れて、舊と濕とに活く。舊と濕とは蝸牛の書なり。而して蝸牛の詩には、『新』の字無きなり。

其三

◉舊と陰濕とは、必らず「黴」を生ぜずんばあらず。「舊と濕」との氣、空中に瀰漫するとき、あらゆる物に黴を生ず。蓋し、花は開いて枝頭に在り、樹を剖いて花を見る能はず、然れども花は自から根幹より出るが如く、あらゆる物を解剖して、黴を見ること無し、「舊と濕」との氣、ものに宿るとき、則ち發して黴となる。黴は「舊と濕」の氣の花なり。所謂優曇華の花といふは、黴の花に外ならず。

◉風景を點綴する黴は、苔と蝸牛となり。苔と蝸牛とは、黴の精華ならずんばあらず。

◉黴の生ずるとき、靑苔厚く、蝸牛も亦た必らず肥ゆ。而して陰濕の空氣閑に、舊國に滿ちて、人をして陰濕の趣味に耽らしむ。此の時、靑苔は靜中に、蝸牛は動中に、共に、黴の書趣を、飽まで發揮しつゝあり。唯だ、僅かに、此の二者を書けば、則ち、陰濕の風景、人の眼中に迫り來るなり。

其　四

●洛外の風景は、京都の誇とするところなり。其の誇たる所以は、幽邃、閑雅なるに在り。京都の幽邃閑雅は「舊と濕」とに存す。樹々、悉く濕はざるは無く、老木ならざるも、亦た古雅の趣を備へざるは無し。而して樹下に苔滿ち、枝上に蝸牛あり。

●洛外、好風景には、必らず水あり、紅葉あり。冷にして濕、則ち楓葉のみならず、能く萬木をして紅殺せしむべし。これを貫くに、流水、或は瀑布を以てす。光景の變化ありて、加うるに色彩の絢爛たるを以てするが故に、人をして陰濕を感ぜず、幽邃を樂ましむるを得る。然れど洛外風景の幽邃たる所以をして、精采を發せしむるも苔と蝸牛とならずんばあらず。

●吾輩、嘗て論ず、京都は苔の都なりと。京都の苔は、殊に美にして、古色の豐厚なるのみならず、苔も亦たすべてのものを苔化するの力を有す。新造の庭園も數年ならずして苔滿ち、新來の石燈籠も樹木もすべて苔に纏絡せられざるは無し。舊きものは勿論の事、如何に新のものも、京都の空氣中に放在すれば、苔を扶殖せざるはあらず。藍壺に投ずれば、物悉く青くなるが如く、「苔の都」に來るものは、すべて苔となる。

●「苔の都」なる所以は、洛外の風景のみに留まらず、洛中、紅塵の衢にも亦た苔あり。試みに町中の小さき寺を訪へ、門、雅にして、石逕あり、逕に沿ひては茶なんど植えたる可く、而して石縁などにも又苔あり。一歩、門を入れば、冷々とすべく、其の小さき奥庭の、松、石なんど苔蒸して、幽邃、閑雅にして陰冷。とても門外、車馬を通ずるほどの人寰ありとは思はれず。王摩詰が所謂「日色冷青松」の書趣は、不知香積寺、數里入雲峰、洛外を尋ねずとも、洛中到處にあるなり。

●苔は京都の地方色を示す。而して蝸牛は京都人を象徴す。蝸牛は則ち「苔の精」ならずんばあらず。

其　五

●今、松簟の季節に入る。清香まさに苔の都を覆ふなるべし。一面より見れば、松簟は、一季に秀出する苔なり、四季に渉りて、京都の地氣を表現しつゝあるものは、滿地の苔ならずんばあらず。

●人は、京都の松簟を言ひて、苔を言はず、樹に懸れるの松蘿、苔蘚。樹色、石色、或は、すべての山色、滿地の色。京都のは、すべて苔ならざるは無く、詩人、未だ苔の傑作を出さず。書人つねに苔を書きつゝあり

て、自覺せざるなり。

●京都の苔は、發育十分にして、實に、美にして軟なり。樹に纏へるの苔は暫らく措く。若し、地上の苔を弄すれば、色濃く、毛長く、纖柔にして濕軟なり、恰も深きビロウドを摩するが如く、若し、これに坐せば、フウワリとして、新たらしき絹蒲團に、腰を下すの快感無くんばあらざるべし。

●山芋の氣分を、靈を與へて活かさしめば、長くしてぬらくらとせる鰻となるべし。而して纖柔にして濕軟に、新鮮ならずして、古雅なる「京都の苔」の精をして靈動せしめば、則ち、蝸牛となる可き也。

●芭蕉の句に、「蝸牛、角ふりわけよ、須磨、明石。」必ずしも未だ京都の蝸牛に言及せずと雖も、蝸牛の二字、上方の風景に配合し得て、自から靈妙なるを覺る。關東、東北を詠ずるの詩、蝸牛を配合して妙味あるを想像するを得ざるなり。

其 六

●古の支那人、蝸牛の詩趣に著眼すと雖も、唯だ其の角ばかりを見て、其の他に及ぼさず。僅かに蝸牛角上の爭の語あり。則ち、蝸牛の角の漫に小なることばかりを見るのみにして、角の構造と靈動とを注視することなし。古人の觀察太だ粗なりといふべし。

●微妙なる觀察力に富める京都人は、つねに「蝸牛の角」に精到なる注意を拂ひつゝあるべし。彼等は、其の觀察の結果を語らずと雖も、自から躬行しつゝあり。其の自から語らざるは、天機を漏らさゞる所以にして、知者、默するものなるべし。

●すべての動物にありて、角は、攻擊機關なり。蝸牛には戰鬪力を有せず。則ち其の角は、攻防いづれをも意味することなし。攻防を意味せずと雖も、生ある者は、攻守無きことを得ず。蝸牛の角は、自在なる偵察機關たらずんばあらず。

●蝸牛の角は、凡そ角と名づく可きもの、中に於て、尤も自在、靈妙にして、また尤も奇異なるものならずんばあらず。彼の角は、牛角、鹿角の如き偉觀を具せざれども、折れず、缺けず、聳然として天に向つて峙ちつゝあり。十分に伸ぶるときは、自から威容を備ふと雖も、伸縮、卷舒、ともに自由にして、全然角を沒入するを得可く、縮みて足らざれば、すべて體軀全部を擧げて、縮みて、殼の中に退き入る。

●蝸牛の角を見よ、其の靈妙にして奇異なる所以は、一に、其を構造する纖緯組織に在り。蝸牛の角は、極

めて纎柔にして堅靭なる「糸ゴム」にも似たり。組織、色彩までも亦た相酷似して、索引、壓縮の間、些の困難を見ず。若し、蝸牛の角を集めて繩となさば、此の頃、少年の玩弄する飛行機模型の糸ゴムに代用するを得るなるべし。

◉蝸牛の角頭に球あり。眼なるべしと見ゆ。眼、徒らに高くして、背後ばかりを見て、前方を見ること無きは、蝸牛と蛙となり。故に眼を以て論ずれば、樹上の蝸牛と井底の蛙と同一般ならずんばあらず。

◉古來の笑話に、京の蛙、大阪の蛙といふ事あり。京の蛙は大阪を見んとし、大阪の蛙は京を見んとす。共に、本國を出發して某地點に會す。互に、眼を睜りて京、大阪を望む。共に曰く、京も大阪も同じ事なり、異なる處無しと。互に本國に向つて却歸し來る其の實は、彼等は、互に、行けども、〳〵、唯だ何時までも後方の本國を見るのみなればなり。吾輩、謂ふ此の話は、奇なりと雖も既に古し、宜しく改めて京の蝸牛、大阪の蝸牛となすべきなり。

◉蝸牛の角と、蛙の眼とは、後を見る「回顧」を專門とするの眼なり。「古」と「回顧」とに活きつゝある京都人の眼は、蝸牛の角に寓せられたるなり。

其七

◉蝸牛の眼は、高く、角頭に捧げられたるも、發展と、進取とを意味せず。或意味に於ては、一種の裝飾たらずんばあらず。

◉試みに、蝸牛に近づき、或物を以て、角頭の近距離に到らしむるも、彼の眼は認め見ざるが如くなり。若し、卒如として、其の眼に觸るれば、則ち、少しく角を短縮して、以て、反應を示す。これを以て見れば、彼の眼は、見て知るに非ず。觸れて感覺するなり。

◉觸れて、始めて感覺するものは眼也といふ事を得ず。則ち、其の眼は、糸ゴムの一端たるに過ぎずして、唯だ、其の末端を括約する一種の防護機關たらずんばあらず。其の眼には、感覺力ありと雖も、識見無きなり。

◉蝸牛の眼を打つこと、一回なれば一回縮み、小なれば少しく退き、大なれば大に退き、數回、打ちて已まざれば、遂に全く退縮す。恰も其の眼は、打者の意思を忖度しつゝあるものゝ如く、一回、一回、打者の手加減に應じて、退縮す。則ち角眼の蝸牛は、識見無しと雖も、其の感覺は大に鋭敏なるを徵するに足らずんばあらず。

◉蝸牛の角は、前途の進路を導かずと雖も、不思議に、

偵察力を發揮しつゝあり。其の角の退縮は、「危險の報告」を表現しつゝありて、角の全く縮少する後に至りて、幹部の體軀、始めて退嬰す。

◉蝸牛に於ける斥候機關と幹部との聯絡は、自在にして、また奇異なり。偵察の角は、少しく退縮しつゝありと雖も、蝸牛の頭は、依然、前方に前進しつゝあり。故に、此の刹那に於ける蝸牛の態度は、其の外觀の纖柔、軟美なるにも係らず、其の中心には、案外、強頑なる意思を包藏せるに非ざるやを疑はしめずんばあらざるなり。

其　八

◉古詩人、屢、蝸牛の角を言ふ者あり、未だ多く蝸牛の殼を言はず。蝸牛の殼は、蝸牛の家也、城廓なり。其の本領なり。彼は最後には、必らず其の城廓に據り、其の本領を死守す。死守すればとて、何等、攻防の力を、聊かも示すことあらず。唯だ死守するのみ。

◉蝸牛には識見無く、攻擊、防禦の力の表現なく、其の形貌は、纖柔、軟美なる中に、死守の頑志を藏す。此の頑志あるものは、其の行くや、必らず足跡の一線を畫し、進退必らず城廓に據り、假令、懸軍萬里すと雖も、必らず其の背に城廓を負ひ、斷じて、赤裸々にして天地の間に立つことあらざるなり。

其　九

◉蝸牛は、詩に入り、畫に描かれ、而して兒女に愛せらる、而して如何なる獰猛、嚴酷なる人にも虐待せらるゝこと稀也。其の形の軟美にして、人の眼を、強く、刺激すること無ければなり。

◉蝸牛は、些の恐る可く、敬すべきものを見せず、形の軟美なるのみにあらず、其の皮膚色澤また甚だ纖柔陰濕にして、つねに潤澤あり。新たに、水を出で來れるかの如く、滑かに光る。

◉「デン〳〵蟲」の一語は興趣あり。兒女は、でゝ〳〵蟲を見付けて嬉笑す。形貌、色澤すべて纖柔、軟美なるは、兒女の掌上に弄する時に於て、頗る能く調和するなり。

◉此の愛玩すべき、可憐なる蝸牛は、人には詩味と畫趣とあり。枝上と地中とに於ては、彼等は實に害蟲たるなり。彼等は、草木の枝に沿ひて、其の破溝を探知して液汁を吸收し、地中に潛みて、若木の嫩根を絞り吸ふ。或は、小松の畑などを堀りかへすことあらんには、根をめぐりて、殼を負へる數百の小蝸牛の累々として群居することあるを發見す可きなり。

◉蝸牛は、角を以て偵察し、後方を見て、前を見ず、すべて攻防の力を缺き、事、毎に城廓に退嬰死守すと雖も、其の自から養ひ、自から活き、又た其の樹汁を絞り吸ふ所以のものは、唯だ其の口に在り。

◉蝸牛の角と眼とは後に在り、城廓も亦た後に在り。前に在るものは、唯だ一の口に在り。蝸牛の詩味と書趣とは、後に在り。蝸牛の害蟲たる所以は、唯だ口に在り。蝸牛は愛玩すべし。ひとり其の口ばかりは恐るべし。

其十

◉江戸兒は「五月の鯉の吹流しにて、唯だ口ばかり」の尊號は、江戸兒たる者、謹んで速かにこれを京都の蝸牛に返却するを要す。

◉江戸兒の口は、直ちに其の肺腑を見る。恐るゝに足らず。京都の口は、則ち、恐るべし。

其十一

◉蝸牛の形貌は、京都の地方色を、極めて美的に表現す。「舊と濕」との氣、纖柔、陰濕、軟美を象徴して遺憾なし。蝸牛は、造物者の趣味ある技巧の特産物ならずんばあらず。

◉蝸牛の動作は京都人の態度を表現す。京都人は纖柔にして軟美、回顧して前視せず。人と事とに接する、纖細微妙なる偵察を用ゐ、偵察すと雖も、其の意思は前進す。京都人は攻擊力を示さず、纖柔なりと雖も、頑固に、軟美なりと雖も、從順ならず。赤裸々にして行藏せず、堅剛ならずと雖も、一箇の本領を具し、つねに之を死守す。

其十二

◉京都の町は、雨の日を最も善しとす。若し、風、乾ける日に、車を驅りて見んには、「舊と陰」の氣分、暴露して、軟美の書趣を沒却す。

◉京都は雨、宜しく雨ならざるも、靄の時を宜しとす烟霧の中に出沒する東山の秀翠、尤も愛すべし。烟中の寺、露を含める花重く開き、鴨涯の柳、霧に濕めて深く垂る。此の時、纖柔、軟美書くが如き人、欄に倚りて、枝上に點綴する、愛らしき蝸牛に向つて流眄しつゝあるならん。

此の編を稿するに當りて、八重山島に、なめくじを塗りこめたる酒甕の事を憶起す。若し、京都に於て蝸牛を塗りこめて、茶壺を製し得ばまた一種の雅味あらんなど、思ふ。此の朝、久病、漸く輕快、則ち筆を執る。遠き林に風の音して、吾が小窓の前にも落葉、紛々として敷き積む。黑頭巾記

現劇壇の新女優

田村俊子

瀧田さんが、今の新劇壇の女優の評をしてもらい度いと云つてお出てなすつた。但し原稿紙十五六枚のところで、女優はたつぷり人數を並べてもらひ度いと云ふ御注文なので、それでは一と口評でもしておきませうと云つてお頼みに應じはしたが、考へて見ればこんな輕卒な事で此所へ引き合ひに出される女優がたはちつと御迷惑な次第かも知れない。それに近頃は女が同性の評をする時は、惡るく云へばそれが忽ち嫉妬の意味にとられるとか云つて、しんねりした論議がある一方にもある事だし、愛敬よくいゝところばかりを見付けて中ぐらゐのお世辭にしておかうかとも思つたりしましたが、それもあんまり自分で自分をくだらなく扱ふやうな氣がしますし、第一社に對しても無責任な事だし、――まあ私がこゝへ拜借しやうと云ふ女優がたはみんな私より年下の方ばかりらしいから、そこは勘忍していたゞいて、先づ姉さん顏をしたところのざつとした憎まれ口にして置かうと思つて、ちよいと五六人の女優を並べて見ます。

松井須磨子と村田嘉久子

二人ながら立場こそ違へ、今の新らしい女優中での腕達者と目されてゐる女優です。この二人はいろ〳〵な點において似たところがあります。あの目が、同じやうにこましやくれてゐて、同じやうに利口そうに光つてるところが第一によく似てゐます。二人の技藝と性格もこの利口と云ふ一起點から出發してることは二人の舞臺振りを見ると直ぐにうなづかれます。二人ながら始末に終へないほどその舞臺の上が落着き拂つて

ゐる。もう演劇と云ふもの丶奥底までも知悉してゐると云つた樣な高慢らしい容體を備へてゐるところもよく似てゐます。それから其の聲の豊潤でないところも似通つた點です。響きに餘情と云ふものがない。思ひを籠めると云ふ婉曲なひゞきがない。すべてに云ひつ放しと云ふ感がある。まだ〳〵嘉久子の方は洗錬されてるところがあるだけに音にスムーズな、透明なところがあつて、緊張した聲調になつてくると快感を持たせるところがありますが、須磨子の方は唯かさ〳〵して無味乾燥で聞いてゐるとだん〳〵に惡感を起させてくる。今度のヴンナなどは、あの乾いたあくまで現實的な聲を、夢幻的に柔らかくうつとりと響かせやうとしたりするものですから、臺詞の抑揚だけが甘つたるくなつて、淫賣婦が客の機嫌でも取る時のやうな調子になつたりしてゐました。

ヴンナと云へば、今度のあの役で須磨子の技藝の奥底が見え透いたと云ふことは氣の毒なことでした。須磨子は藝も頭腦も、分量が薄い。あの人の技藝がマグダ以上に伸びないと云ふのは、少しなさけないと思ひます。ヴンナの三幕目が、すつかりマグダで行つてるなぞは何うしたものでせう。重味もなければ精神的のところもなければ、まるで小供が兩袖を捲つてボチャ〳〵でもしてるやうな恰好をして、顏までがいたづらつ子のやうになつて、飛んだり跳ねたりしてゐたぢやありませんか。然うかと思ふと腮を突き出して、物を云ふ度に頸筋の周圍に波など打たして——あれが何う云ふ情緒の表現だと云ふのでせう？「眞實が‥‥眞實が‥‥」と云ふそのヴンナの臺詞の眞實と云ふ言葉の意味一とつにだつて、あの人は何所までその意味の強さを感じて云つてるのか——すべてが内に考へて、そうして外に發すると云ふ内容的な複雜な、藝術的な味ひもなく、上つ面な見眞似な技巧でアートの全面を塗つてゐると云ふのは、あの人の立脚してる地位から考へても、殆んど、何とも云ひ樣のないほどなさけなく思ひます。演劇の生命——それが何であるか恐らくあの人は考へた事もないのでせう。創造の意味——そ

れが何であるか、恐らくあの人は考へたこともないのてせう。斯うなつてくると氣の毒のやうに思ひます。あの人の藝術における格がもうきまつてしまひました。あの人はこの後、芝居が上手になるかもしれない。ます〳〵上手になるかもしれない。あの人の利口が、他人の演劇と云ふものゝ上からいろ〳〵なものを吸收して來て、ます〳〵上手に演活かす事が出來るやうになるかもしれない。けれどもあの人自身の藝術格はあれぎりです。

それて、先づ一面から云つて須磨子よりは嘉久子の方にいさゝか興味がある。それは、この人には藝と云ふものに就いての基礎がある。根底がある。歌舞伎劇における舞臺上の技術を準備するだけの下地がとゝのつてゐる。だからこの人は、兎に角一とつのある力を底の方に強く把握してゐて、そこから自分の技藝を造り出して行つてると云ふやうなところがあります。

嘉久子自身が考へてるところは、所謂藝道です。そうして自身が進みつゝあるところの其の行先はこの藝道の極致です。須磨子自身が考へてるところは藝術境です。そして自身が進まうとしてるところは藝術境の深奥てす。私の云ふ藝道は演劇そのもの、外廓で、藝術と云ふのはその内面を指すのです。だが、須磨子はまだ藝術を知らない。藝術の生命は何所にあるかと云ふ事を知らない。其れを解釋するだけの力さへない。然し嘉久子の方は、もつとも完全した、しつかりした基礎の上に立つて藝道を辿つてゆく事が出來る。まだ藝術の生命に觸れることは出來ないけれども、藝道と云ふものが何かと云ふ事を知つてゐる。知つて其れを勵んで行くことが出來る。だから少くとも、この人の演劇の上には純一されたところがある。それだけがこの人の價値で、また須磨子よりはその立場が明確なところにあると思ひます。

さて、この二人がこれからさき何うなるか。私は斯う言ふ事を考へます。嘉久子は或る意味において立派な役者となる事が出來るでせう。自分の堅い藝の基礎に立つて、時代以外にある一派の俳優としての自身を

立派に作り上げて行く事が出來るでせうけれども須磨子は何うか？　ある時代がくれば――又、よりよく藝術を知る女がこの人以外に現はれたならこの人の立場は失はれる事と思ひます。藝術の雰圍氣に取り巻かれる團體の中にありながら、女主人公自から藝術の眞髓を解さないとは、何と云ふ皮肉な事實でせう。

森律子と初瀬浪子

律子が洋行から歸つて來ました。まことに華々しく、それてゐて可憐で、又自分自身が咲き亂れる熱帶の花のやうな心持でゐるところが面白いと思ひます。この人は純粹の女優氣質だと思ひます。唯もう萬事派出つぽく、所謂女優と云ふ强烈な色彩のうちに生きやうとしてゐるところが、この人の生命なので、それが觀客へ對しては愛敬になり、同じ仲間へ對しては憎まれものになつて物議を惹き起す種になるのだと思はれます

中年の洋行がこの人に何を與へたか。そんな事は問ふだけが野暮、女優の洋行と云へば先づ貞奴一人だが、あれは稼ぎに行つたので、律子のやうに勉强に行つたのではない。律子は澤山な洋行費を持つて、令嬢らしい裝ひで、潑剌とした才氣を漲らせて、日本娘の極隨の愛嬌を漂はして、誠に小さく可愛らしく氣を吐きに行つた。然う云ふ洋行は我國演劇が初まつて以來、唯女優律子一人だけと云ふところに面白味があります。

口が大きい口が大きいと云ひはやされる其の事一とつにももう愛敬があつて、律子と云へば唯はなやかで、氣さくで、快濶で、陽氣で、劇界に大輪の花が咲いてるやうな感じがする。然し、女優としての技藝の上に、どんな光りを備へてゐるかと云へば、なんにもない。太郎冠者の喜劇がお手に入つたぐらゐのところで、何の因緣でこの人が舞臺の人として存在してゐるかとさへ思はせるくらゐです。

この人は藝で立つ女優ではありますまい。永久に。然し女優中でのある一種の辣腕家にはなります。何か目先の變つたことをして、人氣を取るとか、見物を騷がせるとかして、自身で自身の立場を作つて自分一人

を流行らせると云ふ事にはかり努力して果てさうに思はれます。あの華美な性情が作り上げるところのあの人獨特の女優生活は、唯素晴らしいものだと云ふ他には、技藝の上での女優森律子と云ふ名は、まあ遠く見出されさうにもありません。だが賑やかでいゝでせう。女優界には斯う云ふ人もなくてはならないかも知れない。

浪子も、何時まで經つても漠然としてゐます。女優中での美人と云ふほかには、なんにも取得がない。然し、美しい女優――今のところこれがあの人の獨占の名目だと思へば、あの人の藝能になんにもないだけ其れだけふしぎな悲しさを感じさせます。

上山浦路と林千歳

二人ながら良人があつて子供があると云ふところから一寸並べて見たのです。

千歳の方は舞臺に上つた數がまだ二度ぐらゐなので何うと云ふ事も出來ませんが、二人ながら、あの整つた立派な顔を何うすることも出來ないでゐるやうなところがあります。顔が立派なだけに、あの人たちの拙劣さ加減がよけいに目に立つてるやうなところがあります。浦路は殊に、日本の婦人としては珍らしいくらゐ容貌も姿も立派に過ぎるくらゐ揃つてゐるので、まことに惜しいやうな氣がします。

先づ、當分、劇壇の上では須磨子ほどの手腕を振ふことは出來なからうと思ひます。第一この人たちの演劇における思想と云ふものからして、どの位の程度にあるものかしらと疑はせます。然し其れは、この人たちの舞臺をあまり多く私が見ないせいかも知れませんだが、見る度に、下手だと思つて見たことは事實です。

酒井よね子と衣川孔雀

二人ながら、其の劇界への出端の無垢なところからして嬉しいやうに思はせます。よね子は大分場數を踏んでゐますが、孔雀はまだ、たつた一度です。けれども、あのたつた一度の舞臺だけで、この人のたつぷり

した才分を思はせたと云ふのは、この人の未來の藝術に光明があるやうな氣がします。いつたいに調子が豊滿で、柔かくて、そうして、如何にも静かな、大まかな、クインの態度のあつたことが私に强い印象を殘してゐます。それにこの人の聲がたいへんに潤ひがあつて、語尾にいつも露のやうな滴りのあつたことが、臺詞の上に澤山な效果を與へたことも頭に殘つてゐますそうしてアクトの上に、頗る自然な純粹な藝術の匂ひを漂はしてゐたことも、孔雀と云ふ人のこれから先きの舞臺に就いて多くの期待を持たせます。

それに身體の線が婉曲で、ふつくりとして、一と目見て、この人の全體が如何にも勝れた質のいゝ素材だと思はせた。だがまだ一度の舞臺ですから、あの純粹なあるものが、どこ迄此の儘で渾成されてゆくか。それは問題だと思ひます。それは唯、その人の自覺にあることでせう。

よね子は、柔か味には乏しいけれども、可憐な、いぢらしい、つゝましやかな藝風を持つてるところに、この人だけの色彩をこしらへてゐます。年もまだ極く若いし、この人はよく教へる人さへあれば、あるところまでは進んで行ける人だと思ひます。今のところ、自分の所有以外にその藝をひけらかさないところは、この人の可愛いらしいところだと思ひます。

さて、たいへんに憎まれ口をきゝました。

僅の期間に隨分女優も現はれましたが、兎に角この八人は、ある意味でそれ〴〵の代表的女優だと思ひます。この後、これらの女優がたが我が國劇壇にどんな革命をもたらすか、私たちは大なる期待をもつて見てをりませう。

人物評論（四十二）

山座公使論



△微笑公使山座

吉野臥城

◎山座君と云へば、東洋流の豪傑で、三升の酒を呷つて平氣でゐる豪の者と、斯う輪廓が出來てゐる。從つて其の輪廓によつて想像される彼れは、雜木林のやうな髯面をした、小山のやうに肥つた、痛快淋漓な熟柿臭い男である。が、實際はさうでない。色は黑いが、溫順な風丰で、體はさう大きくない。何處やら外交官風な所はある。談笑の間に事を決すると云ふ事が、古英雄などによくあるが、さうした趣がないでもない。

◎彼れは、始終微笑してゐる。苦蟲を嚙み潰したやうな、凄い顔をする時もあらうが、多くの場合に微笑み浮べて、話し込んでゐる。但し彼れの微笑は、ニコ〳〵でもなければニヤ〳〵でもない。顔で笑つてゐるのか、腹で笑つてゐるのか、ちつと解釋のつかない程度の笑を湛へてゐる。此の一種の微笑は、全く圓次郎式に出來てゐる。

◎彼れは福岡の生れで、若い時に玄洋社に加はり、其の空氣に包まれて成育したから、浪人氣質も何程かあらう。東洋流の豪傑と云はれ、沈著に構へて腹が出來てると謂はれるのも、斯う云ふ經歷があるからで、霞ケ關の標準外交官等と多少毛色の變つてるやうに見られて居るのである

◎日露戰役の論功行賞で、金盃の下賜を辱うして喜んだのは彼れである。古來錢を愛せざる筈の軍人でも、年金の多寡で目を白黑にして居る際に、金盃に美酒を湛へて、談笑曉に徹したなどは面白いではないか。日外彼れは妹を吉岡大佐に娶したが、當夜花婿と徹宵痛飲して、五升樽を傾け盡し、なほ足らないで追加を命じたと云ふ事である。斯う云ふ奇行は彼れには珍しい事ではないが、さりとて酒亂と云ふ風でもなく、醉倒して事務を荒廢すると云ふ質でも無いやうだ。

◎二月十日――民論の最高潮に達して、血を見、煙を見た物凄い日であつた。――此の日の午後に議會は謂はれなく三日間の停會を命ぜられた。廊下で行き會つた代議士の澤來太郎君に誘はれて、前代議士の齋藤二郎君と三人で食堂に入つた。佐竹作太郎や米田穣などは停會を知らずに食事をやつて居たが、作竹は長島鷲太郎と入違ひにアタフタと出て行く。米田は其の儘腰を下して飲んでゐる。齋藤はウヰスキー、澤と予はスタートを飲み、洋食をやつてゐた。處へやつて來たのは、彼れである。彼れの衆議院に來て居やうとは、誰も思つて居なかつた。

◎其の時、予は『矢張彼れであつた』と、一種の不快を以て一瞥を與へた。夫れは外でもない。彼れは普通傍聽席の後方に居た一傍聽人を麾いて、廊下に呼び出し、守衞に何事をか囁いて居たが、守衞の頭が傾くと、懇懃に案內されて、官吏傍聽席の好場所に据ゑられた。周圍の人々は其の依怙の沙汰に反感を持つて、白い眼で一傍聽人を見た。彼れが行動に不審を抱いてゐた予は、彼れなる事がわかると同時に、役人風を吹かせるやうな態度を不快に感じたのであつた。

◎彼れは、例の如く沈著き拂つてウヰスキーを呷つてゐた。呷ると云つても、彼れは呷るのではなくグラスを嘗めるのである。悠然と煙草を吹かしながらやつてゐる。齋藤は矢鱈に呷るので、味ふのでない。鼻尖を赤くして、鼻聲になつて彼れに話し掛ける。彼れは孫逸仙の歡迎會の事や、其他一二支那の事に關して云つただけで、微笑を浮べてウヰスキーを嘗めて居た。彼れは總て斯樣な調子で、自分の抱負を露骨に吐かない人である。談笑に時を費すと云つた風であるが、夫れで居て對手にのみ本音を吐かせるやうに仕向ける。此の邊が、外交家氣質とでも云ふのであらう。

◎彼れの支那通な事は、大抵の人は知つてゐる。南方派にも、北方派にも知己が澤山あるやうだ。が、孰れかと云へば、孫黃贔負と見られてゐる

る。清國に赴任早々起つた投石事件は、排日感情か、山座憎惡か、深く研究もされずに濟んだやうであるが、袁の一派が彼れに對して好意を持つて居ないのは事實であらう。彼れには浪人がついてゐる――北方派は、斯う觀察して、彼れを怖がつてゐるさうだ。

◎彼れが手腕を揮ふには、輕んぜられて居るよりも、怖がられて居る方が都合が好からう。袁の一派から甘く見られて何うにもなる者のやうに侮蔑されれば、伊集院公使の轍を踏むに至るであらう。さればと云うて、浪人側の期待に副ふやうな事をやれば、自分の地位が危からう。腰の弱い外務省の下に活動するのだから、何うせ滿足な成績を擧げ得ないに極まつて居るが、東洋流の豪傑らしい所を見せなければ、彼れの顔が立つまい。

◎彼れは、赴任前に『南北融和する外解決の道はなからう』と云つて居た。そして袁を一度は大總統にして納まりを付ける方が、贊成であつたらしい。今日は何う變つて居るか知れないが、當初と同意見だとすれば、やはり漸進主義者である。外務省と呼吸が合つて居るやうだ。けれども、彼れは『條約の上に腕力がある』杯と凄味を云つて居たから、案外電光石火的に事を運ぶかも知れぬ。

◎彼れを浪人側の代表者のやうに思つて居るのは、誤りである。彼れは矢張外交官である。外務省の命を受けて、樽俎折衝の任に當るのである。如何に酒豪山座でも、何蚊と制肘されて、自由に腕を揮ふことは出來まい。今度の凌辱事件などは、充分彼れの活躍すべき舞臺ではあるが、一向に活きて働いて居ない。まだ新米だから働き得ないと云ふなら、夫れ迄であるが、も少し外務省を刺戟し、列強を操縦して、面白い藝當をやれさうなものだが――。

◎彼れは赴任する前に、頭山の許で、『今度歸國する時は、大方骨になつて歸つて來まつしやうや』と、お國訛で謎のやうな事を云つたさうだが、まさか悄然と痩せて歸朝するの意味ではあるまい。自分のやるだけの事はやつて、行り得なければ死んで歸ると決心の程を示したのであらう。夫れ程の決心があれば、使命を全うし得ない事もあるまい。ウヰスキーを飲んで、微笑するのみが特色でも無からうから、『條約の上にも腕力がある』位の意氣で、當つて碎けて貰ひたい。

◎近時、新聞には、彼れの強硬の態度が報ぜられてゐる。如何程強硬な態度でも、暖簾と腕押をするやうな強硬な態度では何にもならない。足元を用心して掛からんと、強硬の態度で、自分から倒れる事がある。と云つて、參事官になつた緣故で、英國のお先棒に使はれるやうでも仕方がない。彼れの眞骨頭、彼れの眞手腕を現はすのは、正に今日である。

△學友の觀た「山座」

文部次官　福原鐐二郎

山座と私とは大學の同期生であつたが、同級生といふ以上に懇意な間

柄です。大學以前からずつと私とは學校が一所で、大學を卒業するまで一所でした、學校を出てからは各々違つた方面に行つたものですから、役人としての彼の伎倆などは私には解らぬが、個人としては極めて磊落豪放な、膽力の据つた男で、邊幅を修飾するなどといふ事の毫もない、素朴一點張りの男でした。謂はゞ男らしい男、書生らしい書生と云ふのでせう。であるから一所に遊んで面白い男で、何でも行らうと思へば直ぐに決行する、酒はよく飲む男だつたが喧嘩などは毎日のやうに演つたものだ。大きなステツキを揮り廻して鳶人足や土方と喧嘩をしたものだ。何時かの正月にも、學校に出て來たのを見ると額中傷だらけにしてゐるから、何うしたかと言つて訊ねると、斯う〳〵で神樂坂の眞中で例のをおつ始めたなどと言つて平氣でゐたが、そんな事は彼の男にとつては日常茶飯事だつたのだね。あの男が外交官に成らうとは思はなかつたが、あれは多分先輩栗野の感化を受けたものでせう。

役人に成つてからの經歷は世間普通に知つてゐる事以上に私は知らないが、外交官中では兎も角も一風變つた珍しい人間に相違ない。然しそれが即ちあの男の巧く成功して行く所以でもあるでせう。何しろ豪放といつても豪放一點張りでなく、中々細心な處のある男です。酒ばかり飲んで、さう勉强する方でもなかつたが、殊に點數や席順の爲めに糞勉强するといふやうな事は無かつたが、頭腦はよかつた。學問の出來る頭腦を有つてゐた。數學なども能く出來たのだから、細い事は解らないやうに見えるが決してさうではないです。

友人としての彼は、學友中の出色の男で、親切な極めて情誼に厚い善い男です。外交家としての彼を論評するには外に人がいくらも有るでせう。學友としての彼に就いては、一口に言へばそのくらゐの事です。

△買被られたる山座公使

鵜崎鷺城

外交官としての山座は政務局長の時も英國大使館參事官の時も評判の悪い方でなかなつたが、支那公使としては何程の働を爲し得るか、無論今日までは未知數であつた。未知數といふても山座ならさうへマな藝を打つまいと、政府側でも民間側でも望みを嘱し、新橋を出發する時に盛んな人氣であつた。

日頃無能呼はりされるものでも、いざといふ場合になか〳〵やつて退けるのもあり、評判が好うても實地に臨んで案外なのもあり、一概にいへぬが、名下に虚士なしといつて、名の盛んなものは其名に伴ふ所の實力のあるべきことゝなつて居る。が名に伴ふ實力も無事な時に示さうとしても示しやうがない、所が山座にとつて今日の如く絶好な機會はない。或る一派の浪人や政客の利用的煽動に附和雷同してワイ〳〵騒ぐのが眞の國論であると思はぬが、兎に角本國では支那問題の火の手が揚がり、政府は南京虐殺事件なり軍人凌辱事件なりにつき、要求を提出していよ

〜對支外交の本舞臺に入り、談判の成行によつては眞に權威ある國民的大活動が起らぬとも限らぬ。か〻支那問題が國民の視聽を聳動し、隨て公使の一擧一動に注目して居る際であるから、山座の手際が好ければ男も一段上るが、不手際であれば隨分激しい攻擊を受けねばならぬ。

山座も初めから其覺悟をして居るに相違ない。覺悟はしても成べく手際好くやつて世間の人氣に副ふやうにしたい。嘗て柳原前光といふ公卿は支那公使になつて行く時、人間吏と爲る亦風流といつたが、今の役人は面倒なることの多く、決して外目で見るほど氣樂でない。山座の如き場合は尙更である。山座は新橋を立つ時、酒を飲んで公使館の奧に晝寢をすると太平樂をついたさうであるが、それは他所行の言葉で、腹の底から出たのでない。それに問題がこう喧しくなつて來れば益々責任の重きを感じ、殊にナマナカ人氣があると却て臆病になり勝ちのものである。されば晝寢どころか公使館の奧で人知れず心配して居るかも知れぬ。

それは兎に角前公使の伊集院が袁世凱及び其一派と親善であつただけ彼等は其後にやつて來た山座を一種の目で看るに定まつて居る。南方に同情して北方に冷かなるかに思ひ、さまで南方と關係が深くないにせよ伊集院の如く北方贔負でないと邪推して居るに相違ない。袁派が政權を握つて居る以上、山座もちよつと仕事のやりにくい點もないではないが、それよりも困るのは本國政府の態度である。今度の事件でいくら山座が强硬な意見を有つて居ても、自由意志でやるのでなく、やはり事每に本國政府の訓令を待たねばならぬ。處が權兵衞なり牧野なりがあの通りの無方針、無智識であるから始末に終へぬ。とはいへ直接折衝の局に當るものは公使であるから、餘程シッカリせぬと對手國並に列國に對して帝國の威嚴を保ち利益を圖ることが出來ない。公使にして外務大臣を兼ねるだけの抱負があつてこそ、本國政府を動かし、又た頭の外交を行ふことが出來るのであるが、それは今の外交官に望んで得難い。

福岡人には官吏派と豪傑派といふ二つの區別がある。金子堅太郎・末松謙澄・松室致・鶴原定吉・武田千代三郎・內田定槌・山田新一郎・太田峯三郎などは前者に屬し、後者には頭山滿を始め平岡浩太郎・進藤喜平太・內田良平・杉山茂丸・大原義剛などが居る。官吏派は槪ね伊藤なり山縣なりに攀緣して出世したが、豪傑派は多く玄洋社出身で天下の浪人を以て任じて居る。といつて內田や杉山は今日いづれかといへば官吏派に接近し頭山直系とソリが合はぬ。此外に官吏派であつて浪人の仲間入りした寺尾の如きあり、浪人で居て豪傑派と關係なく、さりとて官吏派とも格別緣故のない福本誠の如きもある。山座は玄洋社の一人で後ちに官吏派になつたのであるが、官吏派といつても豪傑派に近い色彩を帶びて居る。福岡出身の外交官は彼と內田定槌の二人であるが、大學を出たものは山座に賴つて職業口を求めるのが多く、大學派の牛耳を執れる形がある。

世間では山座を豪傑の如くいひ、自分も總て豪傑的に振舞うて居る。外形から見たなら豪傑らしいが、腹の底からの豪傑でなく、案外巧慧なる才子とも思はれる。內實は何うあらうとも大學時代から今日まで豪傑風で通し、普通の官僚と肌合ひの異つて見える處に、偉い點があるらしく

思はせるのは確に成功といふべきである。

伊集院には支那浪人の同情がなかつたが、山座は出身が出身だけに何程かある。支那へ行く時にも玄洋社系の浪人は宴會の席で彼を激勵したと聞て居る。死んだ阿部政務局長と仲たがひであつたといふが、若し事實ならそれは支那について意見の相違した許りでない。阿部はいづれかといへば氣障とか高慢とかといはれ、人嫌ひされた方であるが、山座にはさういふ忌な氣分が外に顯はれず、大酒も飲めば藝妓買ひもし議論もする。豪傑振つても智者振つたり威張つたりせぬ。性格の一致しない點も原因の一つであるらしい。阿部の暗殺については勿論直接山座と關係のあるべき筈はないが、そんなことから猜疑心では初めから福岡人を疑つたとさへ傳へられて居る。

新聞紙の傳へる處によると、山座は平素と違ひ何處までも謹嚴なる態度で支那政府の主張を説破し、一歩たりとも日本の要求を枉げないといふが、無論今度のやうに初めから日本の立場の有利なる場合はさまで機敏なる懸引も巧妙なる立廻りもいらない、唯だ道理を以て向へは好いのである。況んや其要求なるものは思ひの外やさしく、決して實の容るゝを難んずるものでない。さすれば今度多少手際を見せるにしても、それだけで彼の外交手腕を定めるのは早い。これは單に前期試驗に及第したといふだけで、今日以後益々面倒な問題が起り、其場合に臨んで多々益々辨ずるに及び初めて相場が決するのである。併し有體にいへば山座も伊集院もさまで異りはない、唯だ伊集院が賞め買被り過ぎたが爲めに却つて自分が買倒されたに反し、山座は何程か實際以上に世間から買冠られて居るだけの相違であるまいか。

△未來の外務大臣

某陸軍佐官

山座は福岡の産であつて、夫の玄洋社に養はれた人である。であるから彼の人格とか品性とかいふものは悉くその玄洋社時代に作られたものであると言つてよからう。玄洋社は人も知る通り一種の元氣、氣慨、氣骨を尙んだ所であつて、其氣風は玄洋社の人には誰にでも備はつてゐるが、彼も亦氣骨の人である。上に對して阿らず、下に向つては極めて寛容、其友誼に厚い事は實に驚くばかりである。此友誼に厚く從つて情に脆いといふ事は軈て彼の欠點とも成つて累を招く事無いとも限らないであらうが、是れは玄洋社通有の美質であつて、接して交り膝を交へて談ずる場合には何とも言はれぬ一種の懷しみを味ふ事が出來る。彼は小村さんの知遇を得、拔擢されて朝鮮の領事から入つて外務省の政務局長心得を命ぜられ、間もなく局長の椅子に着いた。彼の手腕は此時代から遺憾なく發揮されて、世に認めらるゝ處となつたのである。小村さんの外務大臣時代は實に國家の多事多忙を極めた時であつて、日英同盟、日米協約及び日露戰爭等眩しいばかりの政務多端の間に在つて、其中樞と成つて

鞅掌盡力したのが彼であつた。

彼は人と交つて城壁を設けるやうな事をしない。さらばと言つて外交の機密をまでも洩して了ふやうなそんな迂愚でない。言ふべき事と言ふべからざる事とをチヤンと辨へて、而も相手をして底意なく腹藏なく談つたものと感ぜしめ滿足せしめる手際に至つては感服の外ない。

彼は酒を嗜む事尋常以上である。然しながらいくら飲んでも亂するといふやうな事はない。小村さんが嘗て「山座は酒を飲んでも事務の執れる男だ」と言つて私に語られた事のあつたくらゐ、決して酒のために飲まれるやうな事の無い男だ。彼は又文筆に長じてゐる。漢文も書けば詩も作る。彼の一度び筆を執るや平易にして而も徹底的に、讀む者をして深き感銘を受けしめる一種の力ある文體を成すのである。小村さんは英文を能くしたけれど漢文には餘り堪能ではなかつた。そこで其口授する處を山座が筆にしたものであるが、其潤色して發表せられた物を見ると、言々句々常に立派な名文を成したといふ事である。

彼の外交官としての技倆は未だ未知數である。從來は小村の幕僚としての彼の力を揮つたのに過ぎない。彼が眞の手腕を發揮するのは今後である。公使として今回の難局に立つなどは彼にとつてのよい腕試しである。今度の事件に就いても袁世凱は恐らく山座を喰へない男として畏れてゐるであらうと思ふ。例のポーツマウス條約が濟んで、支那との談判が開始された時に彼は小村さんに随從して北京に行つたことがあるから袁世凱は少くとも山座の半面を知つてゐる筈である。恐らく伊集院さんよりも山座に憚つてゐる事が多いであらうと思ふ。伊集院にしろ山座にしろ、二人とも鷹揚で、人を容れるの雅量を有つてをる事は相似てゐるが、學問及び頭腦のハツキリした點では山座の方が優つてゐるやうに思はれる。尚其外彼は人を統御するの手腕を有してをる。是れは彼の今一つの長所であつて、彼が或位地の椅子を占めて仕事をすると、部内に不平不滿の聲が絶えて、極めて圓滿に治まつて行く。例へばどんな亂暴な仕方のない男でも、彼の前に出ると何にも言へなくなつて穩和しくなつて了ふといふ事である。政黨などを操縱させたら巧いものだらうと思はれる。兎に角事務家であり、大膽な計畫を立てゝ遂行する勇氣と膽畧を統率して行く偉大な人格とを有つてをる。今後十分に其手腕と力量とを發揮すべき事であると信ずる。恐らくは今後幾年かの後外務大臣の椅子は必ず彼に依つて占められる時が來るであらう。

終りに彼の逸話を一つ紹介しておかう。それは書記官時代の事であつた。彼は今の夫人を迎へる結婚といふ時になつて、豪傑例に依つて常に赤貧洗ふ如しで、結納を納める事が出來ない。そこで彼は何うするかと思ふと、夫人の父親になる、其時分の代議士神鞭知常氏の處へ行つて、百圓を借りて來た。而して其金を結納として又其家に納めたといふ話がある。婚禮の席といつても形式的な儀式は一切拔きにして、親戚朋友知己を招いて、二階で、親しく書生的に飲み食ひをして結婚の披露を濟ませたなどは彼の一面を最も能く説明してゐると思ふ。

△山座君

文學博士　芳賀矢一

山座圓次郎君は初は上田といふ苗字を名乘つて居た。明治十七年大學豫備門入學以來の友人で、卒業の年も同じである。法科大學では水野內務次官、福原文部次官なども同窓であるから、其等の人々にお聞きになつた方が尙よく分らう。山座君の青年時代を記憶から喚起せば、非常に快濶な、さうして頭腦の明瞭な、勉强家であつたのである。其の頃はハイカラといふ語は無かつたが、今の所謂ハイカラが大嫌で、同級生中でさういふ評判のあつた某氏をどぶの中へ蹴飛ばしたやうな事があつた。酒はその頃から嗜んだやうである。牛込築土八幡の裏の筑前寄宿舍を尋ねた時、竹皮包の煮豆と澤庵で冷酒を馳走になつたこともある。併し粗暴で人に嫌はれたことなどは決して無い。最も快濶な人、俠氣のある人として級中には尊敬された。一見磊落な性質であるが、極めて細心な勉强家で、學校のノートなども綺麗に丁寧に書かれたとおもふ。どの學科もよく出來たので、大學へ入る前の年は全級の首席を占めて居たのである。大學卒業後永らく英國に居つて歸朝した時は、昔の書生時代とは違つて、英國紳士風にキチンと襟飾などを着けたが、唯それだけの相違で依然たる舊山座君であつた。世間では山座君を唯三國志時代の豪傑のやうに思つて居るが、非常な緻密な頭腦を有つて居る勤勉家であるのである。大凡事業に成功するのには必ず一面に豪放な淸濁併せ呑むの度量がなければならぬと同時に、又細緻な着眼と研究を忘れてはならぬ。余は山座君の性行が此の點に於て、成功者たるの資格を備へて居るとおもふ。外交官としては最も適任と信ずる。いつも愉快さうな氣分が眉宇の間に現はれて居て、快活な笑聲が人を引付ける力がある。光風霽月一言でいへば男らしい男である。今でも時々同窓會をやるが、山座君が居ないと寂しいやうに感ずる。

△山座公使の一方面

仙朶谿隱士

私は山座の人物について餘り深くは知らぬが、只傍觀者として今日まで山座の遣つたことを觀察して見ると、あの人には二つの方面があると思ふ。

其一つは外務省中に於ける對外硬の代表者見たいな觀があることである。從來日本の外交は伊藤、陸奧より小村に至るまで、歐洲列國の形勢を常に眼中に置いて　我實力以上の事を、外交でやるのは危險と考へて來たものである。而して之が常に外交軟弱といふ非難を得る原因となつて居つた。然しながら此方針の、一つの取るべき所は、外交では冒險をやらないといふことである。彼の李鴻章とか那翁三世とかの如きは、隨分危い狂言をやつたり、又種々の策略を弄したりしたが、然し實力がそ

れに伴はなかつたが爲めに一時は成功と見えても、最後には失敗することになつた。日本の外交には花々しい成功が無かつた――若し强いて求めれば陸奥の條約改正位が稍々花々しいといへるかも知れぬが、大して花々しい成功が無かつたと共に、又國家を覆へすといふやうな遣り損ひもない。そこは所謂對支軟を辯護する餘地のある所と考へる。そこで外務省の人といへば多くは、外務省傳來の氣風の人ばかりで、日本人からはハイカラとか軟弱とかいはるゝ――詰り外國人の仲間入をする爲めに服裝言語の末に至るまで細心の注意を拂ふといふやうな連中ばかりである。處が、其中でたつた一人山座圓次郎なるものがあつて、大酒を飲み、大言を吐き、倫敦に行つて居つても、何が一番苦しいかといへば日本服を着られぬ事だなどゝいつて、恰かも福岡の玄洋社の代表者たるかの如き觀をなして居る。そこで所謂對外軟の外交に慊らぬ所謂對外硬の連中からは山座一人が囑目せられて、山座は頼もしい。山座でなければ面白い事が出來ぬといふやうに評判された。他の人ならあゝいふ豪傑連と酒を飲むことなどを避けるが山座は自ら求めてやる。又一つは彼の有名な神鞭知常の娘を貰つたなどいふ事も人望の基となつて、今の外務省の遣口に慊らぬ連中はすべて山座に向て非常な希望を囑することになつた。

處が私の觀る所によれば、山座には他の一つの方面がある。それは何かといふと、さういふ樣に强がりの風であるが、頗る事理に明かであつて、其實際に遣る事は決して强いやうな事をしない。例へばポーツマウス條約の時なども小村に隨いて行つて小村の唯一の相談相手――少くとも唯一の股肱として彼を助けた。金子堅太郎なども居つて彼是やつたけれども、小村は自分以外には一番山座を頼みにして居つたらしい。然るにポーツマウスの結果はあの通りであつて、國民の憤激を買ふ事になつたが、山座も小村を援けて、之より外に遣り樣がないといふ決心で、平氣で歸つて來た。それから後倫敦あたりでも加藤高明の下に居り、又内田康哉の下でも使はれて居つた。處が加藤や内田は固より伊藤、陸奥流の外交家で、所謂對外軟の組である。殊に彼等は几帳面の人間で酒も飲まぬ。内田は元は飲んだが近來は餘り飲まない。二人共所謂文明流の外交家である。處が山座は此等の几帳面な、細心な、文明的と稱する外交家に使はれて、非常に信用され、山座ならば安心が出來る、將來は必らず大成すべしと囑目される所を觀ると、彼の豪傑といふのは只表面が豪傑風といふ事であつて、中には頗る細心な所があり、腦髓も明敏であつて、事に處して頗る責任を重んずる所があると見える。彼の世間の豪傑連が山座を自分の味方として、自分等の氣に喰はぬ事をしても之を尤めぬのは、山座が今日まで責任の位置に立たぬからであるか、又其好む所に僻して居るのか、自分にはよく分らない。寧ろ一種の不思議と思ふ。

今度山座が支那の公使となつて、赴任早々南京事件が起つたのは、帝國にとつては不幸此上ないが、山座にとつては餘程幸福であつたと思ふ。といふのは彼の豪傑連などは山座の送別會の席上で、袁世凱などに對して隨分無遠慮な事を言つた。そんな事は勿論袁の方に分つて居るから、山座はどうしても南方贔負の人と思つたに相違はない。出迎をせぬかと

か又例の石投げ事件などの起つたのも或は偶然の事かも知れぬが、又平常の感情が自ら發露したものとも見らるゝ。それで若し何事もなかつたならば、袁最負といはるゝ伊集院の後釜に据つたのであるから、隨分遣りに惡かつたに相違ない。然るにあゝいふ事件が起つて、山座と直接交渉するの幕が開けて來た。而して實際に交渉して見れば、山座の豪傑風の一面よりは、寧ろ山座の細心にして文明的なる方面に接觸することが出來て、頗る意外の感をなしたに違ひない。今度一二條件が引懸つて居るに拘らず、全體としては可なり早く決定したのは、世間でも之を山座の手腕と見、又袁世凱も山座に對する考が一變して、山座は話せる男と思つたによるであらう。今度の外交に於て十分其手腕を揮ふことが出來たら今後益々其力量を發揚するの機會を作り得るだらうと思ふ。

△書生時代の「山座」

東京美術學校長　正木直彦

山座は昔から變つてゐましたよ。私が一番最初にあの男は隨分變つてゐるなと思つたのは、協立學校に入學したばかりの事でした。明治十五六年の頃でせう。其時分彼は上田といふ姓でした――何ういふ譯で山座と改姓したのかそれは知りませんが――或時今の高橋是淸さんが、其當時亞米利加から歸つて英語の敎師をして居られた時分で、我々は高橋さんに就いて英語を敎はつてゐたものです。ところが學生中に一人、恐しく御饒舌（しやべり）な生意氣な男があつて、敎室內で一人で饒舌つてゐて蒼蠅くて仕方がなかつたものですから、高橋さんも其男を譴責しておいでになつたのですが廢めない。すると其時後ろの方に腰掛けてゐた山座がヌツと立つて、例の肩を半分いからしながら其男の側へ行つたかと思ふと、握りしめた拳固でポカンと一つ喰はして、其儘物も言はず、素知らぬ顏をして自分の席へ歸つて行つた。私らも呆氣に取られて見てゐたが、それから其氣障な男もスツカリ靜まり歸つて了つたことがありました。これが本當に不言實行の男とでも言ふのでせうか。

もう一つ山座は學生時代から能く酒を飲みました。寄宿舍時代から彼は本を讀むに貧乏德利を股倉で暖めて、時々出しては飲んだものです。其時分の寄宿舍は、今から思ふとお話にならぬ程亂暴だつたですが、土曜日の晩だけは寄宿舍に門限が無かつたものです。すると先生早速豐國（牛肉屋）へ行つて酒を飲むのはよいが、醉つはらつてグウー／＼其處で寢て了つたものです。毎度の事ですから豐國でも別に起しもせずに、スツカリ客が歸つて店を仕舞ふ時分まで靜かに寢させておいて、もういよ／＼寢るといふ時に料理番から下足番までが寄つてたかつて山座を擔いで寄宿舍まで送り込んだものです。

が何しろ豪い男には相違ありません。學問も能く出來た方で、確か首席を占めた事もあるでせう、少くとも二三番を下らなかつたと思ひます。何をさせてもねつい男だといふ事は事實です。其例は試驗の時に一番後

まで殘つて時間の有る限りは、級(クラス)の者がみんな一人も居なくなつても、平氣で答案を書いて試驗委員を困らせたのが山座です。いつでも一番お仕舞に答案を出すのは山座に極つてゐたのです。

外交官といへばコスメチックや香水で、白粉まで塗つて外國の貴婦人仲間に取入つて仕事をしやうとする中に、隨分思ひ切つて風變りな男だと思ひます。けれども何も外交といへは外國の貴婦人に好かれなくては仕事が出來ないときまつた事もない以上、彼も適任者だと言つて差支ないと思ひます。

△唯一の支那公使適任者

小川平吉

山座氏と私とは仝時代に大學を出たのであるが、在學中から今日に至るまで親交を續けて居る。山座氏は英法、私は佛法であつたが、二人共酒にかけては人にひけを取らぬ方で、其頃から一所に飲んだことは少くないが、然し氏と親しくなつたのは在學中よりも寧ろ學校を出てからで近衛公や神鞭知常氏や又一般の外交問題の關係からである。

山座氏の酒の飲み振りについて話せとの御注文であるが、別に改つていふ程の事もない。兎に角酒は好きでよく飲むけれども、酒の爲めにしくじつたとか、仕事が不十分であつたとかいふ事は先づない。昔は酒量は殆んど限りなしといふ方で、いくら飲んでも飲めぬといふ事がなかつたが、近來は餘り痛飲はせぬやうである。然し今でも一升位は平氣である。いくらか早く醉ふといふ傾きがあるが、少し醉ふと、其れ以上に醉ふといふことは滅多にない。日本酒が一番好き、ビールが其次ぎで、あんまり氣焰などを吐かず、始終笑顏を作りながら飲んで居る。此笑顏を作ることがなか／＼先生のお手のもので、笑ひ方が實に旨い。いくら酒を飲んでも人と衝突したり喧嘩をしたりすることはなか／＼しない。惡るくいへば横着ともいへやうし、よくいへば度量が大きいともいへやう。甞てこんな事があつた。外務大臣の夜會で、山口熊野氏が醉つて山座の頭から酒をかけた。一體山口は山座を好きな方であるが、其夜はどうかした機會(はづみ)から、山座を罵つて「貴樣も官僚系でいかぬ」とかいつて酒をザア／＼頭からかけた。處が山座は一向平氣で、酒を拭からともせず、只笑つてゐた。で山口は後で大いに恥ぢて詫をした事がある。さういふ風でなか／＼怒るやうな事はしない、非常に太っ腹な所がある。

酒を飲むものは一般に亂れるものだが、山座はなか／＼亂れない。彼は飲まなくても飲んだやうな顏をして居るし、又醉うても其爲めに平常と變らぬ。つまり何時でも醉つたやうな風をして居つて、そして旨く調和を取つて行く。殊に著しい事は近年は酒を飲んでも婦人に對する關係などはない。學校時代にはよく女郎買などをやつたものだが、此頃は品行が非常によくなつた。

先にも話した通り、山座は酒を飲んでゐても用はぐん／＼やる。又飲

んでゐながら人に對する具合なども餘程旨い。日露戰爭前の露西亞との交渉はなか／＼面倒なものであつて、事務も大變多かつたし、又所謂高等政略についても非常の考慮を費さねばならなかつた。私達は是非戰爭をさせようといふので、毎日外務省へ出掛けたものだが、當時先生は政務局長の要職に居つて、殆んど晝夜の區別なく働いて、その非凡な勢力を發揮した。其時分には陸海軍の軍務局長などを初め朝野の訪客が非常に多かつたのであるが、先生は自分の室にビールを買ひ込んで置いて時時之を引かけたりして居つた。私なども其御馳走に預つたことがある。政務局長室でビールを飲みながら執務するなどは全く山座式である。然し幾らビールを飲んでも仕事は出來る。人の何倍もやる。之も亦全く山座式である。

　今度の事件についても、私等は山座が居るから頼もしいと思つて居る。支那人に馬鹿にされたり、袁世凱に籠絡されたり又世間でいふやうに態度が軟弱だとかいふ事も、山座には決してない。去年の暮かにも山座は一寸支那に行つたが、あの時などもなか／＼よかつた。眞に支那を相手に國家の長策を立て得るものは今日は山座を措いて他にないので、私達は今後支那の外交はいくらか振ふだらうと思ふ。

　又山座の最も感心な所は、氏は實に親切な、情に篤い人で、國の學生でも友人でも非常に愛する。私が牢へぶち込まれた時に、先生は小村と共に支那へ行つて居つた。そこで私は監獄から餘程面白い手紙をやつた。すると先生は牢の中で寒からうといふて山猫の皮を持つて來て呉れた。そして私が牢から出た時は、本當に涙を流して喜んで呉れた。あの位友情に篤い人は當世に珍らしいと思ふ。

　私の入牢のことを話した序に、今一つ先生の性格の分る話をすると、彼の三十八年九月五日の日比谷事件——あの日に私は引張られて行つたが、恰度其同じ日に先生が米國から出したハガキが面白い。眞黒な夜の繪ハガキに「嗚呼條約成れり。九月五日。午後三時調印」と書いて、「横濱までは歸着し得るならんか」と書き添へてあつた。そして日本に着いてから、あの日比谷の國民大運動の事を電報で知つた時は、内心實に嬉しかつたといつて居つた。以て先生のあの時の心情を察するに足ると思ふ。こんな取留めのない話だから、よいやうに書いて置いて呉れ玉へ。

俳句

蟀

高田蝶衣選

蟀や駒換へに鞍も繕ふ夜　暘谷
蟀や御學問所は夜をとぢて　同
旅立の鑽火定めを蟀なく　同
蟀や詮議の軸の謂れ聽く　同
蟀に禰宜寒う末社灯し去る　羊子
喪にあれば蟀に夜々の雨影を　同
塚ゆふべ蟀に魔除灯捨て過ぎし　同
蟀や雨漏ると鉢も並め寢し　同
蟀や埋み樋に泥の香たつ庭　明兮
蟀や秋錢鳴る笛乞食　同

秩父長瀞

月に泛ぶ小舟や蟀と泉聲と　同
蟀や沈默の膝に觸れてとぶ　芳葩
蟀や爐火を起すに焚く秣　同
蟀や織り垂るゝ衣を踏む足に　同

蟀や挽きあます木に楔さす　朱雀
蟀や改宗の不安を誘ふ時　同
師の一問を弟子の鳩首や蟀に　同
蟀や橋錢拾ふ草の中　帯柿
蟀や寄進の瓦鱗置　同
蟀に夜半の嵐や烽火臺　同
蟀や推肥切り缺く小屋の朝　蝶羽
立琴にすだく夫戀ふ蟀か　同
蟀や長々し夜の句三昧　同
原草を蟀なきぬ露なげに　翠月
こほろぎや逼塞の人の賣る道具　同
蟀や讀みさして灯ともしに立つ　銀竹
こほろぎや葺屑月に掃き溜めし　同
廂間(ひあはひ)を覗くともなくこほろぎに　三蘇
流人の碑に隣り住んで蟀の秋　同
蟀に急がれ縫ひの燭を剪る　三光鳥
農具祭る臼の灯白らむ蟀に　同
こほろぎや壁へ痩せつく貧法師　美田
蟀や蜘蛛の糸とぶ夜の家　同
蟀や納屋へ灯して漁具運ばるゝ　赤傘人
こほろぎの土間去らず幾夜さの雨　同

祕め酒のほとり蟀なく屋後　杜牛
旅歸りの夜をもの欲りす蟀に　同
蟀や逢へぬに泣きし戀あらん　諷軒
蟀や旅籠の代を小錢よむ　同
軒の闇蟀に捨つる化粧水　九白
こほろぎや貰ひ溜めの芋朽つる夜に　同
蟀や月邊り雲の小騷ぎす　双柊子
賣り殘す字書の感慨こほろぎに　同
蟀や紡ぐ苧纏れ疾く解けて　花馭史
千人講の宿蟀の聲そゞろ　同
蟀や火をあやまてる御船倉　六段生
こほろぎや芒は矯めのきかぬもの　同
返り咲く山吹にきくこほろぎや　一箕
夜雨毎に蟀瘦せて爐邊に鳴く　同
爐明りによむ馬代や蟀なく　虛靜樓
遺言しのぶ默禱に蟀のなく　同
參禪の灯も更く座下の蟀や　多蛇王
蠟淚に血書卷き返す蟀の窓　同
蟀や村居の書龕古びたる　九覽亭
蟀は思鄉の吟に去りけらし　同
醬油漏るかごと厨の蟀なく　陽中生

こほろぎに竈繕ふ風の秋　三石
蟀や洞窟拜む燭にとぶ　五黃
蟀や寺間借り獄に比す夜あり　草鳥
こほろぎや糞つまりせる籠の鳥　閑寺爐
雨灑ぐ夜の蟀や湖畔亭　北人
蟀の雨細り聲手記の筆をとむ　國郎
返歌せまるを君しぬび泣く蟀に　秋風嶺
蟀や思出を詩に紛らする　水村
硯海の干てこほろぎの鳴くしきり　稻塢
蟀や庵の後ろの石塚に　阿草
都府樓趾蟀すだく月明に　天行子
一葉ごそと蟀に水暮るゝ宿　南樓
こほろぎや伽に參りし小性衆　延子
蟀や冬物の機仕舞ひけり　米村
豆扱ぐに蟀の地深ひそみ鳴く　碧疑滴
蟀や魔除箒につく鼠　ゝ鴉
蟀や露の小家はまだ起きず　旭洋
軒荒れて蟀も手枕に來る　抜山
こほろぎや水脈外れの空井戸に　葉山
蟀の啼きて秋立つを知る書院　天葉
蟀や菰荷解く倉肌冷ゆる　空鳥

蟀も更くるにすねし子と對す　思石
しみ〴〵と月に鳴く蟀を泣く夜哉　省三

悼
蟀や想の亂れをなく頻り　奇溪

十六夜

十六夜や江に寄り合うて泊る船　芳葩
十六夜の芋落しゆく車かな　同
十六夜や水に果ある稲光　同
十六夜を飛ぶ鷺や離宮木深きに　暘谷
窓に刷く連峯や十六夜の松　同
十六夜を訪てあらざり船に志士　同
十六夜や月忘れ居る宴の衆　五黄
十六夜の返歌恙の臥戸より　同
十六夜や小家の中に抽けて寺　同
病落とし汲む十六夜の井水哉　明兮
十六夜や奥の院への梯子路　同
膳(かしはで)の氣儘酒など十六夜に　六段生
十六夜や灘目より潮滿てる岬　同
十六夜を旅館の家鴨なほ水に　秋風嶺
十六夜のむら竹を擦る飛鳥あり　同

十六夜を君の詩に酬ゆ一魚得て　葉山
十六夜や聖堂の墻灯の漏れて　双柊子
避難港十六夜を岬火淋しかり　羊子
藻笛上手吹く兒も浦の十六夜　銀竹
十六夜や砂掘舟の合圖笛　閑寺爐
十六夜を光る佛膳の蒔繪かな　北人
十六夜や宮森と火の見高き村　陽中生
十六夜や町の灯を見る舟住居　米村
既望空ほのめくは沖に船出しぬ　碧疑滴
十六夜やありの實くれし機の主　延子
雲綻びて十六夜の月甍海に　天行子
十六夜や白き水迯ぐ小笹原　南樓
階前の梧葉婆娑と十六夜の冷え　多蛇王
十六夜や露土這ひて城ほのと　一箕
十六夜や月の名どころ歌名所　諷軒
十六夜や目疣まじなふ摺子木に　ゝ鴉
檣林をわけて漕ぐ既望あかるみへ　三蘇
十六夜の高汐白し濱の松　旭洋
十六夜や門前の杉魔搖らぎす　九白
十六夜や綺羅着し人の衿冷か　國郎
十六夜やしばし灯ともす舟よそひ　蝶羽

藍瓶に人立てり十六夜の影　稲塢
十六夜や芭蕉のかげの蟲の闇　正吹
佐渡へこす越後の舟や十六夜　探花

課題　尾花(十五句)猿酒(十五句)……十月五日〆切
　　　秋雜(十五句)歳暮祝(十五句)十一月五日〆切
注意。各題別紙、淡路國釜口村高田蝶衣宛

今月も亦頁數超過の爲め和歌を掲載するを得ざりしは編者の頗る遺憾とする所也。此旨謹んで選者投稿者及び讀者に謝す。

評論

終を得ざる巴爾幹戰爭

一

勃牙利の運命一何ぞ慘憺たる、西方に在りては希塞兩國に屈服し、東方に在りては土耳其に讓歩す、最近君斯丹丁堡講和協議に於てアドリアノーブル及びキルクキリセの土國還附を承諾したるが如き、眞に人をして其苦境を痛ましむ、

アドリアノーブルは、土耳其國民が捨つるに忍びざる舊都也、一三六一年ムラッド一世之を占領し爾後諸王之に居り、一四五三年君斯丹丁堡陷落に及んで、始めて帝都を後者に移したりき、回教の名刹多く、セリ

ム二世寺院の如き最も著名なる所也、況んや其位置ッンヂヤ、アルダ兩河流相合するの地に存し、戰略的要地たり、之を失はゞ君斯丹丁堡の防守困難なる可きに於てをや、土耳其官民が熱心に之を維持せんとするも、何の不思議か之あらん、然かも同地は亦た勃牙利に執りても離す能はざるの要地たり、何となれば勃牙利は獨り黑海に面するを足れりとせず、出口をエジャン海に求むるもの久し、而してエジャン海の良港デヾアガッチは其熱望したる所、今回幸ひに之を獲得せりと雖も、アドリアノープルは實はデ港行の路上に當る、從つて今更らア市を土耳其に還附するが如きは、到底其忍ぶ所にあらざる可ければ也、殊に勃牙利にしてア市を放棄するの意ありたらん乎、巴爾幹戰爭は、僅かに二箇月を以て終り、講和條約は昨年末に成立するを得たりしならん、然るに當時勃牙利は飽く迄ア市獲得を期し、多大の犧牲を生ずるも悔ゐざりしにあらざる乎、而して今や飜然却つてア市を土國に讓つて怨まず、是れ抑も如何の理由かある、

二

說くものは曰く是れ土勃同盟を形成して希塞同盟に當らんと欲する也と、其れ或は然らん、然かも勃牙利は昨年十月、基督敎國の代表者を以て居り、新十字軍の頭梁として半月旗と回敎徒とを退治し、之を亞細亞に放逐せんと公言したるものにあらざる乎、而して今や一朝豹變、憐愍を其仇敵たる回敎國に乞はんとす、其內心の惱苦如何許りぞや、

蓋し勃牙利は始め餘り多く希塞等同盟國に信賴し、又た歐州列强に信賴したりき、其後そが信賴の誤れるを悟りしかども、時期已に遲かりき、見よ勃牙利軍が土軍の精英をスレシャに喰止め、鮮血杵を漂はすの激戰をなす間、希臘、塞爾比兩軍は無人境を往くが如くマセドニア及びアルバニアを席捲したるにあらざる乎、而して此兩國は德に酬ゆるに怨を以てし、勃牙利軍の勞苦を稿はずして却て其衰弱に乘じ、突擊以て其獲得せるものをも奪ひたるにあらざる乎、次ぎに露墺諸强は如何、ブカレスト講和條約の修正を內約し乍ら之を實行せざるのみならず、今回土軍アドリアノープル撤退要求問題に關しても、極めて冷淡なりしにはあらざる乎、又た英國外相サー、グレーの如き、アドリアノープルを勃牙利に附す可く決定せる倫敦講和條約を斡旋し乍ら、今や宛然對岸火視の態度を執れるにあらざる乎、茲に於て乎勃牙利政治家も、遂に基督敎國

の却て頼むに足らざるを見たりしならん、同時に自國の兵力は最早や土耳其とも爭ふの能力なきを顧み、寧ろ土耳其の要求を寛恕し、將來の接近を畫策するに至りしならん、

吾人は今日土勃同盟の成立如何を斷ずること無かるべし、否な之を論ずるの勇氣もあらざる也、吁嗟勃牙利の土耳其征伐は勇ましく始まりしに似ず、今や悲しく終るに至れり、然り、是れ悲劇也、吾人は唯之を感ぜんのみ、之を論ずるの力あらざる也、

愛蘭自治問題

英國自由黨の元老ロアバーン卿、愛蘭自治問題を自由統一兩黨領袖會議に附し、妥協解決を謀らんことを提議す、一波起つて萬波生ず、今や英國の言論界は甲論乙駁、殆んど此の提案の批評に熱中しつゝあるものの如し、

何が故に斯くの如き提議は起りたる、是思ふに愛蘭法案の通過が、愛蘭の擾亂を釀成す可き憂あるを以てならん、顧みるに同法案は昨年四月十一日下院に提出せられ、五月九日下院の第二讀會を通過し、本年一月其第三讀會を通過したりと雖も、統一黨多數の上院は一月三十日一擊の下に之を破碎したりき、然るに自由黨は豫しめ上院の反對を期したるを以て、毫も屈せず、今春新議會期始まると共に直ちに同案を提出し七月七日百〇九の多數を以て下院を通過したりしが、上院は又た七月十八日二百三十八の多數を以て之を否決したりき、されどこは毫も愛蘭案の運命に禍ひするものにあらず、何ぞや、英國議院法には「一法案にして三回引續き下院に於て可決せられ且つ其第一回第二讀會通過の日と第三回第三讀會通過の日との間に滿二年を經過したる時は上院の贊否に關らず法律として發布せらる可き效力を生ず」との規定あるを以て也、換言すれば、今より八箇月以後に於て三度び下院を通過せん乎同案は上院の贊否如何に係らず、法律となる可きを以て也。

然かも形勢斯くの如く有望なる裏には、甚だ憂ふ可き狀情の潜在否な寧ろ公在するものなしとせず、他無し、愛蘭ウルスターは他地方と異り英人の血多く、又其宗教も他地方が羅馬教たるに反し、新教に屬するものたり、從つて、他地方が愛蘭の政治的獨立を歡迎するに反し、ウ州は寧ろ之を悲み、武力を以てしても之に

反抗せんとするを見る、彼等住民にして其聲言する如く眞に此擧に出でん乎、英國政府は英國に忠實なる臣民を征伐するが爲め、軍隊を動かすの誘を免れざるに至る可き也、

然りと雖も、吾人は以上の事情あるが故を以て此妥協會議の成功を豫期する能はず、試みに思へ、自由黨と統一黨との爭ひは區々たる末節に存せずして、根本的主義に存するにあらずや、愛蘭議會に於ける新敎黨議員割合增加、若くは宗敎的保障等に存せずして、愛蘭議會の設立其者に存するにあらずや、況んや此紛爭は一八八六年以來の歷史を有し、一期發生の政爭事件にあらざるをや、就中統一黨の如きは、部分的讓歩に滿足して、愛蘭自治の共同責任者たるを欲するものにあらざる可きをや、

要するに妥協會議說は、愛蘭問題決定切迫せる際猶一大難局の存在するてふ事實を反映したるものと言ふ可き而已、然かも恐らくは實現し難かる可く、又實現すとも、到底成功を見ること能はざらん乎、

墺國の伊人排斥

人種的排斥、何ぞ獨り米國の專有物ならん哉、吾人は墺國がトリエスト港の伊太利人排斥を見て、轉た痛慨の想ひを禁ずる能はず、

最近トリエスト市に於ては公共工事に對し一切外國人使用を嚴禁したりき、是迄多年同等に從事したる多數の伊太利人は爲めに失業の難に迫らざるを得ざりき、而して其原因を質すれば、所謂スロウエン黨と社會黨とが聯合以て國內勞働者に媚を呈したるものなるに似たり、其徑路及事情何んぞ加利福尼亞州民の支那人排斥（加州は久しく支那人を公共工事に使用したりしも三十餘年前に之を禁止したりき）に髣髴たるや、獨り注意す可きは、駐墺伊國大使の抗議が如何に墺國政府を動かす乎是也、三國同盟果して鞏固なる乎、墺國政府果して公明の心事を有する乎、此兩問題に答ふるものは、唯だ墺國政府がトリエスト市取締規則を取消すや否やに在るのみ、

米國對墨西哥

米國議會は、十萬弗を支出して在墨米人の引揚げを獎勵し、墨西哥大統領ウエルタ氏は、教書を議會に送りて、將來米艦の墨國港滯在を謝絕す可しと說く、以て米墨其後の形勢、面白からざるを見る可し、

知らずウヰルソン氏は遂に斷乎其潔癖を發揮し、マデロ大統領の殺害犯人(ウエルタ氏)を墨國政界より放逐せんと欲する乎、是れ一見理想的の行動なるが如し、然かも是れ自國の道徳的標準を他國に强ゐるの謗あるを奈何せん、况んや中米及南米諸國に至ては、ウヰルソン氏が標榜するが如く、爾かく單純に米國の意思を解釋せざる可きに於てをや、

干渉は言ひ易し、然かも行ひ難し、殊に今日の干渉は、多少墨國に於ける米國の地位を鞏固にするとも、是れやがて中南米諸邦の不信と疑惑とを買ふの惡策也、然らば則ち誰かウヰルソン、ブライアン兩君の再考を利とせざるものぞや、

支那の徴兵問題

支那陸軍卿段旗瑞說を成して曰く、支那陸軍を救ふの道は、唯だ徴兵制あるのみ、歷史を按するに漢、唐時代に同制を採りたることありき、世人をして國土の爲めに武器を執るの必要を解せしむるは、是則ち國土を愛するの心を生ぜしむる所以也と、

支那に徴兵制を採用し以て張勳流の無賴漢的兵士に代ゆるは、蓋し今日の要務なる可き乎、然かも段將軍の徴兵愛國論は冠履顚倒の議論也、蓋し吾人は愛國心存して然る後徴兵制度存するを知る、未だ曾つて徴兵制存して然る後愛國心生ずるを知らざる也、

西藏問題會議

十月印度シムラに西藏會議を開かんとす、而して英國實に之が斡旋者たり、是れ何の兆ぞ、

吁嗟西藏は支那の領土にあらずや、藩屬にあらずや、然るに主權者たる支那代表者と屬領たる西藏代表者との會議が、外國の斡旋に依り外國の領土に開かれざる可からずとは何事ぞや、

一葉落ちて天下の秋を知る、支那は已に西藏を喪失し、英國來つて之に代らんとす、是れ言はずして明か也、何ぞ必らずしもシムラ會議の結果を待たん哉、

紐育市長逝去

米國紐育市長ケイノア氏九月長逝す、隣國一市長の死、我に於て何かあらん、然かもケイノア氏の死は、則ち之を記せざる可からず、

彼れや明治四十三年市長就任以來、市政改革を以て心とし、他を顧慮せず、大統領候補を以て擬するもの

あるや斷乎斥けて曰く、予は職務を知る、中途職を抛つて市民を禍ゐすることをなさゞる也と、心事の光明にして人格の崇高なる、吾人は其比偶を我が市政界に見る能はざるを遺憾とす。

新刊批評と紹介

△社會問題と植民問題

永井柳太郎著
新興社發行

現在及將來の世界の政治的問題は繫りて社會問題と、殖民問題とに在り。此書著者が遠大の抱負を以て此二問題を研究評論したるもの。何れの時にか絕ゆべき激甚なる武裝競爭より說き起して、現在世界の社會狀態と今後の殖民政策とを論ずる邊り、世界の大勢をまざ〱と眼前に披瀝し來つて、身に迫る緊急なる問題に氣付かしむ。總ての問題に先づ須く社會問題の解決に發せよ。此書現在に生を享くる者の必ず見逝すべからざるものといふべし。(定價金壹圓五拾錢)

△華嚴發達史

龜谷聖馨
河野法雲共著
名敎學會發行

本書は佛敎の根本法輪たる華嚴の敎理を究め、其歷史的發達の跡を明かにしたるものにして、元來華嚴の敎理は其說く所餘りに高遠にして其流布は勿論、其研究さへも忽諸にせられたるものなるが、著者之を憾みとして因つて本書を上梓す。高遠奧妙の敎理を說くに趣味ある文筆を以てす。現代に得易からざる良書たるを信ず。(定價金貳圓)

△漂泊

中村星湖著
春陽堂發行

星湖氏の近業「蛆蟲のやうに」外九篇の短篇を收めたるものである。常に浮薄なる我文壇の一角に位し、眞摯と冷靜なる不斷の努力を以て眞面目なる自然主義的態度を失はざる者之を我星湖氏に見ることが出來る。此書の卷頭に載せられたる「蛆蟲のやうに」の如きは實に氏の客觀的平面的描寫の特色を發揮して渾熟の域に達したるものといつてよい。記者は此書の更に弘く讀まれんことを望む者である。(定價金八拾錢)

△西鶴一代男物語

石川巖著
東紅書院發行

西鶴を弘く讀ましめんとして「好色一代男」を平易に書直したものである。難解晦澁な彼西鶴の文章は巧みにこなされて誰にでも解り易いやうに書かれてゐる。特に西鶴物拂底の現在に於いて江湖の需要を滿して歡迎せらるゝであらう。(定價金七拾錢)

△動物と人生

宮島幹之助著
南山堂發行

本書は猿馬牛鼠毒蛇蚊蠅蚤恙蟲及寄生蟲の十種の動物を擇んで人生と如何に密接な關係を有するか又其動物の性質を明かにし、其害を除き其利を擧げる方法を講じたものである。動物と人間生活とは實に密接不離の關係を有する。今此關係を詳說するに綿密なる挿畫を以てし、平易明快なる筆に上せて極めて一般的に何人の讀過をも妨げざらんとする容易の程を窺ふとが出來る。家庭に備へて必讀すべく實益と趣味とを與ふる良書であると思ふ。(定價金貳圓五拾錢)

△支那分割論附袁世凱

酒卷貞一郎著
啓成社發行

其形勢日に混沌として定まりなきを現在の中華民國とす、內は政爭內亂相繼ぎ、外は列國の乘ぜんとして其機を窺ふあり。立國の基礎甚だ薄弱にして今後の變化知るべからず。實に支那は疑問の焦點にして、世界問題の中心たり、著者其歷史的經過を敍して、結局分裂分割の悲運に終

るの已むを得ざるべきを論じたるもの即本書也。附錄袁世凱は一代の怪傑袁の面目を遺憾なく論じ盡して餘す所無し。(定價金貳圓二十錢)

△大疑の前　　沼波瓊音著　東亞堂發行

折に觸れ時に當つて湧き出づる感想を綴つた著者が心の閃きである。思索もあれば警句もあり。哲學ともなれば藝術ともなつて表れてゐる。(定價金七拾錢)

△日本音樂の話　　鈴木鼓村著　書報社發行

有りとあらゆる日本音樂に就いて趣味ある研究を語つたものである。古い昔からの淵源沿革及歷史的發達推移變遷を述べ各種の音樂神樂催馬樂朗詠の類より謠曲長唄義太夫一中節の類に至るまで、一讀實に津々として盡きざる興味を覺えしめる。(定價金二圓五十錢)

△セネカ論說集　　高橋五郎譯　玄黃社發行

羅馬の哲學者にして政治家たりしセネカの論文を譯したるもの也。現代讀書界の缺陷を補ふ爲めに記者は高橋氏の努力に對して感謝せざるべからざるを覺ゆ。(定價金壹圓六拾錢)

△早稻田生活　　南北社發行

都の西北に屹立して、私學の覇を唱ふる早稻田大學の特長と共面目及現在の狀態を明かにしたるものにして、學生父兄共に一讀すべき興味ある讀物たるべし。(定價金壹圓)

△乃木靜子　　冬湖學人著　東華堂發行

乃木大將夫人の事蹟を傳へたる烈婦傳の一也。大將夫人を語れる最初の物にして家庭修養の一助ともなるべし。(定價金九拾五錢)

△記書生活硬派軟派　　湯朝觀明著　鈴木書店發行

硬派は時事を論じ、軟派は三面を語る。面白き書物也。(六拾五錢)

△樂　園　　田山花袋著　植竹書院發行

現代傑作叢書の第四篇として發行せられたる花袋氏の「樂園」外六篇を收めたるもの也。花袋氏の作物は既に定評あり。筆益々圓熟して一讀大家の筆たるを首肯かしむ。「樂園」は殊に本誌に掲載せられた當時已に世の好評を博したるもの、他の篇々とり〳〵に作者の非凡なる手腕を窺ふを得。(定價金五拾錢)

△噴火口　　高島米峯著　丙午出版社發行

書く所婦人問題あり、乃木大將論あり、三教會同論あり、處世論あり禁酒禁煙の實驗あり、淺紙論より、屁の功力に及ぶあらゆる問題に對つて氏の意見を發表したる元氣のよい一種の人生批評である。そこに本書の價も特長もすべての物が含まれてゐる。(定價金八拾錢)

△通俗基督傳　　山室軍平著　救世軍本營發行

一般何人にも讀まれるやうに極めて通俗に書いた「基督傳」である。紙質は粗惡であるが內容は極めて眞面目な、信仰に入らしめんための努力の結晶である。そこに此書の價値も難有味もある譯である。記者は著者此書の一般普及を望んで已まざる者である。(定價金二十五錢)

△狐禪狸詩 (定價金六拾錢)　　釋清潭著　丙午出版社發行

△青年雄辯集 (定價金九拾錢)　　大日本雄辯會編輯部著　同會發行

△算術模範例題解法 (定價金壹圓)　　野口秀倣著　敬文館發行

△千束町より (定價金六拾五錢)　　村崎しづ子著　溪文館發行

△活動寫眞 (定價金參拾五錢)　　筑波紫郎著　講談社發行

△ユニオン第四讀本詳解講義 (定價壹圓四拾錢)　　專法久太郎　間崎勝義共著　敬文館發行

△バットボーイ (定價五拾錢)　　長谷部湘南著　東亞堂發行

△今の女 (定價八拾錢)　　磯村春子著　文明堂發行

△密月日記 (定價九拾錢)　　一條忠衞著　東紅書院發行

△烈火俠妓　　講談社編並發行

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京朝日新聞記者

松崎天民著

岡本一平畫伯裝幀

中央公論に連載して讀書界の好評を博したるもの、こゝに美裝して再び江湖に見ゆ、藝妓、娼妓、妾、女優、女教師、女將、看護婦、狂婦人など、八人の女性を捉へ來りて著者獨得の人生觀、運命觀を語るに、觀察、描寫共に新様の趣味溢るゝものあり。

女八人

四六判全一冊
四百六十頁

總クロース金文字
天金箱入優美裝釘

正價金壹圓　送料十二錢

好評五版

淪落の女

四六判瀟洒裝幀
正價金五十錢
郵税金六錢

三版出來

人生探訪

四六判三百五十頁
正價金六十五錢
郵税金八錢

(中付二の一)

發行所　東京市日本橋區鐵砲町六番地　振替東京(壹五〇五六番)　磯部甲陽堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付二の四）

お鶴

長田幹彦

十二月ももう末近くなつてしまつたので、さすがの津村も今度こそうかうかしてゐられなくなつて、そろそろ歸京の支度に取懸つた。長い間都會の放縱な生活に耽湎してゐた報ゐて、彼はその年の夏頃からひどく健康を害つてゐたので、その保養かたがた、またひとつには萎微しつくした頭腦に自然が與へる清新な力を充分に吹き込んで來るつもりで、丁度十月の中旬に東京を發つて、殆んど二箇月に餘る月日を諏訪の湖畔にあるこの宿屋の二階で暮らしてしまつたのである。併し一度この土地にゐついて見ると、東京で聞いてゐたのとは反對に、溫泉の效力も薄く、それに附近の地がすべて盛んな製絲地なので保養をするには餘りに騷がしくて、初から豫期してゐた效果はまるで得られないと云つても

よかつた。明日は歸らう、明後日は歸らうと思ひ思ひしてゐながら、いつか日數が積つて、一月は二月になり、到頭今日に至るまで延びのびになつてしまつた。

明日はいよいよ此地を發たうといふ日の午後、彼は荷になる衣類や、書籍や、手廻りの小道具など悉皆行李につめて、鐵道便で一足先に東京へ送り還してしまつた。自分は手提げ鞄ひとつの身輕な扮装で、松本から長野へ出て、黄褐色にうら枯れた南信濃の高原をひとまはり廻遊したあとで歸京する手筈にして、その旅の支度もすつかり整へてしまつた。併しいざ別れるとなるとさすがに長い間居馴染んだ土地だけに妙に名殘りが惜まれて、窓からすぐ下に展がつて見える諏訪湖や鹽尻のなだらかな山脈の彼方に聳え立つてゐる眞白な槍が嶽の姿などが今更のやうにもの珍らしく、離れ難いやうに思はれてならなかつた。で、彼は夕陽が沈む頃、土産ものを買ひに出たついでに、繭倉の立ち續いた町端れや、城跡にある公園や、繩手につゞく遊廓などをぶらついて、妙にうら悲しいやうな遣る瀬ない氣持で此の町に最後の別離を告げた。

行きつけの鬭樓といふ料理店で飲んで、膚を劈くやうな寒い夜風に揉まれながら宿へ歸つて來たのはもうその夜の九時過ぎだつた。歸るとすぐ又酒になつて、姐さんのお君と、お千代は座敷の暇を見てお名殘が惜しいといつて酒の相手にやつて來た。

「到頭お別れになつてしまつたわね。折角お馴染みになつたんだから、いつそお正月までゐて下さればいゝのにねえ。」などゝ云ひ合つてゐる婢達の言葉にも眞實別れを惜しむ心持ちが流れてゐるやうに思は

れて、彼はその婢達に對しても今迄にない親しみを覺えるのであつた。

「私ももう少し居てみたいんだけど、お正月までにはどうしても東京へ歸つてゐなくつちやならない用があるもんだから。……來年になつたら又やつて來るさ。近い處だもの。」彼は婢達に盃をさしながらしんみりした調子て云つた。

「お歸りになる時には皆さんそんなことを仰有るけど、一遍だつて來て下すつたためしはありやしないわ。お歸りになつちまやあこんな田舍のことなんか思ひ出しても下さらないでせうね。」お千代は彼の顏を瞻めながら云つた。

「ほんとにさ。全く東京ほどいゝ處は御坐んせんからねえ。」神田の生れだといふお君は頻りに東京を戀しがつて、「私も自由な體なら津村さんと一緒に歸りたいわ。此の節は東京の事だつて云ふとほんとうにしみじみ懷かしくつて仕樣がないんですもの。」

津村はこんな言葉を聞いてゐるうちに引入れられるやうな氣持になつて、障子の腰硝子から見える寂しい町の燈影を眺めながら少しづゝ口數をきかなくなつて行つた。彼にはこゝが諏訪てはなくて、何處か東京から二百里も三百里もかけ離れた遠い鄕國のやうに思はれ、さうした處て故鄕を同じくした人に出逢つてゐるやうな懷かしさが自然と心に滲んて來た。そして長い間朝晩見馴れたこの婢達の端たないことや、醜い立居ふるまいなぞの記憶がいつの間にか薄くなつて、犇々と迫つて來る夜寒や、障子をならす風の音とゝもに彼等の言葉つきからとりなりまてがすべて別離の夜の情趣にしつくりと溶け合つて

ゐるやうに思はれてならないのであつた。

「でも津村さん、あつちへお歸りになつたつて時々おたよりぐらゐは聞かして下さるでせうね。東京も此頃ぢやしどく變つたつてえからお暇のときには繪葉書でも送つて下さいましな。」荒んだ半生をもつこゐるお君の眼にもその時には眞實東京へ歸り度いらしい素直な感情が閃いてゐた。

「そりや送つてやるとも。もしまたお前さんが東京へ出て來るやうなことになつたら私の宅へ是非寄つてお呉れ。格別なことは出來ないかも知れないけど、いゝ家へでも奉公したい時にはどうにかして世話をしてあげるから。」

「えゝ、有難う御坐んす。是非伺ひます。私もいつまでこんな事をしてもゐられませんから、伯母に賴んで東京で身をかため度いと始終思つてゐるんで御坐んすから、……」

「さうさ。出來るんなら早くさうした方がいゝ。こんなことをして旅から旅へ歩いてゐりや末はどうせ碌なことにやなりやしないからねえ。」

「全くさうで御座んすとも。私が東京を出てからもう五年になりますものねえ。……」

その時、私のすぐ後の廊下の處で何かゞごとりと障子へ觸つたやうな音がした。そのもの音でお君はふつりと話をやめて、怪訝さうにお千代と顏を見合はせた。

「誰れ?」お千代はそれと同時に頓狂な聲を出してそつちへ呼びかけたが、外では返事がない。

「誰れてせう? それとも猫かしら?」と、お君はその儘立上つて、突如障子をさつと開いた。その途

端に誰れかゞばたばたと奥の方へ遁げてゆく足音がしたが、お君はその後から追ひ縋つて、

「厭なお鶴さんだねえ。何んだつてそんな處で立聞なんかしてゐるの。入り度きや入つてお出でなね。」お君はその聲と一緒に朋輩のお鶴の腕をしつかり握つて部屋のなかへ入つて來た。お鶴は入るまいとして、柱の影から紅い袖口だけみせながら爭つてゐたが、お君の力に負かされて到頭くづをれるやうに部屋のうちへ跪け込んで來た。そしてなるべく私の眼にふれないやうにお千代の後へこつそり座つて、その儘低く首を垂れてしまつた。

「まあ、ほんとに變なお鶴さんだよ。何んだつて立聞きなんかしてるの。」お千代は體を斜にひいて息をはづませながら忌々しさうに云つた。

「分つてるぢやないか。お千代さん、きつとかうなんだよ。私達がもしか津村さんを口説いててもゐやしないかと思つて心配して聞いてゐたんだよ。ほら、あれでせう?!」と、お君は思惑ありげな眼つきでお千代に眼配ばせしながら云つた。

「莫迦にしないね。そんならなにも立聞きなんかしないたつて、入つて來て見たらいゝぢやないの。厭な人だよ。」

「そんなに怒らなくつたつていゝぢやないか。まだ子供なんだもの。」と、お君は抑へるやうに云つて、今度は津村の方を振顧りながら櫟つたさうな顔つきになつて、

「ねえ、津村さん。あなたも隨分罪な方ですよ。そんなに濟ましてゐないで、どうせお別れなんだから

お鶴さんの云ふことも聞いておやんなすつたらいゝぢやないの。人助けになりますわ。」

「なにを云つてるんだ。詰まらない。」津村はそれをきくと顔を紅くしながら側を向いてしまつた。今年やつと十六になつたばかりのお鶴は色氣のつきざかりて、誰れそれに惚れてゐるの、誰れそれの後ばかり追懸け歩いてゐるのといふやうな噂が三日とあげず立てられて、今では朋輩仲間のいゝ嬲りものになつてゐた。客の少ない期節なので、男の泊り客といつては表二階に諏訪驛所屬の若い車掌が三人ばかり一日がはりて泊りに來るばかり、奥二階の方にはふりの客を除いては津村たつたひとりだつた。で、自然さまざまな噂は噂を生んて、お鶴が彼に惚れてゐると云ふやうな話は彼の耳にも薄々聞えてゐた。色白のぽつちやりした丸顔の女で山家育ちにしては兎に角眼につく容色てはあつたが、眼の色がいつもどんより濁つてゐて、起居ふるまひのはきはきしない、何處か頭腦の働きに缺けたところのあるやうな女だつた。殊に大飯くらひだといふので朋輩達はいつもその話をしては大笑ひをした。女にかけては可成り經驗の多い津村もさすがにこのお鶴に對しては容色と肉體だけを見て、他は無視するといふやうな寛容な氣にはどうしてもなれなかつた。いろいろな噂が聞えてくる度に心を動かすよりも却つて氣持ちを惡くするやうな場合が多かつた。

お君はさうした津村の氣を知つてか知らないでか、追窮するやうな調子て、

「ねえ、あなた。たつた今夜一晩のお名殘りぢやありませんか。この儘去つておしまひなすつたらどんなに氣を殘すか知れませんよ。」と、云つて、今度は急に笑談らしく、「ねえ、お鶴さん、私にばかり云は

しとかないて、お前さんも此方へ來て何とかお云ひな。折角今まで岡惚れしてゐたのがすつかり無駄になつちまふぢやないかね。」

「厭だよ、お君さんは。」お千代はそれを見ると、態とらしく笑ひ崩れて、「眞面目な顔をしてよくそんなことが云へるわねえ。なんぼ津村さんだつてお鶴さんぢや可哀さうだわ。」

「お前さんはいつもそんなことを云ふけど、ちつとはお鶴さんの氣にもなつておやりな。これて隨分津村さんのことぢや苦勞してゐるんだよ。」

「どうだか知れたもんぢやない。昨夜もこの人は表二階の車掌さんとこへ行つてたんだもの。」お千代は眼の底に反感をあらはに見せながらぢろりとお鶴の方を睨んだ。

「莫迦なことを云ふよ。それとこれとは別だあね。」お君はたしなめるやうに云つて、「お前さんは知らないけど、津村さんだつて萬更ぢやないんだつてば。私達のなかぢや一番若くもあるし、容色もいゝし。ねえ、津村さん。圖星でせう。」

津村は厭な薄笑ひを洩らすばかりて、それには返事もしなかつた。いつにないお君の言葉つきが眞面目なのだか、笑談なのだか彼にはさつぱり當てがつかなかつた。長い間の馴染みて氣心もすつかり呑み込んでゐる筈のお君が眞面目でそんな取持ちがましい口をきく譯はないとは思ひながら、それてもたゞ酒のうへの笑談としてはその調子が何となく變だつた。津村はそれが妙に氣になるので今迄あつたいろいろな出來事をあれかこれかと思ひ合はせながらちびちび酒ばかり嘗めてゐたが、しまひには何もかも

面倒臭くなつて、此れから先の旅路のことなどを取留めもなく考へつゞけた。お君とお千代はいつまでも執念ぶかくお鶴のことを云ひ合つてゐた。なかでもお千代はお鶴が子供らしく見えてゐながら實は淫亂で、どんな男の云ふことでも聞くとか、並はづれて薄鈍だとかいふやうなことを云ひ出して、當人を前に置いてはとても云へないやうなことまでつけつけ口にした。お君はなるべくそれをなだめるやうにして、一途な女氣とか、男に惚れた若い女の心持ちとかいふものをこまごまと並べたてながら、露骨にお鶴を助けてその思ひを遂げさせやうとした。その言葉の底には浮世の辛酸を味はつた女のやうな思ひ遣りが潜んでゐないではなかつたが、よそめには一々彼女が云ひ及ぼしてゆくやうな心持ちが果してこの愚鈍なお鶴の胸にあてはまるだらうかと疑はれるやうな節が多かつた。到頭しまひにはふたりともお鶴のことは忘れてしまつて、お互の心の底を剜ぐるやうな調子でいがみ合ふやうに云ひ募りはじめた。

「お前さんがお鶴さんにがみがみ突懸かる譯は私にやちやんと分つてるんだよ。お前さんもこの子にや隨分恨みがあるからね。」お君が鋭い眼つきをして云ふと、お千代は口惜しさうな顔つきになつて、

「恨みがあるつて？　ふ、莫迦にしてるよ。何の恨みなんだらうねえ。」

「きれいな口をおきゝだねえ。男を寢取られりや誰だつていゝ氣持ちはしないからね。」

「私やこんな鈍間な人に男なんか取られた覺えはありやしないよ。」さう云ひながらもお千代の顔はみるみる憤怒の色を漲らして、「いくら私が莫迦だつて、そんなそんな勝手な眞似をされてかうして默つてるもんか。」

「そいだからお鶴さんに突懸るんだつて云つてるんぢやないか。お前さんも餘程どうかしてるよ。」お君は嘲るやうに鼻先で笑つて、「さうして私に云はせりやお前さんも津村さんに氣があるんだよ。」

お千代はそれを聞くとかつとしたやうに顔をあげて、

「え、そうですとも、氣があるどころぢやない、もう首つたけのなのよ。だから端からがやがや云はれると癪に障つて耐らないんだつてば、……」お千代は口惜しまぎれに心にもないことまでさらけ出してしまふやうな調子でいつた。

「さうだらう、お察し申しますよ。」と、お君は揄揶ふやうにちよいと頭をさげて、「だけど氣をつけないと又あの車掌さんみたいにお鶴さんに取られてしまふよ。」

「取られやうが、取られまいが、お前さんの知つたこつちやないわ。憎らしいねえ。」お千代は野獸のやうな険はしい眼つきをしながら叫んだ。そして云爭ひはそれでふつりときれてしまつた。

津村は端なくも起つたこの云爭ひのために忽ち興を殺がれて座にゐたゝまれない程不愉快な氣持になりながら手酌で酒ばかりくびくび飲んでゐた。いかに節制のない女達とは云へかうまで醜い腹の底をさらけ出されてみると、彼にはその賤しさが氣に障つて蟲唾の走るやうな氣持ちにならずにはゐられなかつた。そして時折お千代の肩越しに呆けたやうな無智な顔をあげてしれしれ笑ひながら彼の顔を偸みゝるお鶴をみると、彼は到頭耐えきれなくなつて、ついと坐を立つた。そして廊下のとつさきにある廣椽へ出て、身をきるやうな寒い風を渾身に浴びながら、惡酒の醉ひと胸に鬱した不快さを醒まさうとこゝ

ゐみた。

その晩津村が臥床へ入つたのはもう十二時を過ぎて餘程後のことであつた。

湖畔の町々は一帶に深い睡りに落ちて、つい今しがたまで列車の轟響や、汽笛の音が往きつ戻りつしてゐた停車場もいつかひつそりと更け靜まつてしまつた。時々思ひ出したやうに吹き落として來る風は枕許の雨戸をことことと鳴らして、湖の渚の方ではその都度に枯葦の戰ぐ音や、ひそやかな波の呟きが聞えてゐる。いつもはその頃まで大勢の人達が寄り集まつて騷いてゐる帳場もすつかり寢靜まつて、庭先の元湯からひいた筧も堰き落としてしまつたとみえ、窓の下の臺所でも、浴場でも湯の流れ落ちる音さへこそりともしない。すべてが夜とゝもに大地の面へ展がつて來る寂寞に掩ひつくされてしまつたやうな氣勢のする晩であつた。

彼は臥床には就いてみたものゝ、酒が頭に殘つてゐて、そのまゝてはどうしても寢つかれなかつた。じつと枕に頰を壓しつけてゐると、眩暈が忍びしのび襲ひかゝつてきて、體ごと地の底へ引込まれてゆくやうな氣がする。それに建てつけの惡い戶の隙間からは膚を刺すやうな寒風が容赦もなく吹き込んで來て、眠らうと躁ればあせる程益々眼は冴えてゆくばかりであつた。

明日からの新らしい旅路の空想は先刻のまゝて心象の面に殘つてゐた。雪に掩はれた日本アルプスの連嶺はどんな壯嚴な姿をして自分の眼の前に現はれて來るだらう。それから又淺間山麓から遠く蓼科の

裾野まで擴がつた一望の高原と谿谷とが今頃はどんなに蕭條とした冬の色に掩はれてゐることだらう。さうした光景をあれこれの別なく心に描いてゐるうちに旅好きな津村はいつの間にか寢苦しさも打忘れてしまうやうな氣持ちになつた。そしてその時ふと土産に買つて來た花梨の鑵詰めや、繪葉書などを包み紙のまゝ床の間に放棄らかして置いたのに氣がついた。と、明日の整理をするつもりでその儘にして置いた鞄のことが譯もなく氣になりだして、今夜のうちに何時でも發てるやうにすつかり支度を整へて置き度くて耐らなくなつて來た。いろいろ思ひ惑つた末、彼は到頭思ひきつて寒さを耐えながらむくむく起きあがつた、そして押入のなかから鞄を出して來て、中のものをすつかり臥床の上へぶちまけた。

着換へのシャツや、手帳や、藥入れなどを一々克明に調べてみながら再び順序よく入れ換へはじめると、その時になつて鞄の底へ隱して置いた鼠色の封筒がないのにふと氣がついた。それは宿の支拂ひやら歸京の旅費に宛てるために東京から態々取寄せた爲替を、昨夜やつと現金に引換へて郵便局から送つて來たその封筒のまゝ藏つて置いたものであつた。金高は五十圓餘りだつたが兎に角その場合彼れにとつては懸けかへのないほど大事な金だつた。

彼はおろおろしながら幾度となく鞄の中身をひつくりかへしては鵜の目鷹の目になつて探してみた。しまひには荒々しい足音をたてながら立上つて部屋のなかを彼方こちらと搜し廻つた。ありさうにもない額の裏や、床の間の置きもの丶下のやうなところまで一々眼をとほしてみた。そして彼此半時あまりも搜し廻つた揚句、愈々何處にもないのを知ると、急に喪心したやうに落膽してそのまゝがくりと臥床

の上へ腰を落としてしまつた。

暫らく經つて少しづゝ心が靜まつて來るにつれて、金の行衞に對するさまざまの疑ひはそれからそれへと展がつていつた。夕方宿を出る時までは確かにあつたのを思ひ合はせると、その留守の間に誰れかの手で盜まれたことだけは明らかに推知された。戸外からは容易に入つて來ることの出來ぬ奥二階であつて見れば自然盜人は家のなかの者でなければならぬ。と思ふとその途端に先刻の云爭ひの場の光景が何の理由もなくふつと心に浮んだ。お君やお千代や、お鶴の顏はいろいろな疑ひの影を持つたまゝまざまざと眼の前に浮上つて來た。その間に交はされた言葉もそれと同時にはつきり思ひ合はされて、それがまた一々意味ありげに心に響いて來た。惡辣なお君、一本氣なお千代、薄鈍なお鶴、かう細かに彼等の性情を解きほぐしてみると、疑ひの網はそのいづれにも懸かつた。併しあんな眞正直なお千代がと思ふと、その疑ひはいつの間にか譯もなく消え去つてしまつた。またあんな愚鈍なお鶴がと思ふとそれに對する疑ひも捕へどころのないものになつてしまつた。それとゝもにお君に對する疑ひだけは俄かに根據を得て、盜んだものは正しくあの女でなければならぬやうに思はれて來た。と、いつぞや東京にゐる伯母に仕送りをせねばならぬといつて彼から二圓の金を遠廻はしにせびつたことや、つい二三日前書留めが屆いた時、

「お金が來ましたね。」と、云つて變な眼つきをして彼の顏を見たことなどが明らかに盜んだ事實を證據だてるやうに次々と思ひ起こされて來た。

長い間考へに考へぬいた末、彼はお君がその犯人であることにきめて今度は善後の手段を考へはじめた。今夜のうちに宿の主人へその話しをして取られた金の始末をつけて貰はうとは思つたが、何を云つてももう時が遅いので、明日の朝早く誰れも起きぬ先に主人を起こして改めて手段を講ずるより外に仕様がなかつた。で、彼は空つぽにした鞄や、其處らに取散らした品々はその儘に抛つて置いて、氣のぬけたやうな嘆息を洩らしながら冷たくなつた臥床へもぐり込んだ。

半醒半睡の間に、彼の疲れ果てた頭腦の底にはお君のほかの新らしい嫌疑者が幾人となく映つたり消えたりした。一人は帳場に懸人になつてゐる年老つた憐れな旅畫師だつた。番頭がわりに宿の走り使ひも務めるし、又客のたてこむ時には一合二合の振舞酒をあてに滑稽けた落語や聲色の一席位も辯じるやうな老爺だつた。氣輕な、人に馴れ易い人間ではあつたが、金錢にかけては恐ろしく吝かつた。もう一人は奥座敷に滯在してゐる何者とも得體の分らぬ年增女だつた。婢達には米國へ三年ばかり行つてゐたなどゝ吹聽してゐながら、その癖讀み書きも碌々出來ないやうな容子をしてゐた。いつもハイカラな庇髮に結つて、淺黑い顏に薄く化粧して、旅畫師や出入りの男客や、表二階の車掌などを寄せ集めては花などを引いてゐた。そして始終接近してゐるものにさへさつぱり素性が分らないといふので、この宿では解くことの出來ぬひとつの謎になつてゐた。津村は浴場などで言葉を交はすことはあつても、何だか氣味が惡いのでその女の室へはまるで足踏みをしなかつた。そのほか飯炊きのお駒、風呂番の誰彼れといふ風に家ぢうのものは誰一人嫌疑者にならぬものはなかつた。併しそれ等はすべて皆夢のなかに消え

て行く幻影のやうなもので、何等の理由も據所もない腦中の空華に過ぎなかつた。

眞夜中になつて津村は夢のなかで異樣な物音を聞いた。と、みるといつの間にやつて來たのかお君が血相を變へながら出刄庖丁で頻りに部屋の戸をこぢ開けやうとしてゐる。彼はそれを見ると渾身に冷汗がたらたらと流れ出るほど怖ろしくなつて、突如飛び起きて力任せにその戸を抑へた。いくら抑へてもその戸は一寸二寸づゝ漸次と開いてゆく。そして銀の舌のやうな出刄の鋒がちろりちろりとその間から光つてくる。彼は恐怖の餘りうむと呻めいて頻りに身を悶えた。それで多愛のない夢はすつかり覺めてしまつたが、覺めたあとまでも彼は壓しかゝるやうな息苦しさを覺えて、額に滲み出た脂肝を拭きながら、幾度かほの暗い電燈の光に照らされた四邊の氣勢を恐わごわ窺つた。そして正氣に返つた後で考へなほして見てお戸の開く音がしたことだけはどうも確かであつたやうな氣がしてならなかつた。

「津村さん、津村さん、」と、いふ聲で呼び醒まされてふと眼を睜くと彼の枕許にはいつの間にかお君が突立つてゐる。

「今朝はそんなに朝寢をなすつちやゐられないぢや御座んせんか。早くお起きにならないと汽車の時間に間に合ひませんよ。」と、彼女は常に變らぬ親しげな調子でせきたてるやうに云ひながらそろそろ雨戸を繰りはじめる。

彼ははつとして昨夜の出來事を思ひ起こした。そして態と眠むさうな聲で、

「うむ、うむ。」と、口籠りながらそれとなく容子を伺つたが、眠りの足らぬやうな膨れぼつたいお君の顔には昨夜彼が疑つたやうな罪を犯した氣振は鵜の毛ほども見えてゐない。彼は欺かれたやうな呆氣なさを感じて、自分の眼と心を疑ひながら、

「もう何時頃だい？」と、力めて平靜を裝ほつて訊いた。

「もう八時過ぎてますよ。これから手水を使つたり、御膳をあがつたりしてゐちやとても九時の長野行にや乘れやしませんよ。

「さうかねえ。併しまあかうしても居られない。」と、彼は心にもないことを呟いて、氣忙はしさうにむつくり飛び起きた。そして窓の傍へいつて湖面から周圍の山々へかけて一帶に低くゝ垂れさがつてゐる雪催いの空を眺めながら暫らくの間途方に暮れたやうな顏つきをしてゐたが、お君と向ひ合ひに立つてゐるのがひどく氣拙くなつて來たので、その儘楊子を啣へて浴場へ降りて行つた。

浴場にはお千代がたつたひとりでだらしのない格好をしながら湯卷や肌襦袢を洗濯してゐた。彼が入つてゆくのをみるとぎよつとしたやうに顏をあげて、

「お早う御座います。」といつになく丁寧な挨拶をした。そして昨夜の云爭ひのことが氣になるのかつとめて津村の眼を避けるやうにしてゐたが、彼が湯氣の一面に立罩めた浴槽のなかへ體を浸してしまうのを見ると急に洗濯の手をやめて、幾度か躊躇しながら到頭思ひ切つて口をきつた。

「ねえ、津村さん。昨夜あれから貴方のところへお鶴さんがいつたでせう？」顏は背けたまゝつかねて

とを訊ねる。
「笑談いつちや可けない。あんなに遲くなつてから誰れが來るもんか。」
「いゝえ、そんな白をきつたつて駄目よ。昨夜あの人は私達の傍にや寢なかつたんですもの。」
「お前さん達の傍へ寢なくたつて、私のところへ來たとは限らないぢやないか。よしまた來たにしろ、あんな厭らしい女なんか寄せつけるもんか。」彼は稍怒氣を含んで答へた。ゆうべ夢うつゝで聞いたもの音を思ひ合はせると、ひよつとしたらお鶴が自分の處へ忍んで來たのではないかとも思へたが、その場合そんなことを考へるさへ彼にはひどく厭だつた。
「でも……。」と、お千代は思ひきり惡さうにもぢもぢしてゐたが、やがて、「ぢやきつとまた表二階へ行つたんだよ。ほんとにいけ好かないねえ。」と、獨語のやうに口のなかでいひながらまたぢやぶちやぶ洗濯の音をたてはじめた。
津村は自分までが侮辱されたやうな氣がして、もう何を云はれてもこんな女に口をきくものかといふやうに堅く口を噤んでしまつた。そして腹立たしさを態と湯水に當り散らかして、四邊にざつざつと水沫を迸らせながらやけに體を洗ひだした。そして自分の金を盜んだ犯人はお君ではなくて今度はこのお千代であるやうな氣がしてならなかつた。こんな恥を知らぬ女だもの、何をするか知れたものぢやないといふやうな腹立ちまぎれのやつ當りがとかくするとその輕はづみな判斷に裏書きをしさうであつた。
湯から出るとそれでも少しは氣持ちがさつぱりした。部屋へ歸る途中、階段のところで折よく女將に

ばつたり打突かつたので、津村は一寸話しがあるからといつてその儘彼女を二階へ連れていつた。何も知らない女將は、

「到頭お名殘りになつてしまひましたねえ。」などゝ新潟訛りのある言葉で云つて、襷をはづしながら後から隨いて來た。そして部屋へ入ると、明け拂つた方々の障子をまめまめしく閉めて、自分は出入口のところへ坐つた。

「實はちよつと云ひ憎いことだが‥‥」といふやうな冒頭で、津村は昨夜の出來事を前から考へて置いた通りに吶りながらすつかり女將に打あけた。と、彼女は皆まで聞かないうちに色をかへてそわそわしながら、

「まあ、そりや大變だ。ぢやすぐこれから警察へ訴へさせまして、‥‥」と俄かに周章てゝ起ちあがらうとした。

「まあ、お待ち。」と、津村はそれを抑へて、「今警察へ訴へたりなんかしちや却つて私はよくないと思ふんだ。どうせ宵の口のことなんだから戸外から入つて來る譯はないし、盜つたのは確かにこの家のなかにゐる者だと思ふんだが、それと目星をつけてからなるべく穩便に事を濟ます工風をして、それで可けない時に訴へたつて遲くはないからね。それでないと第一家から繩つきを出した日にや、信用にかゝわるからねえ。」

「それもさうて御坐んさあねえ。」と、女將は尤もだといふやうな顏つきをして、そわつきながらも又腰

をおろして、「でも、そんな澤山なお金を誰が盜つたんて御坐んせうねえ。」と、容易ならぬ心配を眉尻に現はして津村の顏をじつと見た。

「さあ、私にやまるつきり分らないが、誰れか思ひ當るやうなものはゐないかね。」

女將はそのまゝ口を噤んであれかこれかと心のなかで頻りに物色してゐるやうな眼つきをしてゐたが、暫らくすると途方に暮れたやうな聲で、

「お千代は子供の時から氣心もよく知つてますからまさかそんな事をしさうにも思はれませんし、お鶴はあの通りて御坐んすしねえ。お君だつてまさかねえ、……」と、あやふやな調子て云つた。そして津村がその顏を何氣もなくきつと瞻めると、氣の弱い女將はまるて自分が責められてゞもゐるやうに心苦しさうな顏をしながら、やがておづおづ一膝にじりてゝ、

「これはほんの此處ばかしのお話してすけど、實は私やあの奥にゐる女の方がどうも怪しいと思ふんて御坐んすよ。證據もなにもある譯ぢや御坐んせんから、滅多に人樣を疑ぐる譯には參りませんけど、どうもあの女の樣子が此頃可笑しいんて御坐んすよ。」と、さも思ひきつたやうに小聲てひそひそ呟いた。さまて自信もないことを責めふさぎに云つてゐるらしく彼女の顏はみるみる氣恥かしさうに赧らんて來た。

「可笑しいつてどんな風なんだい？　何か惡い素性の人ても出入りするのかい？」津村は充分の好奇心をもつて訊いた。

「いゝえ、格別そんなこともないんですけど、此頃は先時分と違つて手前共のお拂ひもよし、大分工面がいゝやうなんて御坐んすよ。あんなことをして毎日毎日ぶらぶらしてゐてお金が入るなんて不思議なや御坐んせんか。人の噂ぢや警察でも注意人物にしてるんださうですが。……」

「注意人物に？　そりや物騒だねえ。」と、津村は眉を顰めながら云つた。心のなかではあの女が自分の留守の間に忍び込んで來て、鞄の口をあけて、鼠色の封筒を盗み出してゐる慌ただしい光景を人知れず空想しつゞけてゐたが、次第々々にそれが事實のやうにも思へて來るのであつた。「ほんとに困つてしまひます。私共ではそんな方には居て貰ひたくないんて御坐んすけど、お客様であつて見れば此方から追ひ立てる譯には參りませんし、……」女將は俯向いて疊から突き出てゐる麻糸をせゝつてゐたが、急に氣をかへて、起ち上る氣色をみせながら、

「兎に角これから早速吟味にかゝることに致しませう。手遅れになつちや大變て御坐いますから。」といつて、犯人は何人であるにもせよ、かういふ不始末の起つたのは自分の不取締りのためだといふやうなことを愚痴まじりに云ひ譯をして平謝りにあやまつて下へ降りて行つた。

津村はたつたひとりになると、妙に張合ひぬけのしたやうな氣持ちになつた。女將に訴へたらすぐにも犯人の目星しがついて金の在處も分るだらうと思つてゐたのが、それで全く空頼みになつてしまつた。そして一方では確かに此の家の者が盗つたものとすればまだその金は使ひ崩されずに封筒の儘そつくりこの家の何處かに隱されてゐるやうな氣が頻りにして、ぬくぬくとそのまゝにして置くのが居てもたつ

ても耐らないほどもどかしくなつて來た。自分自身で一々犯人を突きとめるなり、家捜しをするなりしなければとても落着いてゐられないやうに氣がいらついて來た。

そこへお鶴が朝飯の膳を運んで來た。昨夜のことはけろりと忘れてしまつたやうな何食はぬ顏をして、「今日は雪ですねえ。」などゝ粗雜な口をきゝながら給仕をしてくれる。眼がしらに眼脂の殘つてゐるやうな眠むさうな顏や、崩れた髷や、八つ口へ突込んでゐる眞紅な皹のきれた手などをみると、津村は食事も喉へ通らぬやうな不快を覺えて、そこそこに箸を置いてしまつた。そしてその儘ずるずるに話し込んで行きさうな彼女の氣色をみると、彼は怒鳴りつけるやうな突慳貪な口をきいて、すぐさま膳をさげさせやうとした。お鶴はその容子に驚いて少時の間まじまじと津村の顏を上眼で見てゐたが、やがて顏を眞紅にして遁げるやうにこそこそ膳を持つて降りて行つた。その姿がいかにも滑稽に見えたので彼は思はず心のなかで憫笑したが、やがて足音が消えてしまうと部屋の眞中へ大の字なりにごろりと臥ころんで、また金の行衞を考へはじめた。

やつと持ちこたへてゐた空合も夕方になると急に時雨れて來て、到頭綿屑のやうな雪がちらちらと落として來た。

津村はその日一日何もしずに考へ暮らしてゐたが、たつたひとりで旅へ出てゐる心細さが氣を滅入らせてゆくばかりで、なにひとつ取留めたいゝ考へも浮ばなかつた。稿のやうになつて盛んに降りしきつ

てゐる雪景色をみてゐると、寒氣が腸の底までも浸み渡つてきて、そろそろ周圍から湧き起つて來る薄闇が遣りばもないやうな賴りなさを覺えさせるので、彼は到頭耐らなくなつて、温泉でほつかり温まつたあとで酒でも呷らうと思ひながらしよんぼり浴場へ降りて行つた。

戸の外で着物を脱ぎながら聞いてゐると、なかでは誰れかゞ皺嗄れた錆びのある聲で頻りに二上りを唄つてゐる。そつと覗くとそれは旅畫師の吉さんだつた。彼は津村の姿をみるとふつゝりと唄ひやめて、崩れるやうに笑ひかけながら、

「お寒うがす。貴方がそこに被居るたあ知らずにすつかりいゝ氣持ちになつちやつて、はははゝゝゝ。」

「いゝ喉ぢやないか。もつとお聞かせな。」津村も引き入れられて笑ひながら湯槽のなかへ入つて行つた。

「御笑談でげせう。こんな鹽干聲ぢや湯ぶくれも粹で御坐んせんや。ははゝゝ。」立騰る湯氣のなかで皺だらけな長い顏を熱てらせながら笑つてゐたが、やがてふと思ひついたやうに、

「時に昨夜はどうも飛んだ御災難だつたさうで。實はそれで私も朝つからひどく氣を揉んでゐるんで御坐んすが、なにしろまるで雲をつかむやうな話なんでねえ。」といひながら津村の方へにじり寄つて來た。

「なあに、唯盜つた人間さへ分りやいゝんだが、……」と、津村は手拭で顏を洗ひながら態と氣にも懸けてゐないやうに鷹揚に云つた。

「なんでも五十圓から上のお金だつて云ふぢや御坐んせんか。そんな大金をまあ盜る奴も盜る奴だが、盜られる貴方もかう申しちや何んでがすが隨分ぬかつた事をなすつたもんぢや御坐んせんか。そこへいく

と今時のお若い方は腹が大き過ぎますさあ、私達なら二重にも三重にも包んで襟裏へしつかり縫ひつけとくてえ奴なんてがすけどねえ。」

「併しどんなに嚴重にして置いたつて盗られる時にや盗られるさ。間が惡いんだから」と、津村は取つてつけたやうに笑ひながら、「併し早く盗んだ人間が見つからなけりや、かういふ商賈をしてゐる家ぢや安心がならないからねえ。」

「全くで御坐んすよ。女將もそこを考へて火のつくやうに云つてるんでがすけど、どうも今に當てがつきません。臭えと思ふ奴は一人ふたりないぢや御坐んせんが、なにしろ證據を握らないうちはうかとはいひだされませんからなあ。こりや結局公沙汰にしなけりや駄目で御坐んせうよ。」と、吉さんは戸外で開えた足音を氣にしがら急に眞顏になつて思惑ありげに云つた。

その時、浴場の戸ががらりと開いた。そこから思ひもかけぬ奥座敷の年増女が入つて來た。私達がゐるのを見ると、彼女は愛想よく笑ひかけながら、

「お寒う御坐います。惡いものが降つて來たぢや御坐んせんか。」と、いつて隅の行へ行つて體を洗ひながら浴槽へ入つた。

「この容子ぢや二三日續くでげせうなあ。困つたもんだ。」吉さんはいつになく親しげなゝかに何處かよそよそしい處のある調子で云つた。そして

「あゝ、溫まつた、溫まつた。」と云ひながらぬうつと骨張つた肩から立つて、うだつたやうに眞紅にな

つた灸の痕だらけな背なかを見せながら浴槽の外へ出た。

「あら、吉さん。もう上るの。そんなに遁げないだつていゝぢやありませんか。もう少し入つといてなさいな。」女は甘えるやうに云つた。

「えゝ、有難うがす。もう一時間も漬つてるんて御坐んすから、湯あたりが恐わうがさあ。」

「人間らしいことを云ふもんぢやなくつてよ。湯あたりのする體ですかい。」と、女は艶めかしく笑ひながら戯れるやうに云つた。

「へいゝゝ。これでも貴方がたと同じやうにまだ生身てげすからねえ。お先に御無禮。」と云つて、吉さんは苦笑ひをしながらそこそこに體を拭きだした。

「ほゝゝゝ。面白いことを云ふ人だわねえ。」女は津村の顔を媚びるやうに見ながら、笑つて、又吉さんの方を向いて、「ねえ、吉さん。今夜雪見に一盃飲まうぢあないの。私が奢るわ。」

「洒落てやすね。」吉さんは後を向いたまゝ氣の乘らぬ聲で答へる。

「いやだよ、吉さんは。もうちつと彈んだ返事をして下さいつてば。」と、女はひとりで嗟いて、「ひとつ今夜は皆さんに集つて頂いて面白く騷がうぢやないの。こんな晩はお酒を飲むにやもつて來いだわ。ほゝゝゝ。そのかわりお花は二がけよ。」

「えゝ、おや、後ほど。」と、吉さんはあやふやな返事をしてその儘脱衣場の方へ姿を隱してしまふ。

津村は女とたつた二人きりになると、妙に落着かないやうな氣持ちになつた。何か女から言葉をかけ

られるのが空恐ろしいやうに思はれて、到頭追ひたてられるやうに浴槽を出た。

女はそれをみると、肉つきのいゝ胸を乳房のあたりまで湯の面へ現はして、叉媚びるやうな嬌態をしながら、

「津村さん。失禮で御坐いますけど、貴方も今晩お遊びに被來つて下さいましな。あんなにお勸めしてゐるのにまだ一度も來ちや下さらないぢや御坐んせんか。何もお構ひは致しませんから、どうぞほんとに御遠慮なく。」と、小さな金歯をみせながら云つた。

津村は銀杏返しに結つた、鼻の大きな多淫らしいその顏をみると、壓し付けられるやうな氣持ちになつて、何を考へる暇もなく、

「えゝ、有難う。伺ひます。」と、どぎまぎしながら答へた。そして體を拭いてしまうと、

「きつとで御坐んすよ。支度をしてお待ち申して居りますから。」と、理をつめる女の言葉を聞き捨てゝ遁げるやうにこそこそ吉さんのあとを追つて脱衣場へ上つてしまつた。

部屋へ歸つて來るまでは何となく女の容子が氣にかゝつてゐたが、火の消えかゝつた火鉢の前へ來てがくりと膝をおろすと、彼には女の口占がすつかりよめたやうな氣がした。あゝやつてさりげなく色氣て人を誘はうとする底には何か秘密がなくてはならぬ。直接昨夜の出來事とは關係がなくても、例へば誰れかを手先に使ふとか、ぐるになるとか、それ以上の手段をあの女が用ゐてゐるのではあるまいか。津村はそんなことまで考へる程神經質になつてゐたのであつた。

お鶴が酌をしやうといふのを素氣なく追ひかへして、津村は寂しさうに手酌でちびちび飮んだ。二本目の銚子がもう空になつてゐるのに彼は殆んど醉ひを覺えなかつた。そして今朝以來お君もお千代もまるて顏をみせないのて何か彼等の間に昨夜のことて變動が起つたのてはあるまいかと訝しむてゐると、そこへ女將がこつそり足音を忍ぶやうにして入つて來た。

「おや、お手酌て、まあ、隨分て御坐んすねえ。あれほどお鶴に云つて置いたのに、氣のきかない子だよ。」と、力めて聲をひそめて云つたが、顏色をみても、擧動をみても彼女はひどく興奮しきつてゐるらしかつた。そしてさう云ひながら津村の傍へ摺り寄つて來て、耳打ちてもするやうに、

「實はさつきのお話しのことて御坐いますが、お君も、お千代も、兎に角怪しいと思ふ者は一人殘らず手をかへ品をかへして調べて見たんて御坐んすけど、まるつきり知れませんのてすよ。私ももうほとほと根を疲らしてしまひましてねえ、今度はひとつ御嶽樣へ伺ひを立てゝ見やうと思ひましてねえ、それて可けなければ愈々訴へることにして、實は此の先に御嶽講の行者て中々驗のある方がゐますから、それを今招びにやりましたんてす。貴方ももし御迷惑てなかつたらどうかその席へお立合になつて下さいませんか。こんなことて御嶽樣をお使立て申すのはまことに勿體なう御坐んすけど、此の前にもあらたかだつたもんて御坐いますから、……」と、眞顏て云つた。

津村は馬鹿げたことゝは思ひながら、平常から女將が人一倍御嶽信者なのを知つてゐるので、無下に

も笑ひ兼ねて、そのまゝ默つて承諾した。そして女將が歸つたあとで大急ぎで飯を掻込んで、用意の出來た時分を見計らつて階下へ降りて行つた。

伺ひたての神事をする處は帳場の奧にある女將達の居間だつた。正面にはお厨子のやうな大きな神棚が開扉してあつて、金色をした花立てやら、燭臺やらが古びた白木の扉の前にきらきら輝いてゐた。白木の三寶にはいろいろな供物が恭しく供へてあつて、新らしく切つた大御幣の前には異様な風體をしたひとりの行者が鹿爪らしく坐つてゐる。白木綿の綿入れに黑繻子の袴をはいてその上から色のさめた紋付を着てはゐるが、色の眞黑な、眼の險はしいまるで、土工の親分のやうな顏容をしてゐるので修法をする人らしい嚴かな感じはひとつもしない。そして電燈は態と消してあるので、神前に點じた燈心の火が僅にほの暗く四邊を照らしてゐるばかりで、隅の方の人顏は殆んど分らないと云つてもいゝ位だつた。

津村はさすがにそのなかへも入り兼ねて、大阪格子になつた入口のもの陰へ隱れてこつそりなかを窺つてゐた。行者は頻りに口のなかで呪文のやうなものをもぐもぐ唱へゐたが、それが濟むと傍にあつた三寶の上から大きな土盃(かわらけ)と素燒の德利をとつて、勿體ぶつた手つきで土盃のなかへ水のやうなものを注ぎ込んだ。そして神棚の上から護符を一枚とつて又呪文をとなへながらそのなかへ浮かした。

「さあ、これてえゝ。淸淨潔白な人は御嶽樣の御神酒を頂くと思つて有難く頂きなさい。だが惡い事をした人は今のうちに白狀して置きなさらんとお咎めてえらい罰が當たりますぞ。」行者は皺嗄れた土地言葉て嚇すやうに云ひながら、險はしい眼をぎろぎろさせて四邊の人顏をひとわたり睨みまわした。

一座はしんと靜まり返へつて、雨戸を打つ雪の音ばかりがさらさらと囁ぐやうに聞えてゐる。
「それではこゝにゐる衆はみんな清淨潔白なんぢやな。そんならえゝ。さ、それではお前さんから頂きなさい。」と、行者はすぐ對向ひに坐つた女將へ土盃を渡した。
その時、隅の方から頓狂な男の聲がして
「ちよつとお聞き申しやすが、お咎ちうたらどうなるんでがすかな。」
一座の顏は一齊にそつちへ向いた。聲の主は下男の五藏らしかつた。
行者はそれを聞くと怒つたやうな聲で、
「そんなことは聞かねえでも分つてゐるぢやないか。血嘔をついて死ぬか、瘧をふるふか、どの道生命をまつとうにしちやゐられないんぢや。踏切の傍の庄公を見なさい。あれがいゝ證據だ。」
「はゝあ、恐えもんでがすなあ。」その聲は巫山戲てゐるのか、眞面目なのか分らないやうな調子で頻りに感心してゐたが、その儘默つてしまつた。
女將は捧げてゐた土盃を恭しく下ろしてそつと一口飲んだ。そしてそれを隣りに坐つたお君へ渡した。お君は女將のした通りに一度眼の上へ捧げてやがて事もなげに飲んだ。その次に坐つたお鶴は土盃を受けとると少時の間ごくりごくり喉を鳴らしてゐたが、此れも何事もなく飲んで、隣の吉さんへ渡した。吉さんは勿體らしく眼を瞑つてそうつとそれを唇へもつていつたが、やがて知つたか振りに呪文でも唱へるやうな見得をしながら飲んだ。

その次にはお千代が坐つてゐたが、吉さんから受取る拍子にどうしたはづみだつたか、土盃は彼女の指先を滑つてころりと疊の上へ落ちた。水は彼女の膝から四邊へたら〳〵と零れて、護符だけが吸ひつくやうにぺたりと前掛けの上へ殘つた。それをみると女將は突如打踣めされたやうに腰を浮かして、「あれ、まあ、飛んだ事を。」と、息塞まるやうな聲で叫んだ。一座のものもその聲にはつとして、すべての眼は悉くお千代の體へ集まつた。

お千代はみるみる顏色を失つてひつくりかへつた土盃をまじまじみつめたまゝよそめにも分るくらゐ息を彈ませながらぶるぶる慄へてゐたが、やがてその儘そこへばつたり俯伏してしく〳〵泣きはじめた。

一瞬の間、重苦しい沈默が間内の隅々まで展がつていつた。

女將はやがてつッと立ちあがつて、疳性な聲を振絞つて、

「お千代ッ」と、叫びざま突如彼女の肩を攫んだ。そして邪慳にその體を引起こしながら、

「お前も隨分な女だよ。もうかうなつたからにや我慢が出來ない。酷いめに逢はしてやるから覺えといて。」と云つて、後を振顧つて行者に眼配せをした。そして裏の方の障子際へ坐つてゐる者に障子を開けさせて、

「私がしたんぢやない。」「私がしたんぢやない。」と狂氣のやうに泣き聲を振絞るお千代を引摺るやうにして其處から臺所の方へ連れて行つた。行者は白けたやうな顏をして立上つてそのあとからついて行つた。その後からはまた吉さんがおろおろしながら隨いて行つた。

跡に殘された者共は呆氣にとられて、各自唯顔を見合はせるばかりであつた。誰ひとり口をきくものもない。殊にお蔦はひどく驚かされたものと見えて、いつのまにかお君の陰へにじり寄つて、おどおどしながら小さくなつてゐた。

津村は不條理なことゝは知りつゝも、その刹那事理を判斷するだけの用意を失つて、激しい興奮を覺えながら身動きもせずになりゆきを窺つてゐた。と、その時、今度は臺所の方で消魂ましい怒罵の聲が聞えて、續いて二聲ばかり斷れぎれに叫び聲が聞えたかと思ふと、やがてどたばた足音がして突如お千代が着物の前もあらはに蹴披げながら臺所の方からついと走り出て來た。そしてそのまゝ上框から土間へかけ下りて、素跣足のまゝ雪の降り積つた眞闇な往來へ飛び出してしまつた。

後から續いて出て來た女將は氣もそゞろに

「彼奴を遁がしちや可けない。誰か早く追驅けて、追驅けて。」と、叫んだが、上框のところには家ぢうのものが總立になつてゐながら突差に追驅けるものは一人もゐなかつた。

少時してやつと吉さんが有り合ふ駒下駄を突懸けて飛び出した。續いて下男の五造も行者もとび出した。女將も我慢しきれなくなつたと見えて、上釣つた顔をしながらそのあとから驅け出して行つた。

津村はその騷ぎのなかで皆に顔を見られるのが何だか後めたいやうな氣がしたので、帳場からこつそり神棚のある間をぬけて裏階段の方へ廻つた。何の氣なしに暗い廊下を手探りに歩いてゆくと、彼は階段の下のところで誰かにどんと突き當つた。

「痛いッ」と、小聲で叫ぶ聲はまさしく奧座敷の年増女だつた。

彼はぎよッとして、

「や、どうも飛んだ失禮を。」と慌てゝ云つたが、女も彼と知つたらしく、くすくす笑ひながら、

「どう致しまして。此樣な處にゐたのは私が惡いんで御坐んすから。」と、又津村の方へ摺寄つて來て、

「一體何ごとが持ち上つたんで御坐んす? 大變な騷ぎぢや御坐んせんか。」

「え、どうも、……。」興奮しきつてゐる津村は突差の間に返事をし兼ねて口籠つた。そして機が變だとは思ひながら落着いてゐられないので、

「ちよつと失禮します。」と云ひ捨てゝその儘階段をするすると上つて、自分の部屋へ歸つて來た。そして夕飯の膳もそのまゝに放つてある火鉢の前へ來て坐ると、頭がきいんと鳴つて、胸のなかが俄かに頼りどころを失つたやうにもやもやして來て、何を考へる力もないやうにぐつたりとなつてしまつた。

そこへさつきの奧座敷の女が、

「お邪魔をしてもよくつて?」と、いひながら唐襖をあけてすらつと入つて來た。さつき階段の處では少しも氣づかなかつたが、燈光を眞面にうけたその顏をみると、大分飮んでゐるらしく、眼のまわりを眞紅にしてゐた。彼女はその儘火鉢の向ふへ坐つて、片手を横ざまに突いて體を支へながら、

「一體どうしたつて云ふんで御坐んす?」と云つて彼の顏を見上げた。

津村は興奮しきつてゐたので、何の考へもなく事の顚末を口に任せてべらべら饒舌つた。女は一々合

點いて聞いてゐたが、津村が話し了はると格別驚いた風も見せずに、
「まあ、さうなんですか。私やまた餘り騷ぎが酷う御坐んすから人殺ろしてもあつたのかと思つたんですよ。」と、云つたが、やがて氣を變へて、「でもそいぢやお千代さんが可哀相ぢや御坐んせんか。あの人は決してそんな人樣のものを盜んだりなんかするやうな女ぢやないんですもの。」
「私もさう思ふんですが、かうなつて見ると手の出しやうがありませんからなあ」津村は當惑したやうに言つた。
「まあ、よう御坐いまさあね。分る時にや分るでせうから。それに警察もあるんですもの、まさかそんな片手落ちな道理が通る譯も御坐んせんわ。」と、又金齒を出して笑ひながら、「でも貴方こそいゝ御迷惑で御坐んさあねえ。五十圓もお盜られになつちや御身代にも障りますまいが、これてちよいと痛う御坐んすからねえ。そりやぢつき又見附かるにや見附かるでせうけど。」
「どうもそれて東京へは歸へれないし、實は大弱りなんてす。五十圓といふと私達にや大金ですからなあ。」津村は愚痴を零すやうな調子て云つたが、ふと端したないのに氣づいて、急に取つてつけたやうな笑ひ方をした。
「まあ、飛んだことを。ほゝゝ。御用さへなけりやまあ當分此地に被居いましな。急いてお歸りにならうとするからそんな目にお逢ひなさるんですわ。」と、親しげな笑ひ方をして、「私ゃ今夜は精々面白く騷がうと思つて樂しみにしてゐたのにこの騷てすつかり駄目になつちまひました。貴方だけてもせめて

彼來つて下さるといゝんですけど。」
「有難う。」津村は女の視線を避けるやうに尻込みをしながら云つた。
「ほんとに失禮ですけど如何です。そんなに御遠慮なさらないで彼來つて下さいましな。私たつたひとりで寂しくつて仕樣がないんで御坐んすもの。」
「有難う。」津村はまたぶつきらぼうに答へたが、稍心は動いてゐた。かうしてこの先起つて來る出來事の結果を待ちながらたつたひとり殘される寂しさと、興奮の後の人懷こさがいつの間にか彼の心を引包んで、もうその時は抗し難い力になつてゐた。彼は到頭むらむらと行く氣になつて、
「ぢや伺ひませう。」と、思ひ切りよく答へた。
「まあ、嬉しい。私はこんな不遠慮な人間だもんですから、人樣の見さかひもなく無理を申上げてほんとに相濟みません。」と、彼女はその儘立上つて、いそいそしながら先に立つて津村を導いて行つた。
裏階段を降りる時、そつと樣子を窺ふと、戸外へ飛び出して行つた者達は何處へ行つたのかまだ歸つて來ないらしく、上框のところにはお君や、そのほかの跡に殘つた連中が圓座になつて何事か頻りにぺちやくちやや饒舌り合つてゐた。
彼女の部屋は湖畔に近い一番奧まつた階下の八疊だつた。素振りには似合はず部屋は隅々まで綺麗に片附けてあつて、床の間には鏡臺や、人形や、古雜誌などが體裁よくきちんと飾りたてゝあつた。衣桁にかゝつた紅裏の長襦袢も艶めかしく、間うちにそこはかとなく漂つてゐる化粧品の匂ひも津村には

妙に懐かしく思はれるのであつた。

　部屋の眞中に据ゑた餉臺の上には鮭の胞兒や、煮つけや、卵燒のやうなものが丼に盛つて置いてあつた。彼女は馴れた手つきで燗をつけたり、肴を小皿に盛り分けたりしてゐたが、支度が出來ると、嬉れしさうに笑つて、

「何も御坐んせんけど、お酒だけはいゝのを取つて置きましたから。」と云つて、菊正の一升壜を見せながら津村に盃をさした。

「やあ、こりやどうも。少し頂きませう。」彼はやつと正氣づいたやうに云ひながら嬉れしさうに酌をして貰つた。

「でも貴方はおいけになる口なんでせう？」女は手酌で自分の盃へも注ぎながら訊いた。

「え、この方は可成りやりますよ。」

「それからあの方もでせう？」女は靨みかけるやうに云つて、眼で笑ひながら盃を脣へもつていつたが、津村はそれをきくと唯聲をあげて高く笑つた。

　ものゝ分つた女の話振りを聞きながら飮んでゐるうちに、彼は金を盜られたことも、さつきのことも少時の間忘れたやうな氣持ちになつた。今迄はこの女の惡い處ばかりを見てゐて全くすべてを誤解してゐたのに漸う氣が付くと、彼は反對に强い力で彼女の方へ惹きつけられていくやうな氣がした。そして雨戸に當るひそやかな雪の音をきゝながら妙にしんみりした心持で飮んでゐるうちにいつか思はず盃の

數を過ごしてしまつた。

十時を打つと間もなく、吉さんが濡れしほれた着物のまゝで唯ならぬ顔つきをしながら津村を迎ひに來た。丁度その時女は東京の山の手で藝者をしてゐた時分の懺悔話しを洩らしかけてゐた處なので、津村は中坐するのがひどく惜しかつたが、警察から刑事が打合せに來たといふことを聞いてふと我に返つて、その儘女に厚く禮を云つてその座敷を出た。

自分の部屋へ歸つてみると、火鉢の周圍には女將ともう一人中年輩の脊の圖拔けて高い鳥のやうな顏つきをした男が古びた黑のマントを着たまゝ坐つてゐた。

女將は津村の顏を見るとさつきとは違つて落着いた聲で、

「どうも先程はとんだ騷ぎを致しまして相濟みません。實はあれからお千代が警察へ飛び込んでしまつたもんですから、到頭あちらの御厄介を願ふことになつてしまひました。この方は警察のお方さんで。」

といつてその男を津村に紹介はせた。

「どうも飛んだ御災難でしたなあ。」刑事は顏つきに似げなく愛想のいゝ挨拶をして、「此節はどうも宿屋で盜難が多くつて困るのです。充分帳場へも注意するやうに達示してあるのですが、矢張り可けません。」

と、いつて、事件の起る前後の容子や、金の置き處などを改めて詳しく彼から訊きとつた。その後で刑事は訝しむやうに眉を寄せながら、

「どうも可笑しい。御面倒ですが、念のためにどうぞその鞄をちよつとお貸しなすつて下さい。」

津村は立つて押入れのなかから鞄を出して來た。刑事はそれを電燈の下へ引寄せて錠前の處や、皮の縫ひめになつてゐる處などを頻りに調べてゐたが、

「こりや當時は鍵がかゝつてゐたものでせうなあ？」

「いや、それが私の手ぬかりで、鍵をかけて置きませんもんでしたから。」津村は頭を掻きながら答へた。

「はゝあ、いや、それではどうも。」と、刑事は苦笑ひをして、「旅先ぢやうつかり信用なさると酷い眼に逢ひますよ。」と、落着いた調子で女將が汲んで出す茶をぐつと飲んだ。

「全く仰有る通りです。まさかと思ひましたもんですから。」津村は自分の失策を恥ぢるやうに云つて、

「それで盜つた奴のお見込みは大抵ついて居りますんでせうなあ。」

「えゝ、まあ、今のところでは大概はづれまいと思つてゐます。その件で今同僚が或方面の方を取調べてゐますから、その報告次第で明朝までには犯人があがるでせう。かういふ事件は外から入り込んで來た奴の仕業ぢやないんですから存外早く足がつくもんですよ。」

「はゝあ、ぢや矢張り家のなかのものがやつたんですな。」

「さうですとも。無論婢達がやつたんでさあ。彼奴等は馬鹿なもんで、情夫に入れ揚げる金に困つちやかう云ふ眞似をするんです。」と、にやにや笑つたが、やがてそろそろ起つ支度をして、「併し私の見込みぢやお盜られになつたあの金はもう迚も返らないだらうと思ひますから御氣の毒ですがどうぞそのおつ

もりて。」

「えゝ、そりやもう諦めてゐますから。」津村は綺麗な口をきいたが、内心はひどく狼狽してゐた。

「いや、どうもお邪魔をしました。」と、刑事はそれをきつかけに立上つて、女將と一緒に出て行つた。

「どうもお寒いところを御足勞を願ひまして。」と津村は金のことが胸にあるので浮かぬ聲で云ひながら彼等の後から送つて出たが、刑事は部屋の外へ出るとふいに立止つて、女將を小陰へ呼んで何事かひそひそ耳打ちをした。女將は一々合點いて聞いてゐたが、やがて、

「それがねえ、あなた。今方々捜させましたんですけど、影も形も見えないんで御坐んすよ。この降りですから戶外へ出る譯はなし、店のものもつい今しがたまで臺所にゐたつて申すんですけど、……」

「いや、行つた先は分つてゐる。」と、刑事は確信を持つやうに云つて、又ひそひそ女將の耳へ何事か云ひ含めた。そしてその儘ぼんやり突立つてゐる津村に挨拶をして階下へ降りて行つた。

津村は部屋へ歸つて來ると、また火鉢の前へ坐つて、何か免れ難い宣告でもされたやうに嘆息をつきながら金のことを思ひつゞけた。差し當つて代りに取寄せる分もないので、後の口が出來るまではこの儘東京へ歸ること出來ずにこの宿屋へ居据わつてゐなければならないかと思ふと彼はもうどん底まで失望してしまつた。さうなると急に東京のことや、そこにゐる友達のことなどが無上に戀しくなつつて來て、立つてもゐても耐らないやうな氣持ちになつた。

そこへまたひよつくり女將が歸つて來て、

「どうもほんとに貴方には申譯が御坐いません。」といひながら、迚も金の出さうもないことや、もし都合がつかないのなら勘定などは話し合ひでどうでもするといふやうな事を慰めるやうに云つた。

津村はおとなしくその話を聞いてゐたが、やがてむかつ腹を立てたやうに、

「一體盜つた奴は誰なんだい？」と、訊いた。

「それがねえ、あなた、警察の方ぢやお鶴へ目星しをつけてゐるらしいんですけど、まさかねえ、あの子がそんな思ひ切つたことをやりさうにも見えないぢや御坐んせんか。それになんでも家のすぐ向ふ隣りにゐる惡い奴と出來合つてるつてな話なんですけど、私にや第一それからして信じられませんよ。」

「惡い奴つて、何者なんだい。」

「もとは繭商人でしたが、今ぢや博奕も打てば故買ひなんかもやるらしい男なんです。尤も表は製絲の女工を買ひ出しにゆく稼業をしてゐるんですが、そりやなかなかものでねえ、それに其顏といつたらとても女の寄りつくやうな柄ぢやないんで御坐んすもの。」女將は其顏を思ひ出すのかくすりと噴き出した。

「だけど警察へ上つてゐる位なら何か證據がなくちやならない筈ぢやないか。」

「えゝ。」と、女將はてんで信じてゐないやうな煮えきらない返事をして、「尤もお千代はあの子が夜遲く屋根傳ひに隣二階へ忍んでゆくのを確かに見たつて云ふんですけど。……」

「そんなら確かぢやないか。あんな莫迦な奴は隨分思ひ切つた眞似をするもんだから。」

「さうで御坐んすねえ。でも警へあの男と出來てゐるにしろ、そりやお金を盜んだことゝは別ですわ。

そんなことを云ひだてしたらお君なんか何をするか知れたもんぢや御坐せんよ。」

「お君はそんな女なのかい？」津村は何かそつちの方へも緒がありやしないかと思つて、態と驚いたやうに聞いてみた。

女將は分りきつた事をと云ふやうな眼つきをしながら津村の顏を見て、

「えゝ、えゝ、そりやもう。あゝ何もかも分りきつたやうな顏をしてゐて、とても私共の手におへるやうな代物ぢや御坐んせん。」といつたが、それから先立入つて說明しやうとはしなかつた。そして急に何か思ひついたやうに話頭をかへて、「こりや警察で聞いた話なんですけど、あの奧の座敷の女ですね、ありやお妾なんださうですよ。町からずつと下の方にある丸二つてえ製絲場の隱居のお妾でね、家へ入れたり、妾宅を置いたりしちや息子さんの手前が拙いもんですから、あゝやつて手前共へ置いてあるんですつて。呆れるぢや御坐んせんか。それて時々家にゐない理屈も讀めましたよ。」といつて賤しむやうに笑つた。

津村はその話を聞くと急にさつきあの女の座敷で飮んでゐた時の氣持ちを思ひ出して、張りつめてゐた心が緩むやうな氣になつた。妾などゝいふ言葉は彼には何でもなかつた。もうあの女の座敷へ入つた刹那からさうした想像はうすうす彼の胸にあつたやうに思はれて、却つてそれで安心しさへもした。そして面白さうな氣性をもつた女の姿がだんだんと心に喰ひ入つて來て、これをいゝ機にこの儘當分の間諏訪へ落着いてゐやうかといふ氣さへ起つて來たのであつた。

女將は津村がそんな考へに浸つてゐやうとは夢にも氣づかずに散々女の惡口を吐いた。そしてその種

が盡きてくるとまたふとお鶴のことにかへつて、今下男をやつて急に姿を隱した彼女の行衞を捜してゐることを話して、それとなく彼女の辯護を試みた。

津村は女將が降りてしまうとすぐに自分で臥床を出して來て横になつた。そして醉ひざめの寒さに慄へながらなるべく奥座敷の女のことを思ひ出さうとつとめた。

お鶴は到頭其翌日の朝早く津村がまだ熟睡してゐる間に諏訪の本署へ拘引されて行つたのであつた。

津村は寢起きにその事を聞いて、今更らのやうに吃驚した。女將の話しては昨夜一時過ぎになつて隣りの家の押入れのなかへ隱れてゐたお鶴を漸う捜し出して無理やりに家へ連歸つたのださうて、それから夜のひき明け前まで散々嚇かしたり、慊かしたりしながら白狀させやうとしたが彼女は知らぬ〳〵と强情を張つてどうしても實を吐かなかつたさうである。それが今朝になつて、其の前夜遊廓で遊興中に捕つた情夫の口から餘罪と一緒にふと事實がばれたのですつかり證據があがつて到頭拘引されるやうな段取りになつたのであつた。そして二人の刑事に連れられて家を出てゆく時、彼女は涙一滴こぼさずにしらしらしい顏をして、

「ぢや直ぐに歸つて參りますから。」と云ひ殘して行つたとか云ふので、聞いてゐたものは皆その大膽さを憎むとゝもにその愚かな心根を笑つた。そしてもう家ぢうお鶴の噂て持ちきつてゐた。

丁度十時頃、晴々しい顏をしたお君に給仕をして貰ひながら朝飯をやつてゐると、突然階下の店の方

から消魂ましいお千代の呼び聲が聞えた。何事が起つたのかと思つて驅け降りてみると、店口には家ぢうのものが集まつてがやがや騷ぎながらすぐ前の往來を駛り過ぎてゆく下諏訪通ひの辻馬車を眺めてゐる。と、みると、そのなかには端のところにお鶴か坐つてゐて、それと對向ひに古びた鳥打帽子を眼深かに被つた一人の男が坐つてゐた。人目を避けるやうに俯向いてゐるので顏は見えなかつたが、それがお鶴の情夫であることは誰れの眼にもすぐ合點がいつた。そして二人が手錠を打たれてゐる處をみるとこれから下諏訪の警察署へ護送されてゆく道すがららしかつた。

お鶴は店の前を通り過ぎてしまうと、何と思つたかちらりと此方を振り顧つた。その時は夜來の雪もすつかり降りやんでゐたので、彼女の顏は手にとるやうにはつきり見えた。路面に降り積つた雪の反射でその顏は妙に面窶れがしたやうに蒼ざめてはゐたが、その眼にも、その頰にも格別際だつた表情は浮んでゐなかつた。

二人を乘せた馬車は漸次と遠ざかつて行つた。ともすると雪に轍をとられさうに大搖れに搖れながら鐵道線路の踏切りを越えたかと思ふと、やがて土手の陰へ入つて到頭見えなくなつてしまつた。そのあとには唯平らな鐵道線路が一直線に野を劃つて、緩かな傾斜をひきながら山の方へ續いてゆく一望の雪の原の上には二三羽の烏が點のやうになつて高く低く丶飛びちがつてゐた。一番遲れて出て來た奧座敷の女は何が起つたのかと怪しむやうな顏をしてそつちを見送つてゐたが、やがてぼんやり突立つてゐる津村の方へ寄つて來て、膨れぼつたい眼に譯の分らぬ笑ひをにつと浮べた。(をはり)

掠奪

中村星湖

私がまだ小學校にゐた時の事である。高等一年から私達を教へてくれた校長は、よく學校を休んだし、獨身者で或る宿屋の離屋を借りてゐたが、その宿屋の寡婦と怪しいとか、村の若い娘を晝間離屋へ引入れて蒲團を敷かせたとか言ふ噂が口々に傳つたしした爲めでもあらう、その人は私達が高等二年になつた初めの頃、急に職をやめられて何處かへ行つてしまつた。

その代りに來たのは、市島といふ、やはり前の校長と同じ師範出の教員であつた。そしてそれは隣村の私の家と極近い親類の總領娘を妻にしてゐた。

『今度お園の亭主がこつちの校長になつたちふ。』と父や母が話すのを聞いてゐたので、その人に一度も逢つた事のない私は、今日新らしい校長が來るといふ

日には、教場で机に向つてゐながらも、早くその人の顔を見たいやうな氣ばかりして、心がすこしも落着かなかつた。

梯子段を踏む靴の音がして、やがて見知らない洋服の男が二階に現はれた時、私はそれが新校長である事を知つた。古參の教員がそれを生等に紹介すると、洋服の男は一段高くなつてをる教壇の側まで行つてゐたが、そこへは登らずに、床板に突立つたまゝ、生徒席を右、左と見廻しながら口を切つた。

『私は今、本庄先生から御紹介下すつた隣村××の市島です。今日から皆さんのお對手をする事になりましたから、皆さんにもしつかり勉強して頂きたいと思ふ。』さう言つて彼はクフンと鼻を鳴らした。『西川先生も十分學問のお有んなさる良い方であつたが、餘り多く學校を休まれた爲めに、村に對して濟まないといふ事で、自分からおやめになつたのです……』

新校長は簡單に就任の辭を述べ終ると、低聲で本庄先生に何か言つて、やがて兩手を振りながら教場を退いた。私は西川先生のひよろりと長が高くて、いつも柔かい赤味を帶びた細長い顔をしてゐたのに比べて、今度の先生は、體格もガッシリしてゐ、色が白く、額の廣い角張つた顔であるのを見た。聲の調子も高くピンと響いた。そして半長靴を穿いて來た事が、よく富士の裾野へ演習にくる兵隊を聯想させた。臆病な私はその人を恐いやうに思つた。

市島先生が出て行つた後で、私は、先生がまだ師範學校にゐた頃、もうその妻となつてゐたお園さんと先生の妹とが、ある夕暮に郵便局へ來たついでだと言つて私の家へ寄つた事を思ひ出した。——用

事はなんでも先生から大急ぎで金を送れといふ請求があつたので、郵便局へ爲替を組みに來たのであつた。××女と言つて近郷に名高い美人村の若い女のうちでも、お園さんは評判な美人であつた。一度ある資産家へ貰はれて行つたが、夫を嫌つて嫌ひ拔いて、飯の茶碗を差出されても知らぬ顔をして横を向いてゐるやうな事ばかりして、とう〳〵望み通りに出戻つて、二度目に市島家へ嫁入つたのである。『あんなに六ケしかつたお園が今度は大變機嫌よく納まつて、亭主は留守でも、生家へ降るやうな事はなくて舅や小姑を對手にくる〳〵働き廻つてゐるさうだよ。やつぱり好いた男の家は違ふだねえ。』と私の母が祖母と話すのを、私はいつか聞き覺えてゐた。だからお園さんが小姑と一緒に、今度の夫へ送金する爲に郵便局へ來たのに逢ふと、子供心にも、それが大變美くしい事に思はれた。

　そのお園さんの夫であり、從つて私の家とも親戚關係になつてをる所から、餘りに元氣過ぎて近寄りにくいやうな市島先生も、次第に私の心になじんで行つた。でも個人としての市島先生と私の家とはまだ親戚の名乘りをする機會が無かつたので、先生の方から特に私に笑顔を向けられるやうになつても、私から心安く口を利き懸けた事はなかつた。父母の計らひで、私の誕生日に市島先生を招いた時にも、父が書いた招待状を、私は自分で先生に手渡しする勇氣がなくて、先生の村から通つて來てゐた友達に頼んだ。先生が初めて私の家へ來た誕生祝ひの席上で、先生は私の學校の成績を言葉を極めて親達に褒めて聞かせた、その時も、私は女の兒のやうに眞赤な顔をして後込みせずにはゐられなかつた。

　どんな雨風の日でも、例の長靴を穿いて一里の道を通つて來ては、精力が滿ち溢れるやうに、クフン

クフンと鼻を鳴らしながら學課を敎へる市島先生が、ある秋の日、朝から姿を見せなかつた。それ故、本庄先生が他の級を敎へながら、私達の級をも敎へた。

その日の十時頃の休み時間に、私は何心なく階下の廊下から、明るい日光の注いでをる湖水の方を眺めてゐた。すると、私の眼先を遮ぎつて、鳥打帽を被つて和服を着た人が校庭へ入つて來た。服裝が變つてゐたので、初めは自分の眼を疑つたが、近づくまゝにそれが確かに市島先生だと解つた。

先生は校舍の入口へは廻らずに、ちやうどその時、私から二三間離れた庭向きの半蔀の敷居に倚り懸かつてゐた本庄先生のところへ來た。

『今日は失敬しちやつた。』と言つて市島先生は近眼鏡の下で眩しさうな眼付をして笑つた。

『何かあつたのですか?』と本庄先生が敷居から身を起こして訊いた。その時、私は、私も今朝から市島先生が見えなかつたのを不思議にしてゐたので、本庄先生の直ぐ背後まで歩き寄つてゐた。

本庄先生が倚り懸かつてゐた高い敷居へ、今度は市島先生が外側から逞ましい兩腕を掛けて吊り垂がるやうにして、大きな顏を仰向けた。

『ナアニ……妻の妹が、どらを打ちやあがつて、昨夜夜中に叩き起こされて……』

『お新さんがゝね?……誰と?』と本庄先生が訊いた。

『上宿の幸太と。』

『ふうむ。……どらなど打たずとも正當の手續で話が纏まりさうなものだがね?』

『一度人を立てゝ申込んで來たんだよ。ところが、阿爺が何うしても承知せんのだ。僕の立場としちやあ若い者の方へ同情してるが、飽く迄赤心を披いて嘆願する態度に出ないで、親からその娘を奪ふってのは間違つてる……元來僕あ、この地方の「どら打ち」といふ事は好ましくない習慣だと思つてゐる』

『さうだねえ、言はゞありやあ掠奪だからね、あまり品は好くない。しかし、僕の知つてる幸太さんはそんな事をする人ぢやあなかつたがねえ、極口數の少い、大人しい……』

さう言ふ本庄先生は、前の校長の不行跡を、村の青年の間などで、あし様に言ひ觸らしてゐた一人であつた。

『一個人としては僕の村でも有數の好青年さ。けれどもあゝいふ事になると、人間盲目だから。』と市島先生が續けた。

『で、結局何うなつたのです？』

『二人の居所は昨夜直ぐ突留めたが、二人が何うしても離れないのだ……仕方ないから今僕あ警察を連れに來た。待つてゝ貰つてちよつと寄つたんだから失敬する。』

さう言ふや否や、市島先生は吊り垂がつてゐた敷居から手を放して、パッと背後へ飛んだ。そしてくるりと踵を向きを變へて、庭にゐた子供等が行儀正しくお辭儀するのにも氣付かぬらしく、サッサと校門を出て行つた。

私は聞くまじい事を偸聞したやうに思つて、本庄先生の側を離れた。そして正午の休みに食事に家へ

歸つた時、その話を母にすると、母は『そりやあ大心配だ。そんな事を耳にしたら、なぜお前はチャンと市島先生に挨拶しなかつた？……蔭からソォッと聞いてゐたゞけぢや可けないぢやないか！』と叱り着けた。その頃の私は、大人の細かい入組んだ話でも大抵は呑込む事が出來た。けれどもまだ世間の禮儀やお世辭には嫻れなかつた。

親や親類が巡査をまで連れて行つて引裂いたお新と幸太の仲は（私はお園さんの妹のお新さんを好く知つてゐたが、幸太といふ男をはすこしも知らなかつた）その後暫らく人の噂に上つてゐた。それに私の家では、その頃もやはり絲繭商をしてゐたので、若い絲取り女等が寄ると觸ると、そんな話ばかりした。

彼女等自身にも、同じ「どら打ち」の經驗を持つてる者が少くなかつた。お杉といふ女などは、「どら打ち」を擁護する若者等の一團に送られて、男が待つてゐるといふ或家へ喜んで胸を躍らせて入つて行つたまでは好かつたが、暗い灯影で男と差し向ひになると、自分の思つてゐた男と、眼前の男とはまるで違つてゐた。でも陷穽へ入つた積りで其儘その男と夫婦になつたが、十日と經たないうちに我が家へ逃げて歸つて、また私の家の絲を取るやうになつた。『俺あ馬鹿を見がした。若い衆が他の男の名を言つたものだから、その人だとばかり思つて行つてみると、あんな人だつたから……まるで瞞されたて御座んす。』と彼女は私の母に話した。

或時、母は父にこんな事を言つた。

『お杉さんもあれてなか〳〵解つてる。お新と幸太の話をすると、《そりやあお新さんを呉れないのは無理あ御座んしない。××でもお新さんの家は門閥だに、幸太さん家はまあ主と家來程格が下だからね》つて言ひがしたよ。』

その時の私の母は、自分達の一門が、湖水ぐるりでも、可なり高い地位にある事を誇つてをる口振であつた。

秋も次第に深けて、豆、蜀黍の收穫も濟み、その跡へ蒔かれた麥も黒い土の中に青く芽づくろひ、湖水から吹く寒い風は村の家々を音連れたり、畑の醜く枯れた桑の葉を鳴らしたり、山の木々の美くしい黄葉や紅葉を小鳥と一緒に舞ひ立たせたりした。雲の無い日には、湖水向ふに、富士が眞白い肌を見せた。

……私はふつと眼を覺ました。私の家の表の戸はドンドン鳴つた。それに對して祖母が閨から『誰だえ？……誰だえ？』と叫んでゐた。『ちよつと開けておくんなんしよ、××の尾瀬の者て……』と戸外の聲が答へた。やがて父が起きて、有明のランプを拈り出して、土間へ降りようとした。祖母は閨からずる〳〵とお化のやうな風で起きて、『阿兄、お前やたら戸を開けさつしやれちよ、何者だか解らい。』と大きな聲で追かけるやうに言つた。

『お祖母さん、俺あ尾瀬さんの東隣りの佐十郎の倅て。聲で解りましねえかね？』と戸外の聲はすこし

笑ひを含んでゐるらしかつた。
戸口に立つた父は、何か言ひながら引戸を開けた。
『お新さんは此家へ來ちやゐましねえかね？』と言ふ聲が、闇から明るい屋内へ向つてハッキリ響いた。寢たまゝて、喫驚して胸をドキドキさせてゐた私は、父がすこし身を退いた戸口から二つ三つの顔が覗き込むのを見た。細長い提燈をも見た。
その頃には、母も起きてそちらへ行つた。
皆て一としきり何事かブツブツと話し合つた。
『お新と幸太』と言ふ聲も聞えた。『昨夜幾時頃？』と言ふ聲も聞えた。『××の村中を探したが解らないて、どうもこつちへ逃げて來た形跡が……』『この村の若い衆が手引きした樣子が……』『……』……
『サア、皆入つとくんな。この寒い夜中に、御苦勞て……』と言ふ母の聲が際立つた。
皆かひく〵しい山仕度をして、頭巾を被つたり頬冠をしたりした人達ばかりであつた。やがて爐にパッと火が燃えあがると、彼等は土足のまゝそこへ入り込んで、暖を取つた。
『お新と幸太』と言ふ名を聞いたゞけて、昨夜から起こつてをる事件が何であるかゞ私には直ぐ解つた。そしてこの人達は『お新と幸太』の追手である事も解つた。追手の中には私の學校友達の兄貴である佐吉も交ぢつてゐた。

私は爐の直ぐ近くに弟等と一緒に寢てゐたが、皆に寢顏を見られるのが恥しくて、そつと夜具から脫けて着物を着た。そしてまだいくらか寢惚けてゐるやうな氣持で皆の側へ寄つて、

『どうも御苦勞さんで。』と言つてお辭儀をした。誰も返辭をしなかつた。私は直ぐに、自分の子供らしくない言葉に氣付いて、極りの惡い思ひをした。

『……ぢやあ、何うしても當りは付かないのかね？』と私の父は煙管を手にしたまゝ考へ込んだ。

『この村でお新さんの身寄りと言へば此家だけだが、』と佐吉が切口上で言つた。『市島先生の指圖では、幸太さんの心安い家と言ふのは無いのだから、第一に宿屋を探して、それから此家へも伺つて見ろと言ふ事でありました。それて二軒の宿屋を叩き起こしてみたが、どうも「梅屋」の樣子が怪しいでしてね……それて、「梅屋」の本宅のまはりに一隊殘して、俺等は此家へ伺つたて……何ても、「梅屋」の內儀の口振では、『お前さん方は知らない人達だから、何とも返答が出來兼る』と言つた風で御座んして……ですから、一つ叔父さんの顏で訊いてみて頂きたいですが……』

『それぢやあ阿父つあん直ぐ行つて御覽なすつて。』と母が父を急き立てた。

父は寢間着の上へ褞袍を着て提燈を持つて直ぐ出懸けた。皆が後に續かうとすると、父はそれを留めた。

『一隊むかうに殘つてゐると言へば、お前等はまあ我家で溫い物でも喰つて待つてゐて呉りよう。……あんまり大勢で押步いて世間を騷がせるも好くないから。』

『さうだ、さうだ。皆はまあ休んでゐておくれよ。今に阿父つあんがシッカリ突留めてから行くが好え。』と母も言つた。

大方は眠さうな眼付をしてゐる皆の者はそれを否まなかつた。たゞ佐吉ひとりが父に續いた。あとで、母の手で食べ物が膳に乘る頃には、焚火に額を炙らせたり、脊中を暖めさせたりして坐眠をしてをる者が多かつた。

やがて、私の父と佐吉とが歸つて來た。私は澁い眼をこすり〳〵それを待つてゐた。『お新と幸太』は案の定、「梅屋」の本宅の方にゐた。腹の出來た人達は、今まで「梅屋」に立廻つてゐた人達と交替する事となつた。その交替が濟んで暫くすると、佐吉はひとりでまた出懸けた。私は別に深い考も無くて、始めは皆の話に好奇心から聞耳を立てゝゐたゞけであるが、次第に、この事件が何うなるか？と氣懸りになり出したので、今度はコッソリ佐吉の後を追つた。それはちやうど何かの力に引かされるやうに。

佐吉はまだ二十歳ばかりで、普段すらりとしてゐる脊長が、筒袖に股引と言ふ山仕度なので、一層すらりとして見えた。無造作に手拭で頰冠をして、片手には火の消えた弓張提燈を提げてゐた。初冬の夜はいつのか間に明けはなれたが、空はうすく曇つてゐて、方々の屋根でチユウチユウ鳴くふくら雀も、往還　住き交ふ一人二人の人影も、すべてまだ夢の中の物のやうに思はれた。

佐吉は「梅屋」の前まで行つて、《諸國旅人御宿》と大きく書いてある看板のかげに暫く彳んでゐた。私も彼の側に立つて、お新さんのゐるといふ「梅屋」の本宅の方を氣にしてゐた。

『佐吉しゆう、お前も幸太んの「どら打ち」の番人か？』

往還を上つて來た村の若い衆の一人が、佐吉にさう嘲りの聲を投げながら、薄笑ひをして通つて行つた。噂はいつの間に此村中に廣がつたらしかつた。さもなければその若い衆は前々から此事件の起こるのを知つてゐたらしかつた。佐吉と一緒に自分も笑はれたやうな氣がして、私は暢氣さうに懷手をして行く若い衆の後ろ姿を見送つた。

佐吉は直ぐに宿屋の背戸口へ入つた。それに跟いて行くと、私は「梅屋」の本宅の側へ出た。そこには生籬と竹垣とが續いてゐて、薄紫の煙が軒端を傳はつたが、屋内からは咳拂ひ一つ聞えて來なかつた。佐吉はやがて小川を渡つて、東の方の麥畑へ入つた。霜柱が深いので、佐吉の後を〳〵と歩く私の草履の足は、ボス、ボスと埋まつて了ふのであつた。麥畑からは疎らな垣根越しに「梅屋」の本宅の後庭の築山の一部が見え、雪隱や奥座敷の外側が見えた。奥座敷の雨戸はまだ閉まつてゐた。

何處からか佐吉の仲間が二人ばかり出て來て、佐吉と眼を合はせて、首肯き合つた。雙方が近づくと、まづ佐吉が『何うだ？』と訊いた。『ちつとも出て來ない。』と對手の一人が答へた。『出て來るわけはないさ。二人で溫とつまてらあ。俺達ばかり好ゑ面の皮だ！この寒いに、夜中に叩き起こされて、夜道をさせられて、おまけに番太郎の役目までやつてるだからな……人の戀路の、邪魔する奴は……』と終りを鼻唄にして、も一人が怒つたやうな巫山戲たやうな調子で言つた。

佐吉は苦い顔をして默つてゐた。佐古の家は昔から尾瀨のお新さんの家の子分であつた。

何の變化も無い立番に飽きて、私が歸つて來た時には、私の家は先刻とは違つた光景でまた賑はつてゐた。

夜の物はすつかり取去られて、曇り日ながら緣側向きの白い障子を透す朝の光は、何の間をも明るく見せた。爐傍には先刻の群が一と組暖を取つてゐ、中の間の炬燵の側には四十五六のお新さんの父親が眞青な顏をして坐り込んでゐた。すぐれて脊の高いその人を取圍んで、羽織など着た四五人の人達が、或時は詫びるやうに低く、或時は爭ふやうに高く、頻りに物を言つてゐた。

私は一と眼見たゞけて、皆村の人ではない事、尾瀨の本家のおんぢが怒つて來てゐるのだといふ事を知つた。私がうつかり開け放しにして入つた戶口から、間もなくまた二人××の人が入つて來た。一人は佐吉の阿爺の佐十郞で、一人は尾瀨の西隣りのやはり尾瀨を姓にした資産家の聟であつた。どちらも小ザッパリした風をしたゐたが、西隣りの聟は黑の五つ紋に白の平打の紐を飾つてゐた。二人は中の間のお新さんの父親の前へ行つた。私はそれに跟いて行つた。

『今ちよつと佐十さんと二人でむかうへ廻つて、男にだけ逢つて參りましたが、本家て、何うか御勘辨はなりませんものてせうか……』と黑紋付の羽織の男が嘆願するやうに言つた。

『どうも皆さんに飛んだ御心配を懸けて濟みませんが……とても、此儘呉れてやるわけには參りません。』と固くかしこまつて坐つてゐた本家の阿爺は、青い頰の肉をブルブルと痙攣させながら拒んだ。

『誰の手にもおへなきや自分て行つて引摺り出すの、娘を叩ッ殺すのと言はれるどうか、斯うした事はさうムキになつても仕方ありがすめえ、ねえ。』と前から居た一人が黒紋付に言つた。

『いゝえ、親の面へ重ね〳〵泥を塗つた女子なんか打殺しても足りない。』と本家の主人はやはり怒りに顫へてゐた。

佐吉の阿爺は腫れ物にでも觸るやうにして何か言ひ出したが、本家に睨まれると、急に頭を垂げてしまつた。やがて彼は黒紋付を顧みて、

『二度まであゝいふ事があつとうし、今度は昨夜から今朝へかけて時間も長い事どうせいに、ね、二人は何うい ふ交情になつてゐるどうか、ね、そこは解りましねえ。たとへ引放して連れて來ても、お新さんも早あ……なんだ、その……處女ぢやあんめえと思えます。ねえ、それどうせいにいつそキッパり呉れてやつとう方が……』と、いやに粘つこい下司張つた調子で、人の心を擽ぐるやうな事を言つた。

『呉れて好えものなら、何も俺あこの面を下げて此家まで出張りやあせんてす。』と言つて本家は座に堪らぬらしくスッと起つた。すつかり眼色を變へてゐた。私は恐くなつた。

『何處へ行くどうね？』『いゝや、放して〳〵。』『お前さんが無茶をやつた日にや俺共は無駄骨折りぢや御座んせんか？』『どうか俺をあいつ等の許へ遣つておくれ！』『可けない、可けない！』『いゝやもう我慢が出來ねえ……俺あ夜のうちに何とか始末を着ける積りでゐた……こんなに遲くなつちや恥の

上塗りだ！』『まあ、まあ……』

　行かうとする人と、それを留めようとする人とが一と塊になつて、壘にドタドタと凄しい音を立てた。更にそれを私の父と母と祖母とが留めに來た。母は片手に空膳を持つてゐた。

『まあ、何の事づら、本家の兄さん！娘一人位ゐ泥溝へうん投げたつて知れたもんぢやあないかね。そんなに青筋を張つて騒ぐ事はありあしない。お新の事は皆さんにお頼まをして、サア、サア、朝飯をあがつておくんなすつて。そんな氣の小さい事で何うするて御座んす。』と言つて、母は片手の握拳で本家のおんぢの背中を叩いた。

　本家はやつとの事でもとの座へ戻された。

『朝飯の仕度も出來てるから、皆さんにゆつくり上つてからの事にして貰はうと思つたが、本家であゝ怒つてちや、やつぱり、先きにお新を連れ出して頂きたい。』と母は、また始めた皆の相談に口を入れた。

『ぢやあ一旦は、兎に角引放す事にしませう。』と皆は揃つて「梅屋」へ向つた。

　本家のおんぢが一人殘つた。シンとした中の間で時計が七時を打つた。母は朝飯の膳を据えながら「兄さん、市島先生は見えなかつたね？』と本家に言つた。

『あれかい？あれに來られるもんぢやない。此村の校長をしてゐて、「どら打ち」の後を押歩かれるもんぢやあない。……己だつて厭どう、他村まで來てこの騒ぎをするなあ……けれども馬鹿の餓鬼を持つと、その儘打遣つて置くわけに行かないぢやないか？』

その時には、本家のおんぢももう餘程落着いてゐた。

『サア、何も無いけれど一ぜん上つておくんなすつて。』と言つて、母は、私が帶戸の側にぼんやり坐つてゐるのを見ると、何處へか行け、と言ふ風に顎でしやくつた。

私は緣側へ出た。空は曇つたまゝて湖水の方から吹く風は寒かつた。畑の桑株はすいすいした細い灰色の枝ばかりを無數におつ立てゝゐた。一段高みになつてゐる往還を見ると、學校へ行く子供が鞄や草紙を提げて一人二人通つてゐた。私は、私も飯を食べて學校へ行かなければならないと思つた。けれども今眼の前に起こつてをる事が氣懸りて、飯を食べる氣にも、學校の仕度をする氣にもなれなかつた。

『マア、兄さんなぜ上がつてくれないら？』

私の母のさう言ふ驚いたやうな聲が聞えた。

『己あ食ひたくない。』

『それだつて……』

『いゝや、ほんとに構はないてくりよう。とても箸を取る氣になれない。』

『いやだねえ！そんなに氣を揉んでも仕方ないぢやありがせんか？』

『うむ。……』

『まあ、もすこし氣を大きくお持ちなすつて。……人の話ぢや姉さんはお新を幸太に遣つても好え考へださうぢや御座んしないか？』

「さうどう。彼奴が餓鬼に甘いから、こんな業をも晒すどう。佐十の奴まで幸太の肩を持つやうな口を利きやあがつて……皆下司共ばつか寄り集つてゐるどうからなあ。己の相談對手はお園の亭主一人切りよ。」

「…………………」

私はふと、佐吉が、阿爺のずんぐりとは少しも似てゐないあのひよろりとした體で、往還から私の家を目懸けて駈け込んで來るのを見た。

「本家の旦那。」と彼は土間へ入つたか入らないのに、息をはずませて言つた。「今、皆がお新さんを引分けて、江西寺道から歸る所ですから……」

お新さんの父親が、佐吉を連れて、急ぎ足で私の家の庭から裏の畑を通つて行つたのは、それから間もなくであつた。縞の羽織を着てはゐたが、端折をした下には白い股引を穿いてゐた。それに草鞋穿きでもあつた。私の母も、直ぐそれを追駈けて行つた。

私がそれに誘はれるやうに、下駄をちぐはぐに穿いたをも拘はず、裏へ飛び出した時には、お新さんの父親と佐吉とは、畑を野割りにして餘程遠くへ行つてゐた。その向ふの江西寺道を××村の方へ一群の人が眞黒になつて通るのも、葉の落ち盡した桑の木立の間にチラ〳〵見えた。

道を眞直に靜かに動く一群と、横合から斜にそれに追ひ縋らうとして急ぐ二人との距離は次第々々に近づいた。いつのか間に、私は夢中になつて畑の中を駈けてゐた。桑の梢がしば〳〵顏や體へ當つた。

長い行列を作つてゐた人の群は、急に一と塊になつてぢつと動かなくなつた。お新さんの父親がその黒い塊へ追ひ付いたと思ふと、塊は幾つにも割れたやうに見えた。そこから一人の女が畑へ逸れた。白い股引がそれを追つた。人の群は道から畑へ溢れ、畑からまた道へ戻つた。

その時、私はもう人の顔の見分けが付く所まで駈け寄つてゐた。息も切れるし、眼もチラ〳〵するし、頭もガアンとしてゐたが、私は人々に護られてゐるお新さんを見た。お園さんによく似た標緻好しのお新さんは、島田に結つて、唐棧の羽織を着てゐた。顔は青ざめて髪は恐ろしく亂れてゐた。二三人の人がお新さんの父親の兩腕をシッカリ抱いてゐた。何かしきりに罵る聲がした。人々はまた動き出した。

私は近寄り過ぎたので、見付からない爲に、わざと道に沿うた畑の桑の木蔭を〳〵と歩いて行つた。

——お新さんは殺されるかも知れない。さう思ひながら私はうか〳〵と跟いて行つた。

——お新さんは引摺り倒された。

——お新さんは土足で蹴られた。

——お新さんは涙含んでゐた。

——お新さんの阿父さんは狂人のやうになつてゐた。

私は今眼の前に見た恐ろしい、痛々しい光景に胸をワクワクさせながら、桑畑や麥畑を横切つて歩いた。生えたばかりのやうな青い麥は冷たい土の中に凍えてゐた。灰色の桑の梢て向ふがすこしも透かせない事もあつた……

背後から母が頻りに私を呼んでゐた。

私がひどく疲れて、ぼんやりして歸つて行くと、母は『馬鹿だなあ、お前は、あんな遠くまで跟いて行く者があるもんぢやない。』と言つた。

『それでも、己あお新さんが殺されるかと思つて……』

『おつちやんがお新を何うかしたか？』

『蹴つたり、突倒したり……』

『親不孝をしたゞから仕方がない。』

――さうかなあ？と思つたが、私はお新さんの髮の亂れた悲しさうな横顏を思ひ浮べると、何とも言はれないさめしい氣持がした。

あれて、あの後お新さんが病氣になるか、湖水に身を投げるかして、死んでしまつたならば、私の母などは《それ見ろ、親不孝の罰だ！》と言つたであらう。そして若い者に同情する人々は彼女や彼女の情人の爲めに萬斛の涙を注いだであらう。そしてまた私のこの思ひ出にも詩趣が横溢したであらう。けれども事實はそれと反對であつた。

その後半年と經たないうちに、執念く行はれた幸太の三度目の掠奪は、遂に尾瀬の本家の承認する所となつた。お新は彼の妻となつた。二人共今なを健在て、もう四五人の子供の親となつてをる筈である。

憂鬱な匂ひ

田村俊子

一

——それても、まだ蟬が上の空な聲で鳴いてゐた。欄干にかけた簾に、薄い秋の日が軒端に立枠をうねらせた瓦の影をうつして、水のやうにちろ／＼と搖いてゐる。力のない日影も淡々した秋の花も、玻璃のやうな空氣の中に冷めたく戰えてゐて、そこから起る物の音の反響の高さ。何處かで金屬製の道具を石の上に落してもしたやうな音が、そこいらの紫や紅い花に觸れてきて、そうしてこの部屋の内にしばらくの間響きひろがつて聞こえてゐる。——部屋のなかは、紙魚臭い錦繪の赤い色がちつと褪めたのを眺めた時のやうな初秋の薄ら淋しさが漂つてゐた。

滿子は簾にうつる秋の日の色を、惡るい夢を見た後の疲れたやうな心持て眺

めてゐた。咽っぽく乾いた秋の香氣が寛いだ襟元からその肌に感じられると、滿子は男の呼吸のやうな其のかさ〳〵した溫みに思はず身體を壓迫される心持がした。三月ほど前男に別れた滿子は、肉の上に起るある感覺がこの頃になつて時々彼の女の心を思ひがけなく突然に脅かす事があつたが、今もその感覺が、倦るく、地の底に遠く突き落されて行くやうな物憂い眩暈のうちに感じられてゐた。滿子はだらつとした締りのない身の內が人知れず少し羞かしくなつて、それを紛らすためについと立つた。そうして本の箱上の花の傍に行つて、顏を押付けて見た。花は、冷やかな指先で女の頰に輕るく戲むれるやうな感觸を滿子に與へたけれども、花の傍をはなれて花を見直した時に、

「なんて刺戟のない無駄な花だらう。」

と彼の女は思つた。牡丹色と白の蝦夷菊の花は、安つぽい女の扮裝のやうに趣味もなく香りもなく、唯、こつてりとしてゐた。滿子の今の感覺に伴ふやうな、それを一層興奮させてくれるやうな強烈な色も匂ひもない。滿子はそれが氣に入らなくつて花を瓶から摑み出すと、花の莖から濁つた水をぽた〳〵滴らしながら、欄干の上から下に投げ捨てた。下は人の往來する細い小路になつてゐて、花は丁度その塀際の塵芥箱の傍に莖を亂して落ちた。花片の一とつづゝに鮮やかな力を保つたまだ切り立ての新らしい花の生氣の光りが、明るい空の色を吸ひ込んで捨てられたまゝしほらしく艶々してゐた。それが此所からもはつきりと見られる。滿子は、ふと其の花に執着した物哀れな心持になつて、欄干から首を延ばして見た。見てゐるうちに、時のはづみて花の美しい生涯を拗り捨てゝしまつたことが不快でたまらなくな

つた。彼の女は悔ひのきざした心のまゝて、牡丹色と白い色とが塊つたり別々になつたりしてゐる自分に投げ落された花の姿を眺めてゐたが、さうしてゐる間にぢれつたくなつてきた。誰か、小供でも來て拾つて行つてくれゝばいゝと思つてるけれども、花は人の足に踏みにぢられるもいやそうな風で蔭に其の姿を寄せてゐる。それが然も、憫れみを催しかけてゐる滿子の心につけ入つてる樣て滿子は憎らしくなつた。そうして、もつと心持の快い花を自分て買つてこやうと思つた。お前よりはもつと美しいもつと醉ひのあるもつと媚びのあるもつと香りのある奇麗な花を見付けてくるのだよ、と捨てた花に云つてゐる樣な心持て滿子は直ぐに外に出て行つた。部屋を出る時、花の影の消えた部屋のなかの狹い淋しさが滿子のおもてを遮ぎつたことを心に殘しながら、滿子は歩いた。

外は晴れて空氣が澄んでゐた。息を吹けば空のはてに其の息が映るやうに思はれた。夏の惱みの晴れた後のやうに、樹々が其の健全な心を露骨にして滿子におもてを向けてゐた。どの樹もどの樹も、小枝を低く延ばして滿子に親しみを寄せ合ふ振りをしてゐた。夏と云ふ苦しみの經驗が樹たちを優しく人なつこひものにさせて呉れたと云ふ嬉しさが滿子の心に溢れて、滿子はどの樹にもちつとづゝ觸つてやりは濃いがした。そこから漏れる初秋の風は、樹々の情緒のおのゝきのやうに身に染みて考へられた。空度い氣藍色の深みのうちに、一切の濟んでしまつた後のやうな靜かな瞑想的な冷めたい味を含んでゐた。其所から落ちる日光は先刻家屋のなかて感じた日の影とはまるて違つたおもむきをしてゐた。何か暴露の恥を忍ぶやうな不安らしいいぢけた其の癖强い捨鉢な薄黃色い光りを帶びて流れてゐた。

滿子は其方此方と眺め廻しながら歩いて行つた。男に別れてから長らく閉ぢ籠つてばかりゐた滿子は、今日思ひがけない機で外に出たことを宜いことをしたと思つた。久しく自分の心の奥に錆びついてゐた何かが、この一と時でその心の上に薄つすらと磨き出されたらしく、すべてに向ける意識が素賢こくはつきりとしてゐる。何を見てもそれになつかしい理解がこもる。その輕快な心の調子が、これから後の自分の心をほんとうに自由に動かすことの出來る其の柔らかな緒開きのやうに思はれて氣が彈んだ。何時までも疲勞れ果てるまで歩るいて見やう。久し振りて郊外の停車場から汽車に乘つて、都の町へ行つて見やう。都には自分の好きな男や女が大勢ゐる。あの人たちは私が男と別れたことを知つてゐる。さうしてあの人たちは、男に別れてから其れ限りみんなの居る派手な世界へ顔を出さなくなつたのを不思議がつてゐる。今夜はあの人達のところへ行つて見やう。然うして――。

ふと滿子の心に品の好い憂愁を帶びた若い友達の顔が浮んだ。その男は二た重瞼の才氣を漲らせた凛とした眼を持つてゐる。それに鐵縁の眼鏡をかけてゐる。眉毛が濃くつて額が狹い。短かく刈り込んだ額の生際が顔の尺を詰めて一の字に平つたくなつてゐる。これがこの男の顔をせゝこましく薄命らしく思はせるけれども、眉目秀麗と一と言云へばそれでもう云ふ事のない樣な顔をしてゐた。その顔には何時も雪に輝く月の光りのやうな淸げな色を持つてゐた。まだ滿子が男と一所に住んでるこの春の頃にある劇場てこの若い友達に逢つたことがあつた。その人は丁度滿子の三側前の斜の位置にゐた。幕の開いてるその最中に、鼻のかつきりと高い口許の小さな男の横顔を見詰めてゐた滿子は「ろ、ろ、ろ、」と舌の

先きを上腮にそつと打突けながら、心の中で男の可愛らしい口許をあやしてゐた。其の内に自分の上腮がむづ痒く擽つたくなつた拍子に、つい舌が鳴つて滿子の口から「ら」と云ふ高い發音が思はず出てしまつたが、それに氣付いて振向いた友達は初めて滿子を見付けて含み笑ひをした。

其の時ほど男の美しい容貌に打ち込んだ瞬間を味はつたことがないと滿子は思つた。其れから後四五日と云ふものは、薄暗い場内の光線の中に人の黒い頭と頭の間から、半面の線を纖細に區劃つてゐた鮮やかな男の顏の幻に惱まされてゐた。——

滿子はその友達を思ひ出した。劇場で逢つたその夜更けに、「幻の中の奇麗な、美しい、可愛らしいあなたのさつきの横顏！」とだけ書いた端書をやつた限り、二人は顏を逢はせたこともないし手紙を遣り取りしたこともなくつて過ぎた。其れが今思ふと滿子には不思議であつた。何故と云つてこの二人は、表面は滿子と一所にゐる男の友達と云ふだけの交際だつたけれども、二人が逢ふときの眼と眼の間には優しい約束を含んだ味な輝きが、ふとした時に力強く交はされたりした。友達は滿子を人知れず甘えさせた。さうして、二人だけ話するやうな時は、當り前の口をききながらその間々に甘えた感情を捲き込んだ、言葉の外の意味が戰え合ひながらその心と心を抱きしめてる樣な事もあつた。然う云ふ時滿子は嬉しかつた。自分の身體の皮膚を切つてそこからこぼれる血の一と滴を男の口許へ持つて行つてやりたい氣がしたりした。

その友達は滿子が男と別れたことを知つてる筈であつた。友達は滿子から手紙の行くのを待つてゐる

のかも知れなかつた。都會の劇場か何所かで偶然二人が逢ふ機會を待つてゐるのかも知れなかつた。以前、滿子が思ふよりも其の友達の方に熱の高いある期間のつゞいた事を滿子は知つてゐる——滿子はこの頃その友達のことをすつかりと忘れてゐた。

滿子は友達を懷かしく思ひ詰めながら歩いた。劇場で「ろ、ろ、」と男の可愛らしい口許を遠くからあやしたあの時の迫つた戀心が、今新らしく自分の血潮のなかから込み上げてくるやうに思はれる。滿子は今夜にも友達に逢いたいと思つた。

坂を下りきると直ぐ角に植木屋があつた。名ばかりは何々花壇と云ふかけふだが下がつてゐるけれども、門から覗くと花壇の全部が目に入つて、花壇の圍ひの垣根の向ふまでも見通される。花壇の中は薄寒くところ〲金箔の剝げたやうに日光が花の上に蔭をこしらへてゐた。花と花の小徑がどこも荒れて背の高い孔雀草が縺れてこがらかりながら仆れてゐるところもあつた。ベコニアの薄赤い花やヘリオトロープのこまかな紫紺色の花が、ぽち〲と花壇の隅々に貧しげな群れを作つて咲いてゐた。滿子はそこいらを歩き廻つてゐるうちに今までのなんの味もない淋しさに復つてきた。男と別れてからのあの的度のない——色を失つたものばかりがその心の中に殘つてゐるやうな寂しさが、癖づいた其の胸の中に又ひろがり初めた。滿子は何も彼もいやであつた。滿子の眼にはどの花も無感覺な裝ひをしてゐるとしきや思はれなかつた。第一、こんな事をしてゐる自分自身がつまらなかつた。

それどころではない。自分は何か疲れた重たい考へを引き摺つて日を送つてゐるのだつた。其の疲れた重たい考へを何うにかしなければならないのであつた。男と別れて自由に世間に向つて開かうとした心が、男と別れてから急に重々した疲れた萎えた一つの考へに捉はれてしまつて、女は嘗て感じたこともない物憂い倦怠な生活の中にその心を腐らせ初めた。

「矢つ張りあの男が戀いしいのかしら。あの人が自分から離れては生きられないと云ふのかしら。」

滿子は斯う思ひ染むほど別れた男が忘れられなかつた。はつきりと男と別れたその瞬間から、滿子のその男に對する新らしい戀がもう初まつてゐた。それは三年越しの肉の馴染みから逃れられないほどに男によつて蝕まれ盡した血液の中から、生れ代つてきたやうな戀であつた。滿子はその戀の爲に別れてからの物憂い日を送つて、何事も手に付かずにゐた。男と別れて、滿子にはやるべき仕事がある筈であつたが其れも何時の場合にも投げられてゐた。自分と別れた男は、別れる時に自分に云つたやうにあれからの毎日を以前よりはきつと豐潤に生活してゐるに違ひないと思ふと妬ましかつた。それともあの男も自分と同じやうに思ひ出に惱まされてゐるかも知れない——然う思ふ時は、自分の心がまだ男に喞んだ儘てゐられることを見出して滿子は嬉しかつた。そうして別れた男に何か相圖でも打ちたい氣がしたりした。けれどもそんな戀を繰り返すやうな言葉をもう一度別れた男のところへ送つてやらうとは思ひもしなかつた。斯うして心淋しく、底の知れない呼吸のなかに迷つてゐる儘に、滿子は自分をそつとしておくより仕方がなかつた。

滿子は少し反抗するやうな氣分になつて、彼方此方と花をあさつた。今、思ひ出した友達のところへ、今夜初めての消息をしやう。さうしてヘリオトロープの花を摘んで入れてやらうと思つて滿子は其の花の傍にかゞんで匂ひを嗅いで見た。花の稀薄な刺戟の匂ひの中にメランコリーな味が含まれてゐた。其れがなんとなく今夜花を入れてやらうとする華美な情調に添はない氣がしておもしろくなかつた。けれどもこの花の匂ひはいやと思ふほどでもなかつた。ただ匂ひに硬い感じがあつた。

他には情緒をそゝつてくれるやうな色を持つた花もなかつた。淺黄色のプランパボーを見付けたけれども其れも陰氣に淋しかつた。急に空氣が冷えて單衣一枚でゐる滿子は寒くなつた。花壇の垣の向ふの方から色のない雲が浮んだ。滿子の手にある白い洋傘から、秋の夕暮れが白々と擴がつて行く――。滿子の胸には思はず悲しさがいつぱいに溢れて、ただ人戀ひしさの中に其の心が埓もなく埋もれていつた。

二

歸つてくると滿子は直ぐに友達のところへ手紙を書かうと思つて机に向つて見たが、今はその興も空空しかつた。空々しい思ひをしながらあの友達にあてゝ一字でも書くことが、僞りの罪を二重にするやうで滿子はいやになつた。それで窓にぴつたりと寄せた机の上のらんぷの灯が、そこだけ窓の障子を濃く染めてゐるのを暫らく見詰めてゐたが、ふと坂の下を汽車が通つて、明りの色の中に沈み込んでゐる机の上のヘリオトロープのこまかい花が、しほらしく震動を受けて搖いだのを見ると、滿子の心は其れにそばえてふと浮いた。

「いちど、いらしつてもいゝでせう。」

と假名ばかりで書いて、其のこまかい紫の花を一と莖折つて封じ込んだ。紫のこまかな花をあつめたこの姿は、姿の小柄な顔の笑しいすぐれた才能をもつたあの友達に能く似てゐると思ひながら、男の宿所が度々變つたことを考へて、滿子は男の妹宛てにして封書の上書きをかいた。若い音樂家で、兄によく似た顔立だけれ共其色の少し淺黑いその妹にも、滿子は淡いなつかしみを寄せながら、

「津波倉子樣方　津波由雄樣」

とこゝろを籠めて書き流した。そうして其の封書を机の上においた儘でしばらく茫然してゐた。封筒の中に花を入れたところだけが、薄い皺を作つてこんもりと高くなつてゐる。この手紙一とつが、自分のこれからの生活の上にどんな色を着けてくれると云ふのだらう――滿子はふしぎに嚴肅な氣持がした。ぢつとりとした重い陰氣な惱ましさが滿子の眉を壓しつけてゐた。

滿子はその手紙を袂に入れて外に出た。久し振りで都の町に出て、誰れか知つた人に逢つて見たいと思つた。然し今までの友達たちはもう自分を振り返つてくれないかも知れない。何故と云へば滿子が一人郊外に住むやうになつてから、親しかつた友達の誰れも彼れもまだ一度も彼の女を訪ねなかつた。滿子はそれが心にかゝつてゐた。男と別れると同時に、自分の今までの友達たちとも自分の生活の上で別れてしまつたやうな淋しい氣がしてゐた。けれども其れは此方から久しく離れてゐたせいかも知れなか

つた。逢つて、陽氣な顏をして二十分も物を云へば、又舊のやうに誰れも彼れも自分を好きになつてくれるに違ひないと思つて、滿子は心を安ませた。

誰れのところへ行かうかと思ひながら、由雄へ送る手紙をそこいらの郵便函に投げ入れておいて、滿子は停車場にはいつた。晝間外へ出たときのやうに心に彈みがついて自分の唇からは昔のやうに匂はしい息が漏れるやうな氣がした。構內の誰れを見ても滿子は眼に力をあつめてその人たちを能く見た。見られた人は滿子の顏から快い印象を受けたと云ふやうな色を浮べて柔らかに滿子を見返してゐた。滿子の心は處女のやうに優しくなつた。しとやかな女らしい會釋がおのづと其の面に溢れるやうであつた。

外には十七日の月光が流れてゐた。虫が鳴いてゐた。膨らみをもつた月のまはりに、クリーム色の雲が鱗形にぽつ／＼と散つてゐた。滿子は袂のわきに垂れた自分の掌が唯徒らに冷めたい氣がして立つてゐた。

三

滿子は的もなく須田町の乘り換へ場所で下りてぶら／＼と步いた。道傍の柳の下に繫がれた荷車の馬が、顏の上に垂れかゝる柳の葉を仰向いて食んでゐた。街燈の瓦斯の光りを含んだ柳の葉は、もぐ／＼と動かす馬の口の傍に、靜に縺れたり搖れたりしてゐた。

大きな商店の男たちは、場所を守るそれ／＼の姿勢のうちに、溢れるほどな營みの力をその身體に漲らしてゐた。自分々々の務めを片時も怠るまいとするやうないそ／＼した勤勉な裝ひを誰れも見せてゐ

た。明りが仕合せらしく輝いてゐた。そうして底に力を含んでるやうな靜かな落着いた町の宵の賑ひが滿子の情味を乾燥させてゐた。

　滿子はこんな事を考へながら歩いてゐた。――あの男に別れてからまだ一度も其の別れに就いてしみずみ悲しんだことがなかつた。男を悲しく思ひ出すこともなかつた。そうして、別離のあとの自分と云ふものを、最も高く、眞面目なところに置かなくてはならないと思つたりした。輕率であつてはならないと思つた。そうして又、この別れと云ふ自分の一とつの經歷に、もつとも眞實な意義を殘しておかなければこれからの自分の生活が墮落的なものになるのだと考へたりした。

　それてゐて、何うして自分にはあの男が忘れられないのであらう。いかなる晩も別れた男の夢にそゝのかされずには過ごした事がない――女から女を追ひ歩いたあの放埒な男の手で、すつかり踏み躙られた殘虐な自分の肉體のくずれた痕が、いつまで經つても別れた男へのみれんな戀を强ひつゞけてやまないてゐる。

「なんと云ふ汚らしさだらう。」

　自分で斯う罵つて見ることはあつても、直ぐに暗い過去の夢に捉はれて、重苦しい倦怠の中に沈み込んでしまふのであつた。

「あんな夢は捨てゝしまはなければ。」

　滿子は往來の明るい灯を眺めた。

早く眞實な生活に入らなければならない。男と別れた後の、自分の生の道を自分は平氣で辿つて行かなければならない。今までの友達たちのサークルに入つて、又新らしい仕事を求めて滿子は瞬くやうに氣忙しくかう思ひつゞけた。ふと、通りすがりのカフエーの窓から白い皿や赤い果物の色彩が目に入ると、滿子の心は少しほぐれた。飾窓の硝子に自分の白い横顏が映つたりすると、滿子はつい硝子の中を覗いて見た。さうして二十五と云ふ自分の年が急にひどく氣に入つた。二十四でもいけなかつた。二十才でもいけなかつた。さうして二十六、七でもいけなかつた。二十五と云ふ響きには紅と淺黃とを絢ひ交ぜたやうな、放逸な、粋な、何か充滿した、その癖生眞面目な物が含まれてゐると思つて滿子は其の年齡を大切にしたくなつた。

「滿子さんぢやありませんか。滿子さんでせう。」

往來の眞中で大きな女の聲がした。呼んだ人は明りの屆かない廣い電車路のところで立止つた儘滿子の方を見てゐた。

「お品さんだよ。」

滿子は斯う思ひながら、自分も柳の樹の傍に立つた儘で其方を見てゐた。

「どうも然うだと思つたわ。」

女は云ひながらゆる／＼と滿子の方へ歩いて來た。さうして、

「今晩は。」

と云つて丁寧なお辭儀をした。

この女はもう二十八だけれどもいつも若々しい扮りをしてゐる。今夜も紫紺色の薄羽織を着て、白い地に少し赤の混ぢつた花の模様に金糸の繡ひのある襦袢の襟をかけてゐた。帶上げの布片か下締めか、何所か身服裝の一部分に赤いものをちらつかしてゐるのがこの女の癖だつた。削つても削つても生地の白さが層をかさねてるやうに皮膚が厚ぼつたくて柔らかに白い。唇が薄赤く小さくて、笑ふと其の口が恰好よく小判形になつて、然うして稍々長い間開きつぱなしになる。この女の皮膚はどこも奇麗であつた。そうしていつもべた〳〵としてゐるやうな感觸の味がその肌にあつた。滿子はこの女の咽喉首あたりの肌を見てゐて、ふと其の同性の肉に動かされたことがあつたので自分ながらびつくりした事があつた。

だが今夜この女に逢つたと云ふのは思ひがけなかつた。滿子は品子とはさして親しみもある仲ではなかつたけれ共、女の顏を見ると直ぐ、思ひ出したある話があつた。

品子は今夜も小さな男の子を連れてゐた。弱々した髮の毛の薄い他愛のない小さな小供の身體付を見ると、いかにもこの母親の軟弱な肉から生れたやうな感じがして、滿子はいつも變な氣がするのであつた。其れて今も別に可愛いゝと思ふのでもなかつたが、一寸觸つて見たくなつて其の小供の頰を突いた。小供は女の子のやうに態をしてはにかんでゐた。

「御無沙汰ばかりして。やつぱり以前のところにゐらつしやいますの。」

品子はなんにも知らなかつたと見えて斯う云つた。滿子はこの女に委しい話をするのが一寸不快に思はれたので、唯、

「えゝ。」

と返事して默つてゐた。しばらくして、

「この頃は何所へ出てゐらつしやるの。」

と滿子は聞いて見た。この女優はあんまり藝能のある方ではなかつた。唯新らしい女優の中ではあんまり醜くないと云ふのが取柄であつた。彼方此方と新らしく出來る劇團の中を渉り歩くのでもこの女は評判になつてゐた。

「今は何所へも出てゐないんですよ。洋畫をやる方のところへね、モデルに通つてるんですの。文展にお出しになるんだそうよ。」

品子は得意らしく云つた。そうして目と眉の間にこの女の癖でちよいと凹みをつけて笑つた。それが淫らな人相になつていやな感じがした。

「やつぱり彼の人と一所にゐらつしやるの。」

「え。この頃はね、幸福だわ。」

四

丁度去年の師走頃だつた。滿子がまだ男といつしよに居る時分のことで、其の日も朝から、二人は思

想の上の衝突でおもしろくない云ひ合ひをしてゐたときだつた。二時頃から降り初めた雪がだん〳〵にかさんで來て、何となくそこいらの風物が雪のなかにしつとりと居座つてしまつたやうな夕暮れに、あんまり行き交ひもしてゐなかつたこの品子が突然に訪ねて來た。眞つ黒な濃い髮の毛をぐづ〳〵に庇髮に結つてる頭髮の上に、白い雪がちら〳〵と附着いてゐて、狹い額に雪のとけた雫がながれてゐた。品子はそれを拭きもしずに、火鉢に兩手をかけた袖口から垢て薄黑くなつた緋縮緬の襦袢のそでを出した儘、ふわッとした顏をして座つてゐた。

この女は、空氣が天象の模樣を直ぐ色の上に現はすやうに、心臟の中で動搖する血の通りが直ぐ其の儘そつくりと全體の筋肉の表面に映つてくるやうな女だつた。今日の品子は見る影もないやうに見窄らしかつた。その顏もいつもとは全で違つた女のやうに滑こくどす青くなつて、眼がどんよりして、眉毛の際にまで貧しさを漂はしてゐた。そうして滿子を見ると小鼻のあたりを引釣らしたやうな笑ひを浮べながら、「私、とう〳〵やつちまつたのよ。」と濁りのない奇麗な聲でかう云つた。

「何うしたの。」

「家を出ちやつたの。一昨日よ。」

二人は知り合ひだとは云つても、友達から友達への引つかゝりで、品子を滿子の手である劇團へ周旋してやつたと云ふことが緣の初めて、滿子はそれほど品子に親しみを感じてはゐなかつた。其れが今日いきなりに古るい友達かなんぞの樣に、ぞんざいな風で獅嚙みつくやうな言葉をこの女から聞いたので

滿子は少しおもしろくなかつた。品子の良人と云ふのは油繪をかく男であつた。それでも品子が寒さうに見えるので、滿子は暖い飲料を作つて出してやつた。

「私ね。」

滿子が坐るのを待ち兼ねたやうに、顔を上げて斯う云つてぢつと滿子を見詰めた品子の眼のなかには、見る〳〵涙がたまつてきた。

「小供がうるさいんだそうよ。それで三枝も弱つてるんですつて。」

「小供をおいてゐらしつたの。」

「小供が可愛想だと思つて歸つてくれつて、實は今朝私のところへ三枝がやつて來たのよ。だから私然う云つたの。小供の爲なんぞには歸らないつて。私は何うしたつて小供の爲なんぞには歸らないつて云つてやつたの。三枝といつしよになつてからもう六年にもなりますけれどね、三枝は始終私に嘘ばつかり吐いてるんです。直ぐ傍から嘘が現はれるのに其れを知れきつてゐながら私を欺すんぢやありませんか。いくら私が云つても彼の男には分らないの。何でも私に隱すのよ。もう一とつ〳〵隱すのよ。だから三枝の女の事で私は幾度恥をかくか知れやしないわ。私は三枝に何をしてもいゝつて云ふのよ。隱すつて事だけを止して下さいつて頼むんだけれども其れが分らないんですからね。もうおもしろくなくつて、おもしろくなくつて、何年我慢しつゞけたか知れないわ。」

「其の爲に家を出たの。」

「えゝ。だけど私、たゞちや出なかつた。」品子の眼が吊り上がるやうに光つた。品子は男をこしらへて家を出たのだつた。

「良人の弟子なのよ。」

そうして品子は其の男に戀をしたのでもなんでもなかつた。唯他人に自分の肉を任せたと云ふ皮肉な事實だけを良人の前に投げ付けてやる爲に、品子は其の男を一時の相手にしたのであつた。そうして品子は良人の家を出て行つた。

「つまらない事をしたと思ふわ。あなたの一方の男の方は熱烈な戀から出來たとてはないんですもの。」

「だからそんな事が出來たのよ。私は三枝に復讐をしたんですもの。私はどんなに三枝を思つてるか分りやしないわ。けれども三枝はちつとも私を思つては吳れないんですもの。だから私は三枝の目を覺まさしてやらうと思つたのよ。こんな事は嫉妬らしく口だけて云つてばかりゐたつて、又素振りで見せたつて駄目だと思つたわ。ほんとに事實にして現はさなくつちや私は矢つ張り嘘つきになるぢやありませんか。私は六年も我慢して務めてゐたのに三枝の心はいつまで經つても私のものにならないんですもの。」

品子は赤い顏になつてゐた。どう云ふ譯か始終仰向いて話をつゞけてゐた。

「だからね今朝も三枝が來て小供の爲に歸つてくれつて云ふから、小供の爲になら歸らないつて云つてやつたの。私はこれから何うなつて行つたつて好いと思つてるの。だけど隨分苦しくつてよ。」

品子の眼から又涙が落ちて來た。

「其の人といつしよに居るの。」

「いゝえ。一所になんぞゐるもんですか。もう彼れつきりよ。」

「だけどね。其れなら三枝さんよりもつと何かの上で勝れた人を相手にすればよかつたと思ふわ。私は。」

「然うね、だけど私にはそんな事は出來ないの。又、私には三枝より上だと思ふ男なんかないんですもの。私は三枝が一番好きなんですもの。だからね、其れさへ三枝に分つてくれゝばいゝと思ふの。」

そんな事が全く出來るものかしら。男への復讐の爲に自分の肉を懸てもない他人にしどけなく許してやる。——そんな事が出來るものかしら。滿子には何うしても分らなかつた。そうして、この二三日の間に地獄の情焔のどん底まで落ち込んでしまつたと云ふ樣に、沈鬱に光る品子の眼が滿子には見てゐられなかつた。滿子は何とも云ひやうのない憫れさが起つて女の爲の淚が湧いてきたが、默つてゐた。

「この次ぎの女に對しても三枝の眼は少しは開くに違ひないわ。女の情熱つてものをあの人は知らないのよ。今朝も然う云つたの。三枝は泣いてゐたのよ。」

三枝と云ふ男はどんな男か滿子は知らなかつた。

「どうして此の人のところへ、こんな話がしたくなつて飛んで來たのだらう。」

と云ふ樣な意味を持つた眼をしながら、品子は直きに力のない風で歸つて行つた。

品子にはこんなはなしがあつた。あれから後、品子は又舊の三枝といつしよになつて暮らしてゐる事

だけは知つてゐたが、其れ限り逢はなかつた。

「私たちは愛の出直しをしたやうなものです。三枝がどんなに私を可愛がつてくれるでせう。あんな事のあつた後、又私といつしよになるに就いてなんぼ三枝だつて考へましたからね。――とうとう彼の人に、高い犧牲を拂はせたことを、あなたも考へて下さい。あれから後、私の爲に三枝は世間へ出られない人になりました。其れでもあの人にはもう私を捨てることが出來ませんからね。出直した愛はほんとに强いものだと思ひますわ。」

斯う云ふ手紙が品子から來たことがあつた。

滿子は冷めたい濟ました顏をした儘て、ろくに口も交かずに品子に別れてしまつた。けれども心の中では、今夜の品子がたいへんに氣に入つてゐた。品子の樣子がよかつたばかりでなく、何か滿子の心の上に明るい力を投げてくれたものがあつたやうな氣がして、いつもの樣にこの女を侮る氣にはなれなかつた。人に對して笑ひさへすれば、いつも歡樂の境にゐる時と同じやうな淫縱な皺がその唇のまはりに刻まれる――あの品子の笑ひ顏にも、今夜の滿子はばかばかしくひきつけられた。

私の爲たことゝ、あなたの爲たことゝ、私は比べてみました。あなたの爲たことの方が、遙に高尙だつたと云ふことを考へました。私の爲たことはどこまでも汚く、あなたの爲たことはどこまでも美しかつたと思ひます。あゝした時のあなたの感情は、ほんとうに奇麗なものだつたと思ひます。――滿

子は品子へ送る手紙の文句をつゞるやうな調子て、心の中てこんな言葉を作りながら、歩いて行つた。

あの人の爲たことは、絶對だつた。あの人の爲た事は初めからおしまひまで唯一人の男に對する情熱て貫いてゐた。他人に肉を許したと云ふあの一とつの事件も、考へて見れば唯一人の男に對して烈しく燃え立つたその情熱の變形見たいなものだつた。唯一人の男に對する戀のまじめな情熱が、あんな不思議な畸形なものになつて女の血の上に現れたと云ふ事は、まあなんと云ふ奇體な色を持つた美しさだらう――けれども、直きに滿子の心は冷めた。あゝ云ふ事が品子と云ふ女の爲たことだと思ふと、やつぱり汚らしい荒んだ肉の感じばかりが殘つていやになつた。女の肉のしどけなさと云ふことに、云ふに云はれない反感が起つた。肉にばかり生きる女――自分て自分の肉の歡びに狂喜してゐる女――と云ふことだ、今の滿子には鋭い皮肉な、徴罰的な意味に聞こえて、滿子の魂はその瞬間にふるへてゐた。

滿子の氣分は、また重苦しく欝陶しくなつて來た。何所へ何う行つたら、誰れに逢つたら、美しい情緒によみがへらして貰ふことが出來るだらうと、滿子は足をとめて、明りの中を往來する人々をぼんやりと眺めて見た。暫く逢はないてゐる好きな友達達を考へて見た。けれども、どの友達達も、小賢しい眼ばかりが自分の上に光るやうで、滿子はその人達に逢ふことだけを考へても、重たく憶劫な氣がした。

あの人たちは誰れも誰れも今の自分に冷淡なやうな氣がした。幾月かつゞいた自分の或る情念の經過の間を、あの人たちはなんにも知らずに過ごしてゐる。

「あの人たちは唯、事件を知つてるばかりだから――」滿子は斯うはつきりと自分て自分に云つて見た。

何うしたら、この重苦しく乾いた氣分をほつと破つて、內から絢爛な花のやうな情緒を染み出させることが出來るだらう――

逢へば直ぐ、自分のこの胸にひつたりと觸れる人が一人あるやうな氣がした。――それがあの別れた男のやうな氣がした。――けれども滿子は自分で自分の心に怒つたやうにして直ぐこの考へを打ち消してしまつた。

もし、別れた男のところへもう一度歸るとすれば、それは決して美しい奇麗な戀心に曳かされて行くのではない。唯、おさへ切れないある感覺に引き摺られて、訓染んだ肉のなかへ自分の魂を埋めに行くだけのことだと思つて、滿子は其れがきたなくて堪らなかつた。

軒つゞきの商店の灯が街の樹の茂みに遮られて、薄暗く沈み込んでゐる往來を電車は右往左往に走つてゐた。其の角に立つた儘でぢつと往來を眺めてゐた滿子は、自分の身體が何所までも落ち込んで行つてしまふやうな氣がしてずる／＼と髮の毛が重くなつてきた。走つてゆく電車の形が見てる間に小さくなつて、暗い地面に眞つ黑な大きな一とつの車輪が金屬の光りを漂はしながらぎり／＼と廻り初めた。その金屬の射るやうな青い光りの中に、自分の眼の神經がごし／＼と揉みこまれてゆくと思つた。さうして、だん／＼に自分の身體が裾の方からその車輪の中へ捲き込まれて行つた。車輪がひろがつて、ひろがつて、ぎりつと云ふ軌んだ音を立てながら自分の體を覆した――と思つたはずみに滿子は我れに返つた。目が曇つて、直ぐには頭を持ち上げることが出來ないほどに重くなつてゐた。握つてゐた掌を開

くと、脂肪の浮いてる皮膚が溶けるやうに柔らかになつてゐた。

滿子は頸筋に力を入れて、ぐいと道傍を振り返つて見た。別になんでもない顏をして青白い光りを浴びた柳の枝が滿子の肩のところに觸つてゐた。滿子はそれがどんなに嬉しかつたか知れなかつた。重たい頭を上げて其の柳を見上げてゐるうちに、柳の樹の眞向ひに、一間ばかりの小さな狹苦しいカフエーのあるのを見付けて、其所へ入つて行つた。

木の生地を洗ひざらしたやうな卓子の傍に三つばかりの椅子がある外は、別には室もなかつた。後も前も押し付くやうに狹い壁があつた。その壁のつゞきの三尺ほどの入り口から、料理の匂ひのこぼれる湯氣がこつちの方に漂つてゐた。そうして時々地面を倦るく草履で擦る料理人の足音がそこから響いてゐた。

滿子はこんもりと温い人氣のない部屋の内に落着くことができた。突き當りの壁の上に赤い襟を返してヴエールを髮の半ごろから後へ退らして、タテゴトを鳴らしてゐる半身の西洋の女の繪が額になつてかゝつてゐる。タテゴトに押し付けてる女の仰向いた横顏が、大變に遠い空の方を眺めてゐるやうな氣がした。滿子はやつぱり重たい頭を上げて、女の眼の行つてる先きを考へたりして氣を紛らそうとした。

滿子はまた、だん／＼に欝陶しくなつてきた。あの品子の肌が、いつの間にか滿子の血を波立たせてゐた。そうして、薄赤くにぢんだたつた一とつのこの明りの下で、滿子は何時と云ふこともなくうつうつと重苦しく放恣な空想に捉はれてゐた。濃紫のこまかい花のあの憂鬱な匂ひを、滿子は頻りとしみ／＼嗅ぎたいと云ふことを思ひながら、その儘卓子の上に昏睡して行つた。（完）

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田表神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 京橋元數寄屋町 北隆館
仝 京橋西紺屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

○定價 金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢 但清國を除く）

冊數＼國別	內國	外國	
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢	以上郵税共
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢	

▲但 新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替 にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金 口座は東京三十四番なり

一郵劵代用 必ず一割增の事

一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢
（集金委託料及送達料）

一受領證請求 は必ず返信料金を要す

大正二年九月廿八日印刷納本
大正二年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 藤本兼吉

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 反省社
電話下谷一九一九
振替東京三十四番
電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE HANSEI-SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日 第三種郵便物認可

大正二年九月廿八日印刷納本